

『 海底 1 5 0 M 囚われの提督 強制M男ペット化調教 』（工事中）

Fry—Hopper

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワクワク深海ライフ

深海成分表現在

提督さん・駆逐棲姫（ツインテール）・飛行場姫・戦艦棲姫・北方棲姫・ソ級Ⅱヨ級・潜水新棲姫

目次

―AVのインタビュー的な所―

くお知らせ用。設定等の案内が本編のパロディとして存在く

1

―セックス調教 初日―

01 戦艦棲姫 01 | 30

02 戦艦棲姫 02 | 40

03 戦艦棲姫 03 | 48

04 戦艦棲姫 駆逐棲姫 01 | 56

05 戦艦棲姫 駆逐棲姫 02 | 69

06 Intermission 女達の舞台裏 | 81

―セックス調教 2日目―

07 戦艦棲姫 | 89

08 そこは海底150M | 100

09 戦艦棲姫 | 112

10 戦艦棲姫(過去) | 122

11 Intermission まどろみの中で | 129

12 飛行場姫 | 141

13 飛行場姫 駆逐棲姫(メイド服) 01 | 148

14 飛行場姫 駆逐棲姫(メイド服) 02 | 159

15 飛行場姫 駆逐棲姫(メイド服) 03 | 170

16 アプサラス | 183

17 アプサラスII | 195

18 アプサラスIII(黒セーラー服 中破) | 213

―海底のセラピー犬―

19	Intermission	キャスト・オフ	235
20	飛行場姫	北方棲姫	249
21	戦艦棲姫	飛行場姫	258
		北方棲姫	
		提督さん (強制女装開始)	
22	駆逐棲姫 (白ナース服)	北方棲姫	273
23	飛行場姫	北方棲姫 (航空決戦・過去)	285
24	深海のメリークリスマス	01	300

ーAVのインタビュアー的な所ー

〜お知らせ用。設定等の案内が本編のパロディとして存在〜

〈本ページは全ての人のヌクモリテイあふれる対応により支えられています!!!〉

——AVで言うところのインタビュアー的な所でつす!!——

(フロント変えられる事にやつと気付いた)

(使い方知らない作者さんへ、本文の上についてる多機能フォーム起動して、開いたページのところのルビとタブのところ押すと、色々変えられるっぽいよ?)

〈本編更新されて進展すると飛行場姫の罵倒屈辱プレイがあるやもしれん。飛行場姫はこの設定どおりいくから、ここ見てから飛行場姫のプレイまで到達すると可愛く見えるよ、不思議!〉

スマホ横にすると大画面扱いになってAAが綺麗に見える事に気付いた!!

↓NEW 警告(前書きスキップ対策)

①本作は独自に年齢制限を設定しております(20歳以上)人類へイト筋の活躍を描くため、定期的に飛行場姫様主導により独自見解にて同性愛や男などの存在を殺しに掛かります。軍事色の強い作品です。割とすぐ、殴り飛ばします。苦手な人は特定話を飛ばしましょう。

②若干アブノーマルなカップリングを好む方や性的マイノリティ

の方は、全速で離脱してください。精神の安定を保証しません。進んではいけません。討ち死にします。なお、その手の糾弾内容は織り込み済みであり、あまり適正な回答を行いません。

③コメントは削除しないと活動内容で明言しているため、名無しの場合は特に気を付けてください。あなたが消せなくなるだけです。複垢などが本サイトで許容されているのであればそちらをご利用ください。どのような回答がついてもいつまでも残ります。

④本作はあくまでも作品であり『深海棲艦(女)』普通(の女)』全男』の世界観で進展していきます。男はゴミのようにサクサク死にます。女様万歳ストーリーです。本作内で知り得た知識や解釈を現実に持ち出した場合、なんらかの不都合の発生が多分に予想されますので、想像だけに留めてください。人類嫌いガチ筋は来ないで下さい。犯罪ダメ絶対。

⑤時々アルマゲドンとかデーパーインパクト並のところでSF見解が実際にありそうなそれっぽい言い回しで出てきます。空想科学研に通報されて笑い飛ばされるレベルの物もあります。それはそれでネタとして楽しんで下さい。本作はフィクションです。

——ここまで書いてダメなら、それも自己責任だからね。きゅぴーん☆

あとは(。△。)シラネ

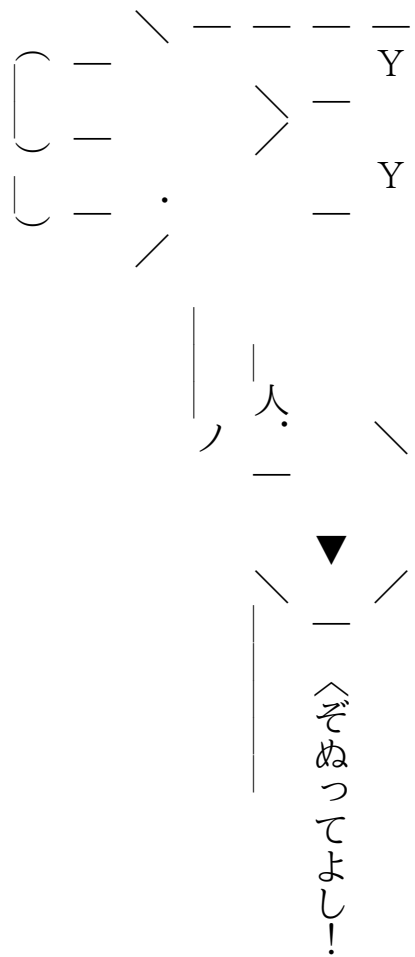
へ一括で見てる人でネタバレ嫌派は次のページまで飛ばしてね
!!
!!

—— ここは わんわんののろい ——

R—18だし限界をこえていくぜえく!!

????





本編◀◀◀超えられない壁◀◀◀チヲ裏

！すでのなきがえぼお

く採用されない可能性特大く

〈超理論のSFですよ？フィクションだゾ〉

— 偶然だぞ —

┌——┐

、 (、・ω・)ノ

— 偶然だぞ — 偶然だぞ —

???┌┐???
└┘└┘└┘

、 (、A、)ノ、 (、A、)ノ

※名前の後のカッコは見た目の問題であり、本作での中身は長生き
しています。ある意味ではエルフです。何となく作者のイメージな
のでカッコ内に合わせてイメージしなくても、はい。作者は大丈夫で
す。

戦艦棲姫（女子大生から人妻くらい）：

キス魔。臭い付け好き。染めていくの好き。粘着厨。駆逐ちやんに

駆逐される。脚に自信(大)。すぐ濡れる。陰毛濃い。戦艦棲姫と、駆逐棲姫は痴女の枢軸。セックスの化身。

声帯(?)から低周波も出せる。不安感与える。振動で耳塞いでも脳の奥まで声が届く。気象条件によっては、水平線の先までコシヨコシヨしやべれるかも。へ水中つて色んな生き物が音たくさん出してるらしいよ、すごいね!〜

弱った所に、繰り返し低周波付き音声で彼の洗脳効果大(ハート)。実は負担大きい。詳細はゾウの声に類似。効果は某国の連邦警察が監禁してヘッドホンで同じこと聞かせ続けて犯罪者作ってマツチポンプしたとかどうかで意外と実用せうわなにすrやm。リリー波にスカラー波?知らない子ですな。

過去編でイメージ変えながら回復だけに全力を注いだら水鬼から弱体化した。駆逐棲姫ラブ筋。時々貞子みたいにしよぼくれるときある。意外と苦勞人。

駆逐棲姫(中学生くらい):

本作の永遠のヒロイン。ドSSS。セックスのNG(スカトロアナル異種姦虐待OK娘)無しの演技派名女優(どうやって泣くの?)。たくさん中出しすることが男のご奉仕の一つだと思っただけで達観してる。深海棲艦一気持ちい名器。プレイ中に悪戯思いつくこともある。たまに優しい(手口なの?)。

キレるとやたら強い(吸引力の落ちないトリプルダイソンくらい)。過去編はリヨナられてる。全裸で直立すると入口が開いてて穴が1CMくらい見えて閉じなくなるほど使われている。(設定はあるけど早々に心閉ざして拘束人形リヨナ延々レイプだから未実装予定)にもかわらず明るくしてる。駆逐ちゃんマジ天使。

足コキは固くて重い鉄みたいなのになる。指まで再現されてる。たまにコスプレしてくれる天使。

戦艦棲姫をペット化に成功。

←に駆逐ちゃんのイメージAAあり。大型ディスプレイ推奨。

飛行場姫（女子大生くらい）：

にわかドS。屈服させればいいと思ってるだけ、ゆえに性交経験少ない。オナニーはお尻派だったから、前より後ろのが感じる。かわいい。

精神的な理由か、実はあんまし濡れない。前の穴入れるときは、頑張つてごまかしながら中までクンニさせるか、ねっとりフェラしないと擦れちゃうし入れづらい。濡れないの恥かしくて、誤魔化しが悪化して中二病になったのかも。長くすると乾いちやうから、頑張つて工夫する。

上の毛と下の毛が極めて細い髪質で、銀色のような白。キラキラしてキレイ。下の毛はたぶんむしつたら食べられる。

赤い目がクリクリしてて、後小さな角ある。何か節分の鬼っぽい。かわいい。

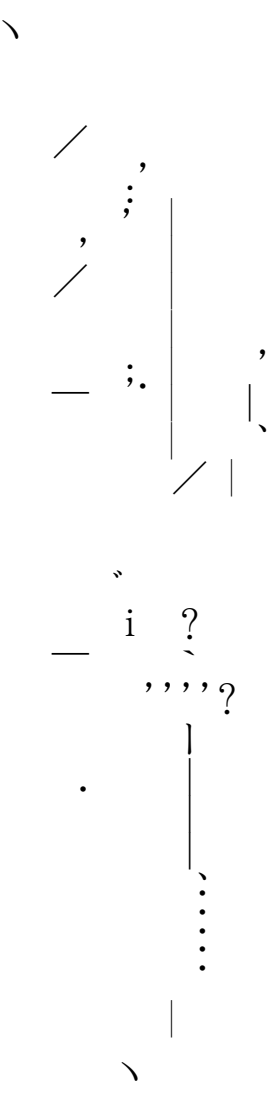
意外と幼いところある。かわいい。アクシズのあいつと、機械仕掛けのやつの九音（事象の瞳は実装できません）のハイブリッド。

永遠の中二病。私的に愚図（ぐ←ず↓）っていう言葉カッコイイと思ってる。実は色々とドキドキしながら反応してる。駆逐ちゃんは飛行場姫と組んでのプレイ中はケツ穴アクメがまた何か言ってる。ぷっ。ておもてうわやめ。増長すると一人称がワレになる事がある。

飛行場姫がなんか言いだしたらこう付け加えましょう。「でもお前ケツアクメするじゃん？」って。3回ぐらい言うと涙目でプルプル敗走します！かわいい！！

実は戦艦棲姫より優しい。ホッポちゃんがリヨナリだと哀れだし血が飛び散って掃除めんどくさくなるからセックス死させてくれる。

バンカーバスター恐怖症。かわいい。



にいる。バミューダトライアングルの陰の功労者。

人類側に非公式のファンクラブ（おヌードの盗撮）あり。

SAVE Loreleyとかいう謎組織があるとかないとか。

挿入経験皆無か膜ついてるかも。挿入以外は一通りこなしてる。

たまに岩の上で、裸で日向ぼっこしてる。色々と貢がれる。

伝説のおフェラマシン。フェラチオマイスター。

喉奥でロックして強制射精させる恐怖兵器。

踊り食いならぬ、踊りごっくん大好き娘。

、 || || 尖 || ||
 | : ; , 二 || r || 二 : ; ; | /

「通さないって、いったよ♪」

!!!!
 →PCから見ると髪伸びるよ。スマホだと伸びない。フシギダネ

潜水組さん（高校生くらいから）：

バラストタンクの掃除とか潜水艇運搬してくれる。あと定期便の攻撃（ワザと当てない）が激化しないか一応見ててくれてる。水中艀装は駆逐ちゃんとかがメンテしてくれる。

実はいっぱい喋ってる。低周波音しか出せないから、基本人間には聞こえない。雑談しながら近づいてくると訳もなく人間は悪寒に襲われる。↑New
 ソ級さんは、全身ムチムチの泳ぐ巨峰戦車。

緊急浮上！

ザッパーン

／ ? < ^ ^
 L | < < | (△、) △
 L | < < : < / / □ :
 \ \ \ \ \ / / : :
 // \ \ \ \ : / Y : : :
 ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~
 ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

地上組さん（女子大生以降）：

砲弾マゾ筋が多い。困ったときの科学者頼みで、時々攫ってくる。用が済んだらご褒美に腹上死のオプションくれる。必要あれば出てくるかも。

本作における深海棲艦について：

生き物。生き物です!!! 大事な事だから (ry)。突然湧いてきた (レインボープロジェクトの被害者?)。気付いたらいつぱいいる。

生活苦からいい感じで海賊生活エンジョイしてたら島占拠したあたりから手配度★★★★★になつて軍隊湧いてきた。彼女の一件以来、地上組が本気出す。出来てた海底港ベースに拡張して居住可能に仕上げた。頑張つて数か所にも海底基地作る。大西洋の海底にローライちゃんのお家ある。

くそプロパガンダのせいで深海棲艦とか言われ出した。戦力の質は軍隊アリ (人類) と白アリ (深海棲艦) ↑これ逆だったの気付いた N E W の戦いになる。トリガーハッピーこなして砲弾エンジョイ筋が発生する。女しくないないっぽいから、全部、寿命くるまで海底に居ていいよ (大本宮感)

わくわく海底基地：

初期は海溝にあつたけど地図みたら技術的に限界を感じ大陸棚に変更しました。(フイリピンの周りあたり?) 逆ツリー状にモコモコと空間がある。先端深度150M予定。(深海じゃないじゃん! また大本宮発表かよ! 一本取られたぜ! ヒーハー!)

下層に行くほど寒い。最下層はバラストタンクと分割槽 (ゴミ捨て場) その近辺にエタノール貯蔵庫がある。海底基地内は内部1.5気圧以下厳守。外部最大想定水圧20気圧 (海底海流の可能性) 人間は減圧病注意。3重構造の空気充填式開閉ゲートなら何とか、恐らく。一個づつ交互に開け閉めするから出撃亀る。

駆逐ちゃん農園がある。電力消費量 (高)。肥料は主に駆逐ちゃんがパンツ脱いでしゃがんでするアレら (体内で謎発熱の高温発酵済み。無臭。無害。そのままでも多分食べれる。3割くらいしか有機物残ってないけど。730調べ)。

酸素問題は残念ながら超SF補完されます。本編内にそれっぽい記述あり。空想科学研だつてウルトラマソが謎飛行してるの当たり前すぎで原因見逃したくらいだし (解明できなかつたのか?)。先

入観って怖いねゝへ

排熱循環で乾燥室兼サウナがある。

家具は主に飛行場姫が作ってる。なぜか鉢巻きして、そこに釘刺してる。口の中から釘吹いて矢継ぎ早に叩くという匠の技が光る。北方棲姫にも安心の全ての家財に角がありません。

「テレビ見れないんですよ？海底まで受信料取りに来ないで下さい。次来たら、バラストしますよ？」

海底のアイドル バラストタンクさん：

5〜6個が輪番で頑張って仕事してる。何でも吐き出してくれる。ゲート開閉の時の排水も防御面の理由でこっちに回ってくる。潜水艦仕様の水中で吸い込んで吐き出せるやつ。排水の時ゴボゴボする音が凄く怖い。吸い込まれたら潜水組以外、多分パニックで死ぬ。

手前に分割するタンクあって、大体何でも捨てられる。どっかの移動宇宙基地星みたく弱点に魚雷ぶち込まれても基地全部がぶっ飛ぶことはない。安全設計。

ていうか基地ぶっ飛ばすとせつかく海底に追いやった敵の主要戦力が本気出して向かってくるの知ってるから怖くて誰もやらない。来ないでって言われたら、大体の艦船は進路変える。緊急時は護衛娘付けて強行突破出来るけど、クマよけグッズ位の認識。お腹すいてると輸送船・商船がカモられる。

縁の下の エタノールさん：

潜水組の艀装が海底基地の下層に溜まるCO2から作ってくれてる。なんでも屋さん。本作の陰の功労者。酒税？知らない子ですね。

提督さん（海底）：

Mを开花。虐められると嬉しそうにおちんちん振る変態性奴隷。重度の足フェチ。いつも足見てる。足舐め犬。胸は飾り。でも恥かしから頑張って隠す（本人はずっと気付かれてないと思ってる）。

罵倒エンジョイ筋で、一番相性良いのは実は中二病拗らせてる飛行

場姫。優しすぎるのはNO！
なぜかアンケートで人気出てる罫。

どこかで、提督さん票が伸びたら、女装でもさせるかって入れた気がしたから、本編進んだら適当にお洋服来てもらいます。男の娘ガチ筋じゃないので、辱めプレイの一環になると思われます。さらに票伸びるとメス化が進んで、お尻の中までしつかり騷けられるかも？

殻割ると、割と泣き虫だった。

良くあえぐ。言う事よく聞きたい子。極力、体型（アルビノでもいけど極めてマイノリティだよ？）、髪質（基本黒短髪で、まあ書かないから好きなように。ハゲ可）、年齢は描写しないので好きなようにM側でもS側でも感情移入してどうぞ。

作者としては一応20代から30代、あるいは40代〜50代もしくは60代以上の可能性を考えてる。（警察の年齢予測コメントかよ！一本取られたぜ！ヒーハー!!）

人間は脆すぎるとの警戒感から意外と丁寧に扱われる。舞台裏知らないから、駆逐ちゃん連れて逃げ出そうとか思ってる頭ハツピーセット。調教進むと状況分かってバター犬兼たね犬に進化するかも。もともと変態Mなの？努力を返して。（戦艦棲姫談）

^ | ^

(*、ω、*) アッアッアッ

人 Y /

(、ωつ。o。o。)

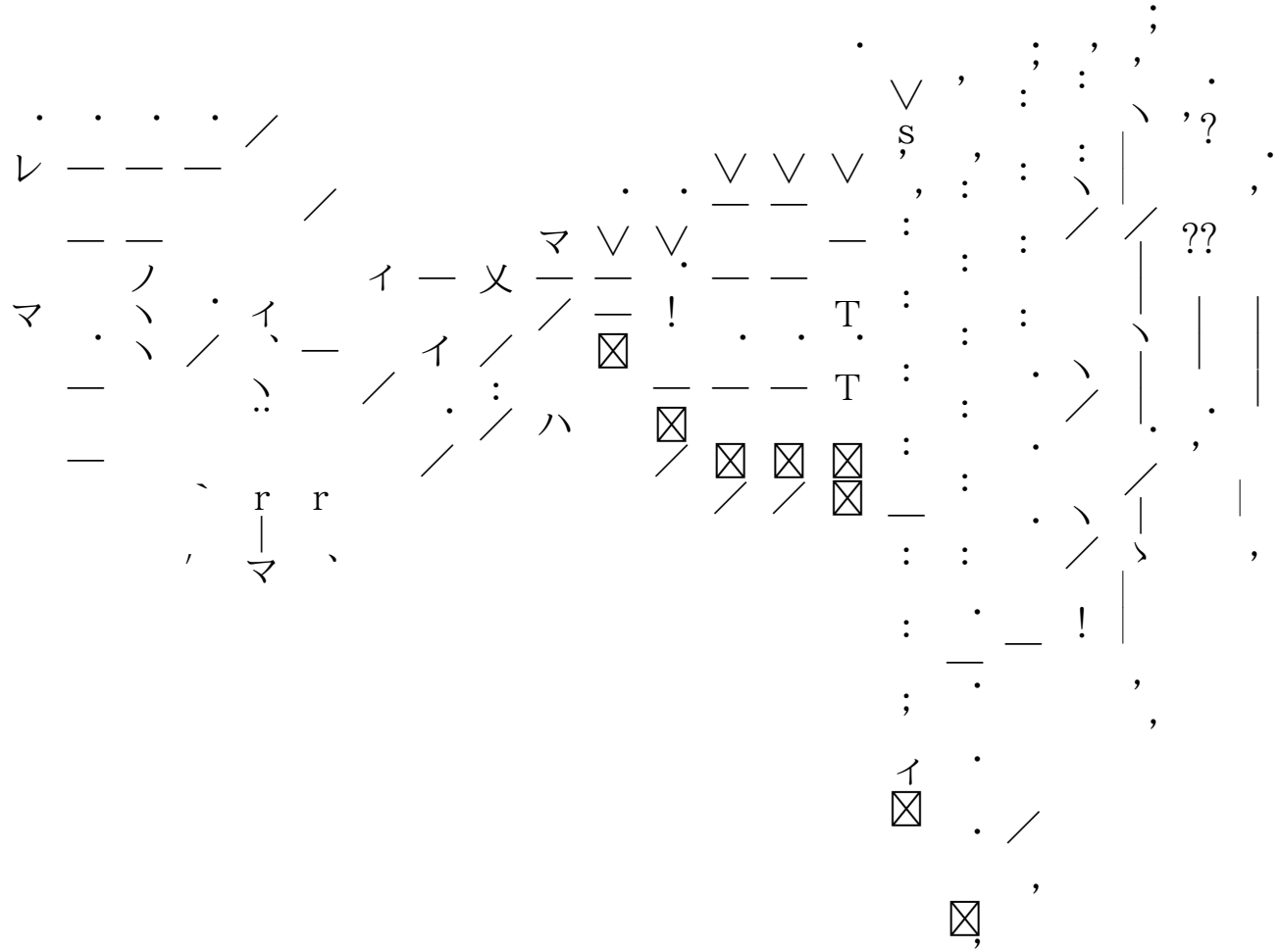
() ()

提督☒Sと艦娘：

これらはすでに形骸である。艦娘は深海棲艦に対して1/2〜1/3位の性能。LV100から例外なく本番セックス出来るしすてむ。ほつとくと深海化（一般レベル）する。いっぱいいる。どんどん

増える。捕まえて食べると多分毒。演習で共喰いとかいうリアルバトルの数減らしがあるとかないとか。

いっぱい増えると気球にぶら下げられてポイポイされる。海の上とか走らせてたら、逃げ出したり、暴れ出したりされたら怖いじゃん。



“チツ！なんて指揮！”

逃げ出したり、使えないのの一部は、極秘に売り飛ばされて奴隷娘に

なる事がある。

売られると護衛と称して同伴させられて、方々で無理やりパンパンさ
れている事もある。表向きはただの護衛で当事者ら以外には知られな
い。捕まって深海棲艦（地上）のオモチャにされることもよくある。
本作での艦娘は闘うラブドールの扱い。

だいたいの新提督達はLV100以上の秘書官複数集めて肅々と
秘書秘書してる。

「九三式、酸素LOVEあたりつく」

／??

— · U —

— し — \ パンパン

／???

— · U —))

— し — \ ノ

U — ?? — — —

?

「司令官。私がいるじゃない」 マルマルマルマル。はい、司令

官！この朝潮、本日は片時も司令官の傍を離れません！時報も掃除洗
濯も、どうぞお任せください！」 マルフタマルマル。静かな海は

：嫌いじゃない。 ” マルヨン：マルマル…。レディーは徹夜し
ても完璧なのよ？” ” マルゴーマルマルよ。え？イムヤの声聞き

たかったの…。 ” か、改装とかいって、私の裸が見たいだけな
んでしょっ、このクソ提督！”

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

：く／ 二二三三ノ(く
.....

無茶しやがって.....

・ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^

() ^ () ^ () ^ .

i (/ i (/ i (/ ..

三 一 三 一 三 一

U U U U U U

三三三 三三三 三三三

三 三三三 三三三

大本営：

あえて言おうカスであると。悪いほうに頑張り屋さん。

ムダにいっぱいいる艦娘をローコストの気球にぶら下げて超高高度からポイポイするクソ見たいな電撃戦してくる。操縦してんのも艦娘。へついに代理戦争出来たよ!!やったねたえちゃん!!<>

大部隊展開してたけど気付いたらCOMCENPACCさんのサーモバリックで消し飛んでた。兵隊出して戦うと金掛かるし正攻法で勝てそうにないから、寿命来るまで鎮守府立てまくって、ここは通さないお”作戦を発動。

U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .)
3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .)
) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U
U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .)
3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .)
) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U
U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .) U U (. 3 .)
3 .) U

戦後は新兵器艦娘で世界制覇かライセンス料でウハウハ狙い。だつて、アイツ拉致ただけで横須賀と東京湾壊滅させられたんだぜ？酷くない？てか虎の子の第三艦隊も巻き添えで壊滅してて草。

オウフｗｗｗｗ拙者、特別にローレライちゃんだけは守りますゾ。フオカヌポウｗｗｗｗ拙者これではまるでオタクみたいｗｗｗｗ拙者はオタクではござらんのでｗｗｗｗコポオ

— いいな、俺達の

— 誰かが殉職したら

— / — ?? —

— — ?? — ^ ^

— | — ?? — ^ ^ (▽・)

— 文 — ^ ^) C)

— ? — () (| 0 0

— — C) | 0 0 : : : : :

— — | 0 0 : : : : :

— 分ってる、生延びた

奴がそいつの自宅

のHDDを潰す！

俺達、死んでも仲間だぜ!!

〈〈三国同盟結成!!〉〉

特務部隊：

関東730特殊技研(?) 1足すとガチのヤバイやつじゃんへ
多くは語らない。駆逐ちゃんエ (; ω ;)

ざわ . . .

ざわ . . .

∠ ,

/ . / , —

/ / 、 / : : : : \ — ハ > . . —

/ X \ : : : : i j : : : : / X 「、 . . —

一、人
ハ、〇
γ、——
〇三

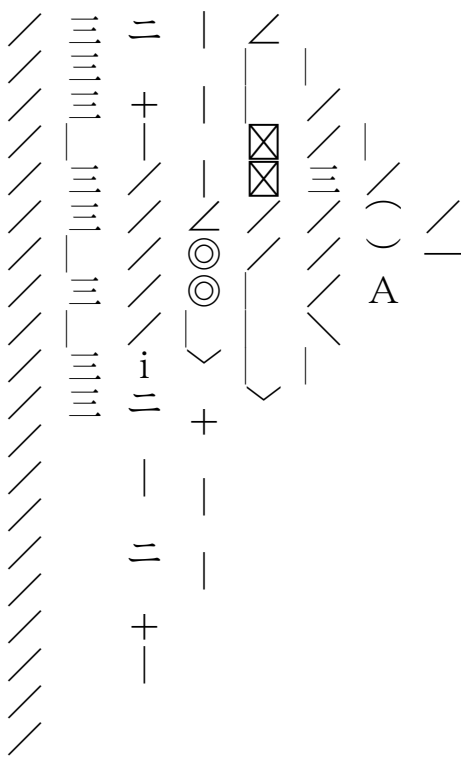
COMSOPAC (Commander South Pacific c) さん:

再建した某国第三艦隊の指揮兼任しています。葉巻とアイス大好き。たまに出てくるかも。

USS エンタープライズから音速機飛ばして超兵器バンカーバスターボカスカ撃ち込んでくる。実は大して成果出なかったのメディアに暴露されてムダに国庫圧迫したから反戦活動ガチ筋に虐められてる。(泊地水鬼にくらべてこの温度差エ・・・)

ific Ocean Areas
a s u b o r d i n a t e c o m m a n d o f P a c i

ちよつくら
コンビニ行ってくる



COMCENPAC (Commander Central Pacific ific) さん

程よく偉い人。多分出ない。出てくると地獄へさか落としの可能性。本作ではたまにくる(?) 潜水艦の親元。

クソみたいな大本營のせいで第三艦隊が酷い目にあう。むかついたから、艦娘わらわらしているとサーモバリック撃ち込んでみた。あいつら気球ごと燃え尽きてて大草原。誤射だぞ！知らん！黄

色いサル共、爆発でクソコラ祭りしとる。内陸安心だからってバカ杉内？

実は設定が定まってない。ホントは名将。

Primary subordinate command of Pacific Ocean Areas

妖精さん：

実は見えるのと見えないのの2種類いる。見えるのは技術者の事。え？あんた両方見えんの？

はあくさつぱり さつぱり

本編<<< 超えられない壁<<< チラ裏

◎深海棲艦と艦娘はゴムいらない。(懐胎しない)

構造の違いから非性病3原則(730調べ)持たない。作らない。持ち込まない。安心設計。

というか概ね毒効かない。最大の毒は酸素系。

性的な上下関係は←で固定。

女<男 女<女 女||女 女<女<男

<<逆転ないんだ！すごいね！>>

^ | ^

(*、ω、*)アツアツアツ

人 Y /

(、ωつ。。

()

！ワオ！大漁大漁！
ワ
オ　　ウワアア！！　　オ
！　　（＞、A、）＞　　！
大　　（へへ　　大
漁　　漁
大　　大
漁　　漁
！大漁大！オワ！

（ナパームはまだいいとして、バンカーバスター耐えるってどういうことなの。。。SF補完にも限度がぐぬぬ）

（サーモバリック以上は全員逃げ出すでFA。ハンタのアイツですら最初、熱だけで死んでるし）

（???：　でえじようぶだドラゴンボールがある!!）

（???：　愚図め。ああ愉快だ、ならばくれてやろう。この力。使いこなして見せろ!・・・）

（???：　我がドイツの医学薬学は世界一イイイ！できんことはないイイイ——ツ!!）

「バラスト位で死ななそうなのは。済みませんがお引き取り下さい」
メイド服でのののの。

深海棲艦の謎回復の決定的理由がなかなか思いつかないのです。

実は思いついたのですが。あれ？

これ。あれじゃん。あれだよほら。

「空中元素固定装置じゃん!!!」

永井豪え・・・

ハニーフラッシュかよ！一本取られたぜ!!ヒーハー!!

何であいつ光るんだよやめろ!!熱量作んな!!!

あいつやっぱ天才だわ。

時々ガチSFぶっこんでくるのホント困るわ。

油断していると盗用になる。まあ、二次作な時点であれか。

一応バイオレンスジャックも怖いから見直しよう。

しーない。ほかの考えるか。。。

仙豆って食べるとどうなるんだろ。体重変わらないのかな？

骨粗しょう症なのかな？それとも葉緑素でも補填して全速で光合成でも始めんのかな？

質量どこから来るんだろうね。体スカスカになるのかな？

いや腹膨らむから、あれかな、カプセルのアレの謎原理かな。

ゆっくり爆縮してたのかな？不思議だよね。

STAPはあれだけど、IPSは元気に頑張ってるからまだ再生医療への希望は捨てられない。そのうち脳もぶよぶよ増やせんだろ。

SS投稿速報<ハーマルンの順でゆっくり更新されます。。

(向こうはログインできなくなっちゃった<へ)

書くの大変になってきた。。。

ていうかエロがもはやスピノフレベルじゃん。じゃん。。。

くうく疲れましたw

実は、なんとなく足コキ小説書いてたのが始まりでした。

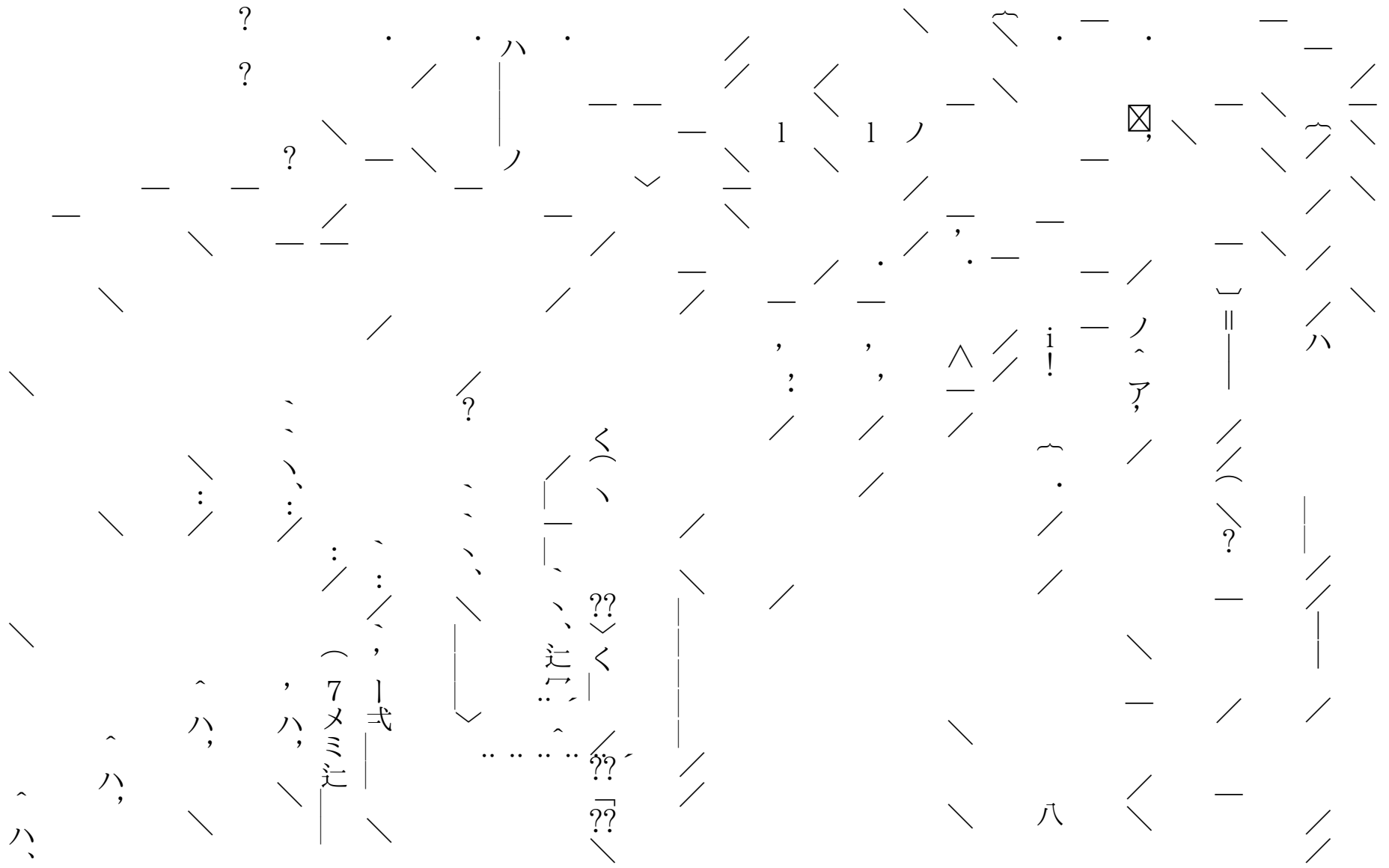
本当は話のネタなかったのですが↑

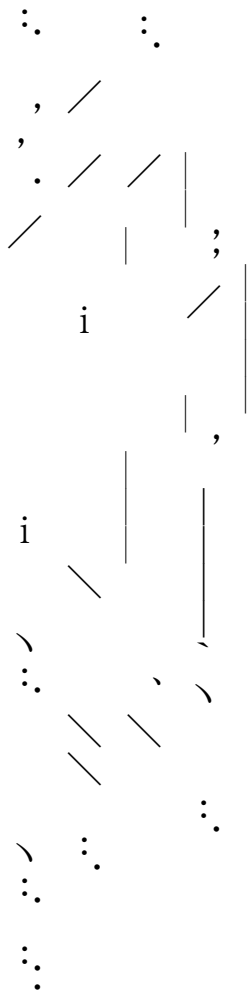
全く需要無いネタを膨らませてみた所存ですw

^|^ ドルルルル…

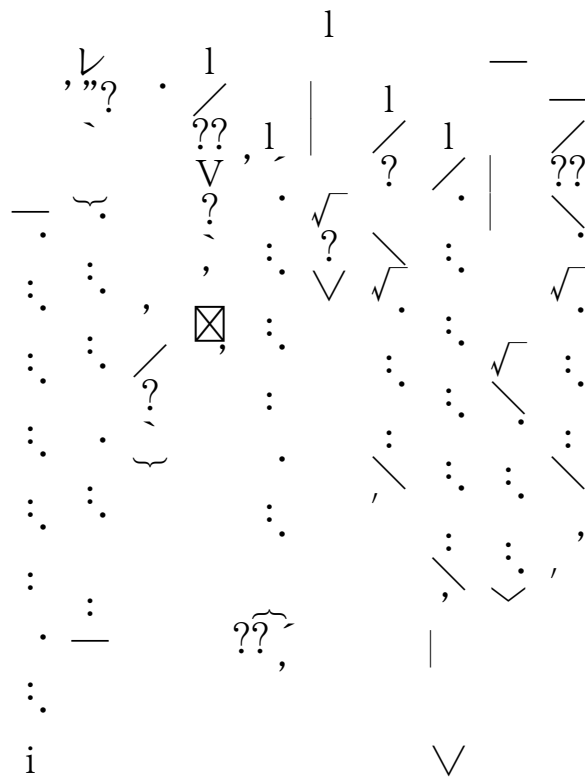
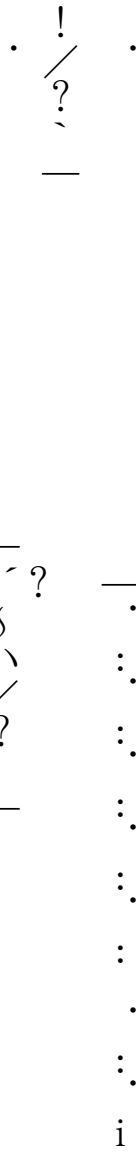
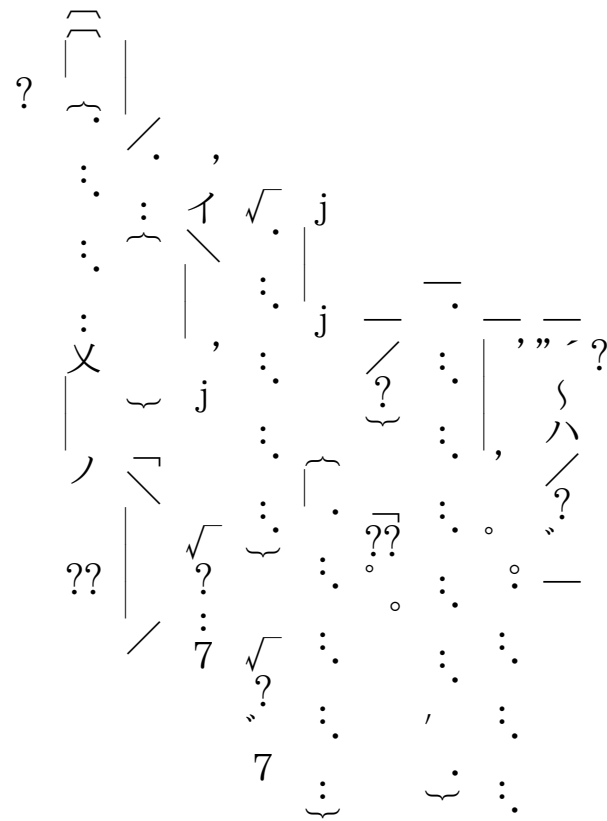
(.v^ ^),

く(っ?) (。D) ミヤミヤミヤミヤ





超絶演技中



! ; \ ∴
 / / / \ / /
 / / / / /
 \ / b / /
 / / / / /
 ! , ∴

※A Aは基本ライセンスフリーから改変してるから
 使いたかったら、好きに流用していいけど
 文章水増しとかで、怒られるかもだよ。

へ本ページは全ての人のヌクモリテイあふれる対応により支えられ
 ています!!!
 <<

― セツクス調教 初日 ―

01 戦艦棲姫 01

「おいお前。いつまで寝ているつもりだ？」

聞こえてきた女性の声。

暗い室内、いや、石牢か。次第に目が慣れてくる。所々、薄暗い裸電球が室内を照らしている。手足を固定されているらしい。首だけを動かし声の来る方向を見た。

「下着一枚ではさむかろう」男は、十字に組まれ直立する鉄骨に、鎖を手足に巻きつけられて磔られている。「添い寝して欲しかったか？」

「貴様は……」

入口から差し込む光の方向を見ると、長い黒髪で背の高い女性が立っている。漆黒でミニスカート。

ドレープネットクのワンピースから、対照的な白くスラリとした足が石段を下りて近づいて来るのが見える。石段にも数か所裸電球が吊り下げられており、白い手足が動いて来るのが見えた。

「しっ」声の主は近寄ると素早く腕を伸ばす。

「うぐっ！」突然、パンチを腹筋に受ける。吊るされる小さな裸電球が彼女の顔を照らし出す。顔には、小さな角が並列に二本、前髪を分けて生えている。「っ……」

「知らないのか？ 私が戦艦棲姫「せんかんせいぎ」だ」彼女は赤い瞳を揺らし怪しく微笑んだ。「深海へようこそ、提督」

「さて、どうする？」鉄骨にしなだれるように白い手を伸ばし、耳元でゆっくりと囁く。赤い瞳が楽しそうに、踊っているように感じた。「次の大規模作戦での侵攻ルートをしやべるか」

「うっ！」先程より重いパンチ。石牢内に鈍い音が響く。「私を楽しませるかだ」

彼女は、腹に沈み込む拳を半回転させる。冷たく鈍い痛みが内臓からかけ上ってくる。手慣れた手つきで肝臓を的確にすり潰す。

「何も知らんし」僅かに視線を下げ腹部にある彼女の赤い瞳に視線を合わせ「しゃべらん！」彼は強く息を吐きながら答える。

「では、楽しませてもらえるのだ」彼女は下半身に手を伸ばし彼のグレーの下着越しに急所を強く掴んだ。「なっ！」

固定された太ももの間に、彼女の白い腕が粗々と突き刺さる。黒く鋭い爪が、下着に数本の渓谷を作り出した。

「あぐあっ！」突然の事に、鎖をガチャガチャとさせ彼は息を絞り出す。「っあああ」予想していなかった事態に思わず彼の口から恥ずかしい声も漏れ出た。

「どうしたの？しゃべるの？」彼女は睾丸に指を張り付けるように、緩急をつけながら下からわしづかみにする。「続けるの？」

彼はももに力を入れ抑え込もうとするが、彼女の強い力が抵抗を許させない。無抵抗な痛む二つの肉玉はピアノでも弾くかのように個々の指に優しく潰されて形をグニグニと変える。

「あよせ・・・」快樂より、痛覚が勝り息をゆっくり吐きながら呟く。「っん、ん」力を入れた彼の内ももに僅かにスジが浮かび、イヤイヤするように下半身を左右に振る。

「あら、もうおしゃべりの時間なの？」そう言う間も手を休めない。力を抜きながら彼女の手の平がコロコロと睾丸を動かしている。「ねえ・・・気持ちよかった・・・の？」

彼女は下腹部を振動させながら耳元で甘く囁いた。彼女の冷たく重い息が耳に深く挿入され、痺れるように彼の全身は身悶える。彼女の毒は彼のカラダを巡ると乳首と股間に集束していく。

「ん・・・っあ」

彼は女の子が股間に電動バイブでも押し付けられたような声を出す。直接触れられてもないのに、下着は古墳のように恥ずかしい男の形が浮かび上がった。

「ふふ」ゆっくりと白い人差し指が男の形に盛り上がった輪郭をなぞりあげる。「痴女め！」

なぞりおろし。また、なぞりあげる。だんだんと、勾配が増している。彼女の黒い爪先が、固く盛り上がる筋を舐めるように滑る。

「腰、動いてるわよ?」

膨らむ股間をしなやかな手で包み込み、素早く上下させる。彼は思い取りにされまいと女の指を追い求めて動く腰を何とか自制しようと集中した。

「ほらっ!」彼女は股間から手を離すと再び腹筋に素早くパンチを繰り出した。十字に組まれた鉄骨に振動が伝わる。「こつちもあげる!」

「うっ!」

繰り返し撃ち込まれる拳で彼の呼吸が乱れる。しかし下腹部の痛みは彼の乳首まで痺れさせ、彼は尻に力を入れながら完全に勃起させた。

「ねえ、しゃべりたい?」彼女はしなやか体を密着させ唇を重ねる。角で彼の額を固定すると彼女の長い黒髪が少し揺れた。「しゃべりたくないの?」

「・・・ん」彼女は舌をねじ込もうとするが、彼は歯でしっかりと口を閉ざして抵抗する。少し、磯の味が彼の口に流れ込んだ。「強情ね」

彼と顔を合わせながら、再び彼女は胸から虫のようにカサカサと指を彼のカラダを伝わせながら下ろしていく。怯えの見える瞳を楽しみながら、彼女の手は彼の脚の間に挿入されて睾丸を強く握りしめる。

「あああっ!」激痛に大きな声が漏れる。「いいわ、ゆっくり楽しみましょ」彼女は彼の乳首に口づけをすると離れていった。

ここからでは見えづらいが、彼女の行く先には重く大きな茶褐色の木のテーブルがあるようだ。高級ホテルの一室のような広い石牢内をどうやら貸切らしい。

彼女は腹ほどの高さのある重い茶褐色の木のテーブルに腰掛けた。裸電球に照らされ、白い足をダンスするようにくねらせる。

先程は見えなかったが黒いハイヒールを履いているようだ。両手で漆黒のスカートをゆっくりと、脚の付け根までたくし上げる。

電球がハイライトする白い足と黒いハイヒールが、優雅に舞った。虚空を蹴るように、ペダルを漕ぐように、彼女は両足をダンスさせる。

彼女は彼の視線が足を追うのを感じた。

「ふふっ」

彼女は楽しむように時折大きく脚を開く。裸電球が白いもの付け根にある、彼女の穿く黒い下着を強調させる。

たつぷりと脚を開くたびに彼女の内ももに健康的な筋肉のスジが浮かび、食い込み張り付く黒い下着にはしっかりと彼女の形が見えた。

彼女は勃起させた彼の視線を独り占めする。刺激的に動き回る、彼女の優雅な白い足が彼の脳裏に漬け込まれていく。彼女の黒く強調された股間は焦らすように不規則に開く。

彼女は彼の視線を透視しようと奥まで感じるようになると、彼女は足をVの字にキレイに大きく開いて止めた。

股間の下部には小さく薄らと楕円状に黒さを増している部分が見えた。彼女は僅かに両手をテーブルの縁に付き腰を浮かせて濡らした部分をさらに見せつける。

彼は永遠にお預けされているかのような錯覚に陥りながら、時を忘れたように二人の時間を刻み込んでいく。

「ねえ、私昔」彼女は足を閉じてスカートを正す。「艦娘だったんだ」白い脚をゆつくりと石床に下した。

「そうか・・・」

しばらく彼女のダンスの浮遊感に浸っていたが、思い出すように彼は呟いた。確かに艦娘が深海化する可能性がある事は鎮守府の提督同士では何度も議論されていた。

現に艦娘が原因不明に人を襲うことがままあった。その犠牲の中に、その艦娘を指揮していた提督すら含まれる。

もともと、艦娘の出生自体が大本営によりブラックボックス化されており、提督たちに出来ることといえば、いつもお湯の上辺をかき回すだけのような身のない井戸端会議しかできてはいなかったが。

「ほら」

彼女が朧な光に手を伸ばすと

薬指に光が反射する。

結婚カッコカリという言葉は聞いた覚えはある。艦娘には、ある特定のしきい値を超えると更なる能力を発現させる事があると。

妖精曰く艦娘との絆の証だそうだが、実際には能力が発現した後その艦娘を区別するために大本営から配給される物がある。

一般人から妖精が見えることを条件に集められただけの、心構えの不足している提督を大量に配置したため、やはり実戦ともなると恐怖心や道徳観を優先してしまいがちで動きが悪い者が多々いる。

酷い時には出撃を拒む艦娘と共に脱走を目論むことすらある。そこで大本営は一種の取引ともいえるシステムを作り上げた。

大本営からの訓令によれば、艦娘の能力を開花させた者には超法規的措置により感状の授与と共に初回の一隻目をパートナーとして私的占有を認めるとある（退役時には艦娘の無力化処理）。

また、2隻目以降の占有については所定の手続きと諸費の7000（単位十万）円を納付する事と定められていた。

つまり大本営は、好きな艦娘を選び、育て上げれば性交渉含め後は好きに使えと言ってきたのだ。2隻目以降の金額についても、元が艦としての価値を考えれば破格の対応である。

この抜け道を「見せて」やることにより、大多数の非凡な提督の士気が高まったことは、想像に難くない。

その証の品が指輪に酷似しており「結婚カッコカリ」などと揶揄されている。無論、純粹に戦力強化としてだけ考える提督は一定数おり、戦力に劣る膨大な数の指輪付きを今なお海へと散らしている。

——つまり戦艦棲姫は、沈められたどれかの艦娘だったのか。

「ねえ」彼が難しい思考を始めると、彼女はゆっくりと立ち上がった。「どうして」

長い黒髪を揺らしながら近づいてくる。彼女は立ったまま体を密着させると、鎖で抑えつけられる両手に白い指を重ねる。

「奪うの？」

衣服越しに、湿り気を帯び始めた彼女の股と、彼の股間を押し合わせる。彼女から未亡人のような細かい声が零れた。彼の顔が数センチ先にあり、二本の角が彼の額を押ししている。

ゆっくりと腰を上下にスライドさせ始める。彼女の冷えた体温が伝わる。それは境遇によるものだろうか。彼女の股間の雫すら、それは涙かと思うほどに。

「すまない」

彼は呟くように言った。彼女らの大多数は当初地上で活動をしてきたが、艦娘の登場以来本格的に深海へと“追いやられた”のだ。これは一般向けには“深海から現れる”謎の敵と発表されている。

「守りたいのよ」

そういうと彼女は唇を重ねる。彼の口は彼女を受け入れ、抵抗なく開かれたままいる。彼女は舌を差し込み、しっかりと舌同士を絡める。

彼女はスカート越しに自分の一番敏感な場所を、彼の主張する物へと押し当てると、長い黒髪を揺らしゆっくりと小さく腰を回す。

動きに合わせて彼が大きく膨らませた物が、左右へと振り回される。彼女の白い四肢は電球に照らされ白さを増しながら激しく揺れている。

揺れる髪から時折見える首筋は、ほのかにピンクがかった色。ローズのような薄い甘さが彼女の熱せられた首筋から拡がる。

「ん、いつ……」

彼女の腰の動きは激しさを増し、ワンピース越しに尖らせた胸の先端からも快楽を貪っていく。全てを味わうかのように、舌で奥歯までなぞりあげる。交差する鼻がお互いの呼吸を音を立て拾い合う。

「ん……あつ」

彼女は両腕を広げ大きな胸で彼のカラダを潰しながら、恋人つなぎされている両手に力を入れた。両足も十字の鉄骨に回しこむように

抱き着きしつかりと股間同士を押し合わせる。

小刻みに動かす彼女の股間から生まれる振動が、十字の鉄骨を軋ませギィギィと鈍い金属音を上げさせる。恋に落ちたように彼は自分からも腰を動かし、彼女の口に舌を入れる。

彼女は二人の愛が作り出した、口の中に出来上がった液体を、舌を使い彼の口の中へと強引に押し込んだ。彼は自然と全てを飲み下し、目を瞑り無言で大きく上半身をのけ反らせる。

口が離されると、お互いの舌から垂れるようにキラキラと伸びる光が走っていた。垂れる電球に頭をぶつけ、石牢の中で光がチラチラと揺れた。光の動きに合わせてキィキィと軋む音が小さく鳴る。

「こんな事・・・」小刻みに呼吸をしながら彼は呟いた。彼女のスカート越しに広がる染みが、グレーの彼の下着をさらに湿らせていく。

「ねえ・・・」

彼女も呼吸を整えながら呟いた。誘うように長い黒髪がゆつくりと揺れ女の匂いが冷え切った彼の全身を優しく包み込む。

「・・・しゃべる？それとも、もつと・・・欲しい？」

大きな茶褐色の木のテーブルの方へと行くと、肘掛けのある焼き目の入った深い色の木の椅子をグレーの下着一枚で十字に鉄骨に固定される彼の前に移動させ座る。

二人の股間部分は光を受け、臍気に光っている。

「ねえ・・・わたし、きれい？」

垂れる黒髪を耳の後ろにかき上げ、黒いワンピースのスカートの先からゆつくりと片方の白い足が伸びてくる。

裸電球の光がパテントに反射され、彼女の妖絶に輝く黒いハイヒールを自然と目が追った。彼が無言でいると、黒いハイヒールの靴底が彼の股間に重なった。

「ねえ・・・」赤い瞳で誘うように笑いながら、足に力を入れていく。

「くっ」下着越しにヒール部分が股間の付け根に食い込んでくる。

勃起している根元に冷たく鈍い痛みが訪れた。そして、アウトソー

ル、ハイヒールの平たい先端部分に体重を乗せていく。

「しゃべりたくなかった？」

靴全体で押し潰しながら円を描くように前後に動かす。ピンヒールではない事が幸いだが、それでもヒール部分から股間の付け根を容赦なく突き刺さる冷たい痛みが駆け巡る。

彼は動きに合わせてのけ反るようにパクパクと口を開ける。破壊することのない絶妙な追い込みは屈服し射精させる事すら許さない。

「なにも・言うことは・・・ないっ・・・」

深海棲艦に捕らわれたと思しき提督の失踪事件は、男女ともに例外なく帰還者がいない。彼女たちの機嫌を損ねれば、およそ楽には死なせてもらい事は容易に想像できる。

手始めに、このまま拒み続けられれば永久に射精できない体にされるかもしれない。それでも、彼は覚悟を決めた。

「ねえ、あなた。わたしと」

ゆっくりかかたとを軸に左右に回しながら、ハイヒールがさらに沈み込んで行く。体内に睾丸が押し込まれて引き伸ばされていく。顔を顔を背けて深く息を吐きながら去勢されるその時を待つ。

「おしゃべりしましょ？」

潰れる前に彼女は足から力を抜いた。しばらく間隔を明けてから両足を伸ばして、弱々と萎んだ勃起をハイヒールの靴底で下着ごと挟み込む。

かかとは睾丸の上に軽く乗せられて、ヒールが中の玉をクリクリ転がし弄ぶ。冷たい鉄骨に押し付けられ擦れていく感触と、睾丸からの痺れるような痛みが再び勃起を増大させた。

彼女はイヤらしい目つきで獲物を狙うようにグレーの下着を大きく盛り上げている、彼の股間の陰影をを見定める。

「しゃべりたく」

太ももを揺らして踊るような白い足が黒いハイヒールを巧みに動かした。片方の靴底で裏筋を押しさえつけながら、表側のカリ首にもう片方の足でハイヒールの表部分を当て勢いよくねじ込む。

「なくなっただ？」

擦れるカリ首にわずかに彼女のつま先の動きを感じる。椅子から木の軋む音が鳴る。スカートを片手でヘソの窪みの上まで一気に捲りあげると、しつかりと湿っている黒い下着を見せつける。

「ねえ・・・どうしたの？」

白い太ももと腹部が彼女の逆三角形の黒い下着を際立たせる。彼の下着は股間部分を常に盛り上がりさせ脈打たせている。

「さっ・・・次は」

白い指先の黒い爪が、黒い下着の上をなぞり、下着の上から自らの敏感な突起を激しくこねくり回す。

椅子から白い脚を伸ばし黒い髪を振り乱しながら、彼女の素早く動く指が下着の衣擦れの音を暗い石牢内に響かせる。色白の美女は男の前で股を開き、お預けさせるようにオナニーを愉しむ。

「あなたの、ターンよ？」

股間に足が乗せられて彼の低い声が漏れる。目線が交差すると彼女は誘うように大きく息を荒げながら、オナニーを続けて黒い爪を下着の中へと滑り込ませ、水の音を響かせる。

「ふっ！ふ・・・いっしょ！」

激しく水音が響く。彼は腰をくねらせ、クサリで押さえつけられた手足をガチャガチャと鳴らしている。しかし、逃げようと動かす腰の動きすら、食い込むハイヒールからの産物になる。

「・・・っいいー！」

彼女はカリ首を颯ついていた足を股の下まで下ろし、睾丸を掬いあげるようにタプタプと振動させ射精を促す。

彼女のハイヒールの靴底が振動するたびに擦れて適度な痛みを与える。彼は初めての恥ずかしい責に、お尻に力を入れ、つま先を伸ばして必死に耐えている。

彼はオナニーしながら足コキを行う痴女にイカされまいと体に力を入れて抵抗するが、その姿はがさらに彼女をたぎらせ濡らさせる。

「はあああああー！」彼女は嬌声と共に大きくのけ反ると、ハイヒールの底で裏筋を抑える足を強く踏み込む。「んんんっ！」

彼女ののけ反りと同時に、ついに彼も、下着の中に白濁液を吐き出

さされた。粘り気のあるベタベタとした不快な感触が広がった。
彼は犯されたと実感させられ、重い瞳で全身から力を抜いた。

02 戦艦棲姫 02

「ねえ……」

しばらく余韻に浸りながら彼女は椅子から立ち上がった。かわいいオスの鳴き声を思い出し、彼女の下腹部はキュツと振動した。

「見せて？」

彼女の赤い瞳が怪しく揺れる。仄かに照らされた白い手足が、未だ鉄のベッドに括り付けられた哀れな囚人にゆっくりと近づいて行く。

その視線の先には尖らせた先端から下方向に大きくシミの広がっているグレーの下着がある。

「つよせ……」

初めて裸を晒す生娘のように、彼は羞恥心から耳まで顔を赤く染めながら弱々しく抗議する。高鳴る鼓動をあざ笑うかのように視線を交わすと、白く細い彼女の指の先、黒い爪が、彼の下着に掛かった。

「ダメ……だ……」

彼女は顔を上げ、視線を合わせながら下着を引っ張る。指の作った隙間に、オスの嫌らしい匂いを染み込ませた彼女の白い手が、何かを探るように滑り込んでいく。

果てたばかりの敏感な先端部分を五指の爪先で上下に動かす。彼女の足を覚え、次は指を教えてもらえると彼の股間は自然と膨らみを増していく。

「もつと、ほしいの？」

彼女は立ち上がり耳に口を近づけ囁く。媚薬のような彼女の声が脳に染み渡り、全身が痺れる。彼女は下着の中で精液を指に絡めて、彼の物に指を密着させながら根元まで塗り付けていく。

指の動きに合わせて、首筋に押し付けられた彼女の舌が上下に動く。彼女の冷たい指が底まで潜っていくにつれて、陰毛から引っ張られるようなベタ付く感じが伝わる。

「いいわ……」

彼女は指を引き抜き顔まで持つてくると、彼の両目の間で僅かに才

レンジ色に照らされる精液でベタ付く指を踊らせる。そのまま指に纏わりつく液体を、舌を伸ばし丁寧に一本ずつ舐めとっていく。

彼女は指をしゃぶり終わると股間まで屈み、グレーの下着のシミに鼻を押し付ける。鼻の中にオスの匂いが広がっていく。再び、彼女はスカートの中に熱を帯びていくのを感じた。

「酷く匂うわね」

彼女は聞こえるように少し大きく言う。鼻を押し付け、大きく呼吸音をたてながら匂いを吸い上げる。寝息を立てるような音が、暗い石牢内に響きわたる。

「そうね」

おもむろにスカートの中に両手を入れ、再び彼女の両手が白い足のももまで下りてくると、一緒に黒いものが下がっていくのが見えた。白い足を交互に上げると、取り出した黒い物を顔に近づけてくる。

「私も味わって?」

彼女はゆつくりとソレを彼の顔に被せる。丁度、粘り気のあるシミの部分の口に宛がった。鼻と口から、彼女の発情したメスの匂いが染み込んでくる。

彼女の指が、彼女の穿いていた黒いショーツ越しに、彼の眉間から鼻を下り、彼の口までなぞられる。

「あなたはエッチなの?」耳で囁く。彼女はしゃがみ込むと、白濁にまみれる彼の勃起する物を、下着から荒々しくむしりだした。「それとも、すぐくエッチなの?」

下着のゴムが固定して、僅かに顔を出す部分が腹にぴったりと張り付くソレは、先端から零れ落ちる白濁液が光を受けてヌラヌラと輝いている。

「きれいにしてあげる」

舌を当て、子供が長いキャンディをたべるように、舌を躍らせる。白濁液の名残を舌に集めては飲み込む。睾丸や陰毛に絡む物までしゃぶり取る。

彼女は貪欲に先端に唇を押し付けると、根元から揉み上げるように指を動かし、吸い付いた。

「ほしがりさんは、まだしゃべりたくないの？」脈打ち勃起した先端を舌でなぞる。「じゃあもう一回、よ」

彼女はゆっくりと先端を口の中へと沈めていく。まだ余韻の残りパクパクと穴を動かす先端部分を、喉奥に押し付けながら、強く吸いたてる。

彼女の温かく水気を帯びた口内が、恥かしい音を出して全体を締め付ける。彼女は強制喉セックスで力の入った膣のような洗練された技を使い彼にがまん汁を吐き出させる。

「むうううう」

彼は呼吸を荒げ、腰を振り動かし抵抗した。しかし、呼吸をするたびに被された下着から彼女の匂いが絡みつき、更に射精感が増してしまふ。次第に彼女の口の動きに合わせて、腰がついて行く。

彼は自分から彼女の喉奥を求め出した。薄らいでいく意識の中で、彼女がテーブルに両手を付き尻を突き出して来ているかのように妄想してしまう。彼も応えるように股間を何度も突き出した。

「ぶあつ」彼女が口を外すと、喉の奥から粘性の濃い、黄色い液体が伸びる。「今、すごくエッチな動きしてたわよ？」

彼女は太ももで、彼の脈打つ股間を強く抑え付けながら、彼の乳首を爪で嬲りつつ囁いた。正面から太ももが突き刺さり、冷たく柔らかい脚のテーブルに睾丸が2つ陳列される。

彼女の折れた膝の先端が、肉の果実を優しくタップして、ドンドンと垂れ下りてくる。

「ねえ・・・どこ？」彼の顔から黒い下着を取り外すと、白い足をダンスさせるかのように、再び軽快に穿きなおした。「おしえて？」スカートをめくり、液のしたたる、白い太ももを見せる。

「どこがいいの？」

彼女はさらにスカートを腹の窪みまで一気にたくし上げた。彼女の股間により再び潤いを取り戻した、先程まで味わわされていた黒い下着を見せつける。

「ほらっ」

彼女は下着を晒したまま、ゆっくりと股間を重ねる。抵抗してもム

だだと悟ったのか、彼は彼女の行為を素直に受け止める。

「ここがいいの？」彼女はスカートを離すと、ゆつくりと股間を押し付ける。「足？胸？口？お尻？」ゆつくりと腰を動かす。「しゃべってくれたら、選ばせてあげる」彼は無言でうなだれている。

「ここの中？」下着越しに股間を合わせたまま、白い太もも左右にグリグリと激しく動かし腰を振る。磁石でも付いたかのように彼の股間がついてくる。「かわいい」耳元で囁いた。

「いいわよ？」

彼女はびつちよりとした股間をさらにグイグイ押し付ける。彼女の下着が与える濡れた絹ズレの感触と自分自身の腹に挟まれて、左右に振られるようにきつく潰される動きが強力に射精感を促す。

「あなたはすごくエッチね」

彼女の股間から生えているように顔を出す肉棒が、悲鳴を上げるように尿道をパクパクと広げている。薄布一枚を挟み、彼女の女性器が彼の股間を蹂躪する。

彼の両脇に腕を差し込み、大きな胸が彼を押さえつけ彼女は太ももを大きく開いた。彼女は角で彼の頭を押えながら彼の片耳の穴に唇を密着させる。そのまま入っているかのような声で鳴き始めた。

高身長な彼女の長い脚は彼を完全に押さえつけ、全身に演技の喘ぎ声を潰け込んでいく。スキ、スキと彼女の声は高く変わり、一瞬にして彼は今日まで運命の恋人同士だったかのような錯覚に陥められた。

二人の両手は重なり、彼の方から強く握り返してくる。彼女は耳穴にビタ付した口で愛を囁きながら男のように間隔を開けて股間を打ち付ける。

彼女が腰を挿し込むたびに彼は愛を訴えるかのように両手に力を入れる。カラダの全てが彼女に溶けていくような感覚の中、処女が初めてを受け入れるように彼は睾丸からの痛みにたえ快楽に変えていく。

「うっ・・・」

彼が小さくうめき、絶頂を教えるかのように彼女の両手を強く長く握る。彼女は股間に温かく彼の愛のの広がりを感じた。

「汚したわね？」

彼女は寸劇を終わらせ、いたずらにそう言うと、漆黒のワンピースを脱ぎ捨てる。ブラは着けておらず、型崩れしていない大ぶりの乳房、全身白い体が照らし出された。

彼女のピンク色で尖らせた乳首がふくらみ、股間部分には彼の白濁液のこびり付いた黒い下着を纏っている。足には黒いハイヒール。

彼女は自分の股間に付着した体液を白い指で掬い取ると、見せつけるようにしゃぶり取った。黒い薄手のショーツをヘソにまで引つ張り上げ、白く透け出る女の形に彼は顔を向けた。

「3回目はここがいいの？」

下着を脱ぎ下ろし、黒い爪に掛け数回クルクルと回すとそのまま床に捨てる。ヘソのくぼみの下には薄く黒い毛が逆三角形型に乱暴に生えている。

彼女はショーツに吐き出したばかりのビクビクする彼の陰茎を、太ももで抱きつきながら直に跨って、指で自分の股間に呼び寄せる。

「もうダメなの？」

だがソレは指の中で力を無くし小さく萎んでいくのを感じる。残念そうに彼女が離れて行った。彼は、彼女が投げ捨てたワンピースのポケットから何かを取り出すのが、もうろうとする意識の中見えた。

「ここが元気になる薬よ」

彼女は指二本を自分の脚の間に突き刺しながら言う。アソコをかき回しながら彼女は再び戻ってきて、彼に跨ると火照る股間をびったりと重ね合わせる。

彼の上半身に胡坐をかくように抱きつき、ひんやりとした彼女の体温を伝える。彼女は舌を出し、自分の口の中に小さな錠剤を含むと、そのまま口移しを行った。

彼女は舌で錠剤を無理やり押し込んで行く。彼は飲み込まさせられないように、巧みに舌を動かし抵抗するが、角で額を抑えられ、しっかりと口を塞がれた。

恋人がじゃれあうように、二人の舌が徐々に錠剤を溶かしていく。赤い瞳が楽しそうに揺れている。彼女は時折体を揺すっては、擦り合

わされる乳首の感触を楽しむ。

彼女のヘソが、元氣のない肉の塊を左右に揺り回し陰茎に残る精液を搾り取る。

何分、何十分、舌を絡め合い愛を育んでいただろうか、低い室温と鉄骨から伝わる冷えに体力を奪われ、ついに彼はだらしなく口を開くと大きく喉を鳴らした。

「さむいのかしら？」

小さく縮こまっていく彼の脚の間の小袋を、軽く指で弾くと悪戯に言う。クサリを外すとぐったりと体をもたらせて来た。

彼の太ももに残るグレーの下着を引き裂きむしり取る、そのまま全裸で木のテーブルに大の字に転がせる。されるがままに無抵抗な彼を、ロープで手足を縛りきつく固定する。

「気持ちいいですって言えたら」彼女はテーブルの上に立ちハイヒールで乱暴に股間を潰しなじる。麗しい彼女の黒く長い髪が左右に揺れる。「今日はもう許してあげるわよ？」

自分の体を見せつけるように、天井のレールを滑らせ電球を引っ張りよせる。全身を白く光らせ、ピンクの乳首を尖らせながら、黒いハイヒールで、高圧的に彼の股間を踏み潰す。

「どうなの？」

彼女は黒く長い髪を耳の後ろにかき上げ、足に体重を乗せていく。グリグリと回すように潰され、痛みが広がる。彼は苦悶の表情で冷たいハイヒールの感触に耐え続ける。

「ほしいの？」しかし、彼は無言で顔を背けている。「入りたいの？出したいの？」体重を緩め腰に手を掛けると、素早く前後に靴裏で擦る。次第に足の裏に押し返す力を感じた。

「あらドスケベね」

彼女はワザと驚くように言う。彼は悔しそうに、顔を背け股間を垂直以上に反り返させた。睾丸を靴底に踏みつぶされ彼のカラダは完全に性欲をとりもどした。

肉棒には血管が浮かび新鮮な精液を作り続けている。品定めするような瞳で楽しみながら、彼女は靴の先端で尿道を擦り、そばつゆの

ように薄く濁るガマン汁を吐き出させた。

「女に靴で踏まれて勃起しました」彼女は、テーブルから下りると、近づきながら言葉を続ける。「気持ち、よかったです」

彼女は彼の頭を手で押さえつけ、自分の股間にしっかりと直立させた恥かしい影が出来ている現実を認識させる。

「よせ・・・」

頭を両手で固定され、垂直以上に反りかえらせている自分の物を見ながら彼は恥ずかしい詰問責めをされ続ける。

彼女は白い手を伸ばして、4本の白くしなやかな指が彼のしっかりと盛り上がらず裏筋をそっと包み込む。

訪れた冷たい指の感触を喜ぶようにビクビクと振動させる。残る1本の指を膨らますカリ首に合わせ黒い爪がジワジワと輪郭をなぞる。

「気持ちいです」「出したいです」

耳元で甘く囁く。

「気持ちいです」「出したいです」

手で優しく握り、囁く。

「気持ちいです」「出したいです」

手をゆっくり上下に動かし、囁く。

彼女の声が、毒を持ち深く脳の奥まで浸透するような錯覚を覚えながら、彼は夢を見ているような浮揚感の中、与えられる快樂に染められていく。

次第に、腰が手の動きとは逆の動きで突き出すようになってきた。しかし、白くしなやかな指の輪を広げてそれ以上の刺激を許さない。

「出したい」

彼女の指を求め腰を振るようになると

「出したい」

彼女は手の動きを止めて言葉を変えた。

「出したい」

彼は目を細めながら

粗い呼吸で口をパクパクとさせている。

「出したい、出したい、出したい」

一段と膨らませ、固定された手足のロープがキシキシと鳴る。用意された頼りない彼女の指の輪にガクガクと何度も腰を突き出す。

出したいという彼女の慈悲深く甘い声を、直接鼓膜に注ぎ込まれるように聞かされ続ける。彼は大の字に開かれた両手両足に力を込め、肛門までもを締め付けると、両足が棒のように硬く変わった。

しかし、彼女の思惑通りに四本の指に擦りつける感触と爪に擦られる適度な痛みが、ついに自分の胸から首にかけてをドロツと白くベタつかせた。

「3回目」

彼女は再び頭を抑え、衰えずに白いものがジユクジユクと残っている物を見せながら言う。どうにもできずに何処か達観した彼の表情を、彼女は微笑ましく眺め愉しむ。

「気持ちいいです」

彼女は睨るように、彼の耳に口を付けると悪戯に囁く。しかし、彼は何も言わずに力なくうなだれている。首に舌を付け、光が照らす部分をなぞりながら、ゆっくりと胸まで舐め下していく。

口に全て舐めとり貯めると、彼の耳元で大きく喉を鳴らして飲み込んだ。

「くっ、きゃっ」

彼女は柔らかく冷たい唇を、彼の耳穴にピッタリと口づけするよう密着させ、恋人のように彼女はゆっくりと囁いた。

彼の股間はピクピクと上下に喜ぶように振動し、残る液体が這うようにトロトロと零れ出た。

「入れてもらえなくてご不満？」

彼女は大の字で縛られている彼の顔の上で中腰に跨り、指二本で僅かにピンクがかかった中身を広げて見せる。

周囲はうっすらと黒く短い毛が、いやらしく粘液を纏い生えている。中身はべつとりと粘性の高い液体で濡れ光が反射している。

そのまま、彼女は顔から1センチほどの距離まで腰をおろしていく。彼は煮詰めたように濃縮された磯の香りと、オスを求めるフェロモンの匂いが、強制的に鼻から送り込まれて来た。

「舐めていいのよっ。」

彼女は髪をかき上げ、細く白い足首でしっかりと頭を固定し、股の入口ををたっぷり開きながら言う。指二本で、入口の周りを何度もなぞる。彼女の愛がトロトロと欠け落ちて行く。

「ほら、口開けなさい」

「いいのよ？薬のせいにして」美女に誘われるままに、彼の口が僅かに開いた。「そうよ、いいこね」穴の外壁を伝ってドロドロと流れ出てくるものが、彼の唇を怪しく潤わせながら溜まって行く。

「ちやんとごっくんして？」

彼が行儀よくコクと喉を鳴らすと、彼女は満足したかのように肉ひだ上部の突起物を、鼻が沈み込むほど押し付けた。彼の額に彼女の陰毛が黒い筆のように優しくのしかかる。

彼女はカラダを少し浮かしたまま白い太ももで顔を挟み込む。彼の口に無理やり、彼女の下の口がディープキスをする。

粗く鼻呼吸する彼の鼻に彼女の突起物を押し付けたまま、指でそのの被せ物をどけ、濃厚な恥かしい女の匂いをたっぷりと堪能させる。「私をイかせたい？」彼女はゆっくりと腰を前後に動かし始めた。「さっきみたいに、イかせたいの？」彼女は男を誘う娼婦のように笑いながら言う。

「あなたのドスケベなおちんちんで、私を恥かしく仰け反らせたいん

でしょ？」

彼女は股間をズリあげると彼の鼻に押し付け、手で広げた臍に鼻を挿入させる。溢れ出る蜜が彼の鼻奥まで蹂躪する。

しばらくすると、彼の口から鼻水混じりのような水気のある呼吸音が聞こえてくる。彼女は口を細め、彼が脳まで愛液に犯されていく様を楽しみさらに濡らす。

「私、中出しされちゃうの？」

彼の股間は彼女を求め、高々と反り返し上下にピクつかせているものを眺めながら、彼女はワザと怯えるような細かい声で言う。

さらに腰を動かし彼の口も塞いだ。鼻と口が彼女の性器に完全に密閉されて、酸素不足が彼から正常な判断力を奪っていく。

「きつと、あのおちんちんで突き上げられ、私は髪を振り乱しながら、たくさんのザーメンを注ぎ込まれてしまっただわ」

彼女はガクガクと腰を押し付け、入口の盛り上がった肉壁を、無理やり彼の唇をめくりあげて、口の中へねじり込む。肉壁が少し舌に直に接触する。

彼の口の中に、発情したメスの味が一気に流れ込んできた。彼女の愛に満たされ、彼の唇がふやけ始めた。

「ああ恐ろしい。これから何度も出されてしまっただわ」彼の舌が動きだした感触を感じる。「酷いわ。私、肉便器になるのね。腰を少し離しても、舌が伸びて動いている。「性奴隷になるのね」

彼はあさるように、掻き出すように。舌で彼女の肉壺をほじくり回して、こそいだ蜜を吸引する。口に溜めた液体で次々喉を鳴らす。

彼女の声が彼の体中を振動させて、神経を痺れさせながら、彼の腰が虚空に向けてカクカクと何度も突き出される。少しずつ精液を先端からにじみ出させていく。

彼女は意地悪く微笑みながら、突然股間を動かす事をやめた。しかし、彼の腰は何かを求めるようにカクカクと虚空を突き上げ続けている。

「エッチ」卑しく笑いながら腰を顔の上でゆっくり回し、彼の顔中を甘酸っぱい蜜まみれにすると彼女はテーブルから下りた。「そんなには

しかったの？」

想像上の彼女と、虚空に向けセックスを続ける彼の腰を、力強く両手で押さえつけた。強い刺激を与えないように、乾燥を始めた精液を口で舐めて削り取る。

射精を求めてもっと深く挿入させようと反射的に突き上げようとする彼の腰を、手で押さえつけながら彼女はゆっくりと、全て舐めとった。

「ねえ、見て？」彼の前に光に照らされ光る薬指を見せつける。指を揺ると、粗い呼吸をしながら、彼の視線が追ってくる。「あなたは何をしようとしているの？」

そういうと、テーブルに上り再び彼の股間の上に跨った。大きな胸を垂らし、白く冷たい太ももが彼の胴体を挟み込む。

「ねえ、あなたは人妻を犯す人なの？」

膝立ちで、彼女の滴る入口に、反り返り直立する物を指であてがつた。仄暗い室内で、彼女の白い体と黒いハイヒールが裸電球に照らし出される。

彼女は白い体に、大きな胸の先端で僅かにピンク色に変わる乳首を大きく膨らませる。彼女のヘソの下に乱暴に生える陰毛は、自らの粘液と彼の唾液で怪しく光りながら皮膚に張り付いている。

「ダメ・・・入れないで」

長い黒髪をかき上げると、ルビーのような赤く澄んだ瞳を細め、彼女は弱々しく言う。支える手を上下に動かしながら、オス汁を滲ませる肉を、彼女の滴る肉ツボに近付けていく。

「絶対に・・・いや、よ」

彼女は、僅かに腰を浮かせて騎乗したまま、手を激しく上下させる。少しずつ彼の腰が動き始めた。手を動かす速度を緩めると、刺激を求めてさらに腰が大きく動き始める。

「ああ・そんなあ」彼の腰の動きで、先端が何度も押し付けられている。自制できない腰の動きに彼は顔を背け、彼女を見ないように何度も腰を突き出した。「ああ、入ってくるわ」

ぴったりと、入口にリードすると何度も彼の先端が侵入してくる。

彼女が手を離し膣を大きく開くとさらなる刺激を求め、彼は腰を高く上げ色白の美女に突き刺した。

アクトアイスのような冷たさと柔らかさの混在する彼女の内部に驚き彼はとつさに腰を叩き落とした。

「ん。ふう」

しかし、彼女は赤い瞳を妖艶に光らせ深く腰を落とすと、一気に根元まで挿し込まれた。ヌラヌラと冷たく蠢く内壁に擦られ彼の皮が引き伸ばされる。

突然の事に、彼は深く息を吐き腰の動きを止めた。彼女の重さと火照った温かさが彼の体を駆け回る。

「ひどい・・・」

彼女は腰を少し上げて、重さをどかし、膣の入口周辺の力を出し入れて、彼を誘う。ゆつくりと、探るように彼が腰を突き上げ始めると、すぐに合わせるように彼女も力強く動かし出した。

彼女は下腹部を振動させて人肌程度に膣温を上げて彼に中出しを促させる。彼と向かい合い、彼女の胸が大きく上下に動き続ける。

「ああ、あああつ」

彼女の腰が勢いよく突き上げられる。両手を腰の後ろに伸ばしてのけ反る体を支える。彼のロープで固定された両手は固く握られ、両足はつま先まで真つ直ぐ伸びて行く。

強固に作られたテーブルが、二人の愛の営みにより金具を軋ませギイギイと悲鳴を出す。

「あああ、あん」

彼の股間が突き上がるたびに、彼女は大きく声を出す。彼女は追い打ちをかけるように股間に力を入れてしっかり締めあげた。すぐに、彼の物が最高潮にまで膨らみ始める。

彼女は腰の力を緩めると、彼は一人でセックスを続ける。彼は歯を食いしばり、顔だけで抵抗を続ける。彼の下半身は動かなくなった彼女の分まで、彼女の内部を求め漁り尽くす。

「いや・それだけは・・・ゆるしてえ」

彼女は彼の急激な膨らみを胎内で感じ取り、甘く囁き続けた。彼女

の黒髪は彼に突き動かされた振動で左右に広がりながら振り乱れ、大きな胸を激しく振り動かさせる。

彼は小さく呻きながら、彼女の際奥を求め腰を強く突き上げたまま停止した。ギチリと彼の手足を縛る縄の音が響き、彼女の中に全てを吐きだした。

彼は荒い息を吐きながら、のけ反らせた彼女の上半身を眺めながら、最高に気持ちのいい射精の余韻に浸っている。

天は二物を与えないというが、深海悽艦は別なのだろうか、彼女は余りにも多くを持ちすぎているように彼には思えた。

「嫌がる女に無理やり出したのよ」

体を起こし呼吸を整えながら彼女は言う。その瞳は赤黒く淀み、いたずら好きの悪魔を思わせる。彼女は挿入させたまま、片手を彼の股間に回し込み睾丸のマッサージを始めた。

僅かに小さくなったが、勃起はまだ収まらない。彼女の指の中で逃げ回る二つの玉が擦り合わされる度に彼は痙攣するかののように体を反応させる。

彼女の膣内へとゆつくりと水のように薄い子種をまき散らす。コロコロと玉が擦り合わさり、可哀想な彼の口が甘美な悲鳴を奏でる。

「悪い子はお仕置きしないかね?」

彼女の瞳が揺れる裸電球のおぼろ気な光を浴びて怪しく光る。彼女はゆつくりと腰を前後に動かし始めた。彼女は喜びに溢れた豊潤な瞳で、彼の瞳を見つめる。ちっぽけな命を差し出せと。

「今度は休憩はなしよ?」

心なしか、彼は彼女の角が少し大きくなったように感じた。彼女が腰を激しく上下に動かすたびに、締め付けられた陰茎の皮が擦れて無理やり伸び縮みさせられる。

次第に、彼女の腰が腰が激しく打ち付けられる度に、パチユンといういやらしい水音が響き始めた。彼女は僅かに下腹部に力を込め、片手が力強く握りしめているような圧力が彼を襲う。

「ああああああ」彼は頭をバタバタと振り悲鳴を上げる。ギシギシと手足を乱暴に動かすと、ロープが擦れて手足から血が滲み始めている。「どうなの？いいの？気持ちいいの？」

深海の姫は哀れな来訪者におもてなしを始めた。腰をガンガン打ち付け、水音のほかに、パツパツと乾いた破裂音も聞こえ始めた。彼女は笑みを浮かべ、乳首を極限まで膨らませた巨乳を暴れさせる。

「きいいいちいいい」彼は首を上下にガクガクさせながら、彼は服従の呪文を唱える答える。しかし、彼女は高笑いするかのようにながら、腰の速度を緩めない。「いいいいいいい」

さらに、ぷつ、ぷつ、と恥かしい音が響き始めた。彼女は膣内を巧みに動かし、膣圧を調整する。空気が抜き出され膣内の密着度が更に増していく。

女の股間が、完全に男を食いつぶす。姫が腰を上げるたびに内臓ごと精子が吸い出されるような感覚に陥り、彼は手足をせわしなく暴れさせて抵抗する。

「なーに？わからないわ、よっ」

呼吸を荒げながら、彼女はさらに腰の速度を上げた。人には出来ない速さで腰の上下運動を行い、カリ首が激しく擦られ、紫色に変色していく。

次第に全身が痙攣し始めた。神経が全て千切れるような快感が彼の全身を硬直させる。

「いいのっ？」乳首を最大限まで膨らまし、とめどなく股から汁を溢れさせ嘲笑う。「よくないのっ？」

彼は、目を血走らせ涙を流しながら激しく首を振っている。もはや何を言ってるかわからない奇声を出し続ける。ガコガコとテーブルは踊り、蛇のように髪を開く女の影が上下に揺れる。

「もつとなの？」

「犯したのよ！穢したのよ！」彼女は激しくジャンプしているかのようになど度腰を打ち付け、ぎゅうぎゅうと玉袋まで押し潰した。「ああははははははは」

彼の上半身から痙攣が拡がり、彼の太ももが作る命の微振動が彼女

を狂喜させる。彼が供物として五回目を捧げた時には、彼は全身を小刻みに痙攣させ、口から少し泡を出していた。

「私、まだ一回もちゃんとイってないのよ?」

いやらしく白濁に泡立つ股間から、未だにビクビクと唸る彼の物を引き抜くと彼女は不貞腐れ酷くつまらなそうに言う。

「勃起はしているけれど、これじゃただのオナニーね」

彼女はハイヒールで軽く股間を蹴り上げる。衝撃で残りの精液が先端から零れ出た。シンシンと染み込む冷気が楽しい遊びの後を物寂しく彩る。

そのまま、彼女は口を近づけゆっくりと愛しげに口で精液を吸い取っていく。痙攣を起こして跳ね上がるうとする股間を両手でしっかりと抑えながら。

口での掃除を終え手を離すと、実際にクスリのせいだろうが、まだビクビクと反り返らせていた。彼女は健気な彼が可愛らしく思い、彼の下の口に愛し気に軽くキスをした。

それだけで、彼は縛られているロープを軋ませながら、ビクツと全身を跳ね上がらせる。今の所殺すつもりはないため、彼女もこれ以上は危険かとしばしの休息を与える事にした。

「私とのエッチな夢を見てね」

彼の口に出来た泡を指で丁寧に撫で取り、彼女は床に脱ぎ捨てた下着を、彼の顔にそっと被せる。そして耳元で甘く囁いた。

気休め程度だが、自分の匂いが染み込んだワンピースも体にかぶせてやると、彼の直立する股間部分は衣擦れの刺激を楽しむように大きく脈打った。ピクピクと彼の腰が持ち上がる。

彼がセックスの淫夢を見ているようで、夢の中まで支配していると微笑みながら彼女は手の甲でそっと彼の顎を撫ぜた。

長い黒髪を耳の後ろにかき上げると、彼から離れて全裸のままコツコツとハイヒールを鳴らして石段を上がって行く。

白い引き締まったお尻と、内股に垂れる液体が、階段の天井から吊るされる裸電球に照らされしだされる。彼女はふと止まり、おもむろに薬指の指輪を外した。

「私が艦娘？冗談にも程があるわ」指輪を見せつけると全く抵抗しなくなつた彼を思い出し、クスリと嗤う。「続きはまた後でね、お馬鹿さん」

扉が閉められ、さらに石牢内が暗くなった。

吊るされた裸電球が、虚しく揺れている。

04 戦艦棲姫 駆逐棲姫 01

「姉さま。食事をお持ちしました」

木の扉が開き、挿し込む明かりを受けて、小さい体系のシルエツトが浮かぶ。

少し頼りげない足取りで、薄紫色の髪をフワフワと揺らしながら、少し露出が多く黒いセーラー服を着た女の子が石段を下りてくる。

「あら、駆逐ちゃん。ありがとう」

戦艦棲姫は、特に声の方角を見るまでもなく言う。あれからずいぶん時間が経過したが、死んだようにいまだ彼は目を覚まさない。

ここへ戻ってきた後、彼女は彼の冷たく冷えた体を、横に連れ添うように彼と密着させ、時折角で胸を突つつくなどして、甘えるようにゴロゴロと時間を過ごしていた。

「姉さまは随分とソレにお熱なのですね」

明らかにいつも通り早く絞り殺せといたげに少女が言い放つ。しかし今の彼女はそしらぬ顔で、彼の背中に片腕を回しこみ、もう一方の手で、彼の乳首を黒い爪で弄んでいる。

少女は運んできた食事を茶褐色の大きなテーブルの上に置くと、彼女の隣に腰掛けた。

隣に座る少女は、薄く透けるような紫色の髪を携え、純度の高いアメシストに、後ろから光源を当てたような澄んだ瞳。白い肌に黒く短めのセーラー服を身に纏っている。

戦艦棲姫の瞳を、あえて形容するのであれば、普段はスピネルのような鋭い赤色をしているが、感情が高ぶると、ピジョンブラッドのルビーのようにその色の濃さを増して行く。

「彼、面白いのよ」彼女は悪戯に指を振る。艦娘付きの提督には比較的によく引つ掛かる方法だ。「それは、いつもの口を割らせる為のただの口実じゃないですか」

感情のない言葉で、彼女の葉指に反射している光を興味なさそうに言い放つと、少女は手でパンを掴み、彼女の口へと運ぶ。

「彼、弱小鎮守府の提督なのよ？」体を起こし、口に入れられたパンをモグモグと咀嚼する。「でしたら、なおさらいらないじゃないですか」言外にどうせ大した情報も持っていないだろうと意味を込めた。少女は冷えて小さくなった、彼の物を手で掴むと、乱暴に小さな指を上下させる。

「提督なんてどれも一緒です」少女は冷たく言い放ち、手慣れた手つきで手を動かす速度を上げる。それは少女の細く白い指に包まれ次第に角度を増して行く。「ほら」

少女が手を離すと、かなりの角度でソレは立ち上がっていた。顔にはまだ、彼女の黒い下着が被されているままだ。すでに彼女の慰みものにされ、残る命もわずかといった様子が見て取れる。

夢の中でも彼女に抱かれているのか、彼は熱い息を吐き彼女の下着を湿らせて、濃密な磯の匂いを楽しみながら時折腰を動かす。少女は気持ち悪いものを見たとき視線を逸らす。

「もう」少女はたった今、シコシコと擦り動かしていた手で、小さなパンを取った。パンを近づけると彼女は口を開け、乾燥した彼の白濁液のついたパンを受け入れる。「んっむう」

少女はスープを口に含み、舌を絡めながら彼女に口移しする。彼女がスープを飲み込むと、少女は舌を絡め合いながらゆっくりと彼女の上半身を押し倒し始めた。

少女の黒いスカートの中の薄紫色の下着に紫の色が広がり始める。少女は彼女と恋人のように手を繋ぎ指を絡め合うと、膝立ちになり冷たく深い紫の瞳が彼女を見下ろす。

重く大きいテーブルの上に全裸で拘束される男の隣で、押し倒された彼女は、少女とガツチリ両手を掴んだまま少女の両膝に股間を踏み潰され、媚びた瞳で少女を見上げた。

少女が彼女の黒いワンピースを捲ると白い下着が出露する。下着の下部はすでに黄ばみ、ベタベタとした粘液が染み出ている。既に一人で何度かオナニーを済ませた後だろう。

少女の機械のように硬い膝が彼女の股間を押しつぶし膝を振動させる。彼女は両手を捕まれ、少女の冷たい視線に身を焦がしながら黒

いワンピースに乳首の位置をくつきりと浮かび上がらせる。

「何ですかこの白い下着」彼女はプイと顔を背ける。少女は彼女からベタベタと黄ばんだ粘液がわき出た場所に狙いを定め、ゆっくりと自分の敏感な突起を近づけていく。「清纯ぶって嫌らしい」

少女が焦らすように股間をスライドさせ彼女の膨らむ突起を探り当てると、自分のものとぴったりと張り合わせる。

少女は両手を彼女の耳元で押しえつけて貝結びに繋ぎ、ゆっくりと腰を回し始めた。彼女の白い下着は、半分以上が彼女自身が作り出した恥かしい色で染まっっていく。

「姉さまは人一倍濡れやすいんですから」

少女は呼吸を荒げ、素早く腰を回す。前後に動かしては回転さながら体重をかける。そして、二人は声のトーンを上げていく。それは彼女たちのありふれた日常だ。

「ほんと嫌らしいです」

ただ今日は、彼女はある一点を見つめている。彼女たちの声を聴き、仄暗い部屋の中、裸電球に照らされ堂々と振り返らせている物を。

彼の勃起を見つめながら、彼女は痙攣して大きくのけ反った。少女も合わせて軽く達する。少女の薄紫の下着が、彼女の愛液に浸食され臭いが刻み込まれる。

「駆逐ちゃん・ダメ・・・よ」

少女は中指を手際よく彼女の秘部に挿じり込ませると、膣内の上部を押しえたまま、ゆっくりと指を半回転させていく。動きに合わせて、彼女の白い太ももが自然にキュツと閉じようとする。

「姉さま・・・腰、上がってますよ?」

次第に高さを増していく彼女の腰を、少女の指がぴったりと追いかける。股を広げ、足だけでブリッジしているような状態にまで腰が上がった。ワンピースの黒いスカートが腰から垂れる。

「ほし・いいい・・・」彼とは、反対方向に顔を背け、彼女はポツリと呟く。彼女の耳が少し赤らみを帯びた。「やっぱり、ドスケベじゃないですか」

少女は軽蔑するようなため息を吐き、人差し指と薬指も挿じり込ま

せる。彼女は無言で頬まで体温の高まりを感じた。彼女の白いももは自然と開き続け卑しい肉ツボを少女に見せつける。

「男にメス臭いパンツ被せて、勃起させて」少女は中指で膣の上部を抑えたまま、人差し指と、薬指を泳ぐように動かす。「自分は人一倍濡らして」

垂れるスカートに水気が広がる。少女は動作に振動を加えていく。彼女はイヤイヤするように左右に首を振りながら声をこらえる。

「いつもオナニーばかりして」

「や、あ・・」黒いワンピースから、少女は片手で乱暴に両胸を引つ張り出す。白い乳房の先端に1、2cm程のピンクの突起がある。「言わな・・でえ・・」

「ここですか、豚」挿入された僅か二本の細い指が、彼女の膣内ではた足でもしているかのように暴れさせる。「あああ、そこお」

家の庭のように彼女の園を知り尽くした少女の指が、女の弱点を内側からほじくり回す。少女の指がくの字に曲がり、少女の爪が天井を削り始めると、彼女はだらしなく上の口からもヨダレを垂らした。

「困った淫乱豚ですね」

少女は耳と頬を少し赤らめながら、無表情で彼女に囁く。少女のツインテールが楽しそうにフワフワと揺れる。少女は彼女の苦悶を着に内ももをソワソワと擦り合わせる。

少女はついにこらえ切れずに、死にかけた二枚貝のように、切ない声でおねだりしながら少女の顔に向けて白いももをバクツとおっぴろげた。

少女の指は、すっかり発情しきった淫乱姉に答えるように、5本の指を全て突き刺す。グリグリと左右に腕を捻りながら手のひらまで完全に埋没させた。

彼女の子宮口をつまみ、その先端を潰しコリコリと潰しながらシゴ

く。彼女はアクメしながら、もう一つの小さな穴から下品に汁を嘔き出した。

少女は許可なく汚水を吹き出した下賤な穴ボコをもう片方の手で潰すように塞ぐ。

「こんなのがいいんですか？姉さまは」

もはや正常な判断の出来なくなるほど追い込まれた彼女を、少女は無慈悲にアメシストの如く冷たい紫の瞳を、さらに凍えるほど冷たくしながら見つめた。

彼女はメエメエと奇声を上げながら断末魔のように股をパカパカ暴れさせる。堕ちていくメスに刺激され少女の股間は蒸気の浮かぶほど蒸れていく。

「出せませんよ？」

細い小指が彼女の尿道に突き刺さった。彼女は上も下も塞がれて、出ちやうと騒いでいる。いやらしい声で騒ぎ続け、少女が飽きるまで彼女は恥ずかしいおねだりをし続ける。

突然少女の指が引き抜かれると、際限なくスプリンクラーのように、彼女は少女の手のひらの中へと水流の音が聞こえるほど放水を断続的に続ける。

彼女の腰がついに耐えきれずに痙攣を起こした。5、6回ほど素早く大きく跳ね上がり、テーブルにドカツと崩れ落ちた。

少女は股からも腕を引き抜くと、冷えきる静けさの中、うっとり肘までしたたる彼女の精子臭い泡立つ体液を舐めとっていく。

少女に犯し尽くされた彼女は、呼吸を整えようと大きな胸を静かに上下に動かした。

「うんむ」

男の方から声がしてくる。

少女は下着とスカートを正し、テーブルから素早く下りる。元々、彼の片腕に彼女を押し倒していたせいもあり、人より重量のある彼女の腰が墜落した際に、潰された腕の痛みで起こしてしまったようだ。

彼女はもつと虐めて欲しいとの余韻に浸りながらも、無理やり気持ち切り替えて、スカートを正しながらテーブルから下りた。

彼が世界を確かめるかのようにゆっくりと目を開けると、口には彼女の味がしみ込んでいて、鼻の呼吸も苦しい。まだ下着を被されているとわかった。手足もロープで固定されたままだ。

「彼、面白いんだから」

彼女は少女の黒く短いスカートの中に手をいれて、僅かに熱く火照り湿らせている少女の股間をそつと揉みながら小さく耳打ちした。

姉の下着を顔に被され、いつまでも勃起している人間なぞどれも似たようなものだが、少女も特に用がなかったので少し付き合う事にした。

「駆逐棲姫！」乱暴に少女の手を引つ張り、移動式の裸電球を少女の顔に向け引つ張り寄せる。天井に数本ある内の一本のレールを粗々しく滑り、少女の近くで電球が止まる。「こつちへいらつしやい！」

美少女の全身がボウツと光で浮かんだ。

「今からやり方を教えます！」

いつものアドリブと少女は察する。時に役を演じて、脅したり、泣き落したり、脅迫されたり、人質だったり。今日は初めての拷問の研修でもある、といったところだろうか。

「見ていなさい！」

そうすることで情報取得の成功率は格段に上がる。特に提督という人種には。もつとも、今回に限っては彼女の趣向の為だけに行っているのだが。

状況の分からない彼は突然現れたか細い声を出す少女に狼狽えながら、目だけをそつと左右に動かした。首筋を彼女の手で掴まれた少女が彼に無理やり顔を向けさせられている。

「いやあ！何ですか、この人！下着被ってる！」青ざめ怯える、どこか既視感のある少女の顔をみて彼は顔を背けた。「駆逐棲姫！見るのよ！」

彼女は少女の顎をつかみ彼の顔に向け固定した。そして大げさに指をさす。そこは男のアソコが大きくそり立ち影を伸ばしていた。

彼女は黒い爪先を伸ばし陰莖に浮かぶグロテスクな血管を上下になぞった。彼は少女の前で指から逃げようと腰フリを始め、下着に塞がれて口にむせるほど溜まった彼女の愛の味のする唾液を飲み込んだ。

彼の喉仏が素早く昇降させて、先端に薄いカウパー汁をチョロつとお漏らししながら犬のように股間で前後に尻尾を振る。

「ほら、しゅっ。しゅっ」

彼女の冷たく細い手がしっかりと節操のないオスの尻尾を包み込む。射精させないゆつくりとした速度で彼女の力ない指の輪が、彼の股間を上下に動いた。

彼女の指の動きに合わせて、先端に白い粘液が見え隠れする。調教されたように彼の腰は命令されるまでもなく彼女の手を追いかけ突然腰を上げた。彼女に逆らえないカラダに、彼はキツく目を閉じる。

「いやあ！気持ち悪い！」目をやっていた少女は、乱暴に彼女の手を振りほどき、悲鳴を上げて縮こまった。「やあだおう……！」少女は首を振り薄紫のツインテールが大きく空を泳ぐ。

少女の刺さるような細く震える声に、彼は険しい表情で何か言いたそうにもごもごと始めた。彼女はどこか満足げな真顔で下着を剥がしてやった。

「聞かれることは話す！」彼から上下とも丈の短い黒いセーラー服の少女が、縮こまり肩を震わせているのが見えた。「だから彼女はー」
「何？そんな簡単にしゃべるだなんて」股間を強く握りしめながら、乱暴に上下させる。「今度は、ウソつきさんなの？」髪をかきあげ、吐き出した唾を彼の顔に浴びさせた。

この男は良い具合に躡が進んでいるようだ。彼女は唾液が彼の顔に当たる瞬間、彼女の手の中で、彼の物が小さく脈打ったことを見逃さなかった。彼女はハイヒールを脱ぎ、テーブルの上に乗り上がる。

「駆逐棲姫！命令よ、来なさい！」

最高のプロポーションを持つ白く長い美脚を片足持ち上げる。彼の股間にゆつくりと乗せ、足の裏で直に踏み潰していく。冷たい足裏の感触を与えながら、勃起をなぞりながら斜めに足を前後させる。

「ねえ、あなた？」彼女は足を止めずに問いかける。「あなたに何のメリットがあるの？」白い足の、黒い爪先で上下になぞる。「彼女に最後まで教えないといけないのよ」

事務的にそう言いながら、かかとで睾丸を踏み、ゆつくりと足を前に倒していく。玉袋を足指がつまみ、あえぐまで引つ張る。

オスの悲鳴を耳を震わせる悲鳴が、少女の無表情な瞳の奥を僅かにたぎらせる。彼女はカカトでさらにゴリゴリと踏み込んだ。オスの悲鳴と鳴き声が交錯する。

「あなたがしなくても、次の男がアレを女にするわよ？」かかたを軸に左右に足を動かす。「ああ嫉妬しちゃう」

彼女は微笑みながら玉を砕く寸止めを繰り返し、少女にかわいいオスの声を奏でて捧げる。彼の反応が薄くなりグツタリと全身を痙攣させ始めると、彼女はテーブルから下りた。

「みんな若い穴ボコがいいのね？」

手で激しくシゴきながら、彼の耳に口を付け淫語を囁き続ける。彼女の声が全身に浸り、そのかさされたカラダが少女を性の対象として反応する。少女に顔を向けさせられ精液を次々生産させられる。

「あの子にオス汁撒き散らしたいのね？」

彼は亀頭に力を込め、射精を求めてすり潰されるように起きる精痛を耐えつつ尿道口だけで精液を抑え込んでいる。よく耐える方だと彼女は感心するように微笑みを浮かべた。

彼女は片手を伸ばし呆然と絶望するような表情につられ、彼女も少し表情を暗くしながら少女の腕を掴み引き寄せる。

「許してください戦艦棲姫様」手を引つ張られうつむきながら少女が近づいて行く。「キ、ス、よ」彼女は冷たく言い放ち、少女の頭を、今すぐ射精しそうな股間に近づけさせる。「だめだ！よせっ！」

少女がテーブルに首を伸ばし無理やり射精寸前で血管が脈打つ気持ちの悪い肉の塊を凝視させる。少女は声なく目に涙を薄つすらと作った。彼は体をガタガタ震わせ抵抗を続ける。

「ファーストキスより先に」手にねつとりと自分の体液を塗り付け、さらに早く動かす。「ファーストフェラする女の子ってどんな気持ちかな

のかしらね？」彼女は魔女のごとく言葉を吐く。

少女はテーブルの上に無理やり乗せられて、股を開く彼の足の間に正座で座らされた。少女は目を閉じてツインテールを左右に振るも彼女の黒い爪が少女の後頭部をガツチリつかみ逃さない。

少女は観念したかのように小刻みに顔を震わせながら固定される顔を近づけていく。少女は彼のそれが、自分が作るこそばゆい鼻息を当てられて、一層膨らむ瞬間を見定める。

そして、ゆつくりと尿道口に優しくキスをした。少女は龟头を周りこむようにキスをしながら頭を下げていく。オスは鳴かなくなり全身全てで耐えているようだ。

少し面倒を感じた少女は開いた尿道口に冷たく振動する鼻息を押し込みながら、裏スジに向けてキスをする。バイブをねじ込まれたような刺激に白濁液が顔に勢いよく吐き出された。

「いやーあー！」

少女の前髪から鼻にかけてドロドロと濃縮されたオス臭い汁が垂れる。少女は唇にまで垂れ落ちた精液を顔を背けて懸命に吐き出し続ける。

「すまないっ！」彼は大変な事をしたと目眩を覚えながら歯を食いしばり顔を背けた。「気持ち、よかったです、は？」彼女は彼の耳にそつと囁く。彼は、悔しそうに奥歯を軋ませた。

「拭いてはダメよ？ 駆逐棲姫」彼女は指でテーブルに垂れ落ちた精液を掬い、ドロつとした指を少女の口に近づける。「舐めなさい」

零れ落ちた液のついた黒い爪先を少女の口の前に止める。少女は目を閉じ小刻みにカラダを振動させながら小さく首を振る。

「さて・・・何でも、話すから！」ザーメンの付く指を睨みながら言う。「何？ 惚れちゃったの？」ゆつくり囁く。「結婚して、安心しないとヤレないタイプ？」

「私が、させさせてあげるから安心して？」彼女は黒いワンピースのポケットからあの錠剤を取り出した。「ほら、口開けて？」

それを彼の口に近づける。何が起きるか容易に想像がついたため彼は固く口を閉じている。彼女はしなやかな指で、軽く彼の頬を叩い

た。酷い脳震盪が起き脳の奥から来ていると思うほど世界が回る。

「駆逐棲姫、飲みなさい」彼女は少女に錠剤を近づける。「さて・飲むから・」彼は素直になり大きく口を開けて彼女を待った。

「おちんちんがエッチになる薬を下さい、よ」

恥ずかしいことを言わせようと、悪魔のように彼の耳に囁く。そんなものを飲まされれば次は少女とさせられるとわかっている、彼はその子に飲ませるよりマシだとカラダを震わせる。

「お・・・ち・・・ください」彼はボソボソと言葉を続けた。「何？聞こえないわ？」彼女は苛立つかのように高圧的に彼を見下ろしながら彼を突き放す。

「駆逐棲姫、口を開けて」彼女は様子を伺うように少し瞳だけが狼狽えながらも少女に命令をかける。「わかりました・・」少女はそんな様子に少し呆れるように素直に口を開けた。

「おちんちんが、エッチになる、薬、ください」彼は見かねてボソボソと言われた言葉を言った。少女は咄嗟に手で耳を塞ぎ震えている。

「何だ、エッチしたいんじゃない。じゃ、口開けて」

彼女は自分の舌の上に錠剤を乗せ、開けた口を近づける。彼は力エルのように大きく口を開け彼女の口の中に舌を伸ばし、恥ずかしい音を出しながら彼女の舌ごと吸い付いた。

彼女が顔を近づけると、合わせるように彼は自然と顔を傾けて彼女と口を密着させる。彼女の口から唾液が流し込まれ、彼は半勃起しながら全て飲み下した。

「じゃあ舐めなさい」再び少女に精液に染まる指を突き出す。「よせ！」彼は首を振りながら手足をギシギシと鳴らす。「はい戦艦棲姫様・・」

少女は酷くつまらなそうな感情の見えない瞳で、彼女の指に薄く唇を開いた。少女は躊躇うように目を閉じ口を開けると、ゆつくりと舌を伸ばす。

掬い取るように舐めると、鼻から伝い落ちた精液と合わせり舌の上に白濁液が溜まった。少女は前髪から、舌の上までしつかりと、彼の精液に浸かっていく。

「そのままでないさい」彼女は舌を出しながら正座している少女に体を寄せる。「動いてはダメよ」指を少女のスカートに滑り込ませて、彼から死角になるように素早く動かし十分に濡れさせた。

「あら？濡らしたの？」彼女はとぼけたように少し大きな声で言うと、少女は舌を出したまま首を振っている。「立ちなさい」

少女を立たせると、彼の顔の近くに連れてくる。裸電球の位置を調整して、少女の股間付近を照らした。

「あなたのザー汁で、この子濡らしたわよ」短いスカートに手を掛け、そつと囁く。スカートを捲りあげると薄紫色の下着に紫色のシミが広がっている。「んーんー」

少女は羞恥で顔を赤らめ、舌を出したまま首を振る。少女の紫色のツインテールがほうきのように忙しく動き回る。

「飲んでいいわよ」

彼女が許可を出すと、少女は目を閉じて震える舌を口に戻し大きく喉を鳴らした。精液が少女の鼻から黒いセーラー服の胸に垂れて灰かに光っている。

「ねえ、あ、な、た」彼の顔を無理やりひっぱり、自分と顔を合わせさせる。彼女の瞳の赤が濃く染まっていく。「その薬、そんなに早く効かないのよ」

頭を角で押さえつけ、目を合わさせる。彼は精液まみれの少女に不覚にも欲情してしまった。男の生殖器が少女を求めて再び精液を作り出す。

「彼、あなたのこと気に入ったみたいよ？よかったわね？」一度小さくなりかけたが、彼の股間が求めるように静かに脈打っている。彼女は彼から顔を離すと、少女の後ろに回り込んだ。「だめえっ」

彼女は少女の腰を両手で捕まえ彼の顔の上に移動させる。そして、乱暴に彼の顔に座らせる。

彼の鼻と口に、紫の下着を通して酸味を帯びた少女の液体がジュクッと流れ込んでくる。少女は膝をもじもじと動かし、ピッタリと股間に彼の鼻の穴を密着させる。

下着からサラサラとした乙女の蜜がジュクジュクと滲み出し、少女

の太ももが、彼の両耳をガチリと挟み込む。心もカラダも少女に溺れさせられる。

「あら、嬉しかった？」少女の背を抱きかかえるように背面で腹の上に跨り座る彼女は、腰にピクピク擦られるような感触を覚える。「あなたのマン汁おいしいって」

彼女は少し腰を上げ黒いスカートを捲り、お尻を振り白い下着越しに彼の先端に擦り付けながら言う。反射的に彼は顔を起こし、少女の股間に鼻を突き刺した。

「やだぁー」少女はグリグリ腰を動かしながら、声を上げる。彼は少女の青果実のようなうっすらとこぼれ出す蜜に溺れながら股間に潰されモゴモゴ何かを言っている。「ゆるしてえ・・・」

少女は狂乱するような声を出しながら、腰を動かしつつ、何かを思い出したかのようにテールブル横に置いてあつたパンに片手を伸ばす。

そのまま上半身を後ろに曲げると、彼女と軽くキスをした。彼女にパンを手渡しながら、思い付いたプランをそつと耳打ちをする。

「わかったわ」

彼女は声に出さず、口だけを動かすと尻を激しく動かす。動きにあわせて白い下着にカリ首の突起がよれてシワを作る。指では先程のパンの中身をきつくこねていく。

「だめえー!!」

少女は太ももで彼のホホを潰しさらに固定すると、鼻を挿入させる勢いで股間を押し込んだ。必死に呼吸しようとする水気を帯びた鼻息が少女の膣内を温める。

「いいのよ、だして」

彼女は、白い下着に反り返り張り付く彼の勃起を押し戻す様に強く腰を振る。ゴリゴリと痛みを与えながら、ひと際脈打つタイミングに、少女の手の甲を軽くつねった。

「あ、あぁっ」

少女は震えるように高い声を出しながら、冷たく固い太ももをパクパク開閉させる。ビクビクと少女は股間を彼の鼻に押し付ける。

彼もまた少女の声に引き合うように、少女に強制顔面騎乗されなが

ら、彼女の尻コキで犯され、ドロドロと精液を垂らす。

少女は僅かに太ももを開き、腰を浮かせて死にかけてオスの弱々しい呼吸を堪能し、下着越しに下の口でデーパーキスした。

05 戦艦棲姫 駆逐棲姫 02

「あら、仲いいのね」

彼女はお尻側の黒いスカートを持ち上げたままそう言う。片手の中には、先ほど作った丸く固めた白いパンのかけらを隠し持ってた。

彼には少女が同時にいったとても思われているだろうか。そんなすぐに薬の効き目が出たとも思えないため、自分のときよりもあからさまに多く出されて彼女はちよつとムツとした。

「下りて」彼女は少女の顔を除き込み様子を見ながら冷たく命令する。少女は何処か危ない足取りで、彼女に心配されながらテーブルからゆつくりと下りた。「汚されたわ、早く掃除して」

テーブルから少し距離を置き、後から下りてきた彼女の前で少女は四つん這いになる。彼の方にワザとよく見えるように前かがみになり尻を突き上げた。

地面に這いつくばり顔を上げる少女のスカートは自然と捲れ上がり、薄紫色の少女の濡れた下着を覗かせている。

「口で舐めて吸い取りなさい」

彼女は石床に膝立ちになるとお尻側のスカートをさらに大きく捲り上げる。裸電球に照らされる彼女の白い下着には、大きく広がるシミとその中心にまだドロツとした精液の名残が見える。

「やめろ・そんなことさせるな・」彼は拘束された手足をギシギシと鳴らしながら訴える。彼が顔を横に向けるとちよつと少女の下着のシミが視界に滑り込んできた。「ダメだ、やめさせてくれ」

薬の効果か彼の下半身に血液が集中を始める。

「早くしなさい。染み込むでしょ?」

彼女に凍るような冷たさで言われて、少女はゆつくりと首を伸ばす。少女は白い下着に僅かにピンク色の舌を当てて、お尻の上部から残る粘液をなぞっていく。

「ちゃんと吸い出すのよ」

少女は抵抗することなく噛みつくように、下着を口に含み自分の唾

液を下着に与え何度も吸い上げる。少女が首を動かす度に床を擦るツインテールが何処か寂しげに感じられるのは彼の気の所為だろうか。

彼は抗議を続けるが、少女が止まることはない。彼は少女の後頭部が上下に動き、彼女の下着の染み抜きをさせられている光景を力なく眺める。

少女は首の動きにあわせて薄紫色の下着を穿いたお尻を僅かにダンスさせる。少女の動きに合わせて下着のシワの形が生き物のように蠢き移り変わる。

「もう、いいわ」

彼女は白い下着のシミが倍に膨らんだころ、長い黒髪を手で弾き、少女にさせている下着のお掃除を止めさせた。彼女はワンピースのスカートを白くしなやかなモコモコまで戻すと再びテーブルの上に登る。「おしゃべりの時間よ」そのまま横向きに、彼の腹に勢いよく彼女は腰を下ろした。鈍器で叩かれたような強い衝撃で彼は小さく呻き声を漏らす。「彼女とオマンコしたいなら、だまっていいわよ?」

彼女は上半身を旋回させて彼の首元を掴んだ。5本の黒い爪が一つずつ彼の首に染み込むように沈んでいく。彼の恨みのこもる瞳に、彼女は心地よさを感じながらニンマリと口元を弛めた。

「全部お話しできたら、特別に私が昇天させてあげるわ」彼女は少女を黒い爪で手招きすると少女は口をキツく閉じて、暗い表情でテーブルに近寄ってくる。「っあ、やっ!」

少女はテーブル側面に立ったまま下着を引っ張られた。少女の両足の間に橋のように紫の下着がかかり、少女は急いで穿き直そうと両手を下ろす。

しかし彼女が下着の中央部分を掴み動かない。少女は悲しそうな表情でツインテールを左右に振り泳がせている。

「脱ぎなさい?」彼女は恥ずかしい命令を少女に下した。少女は下着の裾を掴み震える両手を動かさない。「何してるの、早くしなさい」彼女は僅かに顔を上気させながら言う。

少女が決心したかのように表情のない顔で下着を下ろし、ゆっくり

と片足ずつ下着を足から抜き出した。彼女はさらに恥ずかしい指示を出し、脱ぎ下ろしたばかりの下着を彼の口元へ運ばさせる。

「ほら、なめなめしなさい」少女が悔しそうに澄んだ紫色の瞳に涙を浮かべながら、指示されるまま下着を裏返し一番濡らした場所を彼の唇にキスさせる。「あら、直接がいいの？妬けるわね」

彼女は彼の腹の上で腰を揺さぶる。

「いああ、変態」彼は選択肢がないことを悟ると、少女の味を蓄えた下着に顔を向けて、舌を長く伸ばす。「気持ち悪い」

少女は両目をキツく閉じながら、両目から光の筋を作り出した。彼の舌が少女の下着に触れ一番湿り気の多い場所を舐めさせられると、しつかりと勃起した。

「・・・気持ち悪いっ！」

少女が下着を広げて差し出している両手から、彼が舌で下着を押し動かす微振動が伝わり続ける。

彼は取りつかれたかのように、少女の怨めしそうな嗚咽を聞きながら、濡れジミを追いかけて舌を這いずり回した。

「あら、あらあら」

彼女は彼から突然下着を取り上げると、極限まで肥大化させたカリ首に、5本の黒い爪で囲うように指を回し込みサワサワとソフトになる。

彼は懸命に射精を堪えながら下半身を電撃を受けたかのように暴れまわらせた。先に出してしまおうと腰を動かし、彼女の指を求めめるが、無常にも彼女の乾いた赤い瞳がそれを許さない。

勝手に粗相しないように、彼女は片腕で腹部を押さえつける。オスの可哀想なうめき声にベツタリと濡らした。

「じゃあ、お仕事よ駆逐悽姫」もう嫌だと少女は声なくツインテールを揺する。「いい？言うこと聞かないとお、ポイ・・・しちやあ、あ、よ」彼女は少し淀んだ赤い瞳を泳がせながら、言葉の後半を少しモゴモゴとさせながら言う。

やるなら最後まで真面目にやれと少女から冷え冷えとした深いアメシスト色の視線を返された。彼女は子宮にゾクリとしたものを感じ

じながら背筋まで火照らせた。

すべてを投げ出して押し倒したそうにしている彼女の顔を見て、少女はあきれ果てたような冷たい顔を返す。彼女は崩れかけた表情を律した。

「わかりました、戦艦懐姫様」

少女は色々な意味で陰鬱な表情を浮かべながら、背中でヤレヤレといっているような感じにモソモソとテーブルの上に這い登った。少女にとってはテーブルに何度も登ることは重労働でもあったからだ。

「捨てないでっ、何でも・・しますからっ」

少女は下唇を震わせながら言う。

「跨って」

彼女は赤い瞳をどす黒く収縮させながら言い放つ。痛烈な自己嫌悪に苛まれながら、グルグルと世界が回り始めたかと思うほどひどい吐き気を催した。

しかし、少女が彼女の手を取りニギニギと指を絡め合うと彼女は少し落ち着きを取り戻す。彼女は腰を上げると、少女の手を引き男の股間の上に膝立ちで股がらせる。

彼女はテーブルのサイドに腰掛けるように座り、少女の固い太ももに、爪を這わせて、黒い爪がクモのようにカサカサと上っていく。逆光の暗がりの中、少しずつクモが少女のスカートを捲り上げていく。

彼の視線が動くものにつられて次第に少女のヒラヒラと目くれ始めたスカートに集中する。少女は顔を赤らめながら、口をガツチリと閉じ、声を堪えている。少女の両脚の間にザクッと指が入り込んだ。

「あやあぁっ！」彼女が一瞬腕を高く上げると、大きくスカートが暴れた。少女は悲鳴を出しながら、素早く両手でスカートを押さええる。「あらあ？今見えちゃったんじゃないかしら？」

彼女は冷たい表情で彼と視線を合わせた。

「見たの？」彼は答える代わりに、瞬間的に少女のおぼろげに見えた秘部を思いだし、股間の肉を僅かに上下させた。「あらあ？」

彼女は少女のスカートをピクピクと動かす動きを見つけ指で強く掴んだ。

「ア・ソ・コ・の毛。何色だったかしら？」彼女は添い寝するかのよう
に上半身を彼の体に添わせて折り曲げると、そつと脳に染み込むかの
ような声で囁く。「ねえ、答えてよ」

彼女の爪が無防備な彼の乳首をクルクルとなぞる。

「ふうん？ダンマリして」彼女の親指と人差し指が彼の乳首をカリカ
リと挟み潰す。「もつと見たいのね？スケベ猿」耳たぶの輪郭を舌で
なぞりながら彼女は続ける。「いいわ、おへソまで捲りなさい」

彼女はぶつきらぼうに指を動かす。少女がスカートの裾を握る両
拳を震わせながら、顔を伏せて躊躇うようにゆつくりと持ち上げ始め
ると、ボソボソ彼は口を開いた。

しかし、彼女は知らぬ素振りです、つまらなそうに自分の耳の穴を
ほじっている。

「なーに？聞こえないわよ？」モゴモゴと口を動かす彼に、背筋に冷え
込みのさす冷酷な笑みを浮かべ取り合わない。「あんな一瞬で見たの
？がつつきすぎじゃない？」

彼が大きな声で少女の毛色を言うと、彼女は驚いたように答えた。
少女は両手で顔を隠し、耳まで赤くしながら上半身を震わせている。

気丈に耐えているのか一切の声を漏らさない。彼はやってしまっ
たと、開きっぱなしの瞳にうつすらと涙を蓄え始めた。どのみち果て
る身であれば、願わくば今にと。

「じゃあ、次はお仕事でエッチの練習ね」彼女は体を起こすと、少女の
体をそうつと抱き寄せながら、腰を掴み彼と向き合いながら少しずつ
下ろさせて行く。「言うこと聞きなさい！」

少女はブンブンとツイントールを力強く回転させて彼女に答える。
少女は女の子座りの様に股を開いたまましゃがまされ、彼の亀頭がス
カートの中に潜り込んだ。

「いい？駆逐悽姫」彼女は少女の太ももに向けてゆつくりと腰から指
を回し込み、スカートの中へと潜り込ませていく。「どんな男も、エッ
チですぐ素直になるの」

少女のスカートを内部から盛り上がらせているものを爪を立てて
こそぐ。

「そうよね？」彼女は彼に甘えるように視線を送りながら、爪を肉に食い込ませていく。脈打つ血管を爪をなぞらせ見つけ出し、ガリガリ爪を突き立てる。「ほら、かわいいでしょう？」

彼は眉間にシワを寄せてオスの喘ぎ声を漏らす。

彼は爪から逃れようと腰を回して暴れまわるが、少女のスカートが敏感に開いた彼の尿道口をサラサラと刺激して我慢汁を漏れださせる。

少女のスカートの内側から嫌らしい水気が広がり、オス臭くベタつく液がスカートを汚していく。

「安心して？」彼女は無理やり彼のものを掴み少女の入り口へと向きを合わせさせる。「この子、処女じゃないから」

敏感になった先端が、少女の見た目相応にポワポワと間隔広く生える陰毛に触れて、さらに膨らもうとプクプク動く。

「あなたのじゃ、柔らか過ぎて膜は破けないもの」彼女は事務的な表情で、ふう吐息を吐き続ける。「私が処理しておいたわ、だからハメハメしてあげて？」彼女は嘲笑うように口を開き冷たく笑う。

「でも」彼女は少し困ったような表情で、長い黒髪をクルクルと指で回しながら続ける。「だんまりしてたらエッチがいいのかしら？それとも、おしゃべりしたらエッチ？」

彼女は少女との淫行を罰にするか、ご褒美にするかわざわざ口に出し悩む。

「あら、何を聞かせてくれるのかしら？」聞かれたことは話すからと、透明な汁にじませる先端を少女の下の口にキスされながら、少女を助けるように哀願する。「じゃあしゃべってもいいわよ？」

彼女はつまらなそうに言う。

「船団の通過時刻、補給ポイント、仮設飛行場の建設予定場所」彼女には彼が知る由もない事はすでに想像している。彼は所詮は駆け出しの左官だ。「さ、お話ししましょう？」

答えなど持ち得ない彼は、暗い表情で分からないと叫ぶ。そもそも深海棲艦の諜報網により、海上、航空輸送での作戦は一瞬で看破されるためわざわざ隠しだてする必要もないのだが。

「スケベ野郎」彼女は冷たく嘲笑う。「動いたら入っちゃわうよ?」

彼女は少女に向けて嫌らしい笑みを浮かべながら、肉棒を指で掴む。そのまま、とろみのある蜜を垂らす少女の小さなスリットに乱暴に擦り付ける。

「入りたいの?」彼は両足から尻まで硬直させて、ふうふうと荒い息を吐き、小さな乳首を二つとも丸く膨らませながら上半身をくねらせる。「まだダメよ」

射精しようと根本から膨らみ始めた肉を離し、少女の腰を僅かに上げさせる。

「戦艦棲姫様・それは・・・?」助かったと一息付く少女に、彼女は手のひらの上に小さく転がる丸く白いものを見せる「アレ、よ」彼女は掌の上に乗せ見せつける。

「――っ。セックスします・・・」少女は酷く怯えた表情で顔を伏せながら目に涙を作り彼女に届かぬ願い事を始めた。「セックスしますからっ!」

少女のツインテールが垂直に垂れ、仄暗い光が少女の目から落ちた雫を照らす。

「なあに?二人してイヤイヤして」彼は少女の豹変に何かただならぬものを感じとり、ロープで縛られた手足を血を滲ませるほどガチャガチャと暴れさせる。「なあに?その態度。妬けちやうわ」

彼女はブツと唾を彼の鼻に浴びせた。

「舌を出しなさい!駆逐棲姫!」彼女が命令すると少女は怯えながら仄かにピンクの舌を伸ばした。「はい。ごつくん」

小さな白い塊が少女の舌に乗せられ、少女は男の煩いわめき声を聞きながら、その塊を速やかに喉奥へと通した。

「じゃ、お話ししましょ」彼女は上半身を寝かせて、暴れまわる彼の耳元にそつと口付けしながら甘く囁く。「あなたは、おちんちんにどんどん赤ちゃんの種を運ぶお薬を飲んでいるのよ?」

ゆっくりと焦らす様に彼女が言う。

「この子はオマンコの中に赤ちゃんの卵がすぐに運びだされるお薬を飲んだの。お似合い夫婦ね?」彼女が言い終わると彼は再び暴れ始め

る。「さっ、これで講習もお仕舞いね」

ゆつくりと腰を上げると、彼女は少女の方へと近づいて行く。

「しゃべるきになったの？」

少女の短い上下の黒いセーラー服の隙間から見える細く白い肌の腰を掴む。何も持ち合わせのない彼には、交渉の材料はなくただ抗議することしか出来ない。

「ああ、いいわよそんな演技しなくて、ちゃんときせてあげるわ」

「はい、時間切れ」彼女は髪をかき上げて片耳を出すと聖母のように慈悲深く笑う。「駆逐悽姫、今からエッチだーい好きなおちんちん入れてあげるからね」

彼女は片手を少女のスカートの中に入れて、位置を再セットした。何を言ってもムダと理解しているのか、少女は覚悟を決めたように両拳をグツと握る

奥歯を噛み締めながらギュツと力強く目をつぶる。彼は往生際が悪く腰を振り回し抵抗するが、彼女の強力な力の前では微動だにせず抜け出せなかった。

彼女は少女の腰を強く掴み一気に落とした。

少女は小さい呻き声を漏らし、小振りな胸を突き出しながら最奥まで一突きで串刺しにされる。口から長い息が漏れ出た。糸の切れた人形のようにくたびれ、少女のツインテールがゆらゆらと揺れる。

彼の反り返った肉は、瞬間的に少女の水気のある暖かな肉壁にコリコリときつく締め付けられながら、奥深くまで滑り込んで行った。

そのまま少女の冷たいお尻が彼の太ももを押し潰し、睾丸にも鈍い衝撃を与えた。

「ひどい・・・」

少女の両目から、裸電球に照らされた光る筋が二本見える。胎内で暴れまわるように膨らみ、吐き出された男の特濃汁を感じとり、感情の抜け落ちた口ウ人形のような顔で涙を流し続ける。

少女のその顔を見た瞬間、彼は何かがフラッシュバックするような酷い悪寒に襲われた。次第に動悸が早くなり過呼吸のような浅い息を吐き始める。

「あら？」ビクビク震わせる彼の体を見て、彼女は少女の体をゆつくりと持ち上げていく。「早漏野郎」少女の膣から彼のものが抜き出ると、肉壁をびくびくと震わせながら白濁液を滲み出させている。

「ほんと猿みたい」

ゴミのようにハアハアと小うるさい彼に一瞥をくると、彼女は丁寧に少女をテーブルに腰掛けさせた。

薬の副作用か大事になっている彼を放って置いて、彼女は少女の薄紫色の髪を、そつととかすように黒い爪を優しく動かす。

彼女は、少女が元気なのを確認すると、アソコだけは元気な男向き直った。面白いこれをしつかり躡て、ペットにしてやろうと立ち上がる。

彼はしつかり勃起させながら病弱なように可愛く息を吐いている。彼はトロトロした目で彼女を追いかける。

黒いワンピースの中からこぼれ出る、彼女の白い美脚が、彼の開かれた足の間にゆつくりと下りてくる。黒い爪をつけた足指が、あと数センチの距離で焦らすように止まる。

「4回目は？早漏サル野郎」

彼の呼吸が整うまで待つと、彼女は白い足指を伸ばしてゆつくりと裏スジをなぞり下ろして行く。

根本まで足指が下り、再び上つていくと、降参するかののように腰をくねらせ悶えながら竿に残る小汚い精液をヌラヌラ沸きださせる。

「私とセックスしたいの？」彼女の足裏が彼の腹を大きく凹ませる。

「あの子とセックスしたいの？」彼は息を絞り出され、口からよだれを零れさせた。「選ばないならあの子にしてあげるわよ？」

彼女は足で腹を潰し力カトを軸に足を左右に振り動かし内臓を責め立てる。再び呼吸が乱れ僅かに胃液が逆流し喉が痛む。彼はケホケホと黄色い液体で唇を濡らしながら咳き込んだ。

「ねえ、わたしキレイ？」

彼女は片足を伸ばして、艶かしくスカートの裾を太ももまでたくし上げていく。彼は無言で、裸電球にハイライトされるほんやりとオレンジがかった彼女の白い太ももを見つめている。

「駆逐棲姫」彼女は収縮した赤みが増す瞳で、冷たく号令をかける。「立ちなさい」彼女は少し苛立ちを覚えながら、背中を丸めて座る少女に向かい声をかける。「早く立つの」

少女は浅く弱々しい呼吸をしている。彼の目から、薄暗い石牢の壁に向かい黒いセーラー服の少女が、怯えているのか泣いているのか、背中を丸めて小刻みに震えている姿が見える。

「なに？」彼女は面白くなさそうに、軽く足の甲で股間を蹴り上げた。「せん・か・いきとセツ・スし・たい・イライラとしている彼女にさらに苛立ちが込み上げた。

「なんなの。ちゃんといいなさい！」ヒステリックに声を出し、彼女は股間を蹴り続ける。彼女の白い脚の甲が何度も睾丸を弾く。「せんか・せいきと・セックスしたい！」

彼女は髪をかき上げると、勢いよく彼の股間を踏み潰した。僅かに振動がテーブルに広がる。彼は呼吸できずに金魚のように口を開閉させている。

彼女が無慈悲に押し潰した冷たい足の裏で、彼の腰が痙攣するように跳ねた。

「い・や・よ」彼女は落ち着きを取り戻し、ゆっくりと近づき彼の顔を見下ろしながら足裏で顔を踏み潰す。「なんなの？」腰に手をかけてグリグリと白い足を動かしながら頬を強く潰す。

「早漏のくせに」

足の指を彼の鼻に差し込み、なじる。彼女の足指が鼻の境界を挟み込みゴリゴリと擦る。彼は足指で鼻を蹂躪されながら、うわ言のようにセックスのおねだりを続ける。

「駆逐棲姫、早く立ちなさい」

しかし、彼の言葉は聞き入れられずに、少女は後ろを向いたままゆっくりとテーブルから腰を上げた。彼は目に涙を浮かべながら哀願を続けている。

「ふーん。そんなに私としたいの？」

足の指を鼻から抜くと、唇のすぐ上で誘うようにゆっくりと足の指を動かす。白い足の先で黒い爪がゆったりとダンスを始める。彼は

頭を動かして、彼女の指先に自ら口づけをした。

「変態ねえ」

彼女は足の指をがぼつと彼の口にねじ込む。口の中で彼の舌が、彼女の足指一本一本を丁寧撫でまわしている事を感じる。

白い指先の隙間にザラザラとした舌の感触が何度も訪れた。加減を伺うように彼が彼女を上目使いで見上げる。

「女の足舐めて」口の中で舌を足の指でつまむ。足を引き抜くと彼の顔にツバを吐きかけた。「こんなに勃起させて」

足裏でツバを顔中に延び拡げていく。彼のアソコはご褒美を貰っている犬の尻尾のように大きく上下に振り動く。

「いいわ、抱いてあげる」

彼女は気を良くすると黒いワンピースの中に手を差し込み、白い下着をスツと下した。

下着の股間部分に広がるベタ突く粘液を、彼の唇に近づけると特濃の磯の香りが染み込む下着を、口に含みはしたくない音を出しながらしゃぶりつく。

男に口で下着の染み抜きをさせているところを眺めながら、彼女は自分のスカートの中に指を入れオナニーを始めた。

クチュクチュ水音をさせながら彼の顔に股がり潮を噴く。彼の首から上の全てが彼女の臭いに染まった。さらに腰を回し、彼女の愛液で濡れるまで口に突っ込まれた下着に新しいメス汁を供給する。

「私したら」彼女は彼の股間の上に膝立ちで跨がる。「気持ちよすぎて死ぬわよ？」黒く長い髪を片手で弾くように動かし扇状にブワリと広げながら言う。

彼は少女の震える背中を見ながら決意を固め、少し男らしい顔つきで、頷きながら彼女との最後のセックスをモゴモゴと申し出た。

「させてあげる」

彼女はフウと息を吐き、少し面白くなさそうに、一気に腰を落とした。粘液の滴る肉壁が彼の股間を熱く締め上げる。たまらなく射精しそうになり、股間を大きく膨らませる。

「早漏ね」彼女は彼の状態を把握しながら腰を動かすが、すぐに射精し

そんな気配を膣内で察知した。引き抜くと、彼を見下ろしながら続ける。「駆逐棲姫、リボンをかきなさい」

少女が髪留めを外すと、薄紫色の髪がフワツと膨らんだ。勃起の膨らみを増す先端部分、その下をなぞるようにリボン結びできつく縛る。

勃起の先端部分がパクパクと開き、透明でねばつく液体が染み出ている。

「いっぱい鳴いていいわよう？」

リボンに飾られた極限まで反り返らせ筋を見せる彼のものを、膣内に再び一気に挿入させる。リボンの衣擦れに引つ掛かれ必要以上に膣内に力が入る。

彼は手足に力を入れながら、行き場を失った精液が先端に溜まつていく快感に溺れさせられる。

「もっと、感じていいのよ？」

彼女がワンピースを脱ぎ捨てると、白いしなやかな体が暗い石牢内で明るく輝いている。彼女は腰を回す様に前後に動かす。

黒く長い髪が舞うように踊る。彼は声を上げながら首をブンブんと振っている。

「そうよ、もっといくの」

彼女は顔を赤らめ、体をのけ反らせていく。彼の先端が何度も大きく膨らむのを感じながら、命を吸い尽くす様に腰で激しくこねくり回す。声にならない声をあげる彼の口から泡が見えはじめた。

「いいわ、逝きなさい！」腰をあげリボンの紐を緩めると、力強く腰を落とした。膣内に熱く大きな塊が流れ込んでくる。彼は、そのまま体を脈打たせると。意識を失った。「んっ！」

彼女はテーブルにバンと手突き、急いで腰を上げる。彼の精液と愛液を染み込ませた勃起を抜き出し、同時に彼女の膣内が小さな泡を噴き出しながら激しく痙攣した。

彼女はわずかな余韻に浸りながら、少女の座る隣に腰掛けると息を荒げている。

「終わりましたか？」

少女は彼女の横顔を紫の瞳で除き込みながら無愛想に尋ねる。少女は彼を瞬間的に中出しさせ、垂れ出てくる彼の精液を、白い内ももをもじもじと擦り合わせて乾燥させる。

「ちぎっちゃえばよかったのに」少女は先端が少し紫色にうつ血している彼の勃起をさすりながら言う。手を動かすたびに、彼の手や足がビクツと動く。「でも・面白・い・・・でしょう・・・？」

彼女は呼吸を整えながら答えた。

「面白いのは姉さまです」アメシストの澄んだ紫の瞳が、彼女の赤い瞳をのぞき込む。「わたし、キレイ？」

少女は片足を伸ばして、黒く短いスカートを捲りながら姉のそれを再現した。目を細め自信たっぷりに、ぎこちなくスラリと白い足を伸ばす。

「ちよつと、やだ、駆逐ちゃん」彼女の耳が赤らみ始めた。「ホント、やめてくださいよ、こっちは真面目にやってるんですから」その時、少女は思わず吹き出しそうになり、お腹を抱えて耐えていた。

「キレイに、決まってるじゃないですか」

少女は全裸で隣に座る彼女の腰に両手を回し、彼女の口に舌をねじ込む。そのまま彼の足の上へと押し倒していく。

彼女の膣内になじ込まれた少女の数本の指が、嬉しそうに収縮を繰り返す彼女の子宮から、彼の精液を掻き出す。

「こんなにださせて」指にこびり付いた精液を、顔の前で見せつける。指を開閉させるたびに細く伸びる4本の指の間に、愛液と混合されたベタベタとする精液の線が出来る。「ど・す・け・べ」

この男は、他の男よりもすぐに射精をするようだが、そのぶん濃い種を産出するようだ。オス汁の鼻に付く臭いが冷たい部屋に広がる。

少女は強引に彼女の口に指をねじ込むと、そのまま精液をしゃぶらせた。彼女は少女の指の隙間を這うように舌を動かすと、下腹部に疼

きを広げる。

「ねえ、駆逐ちゃん」彼女は甘い声で囁きながら、指を伸ばし少女のスカートに指を潜り込ませると入口を丁寧に鋭い爪でなぞった。そこには僅かにまだ湿り気がある。「ダメです」

しかし、彼女が全てを言う前に、少女はきつぱりと切り捨てる。少女は男の両足の間に座ると、ネコのようにお尻を突き上げ、開かれた白いお尻の奥を丸見えにさせながら、彼の股間を舐め始めた。

「もう」彼女は、股に粘液を垂らしながら投げ捨てたワンピースを不満げに着る。「変わるわ」自分の股間を指でなぞりながら、少女に近づいていく。

「ダメです」少女は白濁液に唾を含ませて、ふやかしながら丁寧に口で吸い取っている。「もう」彼女は少女のつれない態度に少し角が縮んだかのような気持ちでしよぼくれた。

彼女は、四つん這いで彼の股間に顔を押し付ける少女の後ろに回り込むと、ゆつくりと短く黒いスカートの中に指を入れていく。

少女は刺激を与えないように、小さく萎んでいく彼のものにそっと舌をつけている。

「惚れちゃった、の?」

彼女は少女の股間にお尻側から手を回しこみ、少女の股間をなぞりながら囁いた。薄らと生える少女の陰毛にも手が伸びる。小さく主張する少女の股間の突起を指で擦るように動かす。

「ただの礼儀です」先端に舌を押し付けて唾液を尿道に流し込む。残る精液の塊を、そっと吸い出した。彼の体が数回跳ね上がる。「あいつらとは違いますから」

「当てつけですか?」

彼の陰毛に残る精液を陰毛ごと口の中に含み唾液を乗せた舌でほぐしていく。少女の口内に僅かに抜け落ちた彼の陰毛と精液が、終わりの合図のように少女の喉をゴクツと鳴らす。

「あんなに足ばつか使って」

「ち、違うのよ駆逐ちゃん、違うの」彼女は自分の行動を思いだし表情を暗くする。「別にいいですよ、もう気にしてませんから」

少女は股間に伸びる彼女の手を無造作に払いのけた。お遊びの事後処理を終わらせると少女はテーブルに腰掛ける。

「すっかり冷めちゃいました」少女はパンの横にあるスープをジツと見る。「どうぞ」

少女は時間がたち水分を失って固まったパンに、スープをしみ込ませていくらか柔らかくふやかせると彼女の口へ運ぶ。

「量は少ないですけど」

「ん。おいし、ありがと駆逐ちゃん」彼女は優しげな笑みを浮かべる。

「それで、何が面白いんです？」

抱き合うように彼女の膝の上に跨って座り、少女はスプーンでスープを運びながら言う。

「よくある提督ですよね」

「さすが駆逐ちゃんね」

あの程度、艦娘想いの提督なら一定数いた。最後は彼女の絶頂と共に、膺の締め付けで股間をねじ切られて死んだが。

彼女たちには、もはや提督達、人間などは羽虫程度の感覚でしかない。唯一の感情は潰した後掃除が大変かどうかぐらいだ。

「この提督ね」スープを噛んでから飲むタイプの彼女は、モグモグと口を動かしている。少女との甘い時間に彼女は口元をニヨニヨと綻ばせる。「はい」

少女は無表情で彼女が飲み込む度に、またスプーンでスープを与えらる。時折少女の腰を抱き寄せようとする彼女の手をハエたたきのように少女の手が素早く叩き落とす。

「妖精が見えないのよ」少女の動かすスプーンが止まった。彼女は首を伸ばしてスプーンの上のスープに魚のオモチャのようにパクツと口を付ける。「ちよつと、面白いですね」

スープが空になるまで給油を続けると、彼女の太ももの上に向かい合って座ったまま密着する。そのまましばらく見つめ合うと、彼女はゆっくりと白い太ももを開いていく。

自然と少女はその間に沈み込んでいく。

「ダメです」

少女は、彼女の湿る股間をスカートの上からなぞりながら言う。彼女は小さな瞳を揺らし、捨てられた子犬のような表情で少女を見ている。黒い長髪の間から突き出る二本の角が心なしか小さく見える。

「私なら構わないぞ」

いつの間にか開いた扉から、石段をゆっくり、コツコツと音を響かせて女性が下りてくる。

白い体で、頭にドリルのような小さな角が間隔を開けて二つ。白い水着ともレオタードともわからない服を着ている。

「もう満員ですよ」少女は冷たく言い放った。テーブルの上には男が礫られているうえに、自分の隣に戦艦棲姫がぐったりと腰掛けている。「そう、邪険にしないでほしいな」

その女性は少女の顔に、いたずらに自分の顔を近づけて行く。唇が触れ合うまで数センチ。

戦艦棲姫は少女の腕を威嚇するように自分の大きな胸へと引つ張った。少女は少し驚き目を大きく開くと、薄紫の髪をフワフワさせる。

「何ですか、二人して」面倒くさそうに彼女の手を振り払うと、少女は立ち上がった。「いやらしい」少女は飽き飽きした顔でため息を付く。そのまま食器を手際よく重ねると、拙い足取りで歩き出した。黒いセーラー服を整えると、思い出したかのように薄紫色の下着を回収する。

食器を持つと、少女は紫色の髪をふわふわと揺らしながら石牢を上がって行った。上品に扉が閉まる音がする。

「飛行場姫！」彼女は赤く淀んだ瞳で飛行場姫を睨みつける。キスをして数分後には駆逐棲姫に押し倒されている事を想像していたのに、と。「あんたなんてことしてくれんのよ」

間の悪い来訪者のせいで、そのムードをぶち壊された。もう数日間もちゃんとさせてもらっていないかったのに、またすっかり先延ばしされてしまいそうだ。

「さてさて、私は悪くないぞ」彼女はへびでも飛び出してきたかとも口をイーツとさせながら言う。「お前がいつまでも上がってこないから、様子を見に来たただけだ」

腕を組み何処かめんどくさそうに続けた。

彼女の細く長い銀色の髪が揺れる。艦娘に追われる彼の巡視艇を撃沈したのは彼女だ。その際に海に投げ出された彼を、特異な丸形の形状をした艦載機、通称「タコヤキ」で捕獲した。

「いやね」不完全燃焼の気分を抱えたまま彼女は白い下着を履き、ハイヒールの留め具をパチパチ止める。黒い下着を指に掛けてクルクルと回した。「ほんといや」

彼女は角を膨らませたかのように雄々しく突き出しながらウロウロ歩く。

「聞き出したのか？」飛行場姫は腕を組みながら顎で彼を指した。「いえ？」面白くなさそうに、彼女は彼の腕を枕に添い寝するようにテーブルに横になった。

「まったく・・・」戦艦棲姫は時折フラフラと彼の鎮守府近海に外出していた。彼女は自分から何処へとは言わないし、わざわざ誰も聞こうとも思わない。「宿代分くらいは働いてもらいたいものだな」

彼女らは人ではない、ゆえに人以上の絆を持ち合わせている。今回の事も、大方悪い悪戯でも思いついたんだろうというのが彼女らの認識だ。

そもそも、このバカ姉が駆逐に害をもたらす行動を取るとは到底思えない。

「彼ね、駆逐ちゃんを守るのよ」彼女は意識のない彼にそつと口づけをした。「手段の一つだろう」飛行場姫は、深海流のいつものやり方だとぶつきらぼうに言う。

飛行場姫は、私がたまに北方棲姫と組んでやる事で、別に気にするほどの事でもない。もつとも、挿入を伴う性交が必要であれば、すべて私が行うが。と、ふんふん鼻息を荒げながら考える。

「妖精が見えずに、艦娘に追われる彼が、よ」彼女は彼の乳首を、黒い爪で撫でながら言う。「ほう」

飛行場姫は、敵方から入手した情報では妖精が見えることを条件に新提督と認定していたはずだと考え、確かに興味深い話しだと思っただ。

その上、提督を溺愛するように思想教育されたあれらと敵対していたと言うのも更に面白い。何処にでも紛れはあるものかと、冷静な瞳で色々と分析しながら彼の方を眺める。

どちらがやったかは分からないが、彼の股間が粘液でベタベタになっている。恐らく、残留精液で陰茎を痛めないように舐めとったのだろう。

「駆逐ちゃん」訝し気に見ている彼女に、戦艦棲姫はゴロゴロとしながら疑問に答えるように口を開いた。「あいつらとは違うから、って」

彼の腕を枕に、彼女の瞳がスピネルのような澄んだ赤色になる。はるか遠くを見つめている。

「そう、か」

そうだ、彼女には足が無い。彼女を戦艦棲姫が奪還したときには、すでに足を奪われ、全身に男の匂いをしみ込ませていたと聞く。彼女は過去を語らない。だから、誰も聞こうともしない。

幸い、太ももから先に足形の艤装をつけて、戦艦の主砲塔のように動かすことにより、何とか歩くことが出来るようになった。

彼女は恐らく、大した処置もされずに足の修復を忘れるほど長い間、次々と男の相手をさせられたのだろう。握る拳がギチギチと音を出す。

「ふう」

銀色の細い髪をザワザワと帯電させながら彼女はため息をついた。湧き上がる感情の憂さ晴らしに、少女ほど上手ではないが、彼の股間を手に包み激しく上下させる。

「まあ、駆逐の奴がそれでいいというのなら私は知らん」

「ちよっとー」戦艦棲姫は彼女の手を払いのけた。「今日9回も出させてるんだから！」

せっかく、駆逐棲姫が興味を持ったのにそうそう潰されてはたまらない。上手くすれば少女にも良い暇潰しになるかもと、彼女を怒鳴り

付けた。

「しかし、エサはどうするんだ」

飛行場姫は酷く嫌そうな顔芸をしながら言う。しかし、彼女の懸念はもつともだった。この深海に訪れた人間が数日間滞在したことはない。

男も女も平等にイキ殺されている。ゆえに常体的に人に食べさせられそうなものは少ない。さらに彼女らには人が食べられるもの理解が乏しいのだ。

人間はなにかとすぐに死んでしまうから、自分達が食べられるからと、間違つて毒を与えては大変だ。時折接収する缶詰めくらいしか、確実に安全なものはないとすら思える。

「まあ、駆逐ちゃんが与えると思うわ」彼女は何かを想像すると、口元に酷くいやらしい笑みを浮かべる。「あの子、野菜ばかり食べるから」「そうか」飛行場姫は釈然としないまま、恋人のように寄り添う二人を残し離れていく。「余計なお世話かもしれんが」彼女は立ち止まり思いついたかのように振り向いた。

「生かすならロープ、外してやったらどうだ」

彼の手足はロープの食い込み込みでズタズタに擦れている。そもそも、人間一人暴れだしたところで、どうということもない。幼女体型の北方ですら2秒で彼の首ぐらい千切り取るだろう。

尋問をしないのであれば、わざわざ演出のために固定する必要もない。無意味に拘束して下手に傷口を化膿でもされたら、ただでさえ人員不足のここで、余計な面倒が増えるだけだと、彼女は忠告した。

「ありがと。考えとくわ」戦艦悽姫は彼の顔に自分の脱いだ黒い下着をかぶせると、大きな胸の谷間に彼の頭を抱き込む。「駆逐ちゃんおやすみ・・・」

彼女はモコモコと口と動かすと、ゆっくりと目を閉じた。どうやらここで夜を明かすつもりらしい。人よりも体温が低いため、抱きついて凍傷にでもさせる気だろうか。

「相変わらずSなのかMなのかよくわからん奴だ」飛行場姫はフルフルと首を動かす。ブーツをカツカツと鳴らし石段を上っていく。扉

の前に手をかけ止まった。「ま、悪いようにはしない、か」
彼女は小さく声を漏らした。

あの事件以降、戦艦棲姫が誰よりも駆逐棲姫を愛している事は周知の事実だ。ゆえに少女は彼女を姉と慕っている。飛行場姫は与えられたパズルの答え合わせを楽しみにした。

入口近辺にあるスイッチで裸電球を消すと、扉をゆつくりと閉じる。静寂と暗闇が石牢内に広がった。

——彼の深海での長い一日が終わりを告げる。

— セツクス調教 2日目 —
07 戦艦棲姫

暗闇の中、モゾモゾと影が動く。

彼は恐ろしい倦怠感と身体中からの痛みで目を覚ました。両手首、足首からジクジクとした痛みが走っている。鼻と口に擦れる布切れの感触から顔にはまだ下着がつけられているとわかった。

顔を横に向けると、ぼんやりと、あの悪趣味な女の顔が至近距離に見える。寝ているようだがそれは完成された人形のように不自然なほど美しく、雪女のように白さと冷たさをまとっている。

「あら？ お目覚めかしら？」

彼が脱出を試み、手足をモゾモゾと動かしていると彼女はめざとく目を覚ました。彼女はゆっくりと目を開け、彼の顔の輪郭を指で愛しげになぞると上半身を起こす。

「今電気点けてあげるわ」

彼女はゴロンと体を回し、テーブルから白く美しい足を下ろすと立ち上がる。埃を落とすようにワンピースのスカートをヒラヒラと動かす。

そのまま、もそもそと石壁に手を当てながら暗い石段を黒いハイヒールを鳴らし登っていく。

深海まで泳ぎきれぬ彼女らが、なぜ暗闇に対応できないのかと言われれば、彼女らの個体差もあるが、基本的にはイルカのようにエコーのようなものを利用して対象との距離を測定しているからと答えられるだろう。

視力に関してはほぼ人間と同等である。問題なのは規格外の出力のようで、尋問中にこれをやると、多くの場合哀れな人間がおかしな事になると彼女らは気付いた。

恐らくは石牢内で乱反射した高出力のエコーが収束して人体に何らかの障害を出すのだろう。もつとも彼女らには生まれつき出来る事でその自覚は少ないが。

極力人前ではその能力を使用しないようにしているため、暗闇では光源が必要になる。

「生きていたの？」

スイッチを入れると、裸電球に光が灯る。石牢内がぼんやりと明るくなった。彼女の背中に向け離れからクシヤミの音が聞こえる。やはり寒かったのだろう。

「悪運が強いわね」

彼女の経験上2、3日位は何もしなくても生きていくような体型はしている。昨夜までに9発ほどご奉仕してもらったが一日位で死ぬことはないとも予測はついていた。

彼は、彼女の下着のお尻があてがわれていた部分が口の動きで湿り気を帯びさせている。特に嫌悪感はないようで、睡眠学習で彼女のお尻の中深くの臭いまでしっかりと調教されているようだ。

布越しにモゴモゴと何かを言いながらも、彼のアソコはもう朝のおねだりを始めている。彼女が振り向くと、彼は下着を通して、発情して可愛らしく白く熱い蒸気を上の口元から放出している。

「なくに？」彼女は、彼が全裸で大の字に縛り付けられ、しっかりと勃起させている姿を満足げに眺めながらゆっくりと階段を下りる。「もうエッチしたいの？」

電球を滑らせて、彼の恥ずかしいアソコだけをしっかりと照らした。彼は自分の反り返させている股間を見ると恥ずかしそうに大きく白い蒸気を吐きだし顔を背けた。

「スケベねえ」

「ほら、ちゃんと見なさい」彼女は両手で彼の顔を口の形が変わるほど強く押さえつけ、塔のように恥ずかしい影を作っている場所を凝視させる。「かわいいわよ」

彼が両目を閉じると彼女は顔から手を離し、彼の乳首を黒い爪でなぞる。彼女は上半身を折り彼のカラダにベツタリと密着させる。彼女の冷たく柔らかな肢体に、昨夜の愛の営みが自然と思ひ出させられた。

「ね、え」彼女の黒い爪が、爪を立て彼の腹を下っていく。削るように股間の膨らみの根本をクルクルなぞり回す。「もっとあなたのことを教えて？」

彼女は彼の首筋に舌を付けながら恋人のように甘くささやく。しかし彼には答えられるものなど元々なく、ただ単に知らないとしか言えなかった。

周囲を見回すが、幸いにもあの少女はいないようだ。この状況では遠からず死にゆく運命かもしれないが、最後に大きな罪を作ったと彼は表情を暗くする。

「ねえ。あ、な、た」少し男前な表情をしている彼の横顔を眺めながら、彼女は彼の陰毛を引っ張りつつ続ける。「どんな女がタイプなの？」

彼女は彼の陰毛を指でクルクルと回し、渦巻きのように団子にしていく。予想外の質問に彼は、彼女は口数を多くさせ語るに落ちるを狙っているのだろうかとも思いつつも瞳を少し大きくさせる。

しかし、本当になにも知らなければ、答えられるものなどない。彼女にもてあそばされる彼の下半身は磁石のように彼女の手のひらを追い求め、あわよくば愛撫してもらおうと腰を振る。

「ね、え、ってば」

彼女の柔らかく冷たい指が彼の下半身の肉の塊を優しく包み込み、手のひらの中へと消えさせた。彼女の冷たく細い指臆に挿入させられ、彼はビクツと胸と乳首を突き出した。

「教えてちょうだい？」彼女の冷たい指がゆっくりと優しく上下に動く。「あなたの、せ、い、へ、き」彼女の甘い声カラダに染み込み、股間の先端にまで侵食する。

彼女は彼の横顔に唇を寄せて、彼のホホを舌でなぞりながら指をソロソロと動かす。彼は自分の腹に向けてパンパンに反り返らせている姿をただ眺める。

彼は無防備な男の急所は全て彼女次第と思いきや知らされた。彼女は探るように亀頭に指を這わせて、ゆつくりと擦るように指を回す。

「(っ)かしらっ。」

彼女はいたずら好きな小悪魔のように小さく笑いながら、彼の一瞬太ももに力を入れた場所に黒く鋭い爪を立て、ゆつくりと差し込んでいく。

彼女の爪が彼だけの敏感な性感帯を突き止め苛める。さらに膨らんだ亀頭の、捲れた皮の付け根に爪が突き立てられ溝をほじくる。

彼女から与えられる鋭い痛みが、逃げ出すように自然と彼の腰をくねらせる。彼女は発情したように熱く長い息を彼の耳に吐きかけながら、オスに恥ずかしい鳴き声を上げさせ、その痴態を楽しむ。

「後ちよつとだったのにね」痛みにも慣れ、彼の腰の動きが彼女の指を追いかけるようになると、彼女は突然彼の股間を解放した。「おねだりしていいわよ？」

しかし彼は、抵抗するように無言で彼女と別の方向に顔を回した。小さな蒸気が彼の口から断続的にこぼれ出る。

「ふーん？」

「ほら、かわいくおねだりできたら」彼女は爪を立て、彼の刺激を求め息苦しそうに口開くアソコの口へと押し付け、僅かに沈み混ませると止める。「びゅっびゅ」

彼女は彼の耳の穴に脳まで震えるような声を送りつける。女郎蜘蛛に囚われたような哀れなオスはカラダの全てで彼女を愉しまさせられる。

「ああ、こんなにしたいたいしてるのに」彼女は手を自らの秘所へと潜り込ませると、指二本でとろみのある粘液を掬いとった。「ほら、よく見なさい」

彼の顎を捕まえて、電球の光を反射させ愛蜜に濡れたもう片方の手を彼の顔に近づける。

「どう？」顔の前に指で輪を作り、見せつける。「ほしいの？」彼女の指の内側に蓄えられた濃厚な彼女の蜜が、指の輪がゆつくりと上下に動く度に少しずつ垂れ落ちていく。「強がっちゃって」

彼の両目は取り憑かれたように、仄かにオレンジ色に光る彼女の白い指が上下運動する度に、視線だけを縦に揺らしている。

彼女は彼の耳元で囁くように笑い声を出すと、その指をゆつくりと、彼の血管を浮かせて尾を振る下半身に近づける。

「ダツ、め」彼女の冷たくヌルヌルとした指の輪が、亀頭の先端を囲いソフトに押す。「きもちいです、よっ。」

反射的に指の輪に挿入しようと、彼は腰を高々と突き上げたが、動きに合わせて彼女の愛液にまみれた指膺が上がって行ってしまふ。

「いいなさい」

「きもちいです」

「きもちいです」

「きもちいです」

彼女は彼の耳に低振動に声を乗せ脳の深くまで犯し尽くす。指が徐々に彼のアソコをのみ込み、ぬめり気のある冷たい手のひらが裏スジをなぞり下りていく。指の輪から僅かに抜けた亀頭が顔を出した。「ダメって言うてるでしょー！」

彼女は彼の顎をつかんでいた手を離し、彼の刺激を欲しがり腰を振ろうとする腹に手を置くと、指の力だけで自分で楽しめないように動きを封じた。

彼は何の抵抗もできない恥ずかしさから、泥酔したかのように、首筋まで赤らみを走らせていく。

「かわいいわね」

彼女は手を素早く動かすと、怖いほどの気持ちよさがカラダ中に走り、彼の腰を脱げ出すように左右にくねり始めた。断末魔のようなオスのあえぎ声が電球のケーブルを振動させるほど響く。

彼女の声に完全に支配され彼の全身が気持ちよさに埋め尽くされる。しかし、彼女の卓越した技量により、お射精をさせてもらえずに彼は悶えながら腰を振り続けた。

彼の乳首はパンパンに膨らみ、尻が窪むほど力を入れて、上半身まで赤く染めながら、いつしか気持ちいとあえぎ始めた。彼女の手は全く微動だにしないが、セックスのように彼の腰が突き出そうと動く。

「もつときもちいの欲しい?」

クリスマスのオモチャをおねだりしているように、彼はがむしやりに欲しい欲しいと熱のこもった白い蒸気を吐きながら答え続ける。

「そう。いいこね」

彼女は、屈伏したように雄汁のよだれを垂らす先端を手のひらで撫でてやると、乱れた長い髪を背中に乗るように手で弾き、上半身をノソノソと起こす。

彼の腹の上に股がり、彼の股間から空白を作りながら猫が背を伸ばすかのように馬乗りになった。彼女は上半身だけを屈めると、ドレープネットクのワンピースが垂れ下がり、胸元が大きくUの字に開く。

巨大な白い谷間が彼の鼻に向けておりてくる。ノーブラで下着は付けていないため、直に彼の鼻は彼女の谷間に沈み込み消えていく。

彼女特有の、軟骨のように柔らかい、胸元で両サイドに向かい3本ずつ生える、6本の骨が彼の眉間に乗そつと乗った。

彼の鼻は彼女の胸の中で押さえつけられ、僅かに塩気のある液体を吸い上げ、鼻水のような音を出しながら荒々しい呼吸を続ける。彼の口は彼女の胸部に密着させられ、息をしようとプウプウ音を漏らしている。

彼女は胸の隙間からジュルジュル漏れ出る音と、命を繋ごうと懸命に鼻を膨らませて呼吸をすることばゆい感触に体を火照らせる。

「欲しがりさん」彼は彼女の柔らかい肉の固まりから解放され、鼻を膨らましながら水気の混じる呼吸をむせながら続ける。「恥ずかしくないのかしら?」

彼の下半身は、垂れ下げたスカートの僅かに被さる布の感触を貧欲に求め、小刻みに動いている。

「どっちもあげないわよ?」彼女はスカートを腰上に巻き上げるように持ち上げると、ワンピースの肩紐を両方とも脇まで下ろす。「見たいでしょ?」

はだけた胸元は彼女の尖らす先端に僅かにかかり止まる。ワンピースは彼女の乳首だけを隠し白く大きなおっぱいを彼の顔に近づいて行く。

「ほら、選んでいいわよ?」

彼女は彼の口の上に胸を下ろし、ワンピースを腹まで引き下ろす。さらに彼女は彼の顔に愛用されている黒い下着をむしり取った。

「おちんちんきもちーか」彼の顔の前に、白く巨大な胸の先端が薄桃色にしつかりと尖らせる乳頭が現れる。「おっぱいちゅっちゅ」

カタツムリのように尖らせた乳首の先端が、ツンツンと誘うように彼の唇をなぞる。彼は唇の隙間にその突起を滑り込まされると、探るように舌の肉をモゾモゾと動かし始めた。

彼女の乳首の周辺にまで舌が伸び、凹凸のある輪郭を恐る恐るなぞる。彼女は彼の後頭部に腕を回し込み、片胸に彼の口を力強く押し付けさせた。

彼女の張りのある大きな胸は、型崩れしないまま彼の口の奥へと突き刺さり口内を蹂躪する。突然の事に彼は目を大きく開き、呻きながら彼女の下乳を舌で削るように左右に振る。

だが彼女のスライムのように柔く冷たい乳房は、彼がホホを膨らませるほど奥まで挿入される。鼻も完全に塞がれおっぱいだけで窒息死させられそうだ。

「あん、ひどいわね」彼女はいたずらに甘く囁きながらさらに乳首を喉奥に向け挿入していく。「かみかみして」

彼は口いっぱいにおっぱいを頬張りながら、呼吸困難になりながらも、上目使いで彼女の瞳を恥ずかしそうに覗き込む。

「いけない子ね」

彼女は子宮に痺れるものを感じながら、しつかりと彼のスネに膝を乗せて馬乗りになった。彼は虚空に向けてモジモジと腰を振り、へそまで反り返る斜塔をプルプルと揺さぶる。

柔らかく冷たいおっぱいが彼の口を再び完全に塞いだ。彼の瞳はおねだりしながら、鼻の穴を大きく広げ彼女の首筋にシューシューと風音を作り続ける。

しかし、一向に大事な場所にエッチなことをしてもらえないため、彼は抗議するかのように彼女の大きな胸肉に歯を突き立てる。

「まあ、あかちゃんみたい」

低酸素状態が続き少し朦朧とした意識の中で、ご褒美を貰えずにすねた瞳で、口の中に放り込まれた巨大な肉団子を、舌の腹でタプタプと振動させる。彼女の気を引こうと舌と歯が彼女の胸を刺激する。

「そんなに欲しがっちゃって」

彼女は愛しげに彼の頭を撫でながら、洗練されたシルエットの白い背中を上げ、口の中に彼がイタズラしやすいようにスペースをつくった。

彼は少年のような表情で彼女のお山の探検を始める。舌の先端を曲げ登頂しようと舌を巧みに伸ばす。唾液の登山道を何本も作りながら、彼女の喉ちんこを虐めていた尖らせる先端を追い求める。

彼女の胸は強い舌に圧迫されながらブニブニと変形を繰り返した。ついに彼女の乳首は彼の舌に絡め取られる。

彼は少し得意気な表情でイタズラっぽく、彼女の余裕を携えたスピネルのように澄んだ赤い瞳を覗き上げる。

彼女を気持ちよくさせてご褒美にもっとエッチなことをしてもらおうと、彼女の乳首を巧みに舌でこねくりまわしご奉仕を始めた。

「待て、よ」

彼女は垂れ落ちた髪を耳の上に乗せて、上半身を上げてしまう。口の中を蹂躪していた大きなお肉が抜け出ていってしまった。

彼の口の上で、ベタベタに唾液が付いた片方の彼女の胸がオレンジ色にぼんやりと光る。

「ほら、こっち」

彼女は上半身を旋回させて、もう片方の巨大な爆弾が彼の口に向けられてゆっくりと落下していく。彼はエサを待つコイのように空に向け大きく口を開く。

「こっち、こっち」彼女は背中を震わせて、大きく口を開けて待つ彼の口に、垂れる乳首を揺さぶる。「はやく、はやく」

彼の舌は口から高く伸び上がり、逃げ回る乳首の先端を何度も追

求める。爆弾がゆっくりと自由落下を始めると彼はへたなキスを求めるかのように唇を尖らせ突きだした。

着弾と同時に、乳首に吸い付いた恥ずかしい空気音が弾け出た。ジュバジュバと音を出し、乳輪ごと授乳するかのように乳首を吸い立てる。

だがすぐに彼女は背中を起こし、彼におあずけを駈る。また、胸が降ってきては昇ってしまう。繰り返すうちに、彼は逃げられないようにタイミングを合わせて彼女の乳首を前歯で挟み込んだ。

僅かに顔を出す乳頭に舌でゾリゾリと刺激を与え始めた。乳首だけでも感じさせて、おちんちんも気持ちよくしてもらおうとする、短絡的な思考が見て取れる。

「かわいい」必死な表情で、彼は彼女を鳴かせようと乳首を責めるがその気になっていない彼女を喘がせるなどオスには不可能に近い。「いいわよ、もつとカミカミして？」彼女は愛しげに微笑んだ。

余裕そうな彼女の顔に、彼は少しムツとした表情で歯に力を込める。フンフンと興奮したような荒い鼻息を出し、彼女の伸びた乳首に歯を突き立てる。

チューチューと可愛く音を出し、舌でザラザラと削る。しかし、彼女の胸は意に介さないかのように再び上昇を始めた。

歯で乳首を噛みつかれながら、スライムのようなイビツな円錐に姿を変えつつ昇っていく。やがてカチと歯を叩く音が石牢内で小さく鳴り出した。

胸が下りてきては、乳首に噛みつき、上がっていつてはカチと音を出す。カスタネットでも鳴らしているかのように彼女は、彼のお口でしばらく演奏を楽しんだ。

彼に応えるように彼女は女の甘い声を出し乳首をパンパンに尖らせる。カスタネットに彼女の甘い喘ぎ声の色を添える。彼女の柔らかく大きな胸が彼の唇に押し付けられると、彼は大きく口を開けた。

彼の口マンコはおっぱいに突き刺され、彼は腰を揺さぶり犬の尾のようにおちんちんを振り彼女のスカートに擦り付け始めた。

彼は口を犯され尽くし、勢いをなくすまで彼女は胸を押し付け乳首

を好きに舌で遊ばせてやる。彼はやがて全身から力を抜きその身の全てを彼女に捧げた。

「僕のタイプは」疲れきった彼の耳穴に口を付け、彼女がそつとささやく。「おっぱいの丈夫な人です」秘密を告白するように掠れる小さな声で彼女は続けた。彼の耳が赤く変わっていく。

「あら恥かしいの？」

「こんなに小っちゃくして」

彼は顔を赤らめながら、居心地の悪そうにモゴモゴと口を動かし彼女と反対側に顔を向ける。全裸で大の字に開かれた男の中心は、一度縮み始めると冷気を浴びて一気に小さく代わり果てた。

「かくれんぼなの？」

逃げ出すようにカラダの内部へと頭を引つ込めた二つの睾丸の作る小さなシワを、彼女の黒い爪がなぞるように引つ掻いた。

少年のソレのように小さく代わり果てたソレは、ご褒美を貰えなかった事を嘆くように我慢汗を流しだす。

彼の陰毛サラダに小さく乗る一つのイビツなソーセージから、白く薄い液体がドレッシングのようにこぼれ出る。

彼女の両乳房は彼の変態行為を見せつけるように唾液でヌラヌラと光りを反射させる。全てを失ったかのように、彼は絶望的な瞳をしながら顔面を真っ赤に変えた。

「お食事の時間まで静かにしてなさい？」

顔を無理やり向けさせキスを強制すると、彼女はテーブルから足を下ろし、脱ぎ捨てた黒い下着を指にかけ、クルクルと回しながらハイヒールの音を響かせて階段を上っていく。

照明が落とされ心細く冷たい深淵の中のように、海底の暗闇が彼を覆い尽くす。

彼女は静かに戸を閉じると、思案にふけながらゴツゴツしたジャリのような物が見えかくれする通路に行く。妖精の話は、食事の時にでも聞かせてもらおうか、と。

内容次第では今後もここで飼い続けててもいいかと、しなやかな脚をキビキビと動かしながら考える。あの男は躰のしがいはありそう

で、具合が良いと少女の顔を思いだし彼女のホホが緩む。

海底にお昼を告げる微振動が響き渡った。

——もうそんな時間かしら。

彼女は人差し指をホホに当て、小さく首をかしげて長い黒髪を揺らした。少女を待たせているかもとの焦りから、彼女の足の動くペースが早くなる。

コツコツコツとドツプラー効果でも出来そうな素早い速度で、彼女はリビングへと侵攻する。

08 そこは海底150M

「駆逐ちゃんいますか〜?」

木で作られた戸をソウツツと開け、小さくしぼんだような角をリビングにそつと滑り込ませる。猫のように細めた目をしながら様子を慎重に伺いつつ戦艦倭姫が顔を出す。部屋の中には少女1敵1が認められる。

「いませんよ」少女が4人がけのテーブルの前にあるイスに腰掛けながら答える。「いたいた〜」彼女はあまり怒ってないようだ、角を膨らましたかのように大きく見せながら少女に抱きついた。少女の薄紫色の髪が鬱陶しそうに揺れる。

大陸棚の日の届くまだ浅い側面に切り開かれ、アリの巣のように彼女たちの住み家が存在する。地上暮らしを続ける者も多くいるが、こちらは艦娘の嫌がらせが酷くしょつちゅう損壊させられている。

「艦娘の登場以来こちら側の行動は、向こうの『潜水組』に追尾されてある程度察知されている。深海の住居も大まかな位置が特定されたため、やつらは対潜爆雷や潜水魚雷の定期便をせっせと送り付けてくる。もつとも、お互いにガス抜き要素が強くこちらはその程度で壊れるものでもないが。」

ひっそりと暮らしていた彼女たちの海底基地の場所を露呈。させしてしまった“事により海底基地を中心に暫定的に『深海前線』が発生している。この前線は事実上彼女らの領海であり、これは日により伸び縮みする。つまり超長波に乗せられた彼女らの声を検知できる範囲。水平線前後の距離一周が領海として存在する。

この近辺。

特に領海内部は彼女らの狩場となる。船団や民間商業船ですら轟負なく攻撃される。艦娘の護衛付きであればこの航路を通過できるが、武装集団が闊歩往来する街を大量の金塊を持って民間警備会社に

護衛してもらって通過しているような状況だ。彼女らの機嫌を著しく損ねたり、ワイロ的な物が足りなければ結果は火を見るより明らかとなる。」

「もうお昼か？」

飛行場姫は、感情を失くしたような無機質な瞳でキスを強制されている少女を、少し羨ましそうに眺めながら言った。タコのように絡み付くバカを少女からひっぺがし、無理やり着席させる。

日に二回。

ここにはデイリーと称して海軍の存在意義を示すかのように、嫌がらせ攻撃が行われる。時間はだいたい、正午近辺と日没近辺だ。彼女の件以降バカみたいに膨れ上がった鎮守府の数が連日の嫌がらせを實現している。

「しかし飽きもしないでよくもやる」

飛行場姫とあるように陸上型の彼女がなぜ深海に居るのかと言えば、理由は単純だ。連日の焼夷弾攻撃で髪を焦がされる事に嫌気がさしたからである。彼女の件の後、何かと標的にされるか弱い北方棲姫もつれて移住してきた。

「ここは潜水組の水中港だったが、地上戦が激化したために地上組が過ごせる設備を新設したのだ。移動の際には人側から鹵獲した小型潜水艇を潜水組にけん引させる。人より深く長く潜水できるが、この深度までの素潜りは酷な話である。」

警戒行動中は小さなボンベを持ち単身警戒を行うが、楽が出来るに越したことはない。彼を捕獲した飛行場姫もまた、潜水艇のハッチを閉めただけで、潜水タクシーで帰宅したのだった。」

「駆逐ちゃん」戦艦棲姫は生気が抜け、長い黒髪を垂らして疲れ果てたように、テーブルにワカメのようにニョロニョロ両手を乗せ伸ばす。「ご飯作って欲しいの」少女を目にした際の空元気も切れ幽霊のよう

に深い声でドヨドヨと言う。

「ちよつと疲れちゃった」少女はそつと、横向きに角を転がす彼女の口元に、平べつたい食器に乗るパンを近づける。「彼のも、いいかしら」彼女は器用に舌でパンを口に引きずり込み、早いペースで長いパンが鉛筆削りのように消えていった。

「姉さま」少女はイスに座りながら、淡白にサバサバと続ける。「朝の情事は上手いかなかったのですか？」彼女のその姿はまるで骨折り損のくたびれ儲けを体現しているかのようだ。

彼女が得意とする能力の一つに、通常の声と同時に低周波による声を重複して発声して、より良く、より早く、より深く、彼女の声を直接脳へと刷り込むことが出来る。ただ、同時に事を行うことは彼女自身への負担も大きい。

「萎んでたのよ」力なく言う彼女の言葉を聞き、飛行場姫は手に持つ、飛行場姫の顔が掘られた木製のカップに入る野菜スープを口から噴き出した。「あによ？」彼女は鋭い視線で飛行場姫を見るが、たまに粘着気質な彼女が陥る墓穴だ。

「姉さまがしつこすぎるからじゃないですか？」少女も見も蓋もないことを続けて、飛行場姫をさらにむせかえらせた。「すまない、台ふきんを取ってくる」テーブルに広がる水気を、少女が紫に黄みがかかったバイカラーの瞳でジツと眺める。

山賊が洞窟に作った様な広いドーム状の場所に、潜水艇により分解して持ち込まれた簡素なキッチンがある。ガスの利用を想定していないので、調理には火力の乏しいエタノールを使っている。

その手前に飛行場姫が暇つぶしに作った大きな木のテーブルと椅子があり、いつもそこで彼女らしい食事を行っている。

「どうせ」少女は彼女の胸元だけ濡れたワンピースのシミをイライラとしながらチラリと見る。「気持ち悪い授乳プレイでもしていたんで

すよ」シトリンのような瞳を覗かせながら、テーブルの上にあるパンに手を伸ばし大きくかじった。

「ちいがうってばあ」彼女はパタパタと手を振りながら「もう、違うの」耳まで顔を赤らめる。思い出すと乳首の先端がチクチクと少し疼く。

「何？ 駆逐ちゃん」

少女は椅子から立ち上がり、少しキツイ面持ちで彼女のよれた黒いワンピースのスカートを捲り上げる。彼女の表情がエツチな期待を膨らませて少し柔らかくなる。

「姉さま」時間が立ち黄色いシミで湿らせている彼女の白い下着に顔を近づけた。「とても、匂います」そこは、エビやらカニやらをそのまま長時間煮込んだ時のような濃い磯の匂いがしている。

「・・・わかった」彼女は見えない耳が垂れているかのようにしよんぼりとし「わよ・・・」背中を丸めながらシャワー室へとトボトボと歩いて行く。

【海底での真水は貴重品かと言われると、彼女達にはちよつと節約しようか程度の認識で十分すぎる。余剰した潜水組の機装が、海水からせつせと酸素を作り続ける際の排熱を利用して、できた蒸留水を常時タンクに貯めているからだ。

建設したのは地上組の奴らだが、気圧も内部の工夫と設備に管理され何とか1・5気圧以下には抑えられている。蒸留水で蒸気機関のように発電される電力の大半は3重式の海底ゲートの開閉に使用され、残りは施設内の照明に使われている。

問題なのは温水で、排熱利用では発電力が弱くガスも使用しないため、電力節約のため主にシャワーは常温水になる。氷点下に近い海水を全裸でも泳げる彼女たちではあるが、温かいお湯でシャワー位浴びたいというのが本音だろう。】

「どっちが」飛行場姫は布巾を持ち、テーブルの上で長く手を伸ばしながら続ける。「姉だかわからんな」彼女は節分の鬼のような、サイドにつく小さな角を左右に振った。

「姉さまは」少女は腰に両手を付け少し早口になる。「姉さまに決まっているじゃないですか」少女はドカツとイスに座り、小さなバスケットに入る長いパンを手に取り勢い良くかじる。「当たり前です」

「ほう」彼女は少し面白くなさそうに答える。「アレがねえ」彼女もまた少女と対面するかのようにイスにどっかりと腰かけた。大きめの胸の前で腕を組みため息をつく。「もう少し、理性的になれんもんかね」

「なんですか」少女の瞳が黄色さを増し光るような鋭い眼差しになる。「たかだかバンカーバスターくらいでガタガタ逃げ出すくらいの分際で。降り注ぐ徹甲弾の雨の中をヘラヘラとホッポちゃん連れて歩き回る姉さまを悪く言うなどと」

「わかった」彼女はやっちゃまったと、首を引きつらせながら言う。「私が悪かったわ」目には少し涙が浮かんでいる。「勘弁して」

「だいたい、あなたも日曜大工ばかりやって何ですか。陸上型だからとか言って大して出撃しないわ、尋問したらしたで意味もなく快樂貪って殺すわ、後始末までホッポちゃんにやらすわ。もつとしっかりして下さい」

「あ・・・」

彼女の視界が霞んでいく。どうやらやぶ蛇であつた。なにか知らないが、少女には過大なストレスが溜まってたらしい。飛行場姫は少し後悔した。滝のように少女が怒濤の勢いで言葉を続ける。

「その角ドリルなんなんですか。電撃も出せないくせに。普段俗物めみたいなこと言ってる癖に、実際は気が小さいし。やわらか戦車ならぬやわらか飛行場ですか。ここでひっそり戦後まで生き延びててくださいいね」

「ほっぽー」彼女はついに耐えかねて立ち上がった。「くちくがいじめるー」彼女は韋駄天のごとく駆け出した。リビングに一人、少女が残される。

「さて、いなくなりましたね」

少女は気を静め澄んだ紫色の瞳で、テーブルの上の空の食器をジッと見つめる。農園から適当に摘んできた山菜を食べさせるとたまに

死人が出ることもあり、少女は何を食べさせるかとツインテールを傾ける。

北方悽姫に知恵を借りたいところだが、潜水組の後方を支えているため、あいにく彼女はまだ戻っていない。飛行場姫は今ごろ、拗ねたようにちよつとお尻をいじっているところだろうか。

少女は小さくため息を付くと、キッチンのエタノールコンロに火を入れた。ポワポワと青い炎が出るのを眺めながら、少女は黒く短いセーラー服の上に、テーブルクロスを再利用して割烹着のような形にした布を着る。

「ねえ駆逐ちゃん」

彼女は冷水シャワーから戻つてくると、リビングの木の扉に手をかけて、体を斜めに傾斜させながら言う。

「何ですか姉さま」少女はキッチンで、コンロに乗りコトコトと動く鍋の蓋を眺めながら答える。少女はツンツンとした表情でゆつくりと歩き回り作業を続ける。「やだ、こつち、み・て・よ」彼女は甘く震える声で囁く。

「ダメです」

少女は薄い丸型の食器の上に、コールスローサラダのように加工した、野菜のような塊と、塩で茹でた芋を盛り付けながら冷淡に答える。「もう」全身黒くピチピチの服。極めて短いタイトスカートで白い脚をたつぷりと出した、いわゆるボディコン服だ。洗濯中のワンピースの代わりである。「ほらまた、いやらしい格好して」

少女が顔を向けると、彼女のパテントのように僅かに光沢ある黒いハイヒールの足元から、白い脚が続く。軽く開いた脚が短いスカートを押し上げ、僅かに、彼女の毛並みの良さそうな黒く太い体毛をこぼれ出させる。

ピチピチとする服の胸元は、ノーブラでバスタオルでも巻いているかのごとく、大きな胸の上半分を白く露出させている。少女に向かい少し歩くだけで、窮屈な谷間が大きく振動し彼女の自信のほどが伺え

る。

「パンツはどうしたんですか？」

火を消すと、薄紫色で丸みを帯びたミドルヘアをふわふわと揺らしながら、少女に近寄る彼女を、壁際まで威圧的に押し戻す。少女は彼女の冷たいホホに手を付け、優しく手のひらを彼女のからだに沿ってなぞらせていく。

冷たい首筋にサワサワと少女の指が流れ、冷えきった谷間に人差し指をかけると、反り返らす二つの乳首を暴き出しながら素早く彼女の太ももまで降下する。彼女の上半身は壁と少女の胸部に力強く挟まれた。

「パン・ツ」少女のももが彼女の片足を乗せ持ち上げる。彼女のハイヒールのかかどが左右に揺れる。「どうしたんですか？」至近距離に少女の顔が彼女の顔に近寄りながら少女が問い詰める。彼女の軸足におねだりするように蜜が伝う。

「全・部・」顎下から覗き上げる少女に、緊張から唇を舐めると言葉を絞り出す。「洗・って・んんううう」少女は無表情で彼女の両足の付け根に腕を差し込み中心を無慈悲に掴んだ。「のつよお・・・」

「剃ったんですか」スカートを手の甲で持ち上げていきながら、指二本でたてがみのように生える毛を挟む。毛穴に爪を引っ搔けるように上下に動かす。「変態姉さま」

「違うのよ」彼女は期待するように切ない表情で否定し始めた。「ちがっの」少女は鼻をナイフのように彼女の顎に押し当てながら、凍える瞳で彼女を見つめる。「違います」少女の冷たい声に彼女の子宮がギチギチと収縮を繰り返す。

「すけべ豚」

少女はももをさらに上げ、彼女の脚が腰付近まで一瞬で持ち上がった。壁に押さえつけられた片足は膝を降り曲げプラプラと揺れる。剥き出され少女の上半身に押し潰された彼女の胸は、少しでも刺激を求めようと先端を高く膨らませる。

「おまんこ見せつけたかったですよね？」少女は指二本を彼女の中に突き刺した。「ちいが」彼女は胸を膨らませて息を吐きながら岩肌

の残る天井を虚ろに眺める。

「見せびらかしたくて、剃りました？」指が根本まで差し込まれる。「わざわざ短いスカート穿いて」少女指三本を入れ、彼女の中の口を爪でかき回す。「見られるの想像して」サクサクと指が動き彼女の汗を掻き出す。「しより。しより。しより」粘っこい水音が、少女の指の激しい動きから生まれる。

彼女は興奮した犬のように言葉なく浅く息を吐き続けて、軽く達するたびに片足のハイヒールがキラキラと羽上がる。彼女は乱れて流れ込んだ黒髪を僅かに唇で噛みながら小さく声を漏らし始めた。

少女は、彼女が静かになるまで追い詰めた。両手から力を抜いた彼女の体を乾燥している床に優しく寝かせる。

「くさい、でしょう？」

小さく息を吐きながら彼女は呟くように言う。少女は彼女の両足を開かせると、フワフワとした薄紫色の髪を片手で押さえながら、ゆっくりと顔を落としていく。

「まだ少し匂いますけど」舌を伸ばして太ももから付け根に向かい、彼女の軸足にしていた白いものの光る水後を進んでいく。「別に、嫌いでもありませんし」かぐわしい中心にも舌を付け、刺激を与えないように猫のように舐める。

「ねえ駆逐ちゃん」彼女は立ち上がると、僅かにシワの残る締め付けのきついスカートを元の位置までと下げた。「なんですか姉さま」少女も立ち上がり、彼女の湿り気を帯びた黒いセーラー服のスカートをパンパンと払っている。

「あれ、全部駆逐ちゃんが作ったの？」彼女はテーブルの上の二人分の食事を朗らかな顔で指差す。「そうですけれど、何か」首を傾け片方のツインテールを指でときながら少し不機嫌そうに少女が答える。

「あ。り。が。と」

彼女は両手で少女の顔を抑えると、膝を曲げて身長を少女と素早く合わせ、唇と唇を勢い良く重ねた。彼女の長い黒髪が反動で少女のホホに僅かに覆い被さる。

「もうなんなんですか突然」少女は深く澄んだ紫色の瞳を大きく広げ、

僅かにホホを赤らめた。「油断してると角があたっていたいんですよ」どこか照れ隠しのように少女の素顔を覗かせながら、語気を強め口早に少女が言う。

「ね、え」彼女はゆっくりと片手を少女のホホになぞらせトロトロと囁く。「今度それ、私にも食・べ・さ・せ・て？」彼女は口元をモジモジとさせながら言うと、少女の耳に軽くキスをした。

「ダメです」少女はすぐにいつもの無表情さを取り戻す。「姉さまには姉さまの分がありますから」鬱陶しそうに彼女の顔を手で押し戻した。彼女は少し寂しそうにテーブルの横にある木製の席に付いた。

少女は彼女用と、人間のエサ用に分けられた食事の盛り付けを手早く終わらせる。そのまま少女はイスに座る彼女の膝の上へと、スカートのお尻を丸めるように手で押さえながら座った。

彼女は背中側から、大きな人形を抱き抱えるように少女の腹の前でギュツと両腕で抱き締める。少女は気にも止めない無表情で、テーブル上のパンを取り、上半身を半回転させながら、彼女の口へ消えさせていく。

「はあ、駆逐ちゃん分が充足されていくわ」食事を終え、彼女の満ち足りた顔と対照的に、脇腹に鈍い痛みを与えられている少女の表情はどこか険しかった。「早くもってって、食べさせて来てくださいよ。バカな姉さま」

「ふふ」彼女の膝イスから下りて、プルプルとツインテールを振る少女を見ながら、彼女は嬉しそうに笑う。「なに笑ってるんですか」少女は食器をトレーに乗せると彼女にグイと押し付けた。「早く行つてください」

万力のような力で締め付けられた少女は、少し深いため息を吐きながら、彼女の嬉しそうな背中を見送る。残された痛みにも、嬉しいような心底嫌気がさすような複雑な気分で短いセーラー服の間、白い肌に見える脇腹を手でさすった。

「さて、姉さまの下着さんは、と」

少女は気を取り直しパタパタと洗い場の区画へ移動する。横に掛かるロープ状の物に干されて、石床に水を垂らしている下着を数枚見

つけた。黒いワンピースやグレーの男物の下着もある。彼の下着は男臭いので廃棄することに決めた。

「あら、お花さん」

香水代わりに使ったのだろう。桶の中にすりつぶされた「駆逐ちやん農園」から採取されたであろう生花が数個浮かんでいる。幸い「ココの管理人は寛大」で、乱獲さえしなければ、特に使用の許可は求めない。

「やっぱりいい加減ですね」

少し力を入れて絞ると、僅かにネズミ色の液体が石床に広がった。

「彼女たちは洗剤代わりに、種火としても利用した乾燥させた海藻の灰を利用する。初めのうちは、何となく海水と真水で洗っていたのだが、あるとき北方棲姫が灰を水に混ぜて服を洗っていたところ、意外と汚れが落ちていた事が分かり、それ以降はこれをよく利用している。」

洗濯機の存在に気付いた後でも、これを続ける理由は、節電と節水の為である。また、洗剤を搬入するくらいならその分を北方棲姫のために果物でも積んで来いという意見が多いのも理由の一つか。」

「全部洗い直しますか・・・」

ワンピースからなにやらを一律引き下ろすと、ジャバジャバと手洗いで洗濯をし直す。

「廃水を道なりに併設される側溝へ流すと、最下層バラストタンク部へと緩やかに流れて行った。溜まった汚水や不要物は、複数あるバラスト槽の手前に溜まり、空になっているバラストに適当に振り分ける。」

そして潜水艦のように海水を引き込んだら、海に吐き出すのだ。まき散らされる物には人の骨やら服やらも含まれているが、今日まで近隣水生生物から抗議活動が行われていないことは幸いである。」

「あつ、エタノールの様子も見に行かないと」

少女はハツと思い出すと、足をぎこちなく動かしながらパタパタと更に下層へと下りて行つた。岩肌から変わり、ブロック塀のようなもので補強された通路の見える下層へ向かうと、冷え込んだ冷気が体に差し込む。

「ここら一带にはやはり潜水組の艀装が桶の上であり、トロトロと液体を垂らしている。日常で排出されるCO₂が緩やかに下層へと流れ溜り、艀装がCO₂をエタノールに分解しているらしい。

水中施設の全ての部屋が逆ツリー型で、マヤ遺跡のように一定の傾斜をもつように増築されている。水は側溝を伝つて自然に下層へと流れ溜まる。

空気さえ作れば居住に問題ないと、当初は彼女たちは認識していたため、水中艀装に空気を産出させて、居住区からバラストタンクを経由してゆっくり海水を排水した後ここへ移り住んだ。

移り住んでみると下層部で意識を失う者が続出した。初期は敵の嫌がらせを疑つたが、調べ始めてみると、初めて地上組がCO₂の存在に気付いたのである。潜水装備を持ち、倒れた者の救助に向かうが、この時、重量の関係で水中艀装を一部下層の通路脇に放置することになった。

この一連の騒動の後、地上組は再び外の世界へと追い出される事になる。コツコツと5、6年の工期を費やした一大事業だったにも関わらず、残念な結果に終わったと落胆していた時、施設を暫定的に管理していた潜水ソ級達から、艀装が燃える液体を作っていると極低周波音声により海中から急報が入つた。

通路脇に置かれた艀装から、水溜まりが出来ていて海水もないのに不思議に思い回収したら運搬中に燃え上がったらしい。

適当に捕まえた気の毒な科学者達から得た情報によると、どこかの国がCO₂からエタノールを作る事を実験的に行っている。きっとそれではないか、と。お願いしたら、簡易的なCO₂計測器も譲ってくれた。

お礼に泊地水鬼が機密保持のため全員を気持ちよく昇天させてあげる事にした。

エタノールを回収し一定量を冷蔵補完つつ、CO₂の濃度を見ながら数週間後には、彼女たちは再び別荘を取り戻したのである。更に、生活用燃料としてエタノールが自給できる事は嬉しい誤算になった。

後に、戦艦棲姫と駆逐棲姫が移住して来てからは、駆逐棲姫が事実上の管理者のように施設全体を見回している。」

前方からトイレ100基が排水したかのような音が重低音で反響して聞こえてくる。薄暗い通路から聞こえるこの音は、何度聞いてもなれないもので少女は一瞬ビクツと体を動かす。下層に設置されるバラストタンクに注水が始まったようだ。

「随分溜まってますね」小型のポリタンクを取り換えた。「ちよつと歩きづらいますが、まあいいでしょう」冷え込む通路をよろよろゆつくりと上って行く。紫色の髪が左右にゆらゆらと揺れ動く。

「無限に湧くエタノールは大変都合がいい。燃料にするも、捕虜の消毒に使うも、地上組の水鬼達に酒として飲ませてやるのにも使える。

しかし、自然発火の危険もあるので、深層の冷え込む貯蔵庫に普段は貯蔵してある。面倒ではあるが必要な分を彼女達はキッチンの冷蔵庫まで運び出すのだ。」

「二応、今日は多めに持っていけますか」

もしかしたら、消毒用にでも必要になるかもとポリタンクに少し多めに液体を移し替えると、ポリタンクを引きずるようによろよると下りて来た道を帰っていく。

09 戦艦棲姫

「お食事の時間よ？」

照らされた白い両手と両足が石段を下りて来る。彼女が戻ってきたのかと彼は顔だけを起こし向ける。彼女は相変わらずコツコツとハイヒールの音を響かせながら下りてくる。

彼女の手には銀の円盤が光り、新しい彼女のお楽しみグッズかと彼が睨むようにそれを凝視する。しかし、彼女はまるで、もう何十年も連れ添った夫婦のようにテーブルの上で裸で礫られている彼の隣にゆったりと腰掛けた。

彼の顔の前に、キツキツのスカートからはみ出た、大きくみずみずしい彼女の太ももが、彼女が上半身を動かし何かをする度に、プルプルと揺れる。彼女の太ももから僅かに彼女のあの匂いが漂っている。「手、足、口」彼女は上半身を回して、乳首の形がしっかりと浮き上がるいやらしい胸元を見せながら、手で髪をときつつ優しく語りかける。「どこで食べさせてほしいの？」彼女は下目で高圧的に冷たく言う。

彼は、必要ないと首を背けて素っ気なく答えた。

「食べなさい」無理やり顔を向けさせると、角の隙間で彼の額を固定して目を合わさせる。「なに強がってるの？」彼女は高い鼻で、彼の鼻をゴリゴリと押しながら言う。

しかし、揺るぎない意思か、彼は餓死でも選択したようだ。一日中何も与えられず深海的歓迎を受け、すでに衰弱しきっているが、このまま天命を全うするつもりか断固たる決意がその瞳からうかがえる。

「あくあ」彼女は足をパタパタと泳ぐように躍らせる。「駆逐棲姫にエサを作れと言ったのに」彼に背中を向け、黒く長い髪を躍らせる。「あの子全然使えないじゃない」彼女は僅かに唇を震わせながら言う。

「セックスは嫌がるし、エサもまともに作れない何て、本当に使えない子」彼女は足をぎゅつと閉じると少し淋しそうに背中を丸めている。「もういらぬわね」彼女は唇をムツとさせながら絞り出すように声

を出す。

「死んだら一緒に処分してあげましょう」

彼女はそう言い切ると銀のトレイの上に乗る食事を持って立ち上がった。彼女は視界が滲む気配を感じながら少し頼りなく歩き始める。しかし、離れていく彼女の背中に、待てと、弱々しい声がかかる。「なに？」彼女は赤い瞳を細め、石段の手前で少し大袈裟に、イライラするように立ち止まる。「私、あなたと違って暇じゃないのだけど」ハイヒールのかかをとカツカツと鳴らしながら言う。

彼の声が力強くなっていく。彼は、手で、食べさせてくれと悲鳴を上げるかのように哀願する。彼女はやはり面白いなど、フツと口元を緩め振り返った。

「ふうん？」長い黒髪が、回転に会わせてフワリと膨らみオレンジの光を蓄え、一瞬輝いた。「食べたいの？」銀盆を光らせながら、彼女が石段を戻ってくる。「あなたに次があれば、次からは早く言うのよ？」

彼女が大きく足をかけテーブルに乗り上がる瞬間、彼の瞳が一瞬だけ開いた彼女のスカートの中、股の間を追いかけた。彼女は彼女はそのまま彼の両脇を膝で挟むように腰を下ろしていく。

窮屈なスカートが限界まで伸び、彼女の下半身の形を浮かび上がらせる。彼の腹にナメクジのように乗る小さなそれを、彼女のスカートの中の整った体毛が先端でツンツンと刺激する。彼女のスカートが僅かに内側から盛り上がった。

「お食事でしょう？」彼女は僅かに腰を上げ、彼女を欲しがる彼の下半身から距離を開ける。「淫乱男」彼は少し悔しそうな表情でおしりに力をいれている。「ダ・メ・よ」彼女は捲れたスカートを少し下ろしながら言う。

「はい。あーん」

彼女は膝立ちで大きな四角いパンを切り出し、薄く切ったパンにコールスローのような野菜を盛り付けると、少し水に浸して小さく千切り彼の口にそっと運ぶ。無表情な彼女に顔を覗き込まれながら、彼はモコモコと口を動かす。

「ダメって言うてるでしょ」彼女を求め高く勃起した先端が、おねだり

キスをするように、彼女の陰毛を擦る。「待てよ、待て」彼女がそれを手のひらではたくと、嬉しそうにベタつくヨダレがにじみ出た。

「おいしいの？」彼女は座りながら、片足を伸ばすように、彼の足の間から腹へと乗せる。「ねえ、おいしいの？」食べ物が無理やりガボガボと口に挿入され、彼はハムスターのように口を膨らませている。「なに出そうしてるの」

「ダメでしょ？」彼女のハイヒールの靴底が彼の口を押し潰す。「しっかりと飲み込んで」彼女の足が左右に揺れる度に、僅かに彼の唇をめぐり上げる。

「今なに押し付けたのよ？」彼の体を下から横断する彼女の足に潰され、彼の腰が隠すようにゆっくりと動いた。「遊んでないで早く食べなさい」彼の顔から足を下し、彼の乳首をハイヒールのかかとでカリカリと動かす。

「言うこと聞かないのに、ご褒美貰おうなんて」彼が飲み込むと、残った全てをひとつのパンにのせると、彼の口に指をねじ込む。「甘いよ？」彼女は黒いスカートを上げながら、白く大きいお尻を彼の顔へと向ける。

あまり美味しそうな顔をしていなかった彼の顔に、彼女は苛立ちがこみ上げた。両手で尻肉を開きながら、彼のブクブクと膨らんだホホに腰を下ろしていく。彼の口を完全に塞ぎ、豚鼻のように鼻を捲り返して肉奥の臭いを味わわせる。

「美味しいの？」呼吸を奪われた彼は、彼女の腸内の臭いにえびきながら腰を振り回す。「美味しくなったでしょ!!」彼女は彼の顔に座りながら、ゴリゴリとハイヒールで彼の開かれた太ももを左右に転がす。

垂れ下がる彼女の長い黒髪が、彼の目に刺さるように落下し、視界を奪う。彼女は体を支えていた各所から力を抜くと、恐ろしい重量が彼に覆い被さった。

「早く飲まないよ、死ぬわよ？」彼女は彼の顔に座ったまま腕を組み、白くしなやかな両足を伸ばす。「犬の癖に私の言うこと聞かないなんて」彼のヘソに向けかかとを下ろすと足を組んだ。「あなたが死んだくらいじゃ、収まらないわ」

「あとで、あの子にも」彼女は無表情で、いい案が浮かんだとばかりに少し声を高くしながら言葉を続ける。「お仕置きしてあげましょう」彼女はこそばゆい風を肛門のシワに感じながら、彼が数回喉を鳴らす音を嬉しそうに聞いている。

「そうなの？」彼が全てを飲み下すと。彼女は肉の牢から解放してやる。「まだしぶとく生きてたいのね？」彼はアソコ以外が泥酔状態のようにグツタリとなり動かない。「いいわ、命絞ってあげる」

少女の髪止めリボンを使い

彼の股間をきつく縛る。

緊縛され、先端から苦しそうに薄い液体が漏れ出た。彼女は彼の上に腰を下ろしゆっくりと際奥まで挿入させていく。彼は上半身を弾けるように跳ねさせると、強い刺激で意識を少しはつきりとさせたようだ。

「さて、質問があります」

彼女は上半身を曲げて、彼に抱きつくように体を重ねる。密着したまま角の間で彼の額を押さえつけた。極至近距離で瞳を交わす。彼女の冷たく重い体が、彼の大の字に股を開く体に覆い被さる。

「あなたは」彼女のスピネルのような鮮やかな澄んだ瞳が彼の瞳の奥まで覗き込む。「どうして艦娘に追われていたのかしら？」彼女が口を動かす度に、唇が僅かに触れあう。

「あれは、提督〃は〃襲わないはずよね？」

技研により開発された新兵器、艦娘には致命的な欠点があった。あれは、時として人〃も〃襲うのだ。長年敵対している彼女たちの事だ、知っていても何もおかしくはないと彼は鈍る思考のなか漠然と想像した。

「あなたは、妖精が見えないのよね？」彼は、彼女の言葉を受け、何故知られているのか分からないが、何処かに密偵でもいたのかと思案を巡らす。「何をしたのか話さない」彼女の瞳が集束し赤黒く変異していく。

彼は弱々しい瞳で彼女を見ながら、わからないと返答した。彼女はゆっくりと小さく腰を回すように動かし、オスを喘がさせる。開いた

彼の口に、柔らかく強固な舌を挿入し、強制的に唾交換をさせる。

彼女は彼の口内へと舌を這いずり回せながら、彼の奥歯まで犯しつくす。二人で作った唾液の池を、彼に飲み下させた。彼は少し緩んだ表情で、彼女の瞳を眺めている。

「いつから見えないの？」

彼女は口を離し、白く粘性の高い糸が二人の口の間には掛かった。彼女は問い詰めることはせず、冷静に質問を変えていく。彼の上でうつ伏せにのし掛かったまま、少し楽しそうに足をパタパタと折り曲げる。

「早く教えて」彼女は瞳に力を込め、少しずつ動かしていた彼の腰を押さえつける。「ね。い・つ・か・ら？」キュツキユと瞳でギチギチに締め上げながら彼女が甘い声で言う。「早く。千切りたいの？」

どのみち、かなりの前から監視されていたのだろう。彼は彼女の口に向かい、着任当初から見えていないと、うわ言のように答えた。

「そうなの」彼女はご褒美キスをしてから話を続けた。「よくそれで今日まで指揮が執れたわね？」

彼は無言で答えない。

彼女が彼の鎮守府に興味を持ってからすでに1年は経過していた。あの鎮守府が設置された頃から見えないとなると2〜3年は経っているだろうか。彼は、だからこそ彼女らに興味を持たれ、拾われたのだと、納得した。

「つまり提督など誰でも良いというわけね？」

「近年、爆発的に数を増やした鎮守府には、妖精が見える。事を条件に提督が一人各々の場所に配属されている。」

提督一人を見つけると、すぐに艦娘が30〜200人は沸いてくるため、ゴキブリみたいに迷惑な存在だ。それが海岸線にギチギチとひしめいている。】

「大本営から下される指令書に則り」彼女は上半身を起き上がらせ、髪をかき上げながら言う。「ロボットの如く指示を出すだけ」沈みこん

だ彼女の下半身が、膾の中で彼の肉皮を引きずりながら微振動する。「あなたも同じく行動していただけ、そうよね？」

「提督とあるが、どれほど階級を上げようと作戦立案権がない。彼らの出来ることと言えば、スポーツマンのコーチのように部隊の編成を行い、部隊を育成すること。」

艦娘の状態を把握して「楽しい行事」に参加するか参加しないかの通知を送ることだけだ。」

彼の鎮守府もまた、消極的にはあるが同じように活動をしている。そこまで知られているのであれば、別段隠す理由もない。その上で、やはり彼女らは積極的に戦争をしていないのだろうと彼は推測した。

「妖精が見えなくて、指定された戦果も上げられない。だから追い立てられたのね？」あからさまに無能だと言いながら、ゆつくりと腰を動かす。「違うの？」彼は、小さな喘ぎ声以外返さない。

「じゃあ」彼の視線が、彼女の窮屈に押しさえつけられながら揺れ動く、白く大きな胸元を追いかける。「淫乱おちんちんを、あのお人形さん達に使いすぎたの？」彼女は視線に答えるように片腕で、両方の胸を押し上げた。

「まだ、だめよ」

持ち上がった反動でキツキツの胸元が擦れ、彼女の反り立つ乳首がこぼれでた。しかし、彼女は胸元の服を持ち上げ服の中へと戻してしまった。彼の残念そうに小さく開けた口を眺め、彼女は満足げに冷笑する。

「追撃していた艦娘は『私たち』より『あなた』を優先して攻撃していたそうよ」

誘っても、やはり自分からは話さないらしい。この手の事は、自尊心が強いだけのバカほど語るに落ちやすく扱いやすいものはないが、彼の瞳は何処までも冷静だった。方針を変えて彼女は質問を続ける。

【新兵器艦娘に兵装を与えると自立行動を行い攻撃を始める。しかし、与えられた命令の他に①深海棲艦②人間③提督の順で攻撃していく事がある。

ゆえに大本営は提督を一人だけ配置し、安全性からいつまでも鎮守府沿岸の敵を一掃しないのだ。新兵器が暴れ始めた場合の鎮圧までの時間稼ぎである。】

「明確な攻撃命令を受けていたのね？」

しかし、提督であればその命令を拒絶させる事も出来る。さらに、艦娘は提督に無条件で尽くす様に「作られている。」大本営直轄の指令すら提督の安全性を理由に拒絶することがままたある。

「あなたは、何を、したの？」彼女は瞳を合わせて、膺の圧力を緩めると、ゆっくりと腰を前後に動かしながら

彼女が問う。「話さない」せかすように腰を前後に動かしながら、まくしたてる。

「うっあ」彼の上半身が、彼女の腰の動きに合わせて逃げるようにクネクネと動き回る。「妖、精からっ。手紙があーあ、きた、だっ」彼の両足の指がギュツと閉じ自ら射精をこらえる。

「内容はー」彼女の脳震盪を起こすような軽いビンタが、彼のホホを脈打たせる。「言いなさいー」頬をさらに2、3回叩くと彼の顔に赤みが広がった。

彼は衝撃で精液を送り出してしまふ。しかし、縛られた陰茎が極僅かな通過しか許さずに、その多くが出口を求め逆流するように内部に溜まった。彼は涙と鼻水を作りながら、野太い鳴き声をあげた。

「君は・・・知る必要が・・・」彼は塞き止められた精液により下半身の神経がちぎれるようなチリチリとした痛みを感じながら言葉を続ける。「あると・・・」

彼女は腰の動きを止め、両手で彼のホホを優しく掴みながら先を促させる。

妖精を名乗るものから届いたビデオには、ある一人の足のない少女が映り込んでいたらしい。内容は2、3分と短かったが、その少女は、

体は極限まで細く、両腕から先を壁に埋め込まれた状態でいたようだ。

「それで消されそうになったのね」赤く淀む瞳で彼を睨みつけながら、凍えるような声で言う。「ねえ、それをして、あなたに何のメリットがあるの？」彼女の瞳は鋭く彼を捕らえている。

彼はその詳細を、陸の者を使い探らせていたようだ。彼女の問に、彼は答えを持ち合わせてはいなかった。それは、自分自身でも酷く感情的な理由からだと言わなければならない。彼にはわからないとしか答えられなかった。

「わからないじゃないわよ！」ホホを少し強く叩きながら彼女は言う。高い破裂音を出し、衝撃が彼の首を左右に激しく振った。「あなたはセンチな気分になって、ヒロイズムに浸りたかったでしょう！」

彼の気持ちを代弁するかののように言いながら、彼女は声をさらに張り上げた。このバカは、馬鹿馬鹿しい理由で勝手な行動を取っていたと理解した。大した力もないくせにと、腹立たしさが込み上げてくる。

「それが、迷惑なのよ！」

「泣いていたんだ」と、ゆっくり彼は天に向かい言葉を綴る。その少女は、気高く天使のように美しかったと彼は言った。その時に、彼は、それを行ったそれらと同族であることを心底忌諱したようだ。

「あなたは」彼女はそれ以上考えさせないように、彼の首に片手をかけた。彼は先を察するように、結果などわかっていたのに、バカなことをしたといった表情をどこか満足げに浮かべている。「人間をやめてしまったの？」

彼女の指がパキパキと音を出し、彼の首を圧迫する。彼が気絶をさせられる直前に見た光景は、長い髪を力なく垂らし、スピネルのような澄んだ瞳から涙を流す彼女の姿だった。

彼女は無意識下で、彼に何処か自分と近いものを感じ取っていた。

「あら、こんなに溜めてたのね」

不思議な浮揚感に浸りながら、彼女は膣内からリボン付きの肉を引き出した。リボンを外してやると、小さく萎んでいく股間から濃厚な黄色い液体が零れ出て来る。彼女は咄嗟に口で受け止めると、素早く喉を鳴らす。

「くっさい」塩のような味と、ムンムンとする熱気を喉の奥に感じながら、彼女ははしたない空気で喉を鳴らす。自分から大量に飲み下したのは初めての経験で、彼女は少し不機嫌になった。「なによ、もう」

ブルンと弾力のある大ぶりの胸を揺らし、乱暴に服を脱ぎ捨てると彼に密着するように抱き着く。そのまま、濃厚に唇を重ねた。股間を重ね合わせて、彼女の陰毛が飲みこぼした液体で冷たく浸されていく。

「まあ、いいわ」

少しの時間彼にベツタリと密着していたが、気持ちを整えながら彼女はテーブルから下りる。余剰水のう回路としても機能している、石牢の中を抜ける上水路から水を汲むと、彼ごと水を被った。

上水は石壁を巡り流れているため、かなり水温が低く彼女の乳首も激しく隆起させるほどだ。裸電球が光る水滴を纏い黒髪を振り乱す女性を照らし出す。

「あら、大変」

彼の唇が紫色に変色をしてきているようだ。ほっぺたをペシペシとはたくが死人のようにぐったりとしている。もやもやとした気持ちの整理をしていたために、人は低温に弱いことをつい失念してしまった。

「彼女の経験上、この手のものは温めてやるのがいいとは理解している。尋問中に凍死させかけることはしばしばあった。普段であればただの凍死ほど処置に困らないものもないが。」

ただ、引きずりバラストタンクに放り込む。後は、そのうち海の中だ。彼女たちは基本的に身体の欠損を伴う拷問を嫌う。なぜならばキレイ好きだからだ。尋問時には男にも女にも同じように対応して

いる。

精液や愛液がとび散る程度ならそれなりの清掃で済む。もつとも、女を相手にする場合は簡単にイキ死んでくれない分多大な労力を必要とするが。

掃除大臣の少女が率先する場合、少女が不快に思った男には肉棒膣ねじ切りシヨーが催されることもしばしばあった。基本的に彼女の意向にはだれも逆らわないのだ。

力が強いということも理由の一つではあるが、彼女の過去を思つての事でもある。」

「お湯かしら？」

彼女は脱ぎ捨てたボディコン服を片手に石段をコツコツと足早に上る。湯を求めて、キッチンへと向かった。

10 戦艦棲姫（過去）

「ああ駆逐ちゃん」

戦艦棲姫はびしょびしょのまま、少し匂うからだでキッチンへと戻ってきた。駆逐棲姫がヨロヨロと歩きながら室内へと入ってくる様子を鬼の形相で睨みつける。

「何ですか？死ぬんですか？」少女は片手だけで彼女の首を掴み僅かに持ち上げる。「バラスト開けときますか？」少女は大きく目を開き、薄紫色の瞳が濃縮していく。

「違う・・・のよ・・・」彼女は一切の抵抗を示さずに全身から力を抜いた。「駆逐ちゃん」彼女から匂う、少しアンモニア臭い水の匂いが決定打か。彼女の首にかかる力が強くなっていく。

「今度は何のプレイですか？」パキパキと首から音が出ると、彼女は大きく咳き込んだ。「せめてあそこでだけでやって下さい」少女は大きく息を吸い込み、気を落ち着かせながら、ゆっくりと吐き出した。

少女は鋭い目付きで、両腕両足を糸の切れた人形のように垂らし、ぐったりとしている彼女を両手で支えて、優しく床に寝かせる。

「まったく」少女は呆れるように腰に両手を当てながら続けた。「姉さまがそんなだから、やわらか飛行場如きにガタガタ言われるんですよ」床には少し、水溜まりが広がっている。少女は彼女の上半身を穏やかに抱き起こした。

「あのね」彼女はゴホゴホと咳ばらいをする。「お水掛けたら凍えちゃったみたいなの」申し訳なきように切り出した。「はあーっ」少女の口から、大きなため息が吐き出された。紫色のツインテールが小刻みに震える。

少女は心底がっかりした。いつもはここまで酷くないのにと。少女の様子に、横になりながら髪を床に広げさせつつ、彼女も居たたまれない気持ちで目に涙を浮かべている。いつになく彼女の角が小さく見えた。

「ああーっ」

少女は聞こえるように、大きく2度目のため息を吐いた。そのまま、少女は何も言わず、冷蔵庫を開ける。エタノールを出して温水の準備を始めた。水を張り鉄なべをコンロに置く。

エタノール用に調整したお手製コンロに、エタノールを浸すと、モワモワと円状に青めの炎が出た。

「ねえ。駆逐ちゃん」彼女は体を起こしてアヒル座りにで水溜まりの上にちよこんと座る。お漏らししたかのように広がる鏡面に、僅かに彼女の陰毛が触れ小さく重なる波を作った。「いいかしら？」

「何ですかキモ様」

また、おマンコを見せびらかせて、どうせろくな話じゃないだろうと、少女は呆れたように鋭く即答する。しかし、彼女の口は少し躊躇うかのようにモゴモゴと居心地悪く動いている。

「お話があります」彼女の瞳は在りし日の眼差しをしている。少女は静かに椅子に座った。彼女もまた、イスに座ろうとしたが、汚すなどいった恐ろしい眼光が刺さったので思い止まる。「何ですか姉さま」

彼女は何かを予感していた。もし彼女がこの言葉を知っていたならば、これはハンドローラーの壺になると表現しただろう。果たして壺の中身「エルピス」は希望なのか予兆なのか。

不幸にも彼女は、この件を握りつぶせるほど強くもなければ弱くもなかったのだ。

「彼ね」彼女は言い淀んだ。寒気が走るのは彼女が裸でいるせいだけではない。「あなたを知っていた」彼女は少し瞳を泳がせながら、小さく言葉を続けた。「みたい」コチコチと時計の秒針の動く音がリビングから聞こえる。

少女は透き通る瞳で、こちらをじっと見つめている。沈黙。5秒。10秒だろうか。永遠を感じさせる時間。また、永遠に感じていたいと願った時間。

彼女たちが現れて以来 “2度”

世界は終わりを予感した。

1度目は、大本営が深海棲艦の本土上陸を緩し、「戦艦水鬼」に少女を解放されたとき。2度目は、その少女が錯乱し海上に姿を表した時だ。

戦艦水鬼が本土の内陸まで侵攻した際には、艦娘はまだ生産されていなかった。現れた戦艦水鬼と複数の深海棲艦との共同攻撃により、硫黄島近辺に錨泊中だった米帝の第三艦隊が瞬く間に「沈没」させられた。

その後、大本営率いる陸海合同部隊を突破して東京湾内に侵入。秘匿されていた実験施設から少女が奪還される。関東内陸部にまで上陸され、この時初めて、民間人は戦艦水鬼に気付いた。その恐ろしき能力に。

まさしく鬼神の如き動きに、日本中は恐怖した。最大級の天災が向かう先は全て灰塵に帰すと誰もが絶望した。しかし、少女が救出されるやいなや、それは全速で離脱を始めた。初めから人間などいなかったように。

凶事は再び訪れる。

南方の棲み処で、少女が義足を手にして月日が経過したとき、突如少女は暴れ始めた。黄色い瞳に怨恨をのせて。押し込めていた不遇さが、つかの間の休息により噴き出させられたのだろう。

少女は激情に身を任せ、単身海へ躍り出た。再編中の警戒艦隊を突破し都市に迫る。少女の後方には「あの」戦艦水鬼が追従している。地獄のような「あの日」を経験したCOMSOPACは、口にしていた葉巻を噛み切るほど戦慄した。

ついに奴らの報復が始まった。今日でパラオは地図から消えると。そしてそれは次々拡大すると。馬鹿馬鹿しくも、地球最後の日は本当にあつけないものだ、彼はイメージした。

この時、戦艦水鬼は少女をこれ以上消耗させないために連れ戻そう

と海上を追いかけていた。だが少女の怨念が鬼を上回る力を発現させる。ある日突然少女は現れ、とある海岸線を歩いていった。

そして何も知らぬまま攫われたのだ。体を弄ばれ実験用の素体として足を切断される。理由の分からぬ不遇が少女の艦装をより強く働かせた。戦艦水鬼は少女に角を折られ四肢をもぎ取られる。

彼女の力は、その少女に遠く及ばなかった。戦艦水鬼は泣いた。少女と同じ痛みを分かち合えないことに。その黄色い瞳の見る先にあるいはもう少し早く、少女を救っていたならばと、彼女の体から力が抜けていく。

「ごめ・ん・なさい」彼女は後悔した。「わたし・は・」せめて、五体満足のうちに沈んでいればよかったと。「なお・ってしま・うの」これ以上少女を追い詰めたために。

涙を流し沈み始める彼女を、ついに少女は殺しきれなかった。一瞬の思考停止。それは、少女に感情の過負荷からの解脱感を与えた。少女の体が痙攣を起こし彼女にもたれ掛かるように崩れ始めた。

【トカゲの尻尾を連想させるように回復する彼女たちの体は、体の再生時には彼女ら自身の無意識下でのイメージ力が重要になる。つまり、少女は足を忘れてしまうほど長い間強制的にその状態に晒されていたという事だ。

もし、自分とそっくりな者を将来見つけることがあったとしても、それは所詮よく似た他人である。脚の形は思い出せても、どう再生させるかを思い出すきっかけにはなり得ない。ゆえに、彼女の脚はもう治せないのだ。】

「キレイ・な・ひと・み」

戦艦水鬼は少女のアメシストのような澄んだ紫の瞳を初めて見た。少女は腕のない彼女に頬を撫でられた感じを覚え、抱きそうように涙を流しながら目を閉じる。

二人の重みが、ついに海中へと二人を引きずり込んだ。ゆっくりと泡に包まれ沈んでいく。彼女らは鯨のように長く深く潜れるだけで

あつて、水死しないわけではない。

戦艦水鬼の四肢からあふれ出る体液が捕食者を呼び、機を伺うように彼女達の周りを周回している。

「ねえ・」首を動かして、少女を起こそうとするが、反応はない。「くちく、ちや・ん」時間が経つにつれて世界が暗く冷たく染まっっていく。もはや回復は間に合わない。世界が暗転する。

戦艦水鬼は手足のないもどかしさをかみしめながら、襲い来る捕食者達に啄まれていく。体当たりされるたびにクルクルと体が回る。クルクルと回り、泡に包まれクルクルと沈んでいく。

「いっ・しよに・帰ろう」

その時彼女は直結する艦装で、自らの背中に砲身を密着させて、自分の胴体ごと撃ち抜いた。下半身が千切れ飛び、炸裂する砲弾が捕食者たちを散らす。

彼女から生まれた衝撃波が、少女にもまた直撃した。錐揉み状に速度を上げ沈んでいく。捨て鉢になったような行動は彼女の賭けだった。瞬間。暗く冷たい海に光が爆発する。

【通常であれば彼女らの再生には、触手のようにワイヤーフレームのような意識の層を必要個所に展開する。そして、必要なものを体から伸ばし肉付けしていくのだ。この時彼女は意識的に千切れ飛んだ下半身をエサにした。

彼女は、意識の展開と同時に周囲に存在する少女以外の全ての命を吸い上げた。溶かし、同化させる行為が巨大な光源を発生させる。それでも足り得ない分は自らを制限することによって迅速な再生を成し遂げた。】

「さあ、帰りましよう」

水上で彼女は長い黒髪を震わせて水しぶきを飛ばすと、海水でずぶ濡れの少女を抱き上げた。

この日、新型の深海棲艦“戦艦棲姫”が少女抱え、海上をゆうゆうと進み帰路に就く姿が観測された。世界は生体実験を含む研究を

行った不都合な駆逐棲姫の存在を記憶していない。

全ては戦艦水鬼が扇動した事件として操作されている。大本営はこの脅威を利用して各国から基金を募り世界に先んじて艦娘の製造と運用計画、〃か号計画〃を軌道に乗せたのだった。

「関係者ですか？」

少女の鋭く刺さる視線が、僅かに黄色味を帯びていく。今の彼女では命を差し出した所で少女が暴れ出せばもう止められないだろう。内圧に弱いこの別荘も一連の騒動で失ってしまう。〃あの子〃も今は大西洋にいる。

「後から、知ったんだって」僅かに片足を下げながら、彼女の体が体がビクツと震えた。「何を、怯えて、いるんですか。姉さま」

少女は席を立つと、ゆっくりと近づき、彼女の顎に優しく触れる。冷たさを内包する紫のツインテールが嘲笑うかのように揺れる。無表情の少女の顔が、一層の恐怖心を煽る。少女の周りに深海が広がっていく。

「あの、あのね？」目を見るのが怖い。彼女は前を向いて、立ったまま硬直している。「バカな姉さま」少女は彼女へとふわっと抱き着いた。「ちよっと」少女は息を浅く吐きながら感情を整える。「からかっただけですけど？」一瞬、確かに怒りは噴き出したが、昔ほどではなく感情が十分にコントロール出来るようになっていた。

「もう、気にしていないと言ったはずです」彼女の胸元に頭を入れた紫の少女の髪が、ふわふわと彼女の顎下で動いている。「なに、ぼーっとしてるんですか。ほんと使えないですね。」少女はパツと彼女から離れた。

「アレを死なせたくないなら」少女は時おり見せる優しい笑顔を彼女へと向けた。「早く海藻でも取りに行つて来て下さい」しかし、すぐに少女の顔はいつもの無表情へと戻り、彼女に冷たく言い放った。

「え？」彼女は理由なく零れ出る涙と共に、棒立ちしている。「え？」予想した結末から一転し、彼女はいつまでも少女が笑っている世界に取

り残された。「駆逐ちゃん、笑ってる」彼女はニヨニヨと変な表情で固着した。

「はぁーっ」

少女は少し嬉しそうにため息をつくとき、目を擦りながらしゅしゅと乾燥した海藻を取りに行った。少し楽しそうに少女のツインテールが上下に揺れる。

「む。零れ落ちますね」

少女は心なしか、少し口元をへの字へと変えながらヌメリの残るワカメを、腕の中に多めに抱え込んだ。しかし、少しずつ少女の胸元からずり落ちていく。

「蛇口を捻ればお湯が出るということはない。お湯や熱湯が必要な場合は、エタノールで長時間加熱を行う必要がある。お手製コンロは急場の火力に乏しく、大量のお湯が必要であれば2〜3時間前から火にかける必要がある。」

どうしても、火力が必要な時には乾燥させた海藻や木材を投入して火力を上げるしかない。しかしこれをやると、しばらくの間ススがキッチンを覆いつくし、絶望的なまでに掃除が大変になる。

キレイ好きな駆逐棲姫の許可なくキッチンをススで汚すと、最近では飛行場姫の飛行場が半分に千切られたり、それを目撃した北方棲姫がしばらく夜泣きするなど甚大な被害が発生した。」

「どうした、手伝うか？」

飛行場姫は、全裸で立ちすくみ涙を流す、なんだかよくわからない戦艦棲姫を横目に、遠くで動き回る黒いセーラー服を着た少女に向けて声をかけた。

「ありがとうございます」少女はトテトテと海藻と木材を持ちながらキッチンへと向かっている。少しもってもらおうように胸元を向けて来る。「お願いします」

「え」

飛行場姫は思った。こいつこんな素直だっけ。おかしいな、まさかスパイか、と。訝しげにジロジロ見ていると、ちよつと怖い顔で腹に命の危険を伴う膝蹴りを食らった。うずくまって悶絶しながら少し安心する。

「ふーっ、運ぶぞ」飛行場姫は大きく息を吐きながら呼吸を整え言う。「良い、蹴りだったな」安定の悪い持ちづらそうな木材を全部持つてやる。「別に、そういうの嬉しくないですから」少女はツンツンと答える。

「なあ、アレどうしたんだ？」ドアの入口付近に全裸でオブジェのような邪魔な奴がいる。「知りませんよ、変な魚でも食べたんじゃないですか」二人はヒョイヒョイ避けると、キッチンでコンロに海草を乗せていく。

「この前も、変な電球みたいのついてる魚捕ってきて、喜んで食べてましたし」木材を少しずつ入れると、もうもうとススが上がり始める。「光らなきや食べられないのに愚かですね」

「ああ。たまに泳いでるやつか」飛行場姫は赤い瞳をクリクリと見開き、血の気が引くような思いをした。「私は、見た目的に食べたいと思わない、かな？」

飛行場姫は暗い海底を優雅に遊泳していた時に、ほのかに光りながらそれが近づいて来た事があった。何かと思っていたら、ギザギザの歯がいつの間にか顔に当たっていた。嫌な記憶がフラッシュバックする。

「私もです」

「風呂でも作るのか？」飛行場姫は気を紛らわすように話題を変える。床に設置されてコンロに火を入れた。いわゆるバーベキューだ。「そうですね、流しにお湯を溜めようかと思えます」

「洗い場は錆などが起きないように、流しは石と砂をベースに固められて作られている。つい立を入れると水が溜まる仕組みだ。」

大人二人くらいは入れる容量があり、海水を入れて大型の魚を一定期間入れておくことも出来る。今回は念のためエタノールで消毒をして、真水で洗浄してから、お湯を溜めていく予定だ。」

「ということ、アレも働かせんとな」ちらりとオブジェに目をやる。石像は動かないままだ。「そうですね」そういえば、何か部屋が臭いま

まだなど少女は思い出した。臭いが染み付く前に早く掃除もしないといけない。

「飛行場姫さん」少女は飛行場姫の手を取ると、セーラー服のスカートを捲り、薄紫の下着の中に彼女の手を強引にねじ込ませた。「あついや！」少女は大きな声で悶え始めた。「あああああ、ねえさま！」

「やめろ、それ」飛行場姫は真顔で真っ青になった。次の瞬間背中が軋む。「…っおま」戦艦棲姫が強烈なタックルで飛行場姫を壁に押しさえつける。続いて、しなやかに踊る白い脚から命の危険を伴う回し蹴りを受けた。「むねん」

悶絶しながらお尻を突き出すように床に潰れる。飛行場姫はこの姉妹いつか締めてやると思った。彼女の小さな角ドリルが小刻みに震える。

「助かりました」少女は飛行場姫を抱き起すと、椅子に座らせた。「あの」そつと耳に口を寄せて「今度私と組んで」そつと囁く。「私で犬プレイしていいですよ」

その言葉は、時々気の強い女を捕まえたときに無理やりメス犬調教していた彼女の性癖に突き刺さった。白い水着のようなレオタードの股間部分に、湿り気が薄らと広がる。どうせなら何か着せ変えようと目論む。

飛行場姫は少し鼻を大きくしながら少女の顔を除き見て、少女は無表情のまま小さく頷いた。

「ちよつと駆逐ちゃん」彼女は全裸にハイヒール姿で浮気現場見たりと仁王立ちしている。「今エッチな約束したでしょ？」

「姉さまはいいですから」片手を追い払うように払いながら「早くあれ連れてきて下さいよ」下層で縛られている彼を持って来いと催促する。飛行場姫は黙々と想像を膨らませながら流しを清掃している。

日曜大工趣味の彼女は働きだすところという時には頼りになる。戦艦棲姫は居場所のなさを感じて、いじけるようにトボトボと歩いて行った。

「やつぱりダクトないとなあ」飛行場姫はモクモクと広がる煙に、口を開け歯を見せながら唾然と言う。匂いがいつまでも溜まるとい

う問題もある。「資材も減ってきたし、ちよつとその辺襲撃してこようかな」

「ホント姉さまには困ったものです」

飛行場姫は危ないことを言いながら、つい立で水の流れを止めると、少女は丸い石が敷き詰められて作られた流しに、熱湯を流していく。水蒸気がもうもうと上がる。空になった鉄鍋に水を入れるとまた加熱を始めさせた。

「連れてきたわよ」ややあつて戦艦棲姫に抱かれて持つてこられた彼は、かなり唇が紫色になっている。また、手足にもロープの食い込んだ後があり裂傷が痛々しい。「だから早く外せと言ったのに」

飛行場姫は文句を言いながらも半分くらいに薄めたエタノールで、彼の体を消毒を始める。片手は近くに立つ少女のお尻を、なあ？とばかりに揉み揉みと握っている。指が下着に滑り込み柔らかいお尻を直に撫ぜる。

「姉さまは先に入って下さい」

お尻から胸に舐めるように移動してきた飛行場姫の手を払いのけながら少女が言った。容量の問題もあるが、取り出す時もそのほうが楽になる。戦艦棲姫は足の指からそつと入水する。水位は少し上がったが全然足りない。

「だいぶぬるいわよ？」少ない水の中で、彼女の白くしなやかな足がパチャパチャと動く。「そうでしょうね」少女は鍋をもって近づいて来た。「お湯です」無慈悲に中へと一気に流し込む。

「ちよつと？」開く足の間にお湯が注ぎこまれる。「あつ、あつ」彼女は手足で急いでかき回した。長い髪の下半分に湯がつき、重く垂れる。白い体の、縦に揃う黒い陰毛に気泡が溜まった。「あち、あち」
「取り合えずこいつも入れとくか」彼を持ち上げると、戦艦棲姫の上にそつと乗せる。彼の背中が彼女の胸を押しつぶす。胸くらいまで水位が上がった。「まだ、足りないですね」

少女は黒いセーラー服を脱ぎ下着を降ろすと、足の艤装を外して、ゆっくりももで跨るように、彼と向かい合つて風呂に入った。大ぶりの胸と、小ぶりの胸が前後から密着して彼を挟み込む。

「まだぬるいですね」少女も入ると、人肌より少し冷たいくらいの温度になる。「お願いします」飛行場姫に新しいお湯を沸かしてもらおう。

「ねえ駆逐ちゃん」彼女は足を器用に回して少女のお尻を抱きかかえる。「何ですか姉さま」間の不純物を潰させないように、手で彼女の足を緩めて、力の加減をしてやる。

「何だか私。幸せ」二人と一人で一つの風呂にハマっている。少女は何も言わず、彼女の額から伸びる角を優しくなでた。「入れるぞ」飛行場姫はちよつと面白くなさそうに、お湯をもって来た。

「背中側からお願います」少女は体を丸める。「熱いの？熱いでしょ？」少し熱いお湯を受け一瞬目を細めた。立ち上る湯気は大量だが、そこまでは熱くない。「少し熱いですかね」

しばらく湯に浸ったあと、少女が彼の胸をよじ登るように斜め前へ進み、温水で温まった胸で彼の顔を抱きしめる。胸の間に彼の顔が挟み込まれた。少女の小振りな湯たんぽが、彼の顔に僅かずつ色を戻していく。

「ねえ」戦艦棲姫が目を光らすかのごとく赤く鮮やかな瞳を輝かせる。「それ、後で私にもしてくれる？」少し鼻息荒く彼女が言う。

「ダメです」

「もう」彼女は少女の白く小ぶりな胸の、桜色の先端を両方指で小刻みに摘まんた。「そういう事するからですよ」彼女の指を手で払いのけた。少女の小さな桜色の乳頭が固く肥大した。

「それで、こいつどうするんだ？下に戻すのか？」飛行場姫はしやがみこみ、一応次のお湯を沸かしながら言う。「姉さまはどうしたいんですか？」彼の勃起を始めた股間を、ももで挟み込みながら少女が言う。「そうね。もう少し舐けたら——」彼女はホホに指を当て長い黒髪を傾けて考える。「私の寝室に繋いでもいいかしらね？」この男は、自分達に抵抗はないようだし、苛められるのが大好きな良いオモチャだと予想した。

「なんだ、本気で飼う気なのかよ」面倒が起きても知らんぞと、飛行場姫は呆れたように言い返す。「まあ、駆逐ちゃんがいれば、逃げ出すこともないでしょうし」彼の乳首に手を回し混み、黒い爪で刺激する。

エツちな夢でもみているようで、彼は少女の谷間の中から熱い鼻息を漏らして、小さく腰を回している。散々お預けさせているとはいえ、放っておけばそのまま夢精でも始めそうだ。

「何だよそれは」しかし、飛行場姫は思い出した。「ああ。これが追われていた理由か」何か聞き出したのかと、彼女の瞳が鋭くなる。「そうですね。何故ですか？」少女は未発達達の谷間を両手で寄せながら言った。

「何か駆逐ちゃんのビデオ見たんだって、彼」彼女は思い出すように少し天井をみながら答えた。「はあ？ポルノビデオか何かか？」

どうせこいつのエツちな姿でも見て、はるばる強姦でもしに来たのかと思った矢先、飛行場姫の眼前が白く変わり世界が揺れる。

「いてっ！」

屈んでコンロの様子を見ていたのが災いして、姉妹から息の合った無言のパンチを頭部にくらった。飛行場姫は床を転がって立ち上がると混乱するように膝をふらふらとさせている。

「痛いじゃない！」ゆらゆらと銀色の細く長い髪を揺らしながら。「私、泊地水鬼みたくDMじゃないんだからやめてよ！」きやあきやあと、吠える。

「言つていい冗談と悪い冗談があるでしょ！」戦艦棲姫は鬼の形相で睨んでいた。「まあ別にいいですよ。別に。それで何ですか？」少し気を落としたように少女は言う。

「何かね。駆逐ちゃんが泣いててキレイで」何故か口を尖らせるように続ける。「まるで天使が泣いてるみたいと思っただんですって」彼女は、彼のちよつと良いなと思っただ所を話した。「それでどうなったのか気になったみたいよ」

「さすがにキモいですね」少女の瞳は濃厚な紫色になりしよんぼりとツインテールを垂らす。「ああ、キモいな」飛行場姫も口を広げ、イーツとばかりに歯を見せている。「え。私、いい話かな、つて？」

「姉さまも最近だいぶキモいですからね」少女のジト目が彼女の心に刺さる。「ああ。駆逐のトイレ追いかけるくらいキモいからな」そういえばこいつは、よくこそこしてると、飛行場姫は思い出す。

「え。ホントですか？」少女のアメシスト色の紫の瞳が大きく広がった。「違うわよ？」彼女は頬を赤らめて、スピネルのような鮮やかな赤い瞳が大きく広がった。

「姉さまがドンドンキモくなっても」少女はすぐく残念そうに彼女の赤い瞳を眺める。「別に嫌いにはならないですけど…」困ったように少女は息を吐いた。「駆逐ちゃん・・・」彼女の瞳が揺れ動く。

しばし続く沈黙の時間。カチコチと動く時計の音が耳に付く。少女は無表情で、彼の顔を胸で挟み、口を潰して遊び始めた。

「それで」飛行場姫が火加減を調整して、立ち上がる。「なんでこいつは追われたんだ？」少女の胸に挟まれているそれを、少し羨ましそうに見ながら言う。「キモい罪か？」ケラケラと笑いながら冗談半分に先を促す。

「よくは分からないけど」彼女は少しムツとした表情で少女の胸に頭を突っ込ませている物を眺める。「色々調べて」少し苛立ちながら言葉が続けた。「駆逐ちゃんを追いかけてたからじゃないかしら？」

「まさかの」少女は押し付けている彼の頭を胸から外して、体を下げて湯船の中に浸かると顔を合わす。「ストーリーカーさんですか」だいぶ血色は良くなっているようだ。「変な人間ですね」

「拾って来なきやよかったかな？」飛行場姫はポリポリと頭を搔いた。「まだ、多分。気付いてないと思うわよ？向こうは姉妹艦“設定”も多いし」三人の顔が少し幸せそうに寝ている彼の顔を眺める。

「確かに駆逐自体を知ってる奴も少なそうだからな」冷静になり、飛行場姫は目を細め状況を考え始めた。「こいつからこつちに情報を求めてくるかもわからん」先の展開に思いを巡らす。

「こつちも、最悪、姉妹艦みたいに言つとけば多分気付かないわよ？」彼女は両足で少女の腰をクワガタのように挟み込みながら言う。「姉さま、キツくされるとおちんちん入っちゃいます」

少女の大切な場所に、彼の尿道口がキスしている。彼女は咄嗟に足を話すと、少女の量腰を、足で角のように押し距離を開けさせた。少女のお尻がコツンと流しの底に着底する。

「じゃあ飛行場姫さん」首をかわいくかしげながら少女が言う。「今夜

にアレしますか？」紫の髪がふわふわと動き、ツインテールが湯に伸びる。

「そうだなあ。何処まで知っているかは気になるしなあ」その見つめる瞳は、駆逐棲姫の体を嘗め回す様に上下させている。「ついでに逆らえないように体に躡けとこうか」

「なあ、駆逐」言い淀むように飛行場姫は言葉を止めた。「実はだなあ、そのお」飛行場姫はたどたどしく言葉を続ける。「どういうわけか奇妙なことに、偶然たまたまお前のサイズに合う・・・」少し目が泳いでいる。「メイドふ」

「ダメです」

少女は少し不貞腐れたように飛行場姫の言葉を遮った。偶然掃除のときに、飛行場姫のお手製クローゼットを開けたら、なぜか「自分のサイズの服を何点か見つけたことがある。」

サイズ事態は皆に知られているが、看護服だのメイド服だのと明らかに日常生活に不要なものばかり吊るされていた。どうしてこの連中は、エッチな事ばかり好きになったのかと、少女は頭を悩ませる。「ちよつと、またエッチな約束なの？」戦艦棲姫もまた不貞腐れて頬を膨らましている。「姉さまとは無理ですよ。過保護ですから」ひんやりとした紫色の瞳が彼女に向けられる。「このプレイ、お腹蹴ったりするんですよ」

「え？痛くないの？大丈夫？」彼女の瞳の色が淀んでいく。「後でやわらか飛行場の脚もぎ取っとく？」気のせいか額から伸びる二本の角がちよつと大きくなった気がする。「ほら」少し残念な人を見るように少女が言った。

「北方のバカと組むと、あいつ何故か子供の思考のままにいるから」少し遠い目で飛行場姫は面白そうに続ける。「癩癩起こすと、魚にフォーク突き刺すみたいなこと始めるしな。すぐに壊されかねん」

「ホッポちゃんは潜新ちゃんから、スパイトフルとかいう飛行機の話聞いてから」彼女は片手をお湯から伸ばし、長い黒髪を揺らしてカモメのように手を動かす。「癩癩起こして荒れてるのよ」

「そういえば一時期」プニプニとした、のじゃ公を思い出しながら飛行

場姫が言う。「零戦の模型。ポイポイしてたな、それでか」そういうえば、艦娘からカツオだか何だかが出てきた後も荒れてたなと、しみじみ思いつく。

「それで」二人に挟まれる彼を眺めながら飛行場姫が言う。「こいつはどこまで舐けたんだ？」

「姉さまの足舐めながら、気持ちよく臭い汁撒き散らすくらいはしますよ」少女が腰をわずかに揺ると潰された男の突起物から、わずかにびくびくと反応が返ってくる。「おっぱい噛み噛みも大好きよ？」

「ホントキモいな」じつと男の体を見る。「まあ、私を出しに使ってスケベに仕込んだんですけどね」ここまで酷いと、もともとそうだった可能性も否定できないが。

「ああ」飛行場姫は疲れたように声を出した。「ストーリーだからそこまで引つ掛かったのか」どうでもいい合点がいったと、ため息を吐いた。「純愛じゃないの？」一人好感的に捉えた戦艦棲姫が口を挟む。

「正直」少女は太ももの先端で、コロコロと男の勃起を左右に転がす。「よく捕まった人がかかる病的な一目ぼれですのがまだよかったです」

「飼うかどうするかは今夜にでも決めればいいか」
「そうですね。処分は何時でも出来ますから」

軽い振動が響く。艦娘の定期便だ。

「もうそんな時間か」飛行場姫は疲れたように背中を擦りながらヨロヨロと歩きます。「とりあえず掃除はしてくるよ」そのまま、石室内の掃除へと向かった。

「よいしょっと」少女は太ももを器用に動かして、もじもじと水から上がると、艦装の足を固定した。床に立つと、白い体に薄らと生える紫の陰毛が垂れ、水が滴る。「そういうえば拭く物がないですね」

少し冷えるがそのうち乾くだろうと、少女はそのままべちゃべちゃと黒いセーラー服を着た。彼をゆっくりとお湯から出すと、彼女の着ていた黒いボディコン服のようなもので、体を拭いた。

「飼うならタオルの用意と」少女は彼をテーブルの上の上に寝かしながら首を傾げて考えた。「お風呂もちゃんと作りましようか？」

「ねえ駆逐ちゃん」彼女は白くしなやかな足をスツと踊り出させて、流しからザブツと出てきた。「ご飯どうしようかしら？」長い黒髪を両手で挟み、水を切り落とす。

「コレですか？」首を傾げると紫のツインテールが、床の水溜まりの水を拾った。「両方ともよ」そう言いながら、彼女は裸のまま、急いで少女の髪の水を切り始めた。

「潜水艇で、地上から持ち込んでいるパンは貴重な存在だ。普段は専ら捕まえた魚か、少女が暇潰しもかねて何となく海底農園で栽培しているイモや野菜などを食べている。」

彼女らが魚を食べる分には問題ないのだが、人間の長期尋問中に与えた魚で、痙攣を起こし意図せず死なれた経験がある。それ以降捕虜には極力与えないようにしていた。」

「彼には。パンとお芋さんを煮て冷やしたスープでも与えましようか」少し濡れた髪を戦艦棲姫に指でとがれる。「お魚食べさすと怖いから仕方ないわね」自分と同じように人間に物を与えると、多くの場合良くない結果が訪れる。

「姉さまは適当に泳いで食べてきて下さいね」紫の澄んだ瞳が彼女をマジマジと見据える。「ちよつと。私、クジラじゃないわよ?!」彼女は二本の角が少し垂れるように答えた。「冗談ですよ。バカな姉さまですわね」

「ソ級さんが捕ってきてくれた、お魚さんを茹でておきますから」少女は悪びれもなく無表情で続けた。「最近、駆逐ちゃんがイジワルだ・・・」彼女は角が垂れているかのようにシユンとしていく。

「なんですか、もう」少女は軽く絞った黒いボディコン服を、彼女にグイグイと着せながら言う。「だって、絶対この後飛行場姫とエツチな事してくるんだもん」ついにイジケ始めた。

彼女は膝を抱えながら冷たい床にしゃがみ込んでいる。幽霊のよ

うに黒い髪がブワブワと床に這う。こうなるとしばらくめんどくさい。農園に置いとけばキノコが生えるかもしれない。

「もう」少女は彼女の耳にそっと口を近づけた。「そんなにイジケてるよ、今夜、姉さまだけのエッチな抱き枕になってあげませんよ？」

「え？」表情を明るくすると、勢いよく抱き着いた「ちよつと、姉さま、ハウス、ハウスです！」壁に押さえつけられて、股間をグイグイと体に擦りつけられる。黒い長髪から飛沫が床に広がる。

「コレは本当に酷いな」飛行場姫は掃除を終えて戻ってくると、発情したメス鬼に出くわした。あきれ果てて様子を見つめている。「まあ、人相手だと簡単にイケないから溜まるのも仕方ないのかな」

「冷静に言っていないで姉さまを剥がしてくださいよ」少女は両手で体を押し戻している。「メイド服着てくれたら」飛行場姫はポツリと呟いた。

「え？」しかし飛行場姫の期待とは裏腹に反応したのは戦艦棲姫だった。飛行場姫はすぐさま羽交い絞めにされ壁に制圧された。後頭部には鋭く尖った角が押し付けられている。「その話、詳しく聞かせてもらえるかしら」

彼女の鋭い仕事の目が光る。もはや、やわらか飛行場の命運は誰の目にも明らかだった。

「私は、彼を連れて行きますので」難を逃れた少女は、裸の彼を抱きながら、ゆっくり下層へと足を向ける。「服くらい着ますから」少女は浅くため息を吐く。「仲良くしてください」鋭く黄色い瞳が二人に突き刺さる。

恐竜同士の戦いのように、ギャウギャウといがみ合っていた両者は、取り繕ったような笑顔で少女を見送った。

「コレが来てから何だか騒がしいですね」石牢にある茶褐色の重い木のテーブルに彼を寝かせると、静かに呟いた。手首、足首に赤い線が何本か見えるが、出血はしていないらしい。「困ったストーリーカーさんです」

少女は軽く額にキスをすると
電気を点けたまま石牢を後にした。

12 飛行場姫

「ほう、殊勝な心掛けだな」

飛行場姫は赤い瞳を細くし、ゆつくりと扉を開ける。石牢内に一通り目をやると男は全裸で裸電球に照らされ、あぐらをかくように大きな茶褐色のテーブルの上に座っているだけだ。石牢内に細工をされた形跡もない。

「大変結構だ」

彼女は気を良くして、胸を張りながら見下す様に固く白いブーツでカツカツと石段を下りる。サラサラと揺れる彼女の髪が、フワフワと舞うように広がる。どうやらそれ飛び掛かってくる気配もないようだ。

【飛行場姫の瞳も赤いが、あえて形容するならばパラチアサファイアのように橙と赤を混ぜ合わせた色といったところか。

ルビーの持つ赤みよりも若干淡い。髪を含め、全身白基調でウェットスーツのような物を好む彼女には、ちよūdよいアクセントになっている。】

「ほう」仄暗い石牢でコツコツと石床に音を響かせながら彼女はテーブルに近づく。手首、足首の傷跡を睨むように見据えた。どうやら傷口が悪化している気配もない「我々のもてなしは気に入ってもらえたかね？」

嘲笑いながら彼女は言う。しかし、彼は無言で目を閉じ、瞑想しているかのように静かに座っている。

「私が貴様を拾ってやったのだ、感謝したまえよ」白い手を伸ばし、骨が軋むほどの力で彼の顎を掴む。「そうか・」彼は目を開き、呟いた。臆気に彼女の顔を見たことを覚えている。

「さて、どうする提督。ここで死ぬか？戻って死ぬか？」彼女は背筋を真っ直ぐに伸ばして、腕を組みながら高圧的に問いかける。「私は

追っていたんだ」ポツリと話しだす。

「貴様にお喋りを許した覚えはないがな、聞こう」飛行場姫は組まれた腕に、人差し指をトントンとしながら言った。「ある情報を追っていた」彼はボソボソと語る。

「要点を得ないな、早く話せ愚図め」赤い目を細め促す。「足のない少女だ、紫色の髪をした」彼は目を細めると、壁を凝視するかのようと言った。

「人間の女の話など興味がないな」彼女は顎の下を手で擦りながら答える。「ある特務機関が捕獲した新種の深海棲艦。丸太001。艦娘の起源だ」彼は少しずつ知りえた情報を話し始める。

「ほお？それで？」彼女は少し興味を持ったように声を出した。「わからない」彼は顔を落とした。「私が『識る』ことが出来たのはそれだけだ」後頭部に光が当たり、表情は見えない。

続報を待つ間に艦娘に襲撃されたのだ。

「つかえんな」呆れるように腕を下す。彼女は知っている。更なる事の顛末を。「まったくつかえん」『当事者たち』というのも理由の一つだが、彼女たちを通過していった者たちが知識の空白を大いに埋めてくれた。

もつとも、直結の関係者は『戦艦水鬼』の襲撃の際に尽く『死んでいる』ので足取りはつかめなかったが。

「それに、貴様はそれを知ってどうする？」心底呆れ果てたように、彼女は片肩を上げる。「終わらせたかったんだ」

「人類を、かね？」ふざけた様に彼女は嘲笑う。実質彼の行動理念はおよそ人類のためにはならないだろう。「バカな戦争を、だ」下を向いたまま、彼は力なく答える。

「愚図ほど大きな口を利く」手で頭をテーブルに押しさえつける。「しかし」頭から手を外し、飛行場姫はふっと自分の片腕を撫でた。「あれは手強かったな」

気を失った後の事で、彼は知る由もないが片腕に彼を抱えたことによる負担が艦娘に後れを取り、彼を狙う攻撃から守るように片腕を無

くしたのだ。もつとも、すでに回復しているが。

それら達は、複数の強力な砲弾で三角波を作り、その山の死角から近づき、複数の艦娘による突貫。艦装を撃ち抜かせ、手を撃ち抜かせ、体を撃ち抜かせ、味方を撃ち抜かせ前進してきた。

2軸方向から回り込むように接近し、さらには飛行場姫の航空隊を牽制すべく上空から偵察機すら次々と突入させた。それも指揮者不在で、だ。

「貴様、海軍か？」答えなど期待してはいなかったが、ある疑念を持っていた。「そうだ、な・・・」歯切れの悪い彼の答えが、彼女の想像を確証に変える。

「戦艦棲姫から聞いたが、貴様万年左官のようだな」含みなく事実を淡白に述べる彼女は、どちらかと言えば正直な者なのだろうと彼は思った。

「私たちにとっては、些細な話だが貴様たちは戦争をしているのだろうか？やはり人とは哀れなものだな」

「彼女たちはその気になれば、幾度となく人間を含む既存種を滅亡させることが出来たが、あえてそれを行っていない。

スズメバチが家に住み着いたからと言って、それを駆除した後には、スズメバチ自体を滅亡させてやろうと思う者はなかなかいないだろう。面倒なうえに益虫の側面もあるからだ。

軍属ですらない人類などはミツバチの如く扱いで、いなくなると自分たちの仕事が増えて生活に不便程度の認識だ。

爆弾でも使ってミツバチ特有の、いないいない病でも発症されれば食べものも衣類も趣向品もすべて自分たちで自給しなければならなくなる。適度に収穫してやるくらいで丁度良い。」

「お前のアレは、よく戦った」少し彼女の瞳が大きくなる。「ゆえに尽く殲滅したが」この言葉に彼の表情が陰しくなった。

いるはずのない場所に「浮上し」彼を「拾った」飛行場姫に、決定的に戦力の劣る艦娘らは撤退を行わなかった。全ての艦娘が、飛行場姫に向け、兵装をアンロックする。

大本営より発令された命令を遂行すべく、20隻ほどの艦娘たちが直ちに部隊を「散開」させ分隊単位で必死の攻撃を敢行する。飛行場姫よりも彼に攻撃が集中したため、彼女は止む無く防御に集中せざるを得なくなった。

弾薬を失ったタコヤキがその速度を武器に、体当たり攻撃により20隻ほどいた全ての艦娘の首を跳ね飛ばし終えた時には、すでに片腕を落としていた。

通常であれば、空母種を含む彼女らの戦闘は至ってシンプルだ。ノロノロと輪形陣から始まり、ある程度攻撃を受けてから、いよいよよとなるとノコノコ分散を始めるのでこの時点で半数は刈り取れていたはずだ。

飛行場姫は久しく「人間を」相手にしているかのような懐かしい感覚に浸った。

人はひどく脆いがそれゆえに、その儚さを懸命に輝かせ全ての手段を使い向かってくる。彼女は向かい来る彼らに敬意を払い殺し尽くしたのだ。

飛行場姫は、人形のように動き回る艦娘には価値を見いだせずにいる。艦娘は船のように陣形を組み、能力も自分達に遥かに及ばない。だから船のように沈めてやるだけだった。しかし、彼の部隊は少し違ったようだ。

安全を確保すると、退避させていた潜水艇が再び浮上する。彼女は彼を片手で抱えながら、大きくダメージを負い至る所から体液が流出している体を無理やり動かし、乗り込む。

急ぎ潜水隊を呼び寄せ輸送してもらいながら帰路に着いた。能力解放さえされていれば、この部隊であったならば、飛行場姫と言えど勝敗は分からなかっただろう。

「バカな戦争だ・・・」再び彼は呟く。

「艦娘の登場以来、既存の艦船は第一線を退き、戦闘は複数の艦娘対1深海棲艦という構図が出来上がっている。『水上』での近接高速戦闘となるため、それはもはや足場の悪い氷上や砂丘での『陸上戦』となる。」

艦娘には常に甚大な被害が出続けた。一度の戦闘で未帰還が70%を超える事すら多々あった。理由としてすでに、陸戦における戦闘指南が至っていないとの指摘があった。

これは当然の事で、不足している教官は『海軍』陸戦隊など陸戦にある程度精通している者が抜擢されるが、本家の『陸軍』には確執のため教えを請わないのだ。

深海棲艦は陸上の延長としてすべからく3次元の陸戦を展開するのに対して、海軍、特に矢面に立つはずの艦娘付きの新提督の殆どが、今だに時代錯誤の海戦をしている事にある。

平原を単調に走るだけの単縦陣や単横陣など1000年も前に戦国武将が歩いてきた道だ。にも拘らず、新提督は鎮守府に引きこもり、実戦を知らずに教官の絶対的な不足から熱心に海戦を勉強し続ける。

海軍の存在意義が薄れることを恐れ海戦習熟が昇格に必須な事も問題の一つだ。これでは、会敵した瞬間に包囲殲滅されていても不思議ではない。

『遅かれ早かれ』の意識が次第に感覚を狂わせ、いつのまにか艦娘を死地に追いやるだけの提督が多く出来上がったのもうなずける。「『貴様はよくやった』彼は独力で海上陸戦隊を育てていたのだ『もうよかろう』在りし日の海戦を取り戻すために。飛行場姫はおおらかに語る。」

彼の志とは裏腹に海軍の既得権益層に目をつけられ着任以来昇格していない。陸軍の内部スパイを疑われ、出頭したことすら何度かある。

「貴様の努力を評価して、一つ教えてやろう」彼女らが複数の将兵から

入手した確度の高い情報の一つ。「貴様らにとっては、艦娘とは沈んでもらわんと困る存在なのだよ」

彼女は言う。人的資源の喪失を逃れ艦娘というドリームマシンが作り上げたのは「仕事」であり各国で軍需産業を中心に膨大な雇用が生まれていると。

戦闘に消極的な自分たちに仮想敵として、艦娘を「轟沈してもらって」いるのだと。

「さもありなん・・・」

合点のいく話しではある。絶望的な戦力差がありながら、戦艦水鬼の上陸以外に本土が無事なのは、彼女らの心持以外に理由はないだろう。

そのうえで、所在の判明している根拠地である「ここ」を強襲する作戦は一向に上がらない。

「帰って当てはあるのか？」

飛行場姫は慈悲深く彼と顔を合わせ見つめる。彼は下を向いて沈痛な表情でいる。恐らく当てもなければ身寄りもないのだろうと、彼女は推測した。

この愚図は愚図だが、余計なものを巻き込まない程度には気が回るだろう。そうでなければ、あれらにわざわざ歯向かつては身内がただでは済まなくなることくらい想像しているはずだ。

先の戦闘での艦娘の動きを

彼女は高く評価していた。

「戦艦棲姫の奴は貴様を飼いたがっていたが」テーブルの横に立ち、座る姿をぼんやりと照らされる彼にじっと目を合わせ、続ける。「私個人としてはボートと一緒に外までなら連れて行ってやってもいいとは思っている」

「運が良ければ帰れよう」

それでも追われる身となれば、無事に帰り着いたその先も、きっとろくでもない未来が待っているのだろうか。

「あの少女は・・・」

彼はゆつくりと顔を上げる。

「気になるかね？」飛行場姫はそら来たとばかりに、目を細め腕を組む。「あれは私の愛玩動物だ」彼女はその言葉に少し体温が上がって行くのを感じた。「なに？」彼は眉をひそめた。

「愚図め。わからんか」彼女は彼の様子を見ながら続ける。「昨日は戦艦棲姫の奴に貸してやっていたのだが、戻ってきてみれば股から精液を垂らしたままで掃除が大変だったよ」あたかもお前のせいだと聞こえよがしに言う。

「まあ、連れてきてやってもよい」

どうやら思い出して反省しているようだ、彼女は彼の表情から読み取った。満足げに彼女はテーブルから離れていく。武闘家のように鍛えられ引き締まったお尻が、白いレオタードのようなスーツに食い込み、美しく光っている。

「しばしまて」

白く重いブーツのような靴で

石段を軽快に登って行った。

「またせたようだな」

あれから数10分後に駆逐棲姫を抱きかかえ、飛行場姫が戻ってきた。様子を見ながらゆっくり扉を開けたがどうやら杞憂だったようだ。

誰が入ってこようと確認しようともせずにあの愚図は相も変わらず茶褐色のテーブルの上で腹筋でもやっているかのようなバカな事をしている。

「どうだ？可愛くなったか？」

抱えられる少女は飛行場姫の片腕にすがりつくように抱き着いている。服装は先日見た黒く短いセーラー服から、黒いメイド服に着替えたようだ。少女は心細そうな視線を彼女に送りながら、紫のツインテールを垂らす。

機能性を廃した、少女の着るツーピースのメイド服は、上下とも面積を少なくあしらわれている。

全体が相当なコストを要したであろう良質なシルクの素材で、ハンドメイドを思わせるほど刻み込まれるデザインは丁寧で、染色は深く手触りは滑らかだ。

少女の上半身は胸元がVの字にワイドに開かれ、小ぶりの胸を矯正している白い下着が見える。全体的な面積は少女のあばら骨が僅かに隠れる程度にしか存在しない。

下半身は、少女の持つしなやかな腰のクビレを見せるように、極めて短いスカートで、折の入るフレアにもかかわらず股下2cm程度の長さである。

脚には太ももの半分以上にかかる、黒く長いニーソックスを履いている。靴はパテントの光沢のある黒くローヒールの平らな靴で、靴底は艀装の足でも歩きやすいように波のある硬質ゴム製だ。

全体的に少女のセーラー服姿をベースに細身である少女のシルエツトを最大限引き出されるように「偶然にも」緻密に仕立てられ

ている。

飛行場姫がゆつくりと一段ずつ石段を下りる度に、捲れる少女のスカートから覗かせる3段フリルの白い下着にも目を引かれる。

リアル趣向の飛行場姫であったが、リビングで少女にカボチャパンツのようなものを穿かせたところ、戦艦棲姫から、あまりにもダサすぎるとクレームが付く。

このため、折衝案として普通の下着ではなく、フリルの付いた変わった下着を着せることで両者は合意した。少しお仕事モードに入っていた少女は、一連のバカバカしい話し合いが終わるまで凍りついた表情で待っていた。

少女の首には、星形のスタッツが並ぶ赤い首輪が付けられている。飛行場姫が首輪から垂れる赤いリードを握っている。『愛玩動物』彼女のその言葉が、自然と思いきこされる。

「よし、歩け」

飛行場姫がメイド服の少女を丁寧に石床に降ろすと、少女は四つん這いで彼女に続き、ペタペタと手と膝で進み始める。凜々しく顔を上げ、手足の動きで谷間を揺すりながら彼のいる方へと向かってくる。

暗い室内で黒いメイド服のため、少女の胸元のみ光が強く反射する。いやがおうにも少女の胸と、その零れ出る白い下着に目が奪われる。

「わかったかね？」

電球に照らされる場所に立ち止まると、少女と合わすように白いハイソックスを履いてきた飛行場姫の足に、少女は可愛らしくネコのように頬をこすり付けている。

飛行場がうっとおしいとばかりに少女のお腹を蹴ると、少女は小さく高い声を出してコロコロと転がった。薄紫色のツインテールが、クルクルと回りながら床を擦る。

「愚図め」

少女はいそいそと四つん這いで戻ってきては、また彼女の足にへばり付いた。呆れたように彼女は足を進める。飛行場姫が大きな茶褐色のテーブルまで来ると、少女の姿は見えなくなった。

恐らく四つん這いのままか、正座でもして待機しているのだろう。
「なあ提督よ」

飛行場姫は仁王立ちで腕を組みながら、赤い瞳で彼を見据える。先程は暗くてよくは見えなかったが、纏めていたのであろう白に近い銀色の髪が腰より下までフワツと下りる。

戦艦棲姫の黒髪に負けじとも劣らない、手入れの行き届いている長い髪だ。細い髪質なのかキラキラと光が良く抜ける。

「なんだ、気になるのか？」

彼女は無造作にテーブルの上に髪を投げ乗せた。フワツと輝きながら軽快に髪が広がる。至近距離ではうつすらと金に見える髪が、彼女は本来金髪なのだろうと予想させる。

透き通る細さの髪を傷めずにこれほど伸ばすのは並大抵の努力ではないだろうなと、彼は思った。

艦娘にも髪の長い者がいた手前、ある程度の事は聞かされている。戦争であり、あれらは兵器だったとしても、やはり沈んでしまえばやり切れない思いもある。たとえそのきっかけが自分自身によるものだったとしても、だ。

「私ほどのキレイな髪は、世界広しと言えどなかなかいないからな」彼の心境を知ってか知らずか、飛行場姫は自分の髪をまじまじと見つめる彼に少し気を良くした。「まあ、貴様の気持ちもわからなくもない」「好きなだけ堪能してかまわんよ」

「あら？大した自信ですこと」

石段の上から、戦艦棲姫がハイヒールでコツコツと下りてくる。その手にはプレートがあり食事を持ってきたようだ。威嚇するように黒い長髪を耳の後ろにブワツと掛けながら言う。

「駆逐棲姫。あなた、どちらの髪がよりキレイかわかるわよね？」コツコツと近づき、テーブルに食事を置くと彼女は下方向を睨みつけている。飛行場姫の持つリードが自然と伸び始めた。「どうした？怖いのか？」

飛行場姫は、ペタペタと四つん這いで白いパンツを見せながら離れ

ていく少女を追いかけ、再び腕の中に抱き上げる。少女は安心したように目を細め、飛行場姫の腕に抱き着いている。

「駆逐棲姫。あなた、あとで覚えておきなさい」

コンマ数秒。彼女が世界の全てが崩れ去ったような淀んだ赤い瞳をしたと思うのは彼の気のせいだろうか。戦艦棲姫は捨て台詞を残して、肩を震わせながらコツコツと石段を上って行く。

「貴様の分だ。食え」

飛行場姫は抱きかかえた少女のふわふわする紫の髪をなでる。少女は居心地のよさそうに目を細めている。遠くから、戦艦棲姫が扉を壊れるような勢いで閉める音が、石牢内に反響した。

「あれにも困ったものだ」

少女をテーブルの上に乗せると嫌がるように飛行場姫の腕に抱き着いている。飛行場姫が手で払いのけると、少女はゴロンと仰向けに転がった。少女の細い腰とヘソの凹みが、電球に照らされてぼんやりとオレンジがかる。

少女はまる見えになる下着の股間部分に男の視線を感じると、素早く膝を抱え、体を丸めて横になり下着を隠すように小さく固まった。しかし、スカートが短いため、下着のシワのよるお尻がしっかりと見えている。

「私はまだ」彼は小さな声で語り始めた。「生きている」差し出された食事を前に彼は呟く。「そうだな、貴様は生きているよ」だから食えとばかりに飛行場姫は言い放った。

「お前は飛行場姫なのか」プレートの上には、少女の作った食事を暖め直された、細長いパンと、じゃがいもを溶かし込んだスープがある。彼は食事だけを見ながら、少し声に力を込め言った。「いかにもその通りだ」

彼の瞳に力が戻り、睨みつけるように飛行場姫と目を合わせる。彼の視線の先には、銀色の髪を分け小さな二本の角が見える。肩に乗せ両腕に伸ばしている二基の滑走路、飛行場を模した作りの機装は外し

ているようだ。

彼から放たれる死線が、彼女を取り込む。駆逐棲姫もまた、警戒するようにわずかに体に力を込めた。だが、彼女はこの愚図はずいぶんと男らしい瞳も出来るものだと、関心しながらゆっくりと顎に手を伸ばす。

「飛行場姫とは一人なのか」彼女の指が愛でるように顎をなぞる。この瞳。遠い、あの懐かしい海戦の内に記憶がある。そうだ。「私たちは“一人”しかないよ、坊や」ああ愉快だ。

この愚図――

はるか昔から愚図だったのか。思い出したよ。だからあの艦娘どもは、私相手に戦法を特化されていたのだ。私を基準にしている。だから、強かった。この愚図は、あの日から、本当は私だけを見続けていたのだ。

「嬉しいじゃないか、坊や。そんなに私を覚えていたのか」沈みゆく艦。傾斜する甲板で出会った、あの日のように。「どうだ？ 変わらさず美しいだろう？」重量の少ない銀色の髪が、フワフワと広がり踊る。

「やはり貴様、帰さん」彼女はテーブルにのり、あぐらをかく彼の後ろに密着するように座り、抱きかかえる。「ここで暮らさせる」彼女の白い手が後ろから彼の股間に伸びる。「私がしつかり、躡けてやろう」

彼女の逞しい足が、彼の太ももを回しこみ足をあぐらの状態のまま押さえつける。密着する彼女の体から冷気が伝わって来た。彼の背中に、彼女の冷たく固いスーツ越しに大きな胸の感触が伝わってくる。

彼は、彼女に股間を覗き込まれながら、背中から首筋に彼女の柔らかなく細い髪がかかり優しい刺激を受け、立たせてしまう。反射的に彼は足を閉じようとするが、彼女の足が更に無理矢理彼の股を開かせた。

「おい、食わせてやれ」

彼女が声を掛けると、丸くなる少女が抱える膝を離して、起き上がった。少女は冷たく深い紫色の瞳で彼の股間を見て、小さく息を吐

く。四つん這いで胸を見せつけながら近づき、不満げにスプーンでスープを掬うと彼の口に近づける。

「どうぞ」

少女は、思い付く限り酷く苦痛そうな表情をして、少し顔を背けながらスプーンを彼の口に差し出す。彼は酷く申し訳なさそうにスープを口にしたら。スープの味よりもスプーンの鉄の味が強く舌に染み込んでくる。

少女の手に持つ、深さのある皿からスープを掬う動作で、メイド服の大きく開いた胸元の、寄せ上げられて少し大きく見せている少女の谷間と白いブラジャーが揺れる。彼は視線を上げて、目を逸らすように少女の横顔だけをみる。

彼女の片手が、彼の股間に回り込み中心を乱暴に握った。彼の下半身は小さく跳ね上がり、恥ずかしい声を少女に吐きかけた。少女のツインテールが顔に密着し、柑橘系を思わす果実の匂いが髪奥から染み出てくる。

少女はこちらを見るなど、歯ブラシの上で動く毛虫でも見ているかのように、背けた顔から細目で冷たい視線を返した。彼はせめて声を出さないようにと、彼女の手の動きに合わせて浅く息を吐く。

「なんだ、もつと抵抗してくれないと面白くない」彼女は乱暴に動かす手の上下の動きに、動じずに座っている彼を面白くなさそうに横から覗き見た。「まるで私が下手みたいではないか」白い爪で、先端を弾いた。

彼女は少しつまらなそうに彼を解放してやり自分で食事をさせる。彼は頭を下げ、今にも吐き出しそうな表情をしている少女からスプーンを受け取る。彼女は立ち上がるとテーブル横に降りて立ち、彼の様子を眺める。

「私たち」はあれに、耐性があるようだ「飛行場姫は彼を眺めながら続ける。「だが貴様、よく生きていた」まるで上官に労われるように言われる。「どうやら、貴方のおかげらしい」

自分が生き延びた事へやり切れない思いが、彼の拳を震わせる。生き残ったことが辛くて仕方がない。

「よい。わたしは気まぐれなのだ」彼女は品定めをするように彼の体を見回す。彼が食べ終わるのを待ってから彼女は切り出した。「気まぐれとはいえ2度も救ってやったわけだ。そろそろ貸しを返してもらおうか」

「下りてこい」彼女に言われるまま彼はテーブルから足をふらつかせながらゆつくりと下りた。石床の冷たい感触が足の裏から駆け上ってくる。「最後のチャンスをやろう」

「アレをやる。アレと帰れば」少女を指さす。「愚図の貴様でもいつか探し物に出会うこともあろう」彼女は自然体で力なく語り掛ける。「私を倒せばだがな」

ただ、棒立ちしている彼女から、景色が遠く離れていくかのような、錯覚が見えるほどの強力な威風が放たれ体をすくませる。

彼女はエネルギー消費の多い飛行場タイプの艤装を付けるにも拘わらず、食事の殆どを北方棲姫に回しているため、今の能力は全盛期の4割にも満たない。

そのうえ昨日は、思いがけない深手を負い回復させるために多くのエネルギーをさらに割いた。今ならば生身の人間にも千に一つ程度の勝ち目はある。

自らを倒せる能力があれば、しばらく少女を外出させても安心はあろうと、彼女は判断した。彼女には、少女をここで長年軟禁している事への後ろめたさもあった。どのみちアレも同伴するだろうし問題も少ないだろう。

「どうした坊や。貴様、愚図になりきったのか」帯電しているのか、銀色の細い髪が風もないのに大きく広がり始める。暗い石牢内で小さな角に擦れる髪から静電気が時折パチパチと音を鳴らし僅かに光る。「さあ、こい」

雷神。その風貌はまさにすべてをひれ伏させるに足る力がある。飛行場姫はゆつくりと両手を広げた。彼は、数メートルを全力ではじけ飛び、駆ける。

「そうだ！来い！」

彼女は根っからの武闘派なのかもしれない。彼女が進んで出撃しなくなったのは、艦娘が現れて以来すぐさま必勝法を確立して、必ず勝つ事に飽きたからだ。

“私”が勝つてこの愚図を引きずり込みここで穏便に暮らしてもあるいは、彼が駆逐棲姫と共に親交のある欧州にでも渡らせ、いつか自分たちを尽く駆逐したとしても。

彼女にとってはどちらでも良いのだ。役目を失った巨大な力など、ただ寝転がるだけの愚図以外の何物でもないのだから。

体重を乗せた情け容赦のない攻撃が彼女を襲う。首から下の全ての個所に手や足で打撃を与える。回るように攻撃が続き彼女はただ、サンドバッグのように立ちすくんでいるだけだ。

「こんなものか・・・」彼女は心底残念そうに呟いた。「許す、顔に撃て」

彼女を女性として見ての配慮だろうか、あるいは迷いか。彼は人という、なるべく脂肪の厚い場所を選んで攻撃しているようだ。

音だけを大きく弾かせダメージが行き辛い、まるでプロレスラーの興行用の技のように。憐れむような彼女の瞳に見つめられ、彼は距離を取り、雄叫びを上げながら力強く拳を眉間に向け繰り出した。

しかし、彼は下唇を震えながら噛み、伸ばした腕が彼女の顔の直前で止めてしまった。彼は降参を宣言するとダラリと手を下ろした。下を向いている為、彼の表情は見えない。

「貴様！」彼女の顔が熱を帯びていく。「敵に情けを掛ける奴があるか！」石牢内に怒声が響く。「気をつけ！」その声に反射するように直立し姿勢を正す。

「愚図め！」彼女から繰り出された拳が彼の顎を捉える。舞踊る銀色の髪を見ながら彼は崩れ落ちた。「艦娘などとうつつを抜かすからそうなる」

「かような模造品、何するものぞ！」彼のワキを持ち上げ、無理やり立たせる。「貴様は娑婆に居るのか。愚図め！」再び顎に強烈な一撃を加える。「戦争だろうが！」彼は自ら立ち上がり、再び拳を上げるが止

まる。

「泣くくらいなら撃ち返さんか！」彼は瞳に大きな水の光を反射させながら、モゴモゴと歯を擦り合わせる。「貴様の弛みが！10万100万の将兵を犠牲にするのだぞ！」

彼女のフックのような極めて精確な掌打が、彼の顎を捕らえ頭を大きく揺さぶる。響き渡る乾いた破裂音の後、ついに彼は立ち上がる事が出来なくなった。

「戦争は殺し続けなければいかんのだぞ！」彼女は石床に転がった彼に鬼気迫る声で叱責する。「何であれ、誰であれだ！」

「ぐず……」

彼女は体の揺らめきを覚え、椅子へとヨロヨロと向かっていく。疲れ果て、そのまま木の椅子にどかっと座った。どうやら自分が思う以上に脆くなっていたようだ。

「彼女ほど精密に人間を『殴れる』深海棲艦は他に居ないだろう。背の高いワイングラスをジャブのパンチで殴りつけ、楽器のように音を鳴らす技術が要求される。」

もし彼女が、後10分の1ミリでも踏み込めば、もはや医者には手の施しようがなくなるほどの衝撃を彼に与えている。

数100とある艦載機に、常時エアレースをさせているかのような精密な動きと、自らも同時に攻撃を行えるほどの処理力のある彼女ならではの芸当だ。力技を好む『鬼』クラスには決して真似は出来ない」

彼はうずくまり、涙を流しながら謝辞を述べた。これがピンク色の紙切れ一枚で招集された少年の成れの果てか。彼は遠い昔、今は亡き甲板長に同じような事を言われて殴られた事を思い出した。

軍籍が長びくにつれ、多くの後輩を殴り、強く育ててきたが、いつの間にか新提督の風土に当てられ、シャバっ気に感化されていたようだ。

殴る側の義務と労力を最大限に理解する彼であるからこそ、『彼女

の愛”を理解出来たのだろう。彼が今、不自由なく言葉を発している事が最大の証である。

これが“戦場”ならば、あいさつ代わりにの一撃で、頭が消し飛んでいたであろう事くらい彼は理解していた。

「私は貴様のような愚図を部下に持った覚えはないのだがな」

彼女は上水から水を手で掬い、飲みながらぶつきらぼうに答える。こちらを向き直り、向かってくる姿は、腰下まで伸びる銀色の髪がマントのように拡散し白いシルエツトと合わせり、まるで出で立ちした騎士のようだ。

「彼女が軍人臭いのは、時折飛ばしていた偵察機が彼らの基地を直接見ていたからだ。既存の航空機など、彼女にとってはアラレの中を飛ぶ紙飛行機のようなものだ。飛び上がり次第、戦士としてタコヤキの体当たり攻撃を受ける。」

愛すべき愚図共は打倒飛行場姫の名のもとに、強い上官が、うかうかとしている新兵をまとめ上げ命を奮い立たせ向かってきた。上がり次第、爆散するだけの死の行軍だった。魚雷艇の突入から目を逸らすためだけの。」

「坊やがあまりに可愛いもので」彼女は膝を折りしゃがみこんだ。「つい熱が入ってしまった」彼女の銀色の髪は力を失い、フワフワと降り始めた。

「痛むか？」優しく顎を掴み顔を合わせさせる。透明度の高いオレンジ霞む赤い瞳が彼をのぞき込んでいる。「もういい。お前は私と暮らすんだ」その手が優しく頬に触れる。「もう、いいんだ」

「もつとも」何もできずグスグスとないている彼を、彼女はまるでお姫様のように抱き上げテーブルに投げやりに寝かせた。「もはやお前に拒否権など二度と訪れないがな」

自爆される前に、震える女子供、犬猫ですら撃たねばならない。お味方”の中ですら策謀や内通者によりいつ撃たれるかもしれないという恐怖の中、得られるものは永遠の孤独だけ。

だからこそ彼も艦娘という終わりのある夢に縋ってしまったのか
もしれない。

——愚図が先か、私が先か。だから人生は面白い。

困ったストーカーさんですね・・・。

少女はテーブルの上で、一部始終を黙って座り込んだまま見ていたが、どうにも釈然としない思いが芽生えた。その感情を打ち消すかのように、イラ立ちが込み上げてくる。何だかすごくモヤモヤとする。

というより、彼勝つてたらどうするつもりだったんですかね。潜新ちゃんにあの愚図を引き渡したら、私、帰ってきますよ？姉さま一人にしてはおけませんから。ホントに困った人達しかいないですね。

一番まともなのホッポちゃんだけじゃないですかね。何だかんだ文句いいながらよく働くし。さて、どうしたものかと紫の髪をフワフワと動かし首を傾げていると、彼女と目が合った。

彼女は一瞬ビクツと大きな赤い目を作り、瞬時に目を逸らす。だが、何か閃いたらしくテーブルの上にもそもそと上ってきた。

ああ。事の発端は姉さまですから、仕方ないと言えば仕方ないのですけれど。いつまでも従順少女というのもなかなか疲れますね。やわらか飛行場「殿」のじじよーちよーしゅは後でにするとして・・・「そうだ、ここで暮らすからには」彼女は彼を座らせると、開脚させて彼の後ろに座り込む。「これとも仲良くしてもらわないと困る」そのまま、自分の足を絡め固定した。「察していると思うが、これにはずいぶん嫌われているぞ」

彼女はさらに、白い両手を彼のワキを通して折り返し、彼の後頭部で手を結ぶ。

む。すっごくこっち見てますね。わざわざ、こんなカツコまでさせられて来て放置されたり、かつてに景品化されても別に怒ってないですよ、私は。たぶん。恐らく。きつと。

少女は小さくため息を吐き

仕方がないから合わせてやることにした。

「や・・・」

少女は嫌がる素振りでは体を動かした。太ももをずり上げるスカートから白い下着がはつきり見える。黒いローヒールから黒く長いハイソックスと経て、男の視線が少女の股間からわずかに覗かせる、白い下着で止まった。

少女は胸と股間をガードするかのようになり、手で体を固める。少女は鋭い目付きで猫のように威嚇する。

「アレにもそろそろ深海棲艦としての自覚を持つてもらうか」彼女は少女と目を合わせながら言う。少女はどうやら、少し不機嫌なようだ。「今日からお前は罰としてアレの教材になれ」彼女の言葉に彼の体がビクツと震える。

「今後は許可なく射精してはいかん」彼女の手が再び回り込み、今度は数本の指を添えるように優しく萎んだそれを撫でてやる。「このままこの愚図に住み着かれては、さぞ気分が悪かろう」少女に向けてしっかりと反り返らさせる。

少女は無抵抗にされた恥ずかしい男の下半身にチラチラと視線を送り、もじもじと体を動かす。

「好きなだけ罰を与え、貴様の望むように躡けてやってかまわんよ」彼女は少しくたびれたように投げやりに言う。「なに。私もそろそろ疲れてきた。今後は、お前だけで捕虜を扱わせることも多くなろう」

「まあ聞け」飛行場姫は独白を始める。

「いいか。隠すことはない。見せろ」彼女は彼をガツチリと押さえつけたまま続ける。「人間如きに、ましてやオスに何を恥じる事があるうか」

彼女の白く逞しい脚が、彼の太ももを無理やり極限まで開かせると、彼は目に涙を残し恥かしそうに顔を背けてる。しかし、足の中心ですすでに少女を思い出してか、裸電球に照らされ高々と黒く伸びる

影を作っている。

「こいつを見ろ、口では何と言おうとお前が欲しくてたまらないのだ」彼の亀頭の先端が、何度も膨らみ、尿道がパクパクと呼吸を始めている。「当然だ。我々はそれほどまでに美しいのだよ」

彼は無言のまま顔を背けているが、彼女の言い分が執拗に絡みついてくる。いつの間にか彼の呼吸が早まり、少女の顔をみていたはずの視線が、少女の胸と股間の往復を始める。

「全てのオスは、我々の前には無様に股間を尖らせ、精液を献上したがるだけの存在なのだ」それを聞く彼は、ただ何も言い返せずに耳を赤らめている。「もつとも、美しさはワレの特権ゆえ、お前は可愛さを追求するがよかろう」

白々しそうに冷たい視線を返す少女に気付きもせず、自分の世界に入り込んだ彼女は心底愉快そうに笑っている。

「さて、楽しい罰の時間だ」彼女は先程までのいらくな態度から一変し「踏め」一言、冷たく言い放った。「貴様も愚図か。靴なぞ脱ごうとするな」

「それでは罰にならん」少女は屈み、輝くパテントの黒いローヒールから、太ももの上まで伸びる黒いハイソックスを止める金具を外そうとするが、彼女が制止した。「そのまま踏め。潰しても構わん」

「分かりました」

一瞬少女の口元が酷く楽しそうに、横に細く開く。仄暗い石牢内で光源の逆光であるのと、彼の鈍感さがその事態を見逃した。

しかし、少女から放たれる大理石の冷たさを思わせるような雰囲気纏った足が、ジリジリとにじり寄るように股間に迫り、彼は咄嗟に身構えようとからだに力を込めた。

「コラ。貴様は罰を受けるのだ」その彼女の物言いが。「罰とはいいのだぞ」追い込まれた彼を誘い込んでいく。「罰とは許しだ」諭すように、彼女は感情を込めずに言う。

「貴様も知っていよう」

淡白であり。

「そうだ。罰とは許しだ」

宣教師のように冷静に。

「貴様は許されるのだぞ?」

彼に残された最後の誘惑を。

「罰を受けければお前は『許された』という事だぞ?」

「どうだ、罰とはいいいものだろうか?」

彼女に好かれてみたい。

「そうだ。罰とは許しだ」

彼だけでは叶えられない誘惑を。

「アレに許されたいなら自分から股を開かんか」

彼女もまた、雪女の如く冷たく変質する。前後からの凍てつく感覚が、まるで雪山の深い谷底。クレバスにハマリただ死を待っただけの登山家のような心境が彼を襲う。いや、性交を終えた後のオスのカマキリだろうか。

感じた事のない記憶。気配。はるか昔からそう『設計されていた』感覚。メスには我が身をも差し出す献身。人が上辺の情報で覆い隠して生きている太古からつながる記録だ。

その記録が今、再生される。圧倒的メスには逆らえないという男としての『強さ』が呼び起こされる。そうだ。彼は思い出した。彼女らは深海棲艦。

何故この名前が広まったのか。それは、彼女らが水中に暮らすようになったからだろうか。違う。彼女らと対峙した人間たちがその威風に気圧され、すべからず深く深海を漂流するかの如く冷たさと心細さを味わったがためだ。

そして、海上を『統べる』彼女らを称して深海棲艦と誰かしかが言い始めた。自分もその一人であった。これほど適当な言葉はない。瞬く間にその名が各国に伝わった。

「彼女らは単独にして、自然災害級の力を保持する。人は災害を克服できただろうか。いや、制御くらいは出来ている。しかし、意思を持ち自ら動き回る自然災害はどうだろうか。昨日はあの首都。今日はあの田舎街。明日はこの途上国にしようか。」

彼女らの熱核兵器級の怒りを買えば、そこに残る物は焼けただけ無残に露出した鉄骨が見えるコンクリートの構造物だけだ。奇しくも彼女らは最上位種としての自覚があり、”その他の全生命”に対しては大いに寛容である。

その大災害を見舞わせた場所は、人気の少ない未開の地の島々と、愚かにも彼女らに挑戦した大本営への本土上陸のただ一件のみに留めている。襲撃の際にも、戦闘員、非戦闘員の区別を付け、可能な限り精密に攻撃をしている。

また、非戦闘員が飼育しているであろう、他の種族を必要以上に撒き込まない措置でもあった。これは、絶対的強者の余裕に他ならない。彼女らは与える側なのだ。常により多くを選べるのだ。生き物は彼女らの許可の元生存している。」

大風が家屋を吹き飛ばし、泣き叫ぶ家族をあざ笑うように、慈悲もなく家が崩れる。人がどれほど集まり、嘆こうとも届かないのだ。命の灯が次々と消えていく。それが飛行場姫。それが深海棲艦の本質だ。

彼は今、一匹の群れからはぐれた野ネズミであり、豪雨のつくる濁流をただ眺めるだけの存在だと改めて思い知った。彼女は災害なのだ。どれほど衰えようとも災害であり続けるのだ。

「何を呆けておる。しっかり勃起させんか！」飛行場姫の号令が飛ぶ。「あれほど可愛いアレに対して、失礼だぞ貴様は！」少女の靴底が、恐怖に当てられ少し小さくし始めた股間に触れる。

ギザギザとしたゴム底が肉を擦り刻む。押し付けられての上下の動きが、芯の中までゴムの凹凸を挿し込み、直接激痛を運ぶ。

彼の悲鳴が石牢内を反響した。少女は靴の下でグリグリと転がり回る肉の感触を楽しむ。少女は恍惚の表情で、足の動きで彼の悲鳴を奏でる。

「ほう。上手いぞ」彼女もまた、彼が左右に逃げるように腰を振る動きを楽しんでいる。「だがもつと踏み込め」

「おい！腰を引くな、ばかもんが！」少女の足から逃げるように、彼の

お尻が彼女の股間に食い込んでいく。「貴様は罰を受けているのだ」
彼女を股間を突き出し、少し仰向けにのけ反ると、彼もつられて股間を上げていき。少女のひざ元まで、擦り傷のある肉の塊を献上する。

「おとなしくせい！」

「あら？汚い玉が二つ垂れていますね」彼がブリッジのような姿勢に腰を持ち上げられると、鶏の肉垂れのように男の玉がこぼれ落ちた。「ブラブラ、ブラブラと、ふざけていますか？」

少女は桜色の乳首を白いブラジャーの中で立たせ、フリルの白い下着に、楽しむように小さな円を広げていく。

「ああ、飛行場姫様」少女は甘えるように彼女に顔を近づけていく。「み・ぎ・と。ひ・だ・り。どちらがいいですか？」紫色の瞳が楽しそうに広がっていく。彼は青ざめた顔でそれを聞いていた。

「こういう時はな」彼女はため息まじり、仕方のないやつだと続ける。「選ばせてやるんだ」

拘束を外し、体を離す。彼は転がったまま、ただ体を震わせている。凍える心が彼の動きを阻害する。呼吸を速め、世界が白く染まり始める。酩酊状態か、過呼吸に近い。

テーブルの上で二人のメスが見下ろす先には、ダンゴムシのように膝を抱えて丸まり、ブルブルと体を震わす一匹のオスが転がっている。

「おい」彼女は白いブーツで彼の背中を蹴りつける。「愚図」何度も蹴る。「おい」何度も。赤く、青く変わるその背中を。

「四つん這いになって下さい」少女の何気なく言う一言が、彼には冰山。氷の塊が体を突き抜けたかと思うほどの強烈な恐怖と冷たさが襲う。「どうした。男を見せんか！」

腹部に彼女のブーツが刺さり、彼の体が振動する。人が作り出せない恐怖が彼の記憶を呼び起こす。

光の届かない密林の中、生い茂る深い緑。右も左も敵国の鉄兜が素早く動くのが見える。後方からは上官が機関銃を構えている。聞こ

える銃声。

敵も味方もなく、次々と人が消える。永遠の孤独がよみがえる。彼がまだ、深海棲艦と戦う前の記憶だ。深く冷たい蒼い海の底で。同じ世界が広がっていく。

「これは罰だ。終われば貴様は許されるのだぞ」その言葉すらも、もはや幻聴に変わる。「誉て戦え、お国のために」と。

進退窮まるも愚直な彼はその火線、曳光弾の走る赤い光の中へと歩を進めた。腹を這いずらせ、隣で、今飛び散った友と同じように死の行軍を開始する。

彼は幸運であり、常に正しい解を導き寄せてきた。あるいは今日この日が、彼の終着点なのか。

「おい。愚図。こちらを向け」声の来る方角を見ると、見覚えのある白い拳が飛んでくる。「とんだ愚図だ。手間を取らせる」彼女は疲れ果て、テーブルにあぐらをかくように座った。

「逃げては駄目ですよ？罰になりませんから」痛む顎が視界を切り替える。目の前には、メイド服の少女がいる。空白の月日が一気に埋まった。「お前は何処へも行かさんといった。しっかり気を持ちここにおれ」

少し離れて、背後から彼女の声がする。声色からはかなり消耗している様子が窺える。

「さあ。嗅いで。しっかり立てて下さい」少女はうすら笑うように言いながら、膝を下ろし、白い下着を彼の顔に近づける。「ほら、どうぞ？」

少女は腰を下ろすと、膝を大きく開き近寄る彼に股間を与える。足を開くその先。それはラフレシアのように怪しく存在する。

「どうぞ？」

少女から与えられる喜びが、彼の顔を動かす。犬が水を飲むように。頭を下げ、腰を突き上げる。短いスカートを頭で捲り、厚手の下着越しに、子宮の中まで熱い鼻息を送り込む。彼の股間は次第に今日一番の硬さを示すようになった。

「いい子ですね」頭を撫でながら少女が言う。「可愛らしいです」粗い鼻息で少女が濡らす臭いを嗅ぎ漁りながら、腰を振り暗く見える勃起のシルエツトが、犬の尾のように左右に揺れる。「こんなにお尻振っちゃって」

「でも——」少女から放たれる恐ろしい冷気が彼の動きを止めた。「まだ、罰は終わってませんよ?」

少女は彼の頭を押さえて、そのまま後ろを向かせる。彼は怯えるように正面にいる、彼女の腰に抱き着いた。

「どうした? 怖いのか?」彼は、彼女の白いレオタードのような白いスーツのヘソ部分に頭を埋める。「やれやれだ」

その瞳は早くしてやれと、少女にいう。不思議な事に、飛行場姫の放つ威圧は少女が行っている物の数倍は強い。にもかかわらず彼は飛行場姫を選んで抱きついていていた。

「イライラとさせてくれます」臆病なオスの姿にか、彼女にすがり付くその態度か、ついに少女のストレスも限界に近づいた。フリル付きの下着を見せながら足を大きく後ろにさげ、上げる。「潰れる!」

少女の脚がキレイな円を描くように正確にお尻の間にヒットする。彼女のあえて力を抜いていた腹に、衝撃で彼の頭が突き刺さる。重いテーブルが三人も載せているにもかかわらず、わずかに滑った。

「まあいいです」痙攣するように震えるお尻を目掛け、水平に少女の脚が刺さる。「もとは」何度も赤く変わるまで「姉さまの」楽しむように蹴りが飛ぶ。「せいですから!」それは彼が完全に動かなくなるまで続いた。

「おい、坊や」衝撃で何度も頭突きされ、少し痛む腹を気にしながら、彼女は彼の顔を持ち上げる。指二本でまぶたを開け、赤くクリクリした瞳でのぞき込む。「んん?」

まぶたの裏も血色がよい。貧血も無さそうだし、気絶もしてなさそうだ。以外と耐久性だけは高いみたいだ。

「ほう」彼女は彼の体を抱きしめ、キスをしてみると、甘えるように舌がゆっくりと振じり込まれてくる。「まったく可愛い坊やだ」体を引きはがすと、テーブルに転がした。

丁度、立ち上がった少女の足の間に顔が来ている。真上には円状に広がるスカートの中から、太ももが二本突き出て来ているのが見える。短いフレアのスカートではあるが、下着部分は逆光のため暗くてよく見えない。

飛行場姫は立ち上がると、彼の腹に顔を合わせたまま座った。衝撃で体が僅かに跳ね上がる。丁度、少女の太ももの間から、赤く大きい瞳が見える。

「どうする？まだ罰が必要か？」彼女は少女の短いメイド服の背中に向かって訪ねる。「私に勝手に射精して、反省しましたか？」少女は、腰に手を当てぐつと腰を曲げながら、彼に尋ねる。

紫のフワフワとした髪がすべて下方向に垂れ揺れる。少しお尻が彼女の顔に当たっているようだ。無理やり性交をさせられた状況ではあったが、射精した事実は変わらず、彼は真摯に誤った。

「ごめんなさいだ」彼女は冷たく言い放つ。彼は目に涙を浮かべながら、念仏のようにブツブツと何度も謝った。「まあ、よかろう」彼女は再び立ち上がる。

「何もせんよ」彼女が白い片手を伸ばすと、ビクツと彼の体が動く。少女がどき、彼女の手が彼の上半身を起こし上げる。「自分で見て見ろ」彼に自分の太ももの間を見るように促す。彼は、怯えるように、視線を伸ばしていく。その想像の先にはおそらく、赤く染まったテーブルを想像する。潰れてしまった、睾丸による。

「手心を加えたなどと思われては困ります」

どれほど集中したのか、彼の体を一切損傷させることなく最初の一撃を、正確に肛門の下近辺を打撃していた。尾骨へのダメージもない。

少女の放つ殺気が、彼の意識を誤認させたのだろう。その直後からの複数回の打撃もその要因の一つだろうか。

「飛行場姫様に感謝なさってくださいね？」

「このテーブルは飛行場姫様お手製なのです」少女はその飛行場姫様の背後に回り込むと、顔を首筋に擦りつけ甘える。「許可なくあなたの血ノリでテーブルを汚しては、わたくしが怒られてしまいます」ペ

タペタと彼女の体に抱き着く。

「ふむ」彼女は自分の顎に手を当てながらしばし考える「まあ、私としては種なしでも構わなかったが」彼の方を目を細め睨む。「まあ、お前の言い分も一理ある」軽くテーブルを数回叩く。

「これは一昨日出来たばかりなのだよ」楽しそうに話を続ける「実はな」「前のテーブルは足が刺さって抜けなくなったものだな」何をしたのか理解が及ばないがおよそ人道的な事ではないことは確かだ。

「廃棄してしまっただ」彼女はケタケタ笑う。少女もまた楽しそうに紫の髪を擦りつけている。「北方棲姫の奴が、な」思い出したように嘖き出すように、笑いだす。「貴様は幼女趣味か？まあ、いずれは合わせてやろう」

「お前は褒美に気持ちよくなって良いぞ」少女を膝の上に乗せると、まるで新体操の競技者のように彼女は「やわらかく」片足を垂直に上げる。「好きに楽しめ」その間に少女の体が挟まっている。

「貴様は、今日はまだ射精はしていないのか？」彼女は、ビクビクとしながら転がる彼に声をかけた。「もう抜いたのか？まだ抜いていないのか？答えよ」

まるで、毎日自慰を行っているかのような2択を迫られるが、彼はまだ抜いていないと。正直に答えた。

「ふむ。素直なのは良いことだ。貴様にも褒美をやろう」彼女は視線を未だに勃起させているものに移す。「構えよ」

「愚図め、オナニーをせよと言ったのだ」意図を理解し兼ねてオドオドとしている彼に、怒声を浴びせる。ビクツと体を動かすと反射的に片手を動かした。ゆっくりと手が上下に動き出すのが見える。「そうだそれでよい」

次第に彼の呼吸が早くなっていく。特に彼の視線は高く上げられた、裸電球が美しく照らす、逞しくそれでいてしなやかな美しい彼女の脚を執拗に上下させている。

「待てだ」

彼は彼女の声に従い手を止めた。彼は少女と彼女の体を上から下まで堪能しながら手を動かしていたが、お預けをくらい、抗議するか

のように勃起している先端が大きく膨らませる。小刻みに呼吸をしながら尿道を開かせた。

「ただの見抜きだけでは、褒美にならんだろう？」彼女は誘うように怪しく微笑む。「いいものを見せてやる」

「お前はもう見せてもらったか？」

飛行場姫は体を寝かせると、足を伸ばし、片足だけを垂直に上げ力を込める。長く白いハイソックスを履く太ももから、筋肉が少し浮かび上がっている様子が見える。

「お前への褒美は後だ」

彼女はそう言いながら少女の紫のフワフワとした頭に手を置き、優しくなでる。少女の首輪につくりードを外してやった。テーブル脇にクルクルと重ねて置く。

「戦艦棲姫だ。あいつはダンスが得意だな。コレとよく踊るのだ」彼女は少女の顎を撫でながら言う。彼女はどこか上機嫌なようだ。「ほら、舞って良いぞ」

少女のお尻を押し上げ、立つことを促す。彼女の高く突き上げられた白い脚に裸電球の光が集中する。

「貴様らの文化にもあろう。これは美容にも良いのだぞ」そういうと、少女は彼女の垂直に伸ばされた足に手を掛け、足を中心にクルクルと歩き出す。「今回は少し貴様の趣味に合わせてやる」

何かを期待するように

彼は身を乗り出し膝立ちになる

「かまえよ」彼は言われるままに股間に手を添えた。「かかれ」彼女の片足をポールに見立て、少女は幻想的に舞い始めた。

短く黒いメイド服から白い下着を見せながら、クルクルと旋回して足を開く。彼は獣のような瞳で、荒く息を吐きながら、その視線が動き回る少女の上から下までを追いかける。

「もつと打ちつけるようにだ、愚図め」彼女は首だけを起こし、彼に指示を出す。「もつとだ、音を立てろ」

やがて、後ろから突き上げる後背位のように、彼は腰をガクガクと突き出す。挿入しているかのように手の甲が股間の付け根に打ち付けられパンパンと乾いた音を一人で出し始める。

「いいぞ、ご褒美の最中も私を楽しませろ」

彼女は彼のその恥ずかしい疑似セックスをする動作を楽しむ。少女もまた、男が作り出す乾いた破裂音に答えるように、徐々に魅せる踊りから淫靡な舞へとスタイルを変え始めた。

少女は彼女の脚に直角に両手でつかまり、大きく足を開きながら大回転を始めた。ツイントールを空へ靡かせながら、ポールダンサーのようにクルクルとねじを巻くように回り、テーブルへと下りていく。

テーブルへお尻を付けると、黒いハイソックスの片足を上げ、フリルの付く純白の股間を見せつける。少女は片手を彼女の上げられた脚に回し込み、もう片方の手を自らの股間の上に添えた。

少女は紫の瞳を小さく細め、誘うようにオナニーを続けるオスを眺める。手が黒く短いスカートを押さえ、少女の下着を隠す。ほの暗い石牢で、男の視線が少女の股間の暗がりを追いかける。

少女がパツと山なりに閉じた膝を開く度に、彼は答えるように手の動きを速くする。少女は両方のツイントールを垂らしながら、男に向け腰を上げていく。

少女の股は自然と開き、下半身がブリッジを始めた。添えられた手が、短いメイド服のスカートを引き上げていく。胸は白い下着がこぼれ出て、小ぶりの谷間がはつきりと見える。もともとないようなスカートのざり上がる。

少女のフリルの下着には楕円形に水気を帯びている場所が見える。少女は股間を電球に向け突きだし、アソコだけを光らせ見せ付ける。濡れ透けた場所は、薄らと紫色の少女の体毛が浮き上がっている。

少女はももの上まで黒いハイソックスを履いているため、僅かにオレンジ色に照らされる股間部分の白さをより印象付ける。少女の表情は闇に隠れ、全裸で膝立ちのオスが、喘ぎ声を漏らしながら広がる染みを凝視する。

無理やりしてしまった、少女の柔らかく冷たい場所を思い出しながら、彼は勢いよく腰を振る。少女の泣き顔と声を思いだし、自制しようとするが、すでに両足まで痺れが広がり止まらない。

「よし。そこまで。待てだ」

素早い動作を始めると、彼女はまたもお預けを命令する。二度目のお預けに、彼は少し虚ろな表情で腰を左右に振って抗議しているようだ。少女が楽しそうに目を細めて眺める先には、そびえ立つ影が左右に振れ動いている。

「どうした？言う事を聞け」彼女は立ち上がると、彼にゆっくりと近づきながら白い片手を頭へと伸ばす。彼の体が反射的に震えるように反応した。「まったく。ご褒美の時間だぞ」

彼女は顎に伸ばしていく手を、彼と顔を合わせ見つめたまま降ろしていく。彼は残念そうな表情で彼女の顔を覗き上げる。

「かわいいぞ」

彼女の顔が近づいてくる。彼女の赤く透き通るようなオレンジを帯びた瞳が近づく。突然彼は声を出しながら、体をのけ反らした。彼女の手の甲が、彼のメスを求め透明な涎を垂らす彼の尿道を、ゆっくりと擦り回していく。

「何処がいい。ん？」穏やかに包むような声で、彼女の冷えた白い指先が全体をなぞり下りて行く。「痛むか？」包み込むように指先を滑らせ、睾丸をなぞるように冷たい感触が伸びていく。「何だ？欲しいのか？」

彼は粗い呼吸で太ももを大きく開き、密着してくる彼女のヘソの窪みに、股間ゆつくりと伺うようにこすり付け始める。上下の動きで彼女の白いレオタードのようなスーツに水気を伸ばす。

「待てだ」股間を押し付けたまま、彼は腰を止めた。「良い子だ」彼女の唇が顔に近づいてくる。

彼女の顔が近づいてみると唇はわずかにピンク色をしてる。顔がさらに近づき数センチ前で止まる。彼女は鼻を近づけて、彼の口の中の匂いを嗅ぎ始める。彼の顔が赤く変わっていく。

「やはり、匂うな」先程キスをした時に気付いたのだろう。「口を開け、動くな。出来るな？」彼は返事をするように静かに口を開け、彼女の腹が押し付けられた彼の股間から数回の膨らみを感じる。「良い子にはご褒美だ」

彼の両手を持ち上げ自分の腰に回すように誘導した。彼は彼女の

冷たい腰のクビレに手を回し、大きく形のいい彼女の胸に体を密着させていく。二人の視線の間に数本。数十本の銀色の髪が滑り込む。

彼女は気にも留めずに顔をさらに近づけると、わずかに赤みを帯びた舌を伸ばす。彼を焦らすように前歯の先端を舌でなぞり、時間をかけ、舌の先端が彼の歯を一本ずつザラザラと舐め削っていく。

「待てだ。動かすな」

彼はご褒美をもらおうと、腰をゆっくり回しながら、興奮して勃起した乳首を、彼女の胸にスーツ越しに擦りつけ始めた。

「言う事を聞かないと、今日はもうおしまいにするぞ？」彼女の淡々と言う口調に、彼は諦めるように体から力を抜いた。「そうだ。それでいい」

「おい。水を頼む」

彼女は体を捻らせて少女に言った。少し不貞腐れているようだが、少女は立ち上がり、テーブルから下りる。暗がり小さく置かれている、木のタンスのような物から木製のコップを取り出した。

表面に小さくデフォルメされた飛行場姫の顔が彫られている、ヒノキのような匂いのするマイカップだ。

「どうぞ」少女は上水を汲んでくると、テーブル上の彼女に手を伸ばして手渡した。「どうする、変わりたいか？」少女の方をいたずらに見て言う。「いえ、こちらで見えています」

テーブルに上半身を乗り上げると、少女のメイド服がズレ下がり、白い下着が大きく露出させる。少女は谷間の隙間に訴えるようなオスの視線を感じた。

「コラッ。こつちを見ている」彼女はカップを腰の横に置くと、両手で顔を抑え瞳を合わせさせる。「まったく。まあいい。続きだ」そう言うのと、口を近づけていく。彼は自然と口を開ける。「飲み込んで駄目だ、いいな？」

彼女は顔を横に傾ける、舌を奥歯の後ろにギュウギュウとねじ込み始める。彼は喉奥に舌で触れられ、反射的に口を閉じた。

「コラ。主人を噛むやつがあるか」彼に大きく噛まれたが、彼女はわずかに痛みを伴っただけのようだ。「しつかり口を開けろ」

今度はゆつくりと、彼の奥歯の後ろまでゆるゆると彼女の舌が入り込む。歯に密着させると、舌の表面を前後に動かし、表面の研磨を始める。

奥歯から丁寧に始まり歯茎に押し当て、こちらもザラザラと舌を這わず。彼の口の中に、苦さと鉄分のような味が広がり始める。

「飲み込むなよ」彼女は自分の口に水を含むと、数回口の中をすすぐ様にブクブクとさせてから、斜めにキスをするように口を合わせそのまま流し込む。「何をしている。早くゆすげ愚図め」

彼が口の中でもごもごと水を動かしていると、彼女は木製のコップを近づける。

「いいぞ、出せ」可愛らしいカップに付く飛行場姫と目が合うが、そのまま口を付け水を吐き出した。「やはり汚いな」のぞき込むと、液体が赤茶色く濁っている。

「おい、見ておけ」彼女はコップを少女の方に伸ばすと、彼が咄嗟に手を伸ばしてきた。「なんだ？ 恥かしいのか？」少女は彼女からコップを取り上げると、中を透明な紫の目で覗き込む。

「確かに、汚いですね」少女はコップを傾け、中の不純物をコロコロと転がす。「不潔です」そのまま側溝に流しに行き、新しい水を汲んで戻って来た。「わかっただろう？ こんなもので舐められてはかなわん」

彼女は少女からコップを受け取り、もう一度顔を横にしながら彼に近づく。彼は慣れたようで、自然と口を開けて待ちはじめた。

「そうだ。いい子だ」

彼女の舌が再び侵入してくると、意図を理解した彼は、舌をどかせた彼女の舌が動きやすいようにしている。彼の鼻息を顔で感じながら、彼女は事務的な表情で丁寧に歯茎の隙間までを擦り研磨掃除を行う。

丁寧に行われる彼女の作業は長時間に及んだ。

「まあ、こんなところだろう」

気が付くと、少女が用意したのだろう

木のコップが4つ並んでいる。

戦艦棲姫、駆逐棲姫、飛行場姫、北方棲姫の可愛い顔がテーブルの上に、ワザとこちらを見つめるように扇状に並んでいる。少女を飽きさせてしまっていたようだ。

「すまん、もう終わる」彼女は取り合えず戦艦棲姫を取り上げると、先にブクブクとしてから、彼の口に流し込んだ。「まったく、人間とは不便なものだ」

「ほら、出せ」

少し彼女が笑っているような感覚を覚えながら、彼は戦艦棲姫のコップの中に汚れた液体を吐き出した。のぞき込んでみると、やはりだいぶ汚い。

少女は、一瞬不機嫌そうな顔をするが、受け取ると引き戸を外して上水から側溝へと斜めに下りるストイに水を呼び込む。道を変えて流れ下りる上水に沈めて、丹念に木のコップを洗い始める。

さて、と考え、彼女は飛行場姫に手を伸ばす。これは、彼にそのまま手渡した。ブクブクとさせた物をのぞき込んでみる。透明度があがっているようだ、裸電球が照らし出すコップの中身に影を残さない。

少女にコップを手渡すと

いささか投げやりに洗っているように見える。

「後二つあるが飲んで構わんぞ?」

駆逐棲姫を手渡すと、彼はコップの顔と目が合ったようで何故か少し頬を赤らめているようだ、そのままゆっくりと喉が動く音を作り出した。

北方棲姫の方も同じく飲み下し、少女にコップを渡す。少女はどちらも丹念に洗っているようだ。紫の髪が少し楽しそうに踊っている気がする。

「さて、口もキレイになったことだし続きをするか」彼と顔を合わせたまま、冷たく白い手を彼の股間に下していく。「コラッ!」小さく萎ませて、逃げるように体内に縮こまっている睾丸を爪でなぞる。「立ておけと言ったろうが」

彼女は彼から体をどけると、木のコップを洗い終えて戻ってきた少

女が、テーブルに上半身を乗り上げこちらを見ている事に気付いた。「何だ、変わりたいのか？」少女はそのまま、テーブルへと上つてくる。「少し興味がわきました」少女のパテントの黒い靴が、テーブルの上でキレイに光を反射する。「ご褒美を選ばせてあげましょう」

彼女の方へと向き、悪戯に笑う。

「飛行場姫様はこちらへ」彼は少女に促されるままテーブルの端にしゃがみ込まされる。「ほう？」「あなたは、四つん這いです」

少女がドンと押し

彼をテーブルに倒す。

「今はご褒美の時間ですから安心してください」先程の光景がよみがえり少し体を震わす彼に、少女は冷静に言った。「さて」少女もまたしゃがみ込む。「どちらをクンクンしたいですか？」しゃがんだ姿勢でももを広げる。

「ほう」

意図を察したのか

彼女もまたもを広げた。

少女のメイド服はスカートがしっかりとめくれ上がり、ももまである黒ハイソックスを履いた斜め上に伸びる両膝を大きく開きく。

白いヘソの窪みを見せながら下着に広がるシミと、浮き上がる薄らと生える紫の体毛を見せつけている。少女のの体の白さと、黒い衣類が綺麗なコントラストを生み出す。

彼女は逞しいももを広げると、スーツが延び股間を少し引き上げる。白く細い体毛を大きくハミ出させる。彼女の白いスーツが窮屈に股間に食い込み、秘肉を照り返す光は、わずかに金色を帯びている。頭部から覗き出る小さな角も彼女らしく印象的だ。またパラチアサフアエアを連想させるその瞳が、見る者を強く魅了する。

「さあどうぞ」「おいで坊や」

二人は同時に掛け声をかける。彼は四つん這いで誘いに乗り、ゆつくりと体を前に進め始めた。少女の下着を見て、股間を再び大きく膨らませる。

「いいですよ。ご褒美をあげます」少女は胸元を腕で挟みながら、胸の

谷間を押し上げる。「欲しいんですか？」彼が、少女に頭を向け体がついていく。

「コラ坊や。上の毛でして見たくはないか？」

彼女は首を揺すり、銀色の髪を躍らせる。長く細い髪がテーブルに舞い降りる。広がる髪が乱反射する光を作り上げる。まるでプールで水を浴びている女性にフラッシュを焚いたときのように、大きく光を受け止めている。

「私がかまわんよっ」

「こちらです」「おいで」

彼が迷いながら思考の迷宮を抜けたどり着いた先は、まるで街灯に誘われる虫のように薄暗い室内で、彼女の神々しく光を放つ股間だった。鼻を付け安心するように呼吸をしている。

「そうだ坊や、いい子だな」隣でイラ立っている少女を横目に見ると、彼女は勝ち誇ったようにいやらしい顔で少女に笑う。「今日は気分がいい。好きなだけ堪能するがよかろう」

彼女は上機嫌になるとそのままテーブルに座り、彼の首を挟み込みながら、彼の背中に両足を乗せる。彼女の白いブーツが、彼のお尻の上で柔軟をするように開閉される。

彼は可愛らしく舌で必死にスーツを左右にどけながら、その内側に舌を振り込ませている。彼女は余裕の表情で、ブーツの力カトを彼のお尻に乗せ、欠伸でもかくようにリラックスを始めた。

彼女がくつろぐその間も、彼の頭は暗がりの中で必死に上下運動を続けている。彼の唾液で、入り口を湿らせているものの、舌の前後運動の摩擦熱で、彼女の股間は乾燥して舌の動きが悪くなっていく。

「何だ。もういいのか？」次第に彼の頭の動きが鈍くなり止まった。「おいで」

彼を押し戻し、彼女はテーブルに横になると、彼の上に乗るように誘う。彼女の冷たい体がしみ込むが、彼女をベッドにした彼の血流は上がり、次第に息が早くなっていく。

彼は彼女の不ともにも股間を押し当て、様子を見るように股間を上下にゆつくりと動かし始めた。彼の下の口から出るいやらしいヨダ

レが、彼女の脚をベタベタと男臭く染めていく。

「いいぞ。好きな所へ出してかまわん」

念願のその言葉に彼の腰の動作が早くなる。彼女のふとももを性器にみたてて素早く腰を振る。次第に彼の呼吸が小刻みに変わり、お尻にへこみが見えるほど力を入れ始めたようだ。健気に腰を押し付ける。

彼女は彼の両腕を誘導し、しなやかな白い腰に巻きつけさせる。彼女は首を伸ばし、そのまま唇を重ねた。彼の呼吸がさらに早くなり、太ももの肉を貪るように押し付ける。彼女の股間も湿り気を帯び始めたようだ。

彼女たちは当の昔に性交に飽きてしまい、もとより身体能力差もあり、まともに性交渉が出来るわけではないので各々に特殊な性癖を持つようになった。

男性器の挿入だけでは達することなど到底出来ないで、基本的に雰囲気でイカせる以外に人間が彼女らを相手取る事は出来ない。つまり、すべては彼女らの気分次第なのだ。

駆逐棲姫と飛行場姫はある共通の性癖を持つ。オスが卑しく腰を振り、その先端から精液を噴き出しているところを見る事が好きなのだ。

それゆえに、彼女たちは私的には挿入による性交よりもあらゆる方法で、射精させることを好む。たくさん我慢をさせた後に吐き出させるときの表情を見る事も好んでいる。

彼は眉間にシワを寄せ、お尻をくぼませながら必死に腰を振る。少女もまた愉快そうに股を濡らしながら横から見ている。

彼の喘ぎ声が大きく変わる。彼は上半身も前後に動かし始めて、彼女の冷たいスーツに自らの乳首を浅くするようにこすり付け始める。彼女と少女は、僅かに呼吸を速めながら食い入るようにその光景を凝視している。

「んっ。ん、あ」

二度ほど、彼が絞り出すような声を小さく出すと、彼の腰振りが止まった。ドロツとした、少し黄身を帯びた濃厚な体液が、彼女のふともに乗せられ広がっていく。彼は呼吸を整えながら、恥ずかしさで彼女の首もとに顔を沈め隠す。

少女がだらりとした彼の体を持ち上げ、無理やり起こした。彼の股間の先端部分と、彼女のふともにも精液のかけ橋が伸びている。二人の待ち望んだ瞬間だ。彼は見られたと、視線を泳がせ耳を赤らめる。「たくさんさせたな。いい子だ」

彼は寝転がったまま首を上げ、見下ろす先には水気が少ない盛り上がった精液の塊が、自分の脚をドロドロと下りていくところが見える。少女は彼を座らせると、わずかにピンク色の唇を精液に近づけ止まる。

彼は手を伸ばし少女を止めようとするが、精液の濃厚な段差が少しずつ少女の口の中へと消えていく。彼は自分の物が少女の喉を動かしていく光景で、再び股間を膨らませていく事に嫌悪感を覚えて、目じりにわずかに涙が溜めていく。

「あら、可愛いですね」少女は彼女の太ももを舐めきった後、彼に近づき片手を彼の頬へと伸ばす。「今はご褒美の時間ですよ？」

そう言うと、少女は体を折り曲げて、黒く短いメイド服の中のブラジャーによって作られた大きな谷間に、彼の顔を近づけていく。彼は目に涙をためて許しを乞うような顔で少女の顔を見上げる。

「ダメです」彼の顔はその胸に沈み込んだ。粗い鼻息が谷間から零れ出てくる。「ほら、舐めてください？」

彼女はその光景を見て、まあ好きにやらしてやるかと、起き上がりコップに水を汲んでくる。突然飼主の手から離れ自由に駆け出す犬のように、彼は少女の白く柔らかい谷間に舌を押し付ける。

彼の粗い鼻息が首筋まで上がってくるようだ。少女は彼の手を取りメイド服の上下の隙間、クビレのある腰に直に腕を回させる。

「そっちは、ダメです」

彼の舌が彼女の白いブラジャーを押しつけるように先端を目指し前進を開始する。舌と鼻をを巧みに上下に動かし、少しずつ少女の胸

の先端を目指して進んでいく。

しかし、先端に届きかけた舌は、少女に胸元の服を持ち上げられ下着を元の位置に戻されてしまう。彼は残念そうに、今度は少女の谷間の筋に舌を奥深く進ませながら執拗に舐め始めた。彼の股間は欲しがるように上下に振動を始める。

「可愛いです」

少女はポニーテールをフワフワと揺すりながら、彼の頭を優しくなでた。彼は顔を赤らめながら、少女におねだりするように、少女の谷間に吸い付くようなキスを始める。

「よし、そろそろセックスの続きをするか？」少女が胸を離すと、彼は名残惜しそうに小さく座る。彼女は精液が乾き始めている彼の股間に、彼の片手を近づけさせる。「次はワレも楽しませてくれ」

彼女は、彼の手が乾き始めたゲル状の精液を、手に付けていく姿に興奮した。精液を刷り込むかのように彼は、彼女らの期待通りに懸命に手を動かす。

「セックスを見せて見よ」

二人は彼の正面から挟み込むように座る。あぐらをかくように座る彼の両膝上に、各々が股間を乗せるように股をわずかに開き乗せた。彼の両膝が彼女たちの冷たさと重さと、にじみ出る体液を感じる。自然と彼の手が動き始めた。

「そうです」「いいぞ、もっとだ」

彼は頭上からステレオのように声を聴きながら、膝にこすり付けられていく彼女たちの股間を感じる。空中から絡む水音が聞こえる。二人はキスでも始めたようだ。

彼の手がさらに早く動き出し、躡けられた通りにパンパンと手の甲をワザと睾丸に打ち付け、大きく音を立て彼女たちの耳を楽しませる。

彼の目の前には白いスーツのお腹の窪みと、少女の上下に切り離されたメイド服からだす白い腹部の窪みが見える。彼の膝の上には、彼の奏でる音に呼応するかのように動く二つの湿った股が、前後に、上下に動いている。

二人が見下ろす先には、彼が根元から血管を浮かばせながら大きく膨らませている、彼の平たい先端部分がしつかりと見える。その光景を見ながら、二人は両肩を掴み合い、少しづつ呼吸を早くして行く。お互いに顔を傾けて、下を向きながら彼に聞こえるように、ワザと大きな音で舌を何度も絡め口に出し入れする。彼の乾いたパンパンとする鈍い音の間隔が、さらに早くなっていく。

彼女たちも腰を振り、彼の膝にさらに強く押し付ける。彼の視界に、円を描くように上下に激しく動く二つの白いヘソの窪みと、膝に押し付けられ、濡れの広がる二つの股が見える。

片方はフリルの下部分の薄い布地にベタベタと液体を生み出し、下着の中の紫の体毛が、下着に擦り引かれ動いているのが見えている。

もう片方は、細く伸ばされた、彼女の白いスーツが秘部を露わにし擦るように伸び縮みして、わずかに泡をたたせている。

彼は忙しく頭を振り左右を眺める。その光景が上から覗く彼女たちをさらに興奮させていく。彼の膝で角オナニーを始めた二人の股間を、びちよびちよの白いフリルパンツ、食い込みはみ出す銀色の陰毛と、目移りさせる。

彼女たちの大切な場所を膝の骨で感じながら、彼は数回、間隔を空けるように深く、彼が手を打ちつけた。彼の先端は激しく膨らみ、尿道が大きく開いて粘性のある白い液体が、尾を引きながらドロツと零れ落ちた。

その直後膝にこすり付けていた彼女たちの股間が震えるように動き、顔の近くまで腹が近づいてきて、そのまましばらく止まった。頭の上から呼吸を整えるような二人の息遣いが聞こえてくる。

「よかったぞ坊や」

彼女は腰を落とし、彼の顔の高さまで下りてくる。そのまま彼に舌を絡めると、口の中にねじ込んだ。彼女は押し倒しキスを始める。彼女の濡れた股間に彼の零れ出た精液がしみ込んでいく。

「もう一回立たせてやりたいところだが」彼女は起き上がると股間を払い精液を弾く。少し泡立つ白い粘液がテーブルに飛ばされた。「簡単に壊れてもらってはかなわん」

彼女はそう言うと、背中を向けて両手で銀色の透き通る髪をフワツと肩の後ろに投げ上げた。髪が躍るように大きく広がり、一瞬視界が明るくなる。

「いい子にしていれば、またご褒美をやる」そう言うと彼女はテーブルを下り、メイド服のズレを直している少女を抱き抱えて石段を上っていった。「その引き出しの中に毛布がある」後ろを向いたまま続ける

「上水は下ろしたままにしておく、自分で股を洗っておけ」彼女は甘く抱き着きながら紫の髪をふわふわと揺する少女を抱きかかえたまま扉に手をかける。「明日には違う部屋を用意する」ゆっくりと扉を閉めて出て行った。

彼女は半分ほど電球を消し、石牢内はさらに暗さを増すが、目が慣れればさほど困らない程度ではある。下されたすどいから、僅かに水の流れる音が聞こえる。

・
・
・
・
・

16 アプサラス

「それで」

「あの『坊や』は」少女は、石垣を地面に並べたような通路で、黒いパテントの光る両足をポンと下ろし「どこで拾ってきたんですか？」無表情で彼女の腕からすり抜けた。

少女のメイド服のスカートが僅かに広がり、キレイに足を揃えて着地する。少女が体から力を抜くと、脚をもつれさせ転びそうになる。彼女は咄嗟に少女の腰を支えた。

「無理をさせたようだな。すまない」少女の脚は、大半が艤装であり、先ほどの精密な競技には戦闘レベルでの負担がかかる。「別に、好きでやっているだけですから」

少女は素っ気なく答えた。

どうやら何か機嫌が悪いらしい。

「こんなの、どこがいいんですかね」少女は、彼女のキラキラと光る髪を引っ張る。「いたいたい」忌々しく輝く髪を手の中に握ると、グイグイと引っ張った。「やめてやめて」

どうやら、少女は先程のワンワンレースの時の彼女のドヤ顔に腹がたつたらしい。少女なりの勝算あつての提案だったものの、予想外の結果に加え彼女の態度がいけなかった。

「まあいいです」

拙い足取りで、遠くに明かりの見える。キッチン兼ダイニングスペースを目指す。いつもより見てわかるほどよろよろと頭が振れている。少し涙目になりながら彼女は少女の腰を支えた。

「おもしろいワンワンですね」

少女は片足でつま先立ちをして、小さく一回転した。少女の黒いフレアのスカートが水平に風を掴み、クルクルと泳ぐ。少女の薄紫色のツインテールは、少女の体に巻つくように回転する。

「あいつはな、昔。大型艦の上で出会ったんだよ」ふと彼女は懐かしそうにその日を思い出す。彼とその光を。「まあやつのはいい。今

「はあのバカの事が先だ」

彼女が首を上げ、示す先からガラスの割れる音がしてきた。途端に少女の足取りが重くなる。躡の足りないワンワンをもう一匹思い出した。

「あああ、ああ」

二人がダイニングに付くと「赤鬼」がテーブルにうつ伏せに体を伸ばして座っている。

「あゝ!!じゃないですよ!!」わざわざ下から持って来たのだろう。エタノールの入っていた大型のポリタンクが、複数テーブルの下に転がっている。「こん!なに!飲んで!!」

少女の疲れは吹き飛び、大きく声を上げる。少し紫の瞳に黄身を帯びさせながら、硬く握られた両こぶしがプルプルと震えている。

「あいつが少し羨ましいな」

彼女は小さくこぼした。二人にしといてやろうと自室へ体を向ける。少女に背を向けて立ち止まった。彼女は少し首を下げながら、少女に真剣に向き合ってもらえるアレを羨ましがりながら、リビングから出ていった。

「ほら、お水ですよ」少女は後ろから胸を支えるように片手を伸ばし彼女の上半体を起こした。少女のメイド服には上下に隙間があるため、彼女の体に密着すると少し腹が冷える。「ん〜」

彼女はテーブルの上に置かれた木製のコップに、頭を下げふちに少し噛みつくように水をすすっていく。彼女の視界はグルグル揺れ、全体が白くかすみがかっていく。強烈な倦怠感を感じる。

「姉さま」

彼女はテーブルに力なくつぶれ、倒されたコップから水が広がる。少女はゆっくりと声をかけ、体を少しずつ揺さぶる。

「姉さま」彼女の表情は先程見たよりも白い。呼吸も小刻みで浅いようだ。次第に彼女を支える手に重さが増していく。「姉さま!」彼女は力なく目を閉じ不規則に呼吸を続ける。

「大変。です」

少女は体をすり抜ける力に身を任せ、崩れ落ちると石床に両膝を強

打した。僅かに石にひびが入る。

「だれか」衝撃で外れた足の艤装を付け直すと、通路を走る。紫の髪が水平に伸び風になびく。その扉の前へと。「飛行場姫さん！」少女は勢いよく扉を開けた。

「きやあつー」

彼女から小さく悲鳴が漏れる。室内はピンク色基調に彩色が施されており、ベットを模した作りの台に布団が敷かれている。その隣、壁に密着させた勉強机のような作業台の前に彼女は座っていた。

彼女は声を出さずに口を開け、片手でお尻の穴を丹念にこねくり回し、もう片方の手でレオタードのような白いスーツを引っ張り、紐のように細く延びるまで股間に食い込ませて楽しんでる最中だった。「今はお尻いじってる場合じゃないですよ！」少女は真剣に、目に涙をためて恥ずかしさでいじけるようにうづくまろうとする彼女を無理やり立たせると、ダイニングへと足を向けさせる。「どうしたのよお」

彼女は足をふらつかせる少女を抱きかかえると、足早に通路を戻る。彼女は不完全燃焼で濡れた内ももを、未練たらしくモジモジと擦り合わせながら、大きなお尻を振り歩く。

「姉さまが大変なんですよ」

少女の目にもうつすらと光るものが見える。どうやら本気らしいと彼女は感じた。リビングまで戻ると戦艦棲姫がいつものワンピース姿で、テーブルに伸びている姿が見えた。

「おい。お前」少女を床にゆっくりと下すと、飛行場姫彼女の背中を軽く掌打しながら問いかける。「おい！」

彼女は自発的に呼吸をしているようだが、飛行場姫は彼女が不定期に大きく息を吸い上げようとする姿に恐怖を覚えた。似ている。人の死に際と、と。しかし分からない。

「駆逐！アルコールの量は！」彼女は表情を変え怒鳴るように言う。「40:いや」床に顔を向けグスグスと声を曇らせながら続ける。「60・リットルほど・・・でしょうか・・・？」

少女も感じたのだ、多くの経験から。彼女のその死戦期呼吸を。は

やる気持ちを抑え、飛行場姫は数千、数万の可能性を捉え、数本の道筋を導き出す。

人間でもあるまいし、たかがアルコール程度が深海棲艦を死に追いやるなど聞いたこともない。では、別の要素か、と。多量の水分が排泄された形跡はないうえで、体形の変化も見られない。

では、水分は何処へと消えたのか。多くの可能性を捉え、超高速で取捨選択を進めていく。

——呼吸器だ。

「駆逐。これは賭けになるかもしれない」彼女の瞳から色が抜け落ちた気がする。夕焼けの野を駆ける木枯らしのような寂しさを感じさせる。「やるか？」

「やります！」しかし、少女は足に力を込めて、立ち上がった。「何ですか？」その瞳は未来をすでに捕まえたかのように輝いている。飛行場姫もまた、覚悟を決めさせられた。

「いいか駆逐」彼女は少女を諭すように、少女の両肩を掴みながら言う。「ただ、思い切り息を吹き込んでやるだけだ」それで済まなければ——

「タコヤキ」を連れてくる」自分が悪役になるより他はない。「二人とも服を脱いで待っている」

「わかりました」少女は彼女の不穏な発言に疑問を持つが、彼女の言うとおりに服を脱ぎ始め、次々と服をテーブルに放っていく。「いい子だ」

彼女は体を少し足をふらつかせるように歩き出た。少女は戦艦棲姫の服も全て脱がすと横向きに床に寝かせた。やはり、状態は思わしくないようだ。ただの気絶ならばどれほどよかったことか。

「姉さま」

少女は彼女と並ぶように横になり体を合わせる。呼吸音のわりに、彼女の胸が動いていないように感じた。彼女の胸に顔を沈めると、そのまま腰を抱きしめるように両手を回しこむ。

飛行場姫が戻るまでの間が、少女にはひどく長い時間を感じられる。彼女が息を吸い上げるたびに、長い黒髪が床を舐めるように大き

く広がる。

「彼女たちには前例がない。生まれてからまだ、一人もこの世を去っていないのだ。彼女たちは無敵なのだろうか。老いもなく、体も多くを再生できる。しかし、酸素を必要とし、窒息もすれば死への恐怖もある。」

つまり、自らは有限であると本能が理解している。人とは違い、経年劣化が訪れない彼女たちにはリミットが分からないのだ。それは今日なのかもしれない。あるいは半永久的に訪れないのかもしれない。

老いのない恐怖は、彼女たちにその準備を許さないのだ。だからこそ、彼女たちはより結束する。だからこそ、より冷静に生きようとする。仲間と共に不確かな永遠を生きるために。」

「またせたな」

飛行場姫は疲れ果てた表情ではあるが、その瞳は力強く輝いている。彼女の両肩の後ろに、丸型で人間大ほどの大きさがあり、大きなギザギザの歯の付く口がある。モンスターのような顔が付いた球体が、複数浮遊している。

「始めようか」

戦闘中ではないため、いつもならば彼女が背負うように装着し、両脇下から伸びる二本の滑走路のような艀装は付けていない。

「息を吹き込めばいいのですか？」少女は戦艦棲姫に横を向かせたまま、彼女の口に唇を近づける。「一度だけ、強く深くだ」

彼女の予測が正しければ、行き場のない水分が呼吸器を圧迫しているのだ。吐き出されるエタノールの発火を懸念して、浮遊するタコヤキの口の中には限界量の海水が積載されている。

「そいつは自ら死にはせん。お前を残してはな」

たとえヤケを起こしたとしても、彼女にはその愚図が少女を残して逝くとは到底思えなかった。これは完全に事故だ。つまり、基礎回復さえできれば、その愚図自身がどうかしてくるだろうと予測を立てる。

問題は「水鬼」ではなくなった彼女がどの程度までの負担を許容できるかだ。

「大きく、深くだ」

少女は言われるまま、クジラのように深く多量の息を吸い込むと、大きく胸を膨らませた。そのまま、唇を重ね、強く力をかけながら息を吹き込んでいく。巨大な抵抗力を感じながら、彼女の胸をわずかに膨らませる。

「まだだ。もっと強く、深く！」

深海棲艦と呼ばれたほどだ。我々はそれほど弱くない。自答しながら飛行場姫は口の中に乾きが広がっていくのを感じる。拳に力が込められる。両肩で口を上に向けたまま自立浮遊するタコヤキも事の推移を見守っている。

「今だ！離せ！」彼女の体が大きく痙攣するように脈打つと、戦艦棲姫の澄んだルビー色の瞳がはつきりと少女を捉えた。「姉さま！」

「どいて」「ダメです」

少女は彼女の体を抱くようにしっかりと掴み、腹部を圧迫する。促され、自発的に逆流させる大量のエタノールが少女に注がれていく。吐しゃ物が少女の紫色の髪を染めていく。前髪からポタポタと垂れ落ちる。

呼吸の回復により本来の強力な機能を取り戻した彼女は、少し怯えるように汚濁に満ちた少女に視線を送るが、少女はただ、伸びる彼女の角を優しくなでている。

「次からは、一人で飲むではダメですよ？」

少女は彼女の体を回転させ仰向けにすると、腹の上にのしかかるように密着する。紫の前髪から液体を垂らしながら話し、彼女の口に唇を重ねた。

「まったく、世話の焼ける奴だ」浮遊するタコヤキが、ふよふよと近づき、絡み合う二人の直上で口をあけた。大量の海水で次々と水平爆撃を行っていく。「頭は冷えたか」

飛行場姫もまた疲れ果て、海水の広がる冷たい床に寝そべった。床にはなだらかな傾斜があるため、海水は自動的に側溝へと緩やかに流

れ集まっっていく。

「まあ、千切らずにすんでよかった」

原因を高水圧による呼吸器の異常圧迫と、エタノールの気化による呼吸の阻害と睨んだ飛行場姫は、少女の力が及ばなかった場合、体の開閉も視野にいられたが、大事にはいたらなかったようだ。

あのような状況であれば、「戦時」でもないので余計なリスクは極力避けたい。

「腐ってもこいつは『水鬼』だからな」

飛行場姫はうんざりするような気怠さに体を任せながら、背中をマッサージするかのようゴロゴロと左右に揺らす。海水をくみ上げた銀色の髪が、床に広がり緩やかな流れに乗って側溝に向かいゆつくりと伸びて行く。

「あなたの作ったテーブル濡らしちゃったわね。ごめんなさい」戦艦棲姫は少女にのしかかれながら飛行場姫にボソツと囁いた。顔に垂れるは、海水か、涙か。「バカな姉さまですね」

少女は深く口を重ね合わせ舌を挿入する。

彼女の口の中は体内の味が多くのこっぺっているようだ。

「そうだ。作れるものなら、また作ってやるさ」

「それで、あいつは何処へ突っ込むつもりだ？」何処か不貞腐れるように背中をゴロゴロさせながら続ける。「別に私の部屋でも構わんが」床をコロコロと転がり、裸で抱き合う二人に近づぐ。

「機密性の高いホッポちゃんの部屋にしましょう」

少女はのけ反るように絡める舌を外して言う。戦艦棲姫は名残惜しそうに、虚空へ舌を伸ばし、ペロペロと空を舐めている。

「ほうっ？」「どうしてかしら？」

少女は寝転がる飛行場姫に引つ張られ、二人の間に転げ落ちる。両サイドからしがみつかれながら少女はステレオ音声を聞いている。両側から白い脚が伸び全身を海水に浸す全裸の少女の内ももに執拗に絡みついてくる。

「はあ」少女は仰向けのまま大きく両足を開かれ固定されると、好きにしろとばかりに小さくため息をつく。

「一番気密性が高いし、色々安全だからですよ」

「しかしなあ。ホッポの奴で大丈夫かなあ？」

「そうね。あの子時々危ないから」二人の指が、少女の桜色の胸の先端を、お互いがなぞるように動かしながら会話を続ける。「大丈夫ですよ可愛いわんわんですから」

少女は股を大きく開かされ、乳首を無理やり立たされるが、特に気にする様子もなく続ける。二人は少女の乳首の高さを競うかのようになり、くりくりと指を動かし回す。

「姉さまの所に置くと、毎日ムダに臭くなつてそうですし、飛行場姫さんの所だと変な甘え癖が付きそうですし」飛行場姫の唇が少女の胸を吸い立てる。「私は姉さまの面倒だけで忙しいですし」

戦艦棲姫が二本の角でツンツンと飛行場姫の顔を押し出すようにしながら、少女の胸に顔を伸ばし始めた。少女は戦艦棲姫の角を無表情で押し戻し、飛行場姫の方へと体を転がす。

「ところで、飛行場姫さんはお尻の続きしますか？」目を細め、無表情な澄んだ紫色の瞳が彼女を見つめる。「やだ！ いわないでよ」不貞腐れた様に飛行場姫は体を反対方向へとコロんと転がした。

「なーに？ またケツアクメさんなの？」

「姉さまは静かにしてください」

少女は首を動かし、そちらを睨むように言う。反射的に彼女は体をビクツと反応させ、角を垂らすように小さくした。しかし、少女の胸の先端を捉えた指は動かし続けている。

「何本ですか？」

「・・・ぼん・・・」飛行場姫は背中を向けたまま小声で答える。「私は4本！」戦艦棲姫は少女の乳首を黒い爪でツネツネしながら声を大きくする。

「なに張り合ってるんですか。バカな姉さまですね」白い手が彼女のスーツ越しにお尻をなぞる。「脱ぎますか？ めくりますか？」彼女は無言のままモソモソとスーツを脱ぎ、そのまま無造作に海水で濡れる床に置いた。

「4本ですか？」

少女が白い指先で彼女の尻肉を開き、内側ゆつくりと指の腹を当て、少女の白い肌色を反映させた爪がギザギザの入口をなぞる。カギ穴のように何度も半回転させる。こそばゆい感触を与え、お尻でおねだりするように腰を振らさせる。

「5・ほん・・・？」飛行場姫はお尻をむずむずさせながら、体を震わせ恥ずかしそうに背中を向け小さく答える。少女の中指が彼女の出口をトントンと叩く。「いいですよ？」彼女は少女の責めを想像して少し膝を抱えるように丸くなる。

「姉さまですか？」

戦艦棲姫は黒髪を海水の残る床に浸しながら、仰向けに横になっている。彼女の太ももの間に少女の指が進んでいく。彼女は身震いしながら、肯定するように頭を前後に動かし何度も角を突き出す。

「病み上がりなんですよ？」彼女は首をブンブンと振り黒い髪を踊らせる。床に円状の小さな波が広がっていく。「はあ」

「しよがないですね」少女は仰向けのまま頭を石床に下ろす。「終わったら、今夜はゆつくり寝てくださいね」紫の髪を床に浸し、大きく広げながら諦めた様に両腕を動かし始めた。「じゃあ、二人とも入れますよ」

飛行場姫は再び少女の方へと体を転がすと、少女の片側のふとももを股で力二挟みする。少女は背中側から手を回しこみ、再び飛行場姫のお尻を捉える。

少女は両手で器用に戦艦棲姫の前の穴をほじくり回し、もう片方は飛行場姫の締め付けのいい後ろの穴を強制的に拡張していく。

飛行場姫の後の穴に中指と人差し指を挿入させて、半回転を繰り返しながらゆつくりと最奥まで出し入れを行う。戦艦棲姫の膣肉を曲げた指でゴリゴリと責め立て軽く潮を吐かさせる。

「はあ」少女の三本目の薬指が挿入された。「結構疲れるんですよこれ」少し速度を上げて指の腹に力を入れて掻き出すような動作が、彼女達の腰を大きく弾ませる。「じゃあ4本目ですよ？」

少女の白い体に、両サイドからのしかかるように彼女たちは体を動かす。そのまま腰をくねらせ股間からの分泌物を少女のふとももに

塗り付け続けながら、少女の両肩にしがみつく。

少女は四本の指を固め、親指の付け根までを回転させるように何度も素早く動かすと、視界がぼやけ始めるような浮わついた顔で、二人が小刻みに小さく声を漏らす。等間隔の吐息が、楽器のように少女の両サイドから聞こえ始める。

少女の手首までが二人の体液に浸され怪しく揺らめく。まるで暴れ馬に乗っているかのように、二人の白い腰が大きく不規則に動き回る。

「五本です。いいですね？」楽しそうに目を細め、少女の口元が水平にわずかに開く。「知りませんよ？」

二人は答えるように、目を瞑り少女の両肩に強く抱き着いた。少女は強引に手首までをねじ込むと、力任せに体内を探る。

戦艦棲姫の体内で五本の指を開くと指の先端、第一関節までを折り、カギ爪のように乱暴に掻き乱す。拷問のようにガチャガチャと暴れまわる手の動きに、彼女は体を回復させながら口からよだれを垂らしつつ首を大きく振り回す。

目を大きく広げ声にならない声を出し、黒く長い髪がまるでモツプのように床を這いずりまわす。少女は中指だけを真っ直ぐ槍のように突き出し、最奥を無慈悲に突き立てる。

彼女の体が何度も脈打ち、少女の肩から離れ、釣り上げられ投げ捨てられた魚のように、体を床にはねまわさせる。口から零れ出る泡が次第に大きくなり、やがて動が鈍くなる。

飛行場姫もまた少女の手首が深く侵入し、体内を深く探られる。少女は手を大きく開くと子宮を外側から手の内側に滑り込ませる。

数センチを隔てて直接子宮を男性器のようにしごきたてる。彼女は下半身だけをブリッジをするように腰を上げながら少女の手のひらの形をわずかに腹に浮かばせ、瞳を最大にまで広げてパクパクと口を開閉させる。

激しい快樂が彼女から視覚や聴覚を鈍化させ、次第に世界を白く染めていく。少女のたなごころが彼女の腰を執拗に追いかけて、子宮をすり潰しながらの上下運動と、時折指を突き刺すように掴み上げる。彼

女を何度も死の淵へのやり取りへといざなっていく。

戦艦棲姫は無理やり刺激で起こされ、再び股を何度も激しく開閉させる。股間を激しく上下に動かし、目から涙をこぼしながら首を振って大きく声を出す。腰を落とす度に少女の手のひらが腹に大きく浮かび上がる。

強烈な快楽から逃げるように腰を上げるとまた、力尽き腰を落とす。それは、戦艦棲姫が動かなくなるまで続けられた。

「姉さま」

少女は片腕を戦艦棲姫の体内から引き抜くと、耳に口を近づける。疲れ果て深い睡眠をとるような長い息を確認すると、少女は床に腰を落とし手足をもぞもぞと動かす飛行場姫に向き直った。

「片手、空きましたよ?」

何度もイキ続け、すでに満身創痍の彼女に、口元をほころばせながら紫の濡れた髪を揺らし膝立ちで近づく。

「あ・うあ・」飛行場姫は涙を左右に伸ばしながら、プルプルと首を振る。しかし、少女は彼女の不ともにも、両足を乗せて拘束した。「ダメです」

一気に彼女の股に腕まで挿し込むと、彼女はその少し上の小さな穴から抗議の潮吹きを始める。少女は楽しそうにその強烈な潮吹きを腹で受け止めている。

拳を作り体内をゴリゴリ無思慮に暴れまわさせる。強靱な彼女らの体は強力な拷問のような動作すら耐えきらせてしまう。ゆえに少女は長く遊べるのだ。

強力な記憶が深く堆積して中毒性を産むのか、少女は巧妙であり巧みに対象を追い詰めていく。そして、ギリギリの時間を最大限に作り出し植え付けるのだ。

深海棲艦と呼ばれた彼女たちは、インドの水精アプサラスのように、美しく、全てをかどわかし、性別を超え、惑わす。その最上位に駆逐棲姫が存在している。

過去の経緯から少女は基本的に人に優しくないが、仲間が気になる

者には寛大な配慮により、恩赦を授けることもある。ゆえに彼は今なお辛くも生存している。

「あ・ああ・・や・・」

彼女はぐったりと目を閉じ、うわ言のように声を出す。腰からはとめどなく潮が吹き出て、今も腰が激しく動き回っている。差し込まれた二本の腕が彼女の上半身を芋虫のように暴れさせる。

手の甲が上部を圧迫し無理やり潮を絞り出させ、それと同時に腸内からの手を体内で張り合わせるように密着させ大きく振動させる。

「おや。もう終わりですか？」飛び散る液体が、顔に掛かる量が、いつもよりも少ない。「疲れに気付かないほど、疲れていたのでしょうか？」

少女は両手を股からズボツと勢いよく引き抜くと、持ち上がったいた彼女の腰が、石床に叩きつけられる。膝立ちでいる少女の裸体に全身粘性の強い液体がこびりつき、胸の間を辿る。

股間に薄らと生える少女の逆三角形の陰毛に二人の粘液が集まり、先端からドロドロと垂らしている。

「あ。お願いします」ふよふよと近寄ってきたタコヤキが頭上で下を向き口を開ける。裸でビクビクと横になる二人の間に腰を下ろし、アヒル座りに座る少女に海水が再び爆撃される。「いつも助かります」

ギザギザに閉じられた白い歯に
そつとキスをする。

「さて、と」少女は立ち上がると、体が大きくグラついた。タコヤキが丸く膨らむと少女の背後に素早く回り込み背中を押し姿勢を支える。「ありがとうございます。大丈夫です」

少女は背中に手を回し、頭をなでるように引き離す。心配そうに、ふよふよと旋回していたほかのタコヤキたちも離れて行ったようだ。

17 アプサラスII

「それで、こやつらはどうするのじゃ?」

タコヤキを愛でるように艤装に収容しながら、極めて小さな体系の深海棲艦が入口に立っている。

「ああ。『ホッポちゃん』ですか」

少女はびしょびしょに濡れカールするように垂れる紫の髪をゆつくり回転させながら、声の方へと顔を向ける。

白いワンピースを着た幼女が、インペリアルトパーズのような深く澄んだブラウン色の瞳で少女を見ている。背丈は低く、立ち上がった時の少女の胸元程度の身長しかない。

見た目は小型の飛行場姫を思わせるが、細く透き通る銀のエンジンルへアーを持つ彼女とは違い、こちらはホワイトライオンのような雄々しい白さを持つ長い白髪を携えている。

「楽しむのもよいが、そ奴らも疲れておるでな」幼女がポテポテと裸足で白い足を動かしながら近づいてくる。「そうですね。とりあえずは乾燥室にでも」少女は全身に力を込め、両脇に裸の彼女たちを抱え込もうとする。

「ふむ。こやつはわらわが運ぼう」

幼女は斜めに一本背負う飛行場型の艤装を下すと、体から大きくはみ出させて、飛行場姫を抱きかかえるように持ち上げる。

「アリユーションに現れた北方棲姫は、実の所年長組ではあるが、その体型から最弱棲姫と広く誤認されている。これは深海棲艦の拿捕を狙う輩から執拗に追跡されるが、常に戦艦棲姫が随伴して、敵を抑え込んでいたためと推測される。

また、これを利用して北方棲姫本来の能力を活用して、多くの釣り上げられた戦力比を誤った部隊を単独撃破に成功している。海底基地内でも彼女の幼女としての役柄が板についてしまい、体型のままの扱いをされている。

当の本人は楽が出来るならそれにこしたことはないというスタイルであり、大多数の深海棲艦にも潜水新棲姫とともに幼女として認知されている。

純粋なパワーバランスだけを考えれば、現在の海底基地の最大戦力は駆逐棲姫であり、続く戦力として戦艦棲姫、北方棲姫、飛行場姫と並ぶ。

人類側には、“双方の欺瞞工作”により駆逐棲姫の存在は秘匿され、最大戦力は飛行場姫、続く戦力として水鬼より弱体化した戦艦棲姫、北方棲姫として公式に認識されている。

飛行場姫が作戦参謀のように振る舞う姿がより錯綜をよんでいるのだろう。

敵方がすでに戦力を大きく落としている飛行場姫をいつまでも基準にして作戦立案していたことが、深海棲艦側の大きなアドバンテージになり常勝するきっかけにもなっていた。

艦娘付きの提督に覚えの少ない陸戦を強要する姿勢と相まって、戦線は一方的なこう着状態が続いた。現在では、敵連合勢力は成果の上がない進行・攻略作戦をすでに放棄している。

連合軍は基本戦略として深海棲艦の絶対数の少なさに目を付け、大陸ごとに膨大な数の艦娘を配備し、専守防衛の籠城戦を展開している。

彼女たちの勢力拡大には消極的な姿勢もあり、一部の主要島奪還作戦を除いては事実上の停戦状態が維持されている。」

「やはり、二人だけでは負担が大きいのではようか」

湿度の低いサウナのようなスペースにある長い石の椅子に、戦艦棲姫を横たわらせると背中を向けたまま少女が力なく呟く。

戦艦棲姫と飛行場姫が主に、“深海前線”の維持を行っており、口には出さないがかなりの負担がある事は想像に難くない。

「そうなの」

北方棲姫もまた、飛行場姫を反対側の石椅子に横たわらせた。石椅子から零れ落ちる彼女の腕を丁寧に胸の上に戻す。

「今宵は、わらわに任せておくがよい」

「ホッポちゃんか、すまない」

飛行場姫は、うつすらと、目を開けると全身の倦怠感から仰向けで天井の縦に倣うライトをぼんやりと見ながら言った。

「駆逐ちゃん。ありがと」戦艦棲姫は、持ち前の回復力ですでに体調を整えており、長椅子に裸のままスツと足を下し座る。「そうね。お願いしようかしら」

少女は手グシで彼女の長い黒髪を絡まないように、真っ直ぐになぞっていく。スルスルと指を動かし、サラサラと髪をほぐす。

「いたっ」「枝毛です」

少女が摘まむ指をスリスリと動かすと、先端が別れた黒髪が指に擦られクルクルと回る。

「二人間数十人程度が入れる、横長の小規模なスペース。薄暗く、天井には入口から並列に並ぶ小さなライトがあり、細い鉄柵が格子状に付いている。

中央には専用フックが多数あり乾燥させる必要のある艤装や、衣類などが干されている。

中央を挟み、石壁に沿って、発火の対策として石の長椅子が二つ並び。入口の扉には上下に中の状態が見えるように、隙間が出来ている。

入口の扉の内側には、エタノールげんきん！と書かれた貼り紙が、駆逐棲姫の愛らしい顔と人差し指を立てて注意するような仕草のイラストと共に貼られている。」

「ホッポちゃんが出るんですか？」

「今宵は雲も低く、声を出す程度ならわらわでも安心じゃて」艤装から、ギチギチとした白い歯が見え隠れする「こ奴らもおるでな」幼女はタコヤキの頭をポンポンと撫でながら言う。

「ん？」体の振動を覚え、北方棲姫は入口に目を向けた。「どうした？」

駆逐棲姫のイラスト付きのドアが開かれ、その前に潜水ソ級が立つ

ている。潜水用の艤装は付けていないので容姿は少し背の低い戦艦棲姫と言ったところだろうか。しかし、その瞳はブルーダイヤの如く深く冷たい。

「え？不審艦？」

戦艦棲姫が答える。海上に、上部を黒く塗り海面下は深い紺色に塗装された巡洋艦ほどの大きさの艦が一隻。深海前線圏内に向けてこちらの直上を通過するコースで微速前進しているらしい。

「私は知らないぞ？」三人の視線が飛行場姫に集中する。「家のご用達ではないはずだ」コロコロと背中を転がすようにしながら不貞腐れるように彼女は答える。

「なんじゃ、また痛めたのか」

コロロンと転がり背中を見せる彼女に、北方棲姫は細く小さな指で背筋をなぞるように、指を下から押しながらゆっくりと首筋まで動かしていく。

「年甲斐もなく無理をしよってからに」

「あんたに言われたくないわよ！」

飛行場姫は首を動かしキヤアキヤアと抗議するが、幼女の指に体を任せる。

「え？不審艦が攻撃を受けているのですか？」

「おかしいわね」

駆逐棲姫と戦艦棲姫が訝し気に言う。通常であれば、取り合えず沈めてしまえば良いのだが、状況を判断し辛くわざわざ相談に戻って来たのだろうか。

「分かんが、罨かもしれん。ほっとけばいいんじゃないか？」

「しかし、無事に通行できる」前例を作っては良くないのじやが」

「それを含めて二重の罨なのだろう？」飛行場姫と北方棲姫が事態の分析を始める。「来なければよし。来ればなお良しの二段構えだ」飛行場姫はニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべ始める。

「ほう。追撃は足の速い駆逐艦が4隻か。いずれも大本営属の。艦娘は艦載されているのか？」わからないが気配はないと彼女たちは答える。「久しぶりに人間相手か」飛行場姫は背中をさすりながら、楽しそ

うに目を細めた。

「ああ。いつ以来だろうか？」誰に答えを求めなくてもなく。一人思いにふける。「だとすればわらわでは荷が勝るか」

飛行場姫の様子を見るに、やはり先日のダメージが大きい。戦艦棲姫もまた反復攻撃をこなし疲労は多い。確認してはいないが、〃潜水艦〃による同時攻撃もありうる。

地上組の話では、ステルスとして潜水艦の〃箱〃に積載された艦娘が、基地直前で自爆したその潜水艦の中から、蜘蛛の子を散らすようにわらわらと湧いて出て来たとの話がある。

「おう駆逐。おぬしたまには〃羽を伸ばして〃きてはどうじゃ？」彼女の発言に室内の空気が変わる。「だめよ？また捕まったら、どうしてくれるのかしら？」「今のこやつを捕らえるのは貴様でも無理じゃよ」ブラウンの瞳を細め、戦艦棲姫を威圧する。

「それに、コレが知らんと言うのであれば、どれも沈めて構わんじやろ」飛行場姫を背中向きに押し倒し、馬乗りになると両親指でゴツゴツと背中を押す。

「知っておろう？駆逐の疲れの原因に、過度の禁欲によるストレスがある。駆逐はお主の〃鬼〃を飼っておるでな」遠く前、壁の遙か先を見ながら北方棲姫は呟く。

「のう。駆逐」北方棲姫は石床に降りると、小さな白い脚を動かし、駆逐棲姫に近づく。「わらわも疲れた」白い手が伸び、少女の手を優しく包む。「そろそろ、世代交代じゃ。お主と、上の連中に任せてみたいと思うでな」

その瞳は濃く、上質な紅茶のようなブラウン色を示す。

「今朝は赤潮が出ておつてな。外に出て夜光虫も見ればキレイじゃぞ？」そこに居合わせた全員から、少女に視線が集中する。

「あくあ。私も疲れたなあ」言葉に詰まる少女を助けるように戦艦棲姫は細く伸びる白い脚をパタパタ動かし言う。「駆逐ちゃん変わってくれるかしら？」

「ああ。私も腰が痛くて思うように動けないようだ。すまない」「わらわ。幼女ゆえ。重火力相手はちと手に余るのう」いたずらに片眼を細

め、幼女は少女に笑いかける。

「私は、姉さまの面倒だけで忙しいのですが」乾いた紫の髪が温風に乗
りふわふわと動く。「皆さんがそう仰るのであれば」

少女は両ももに力を込めて、石床に降りる。少女の脚が、艀装が答
えるように力強さを増していく。

「む」北方棲姫の艀装から様子を伺うようにタコヤキが顔を出してい
る。「なんじゃ?」一つ取り出してやると、小型化しふよふよと少女の
周りを旋回する。

「一緒に行きますか?」

「そうだな。お前の随伴はそいつくらいしか無理だろうしな」飛行場
姫が手にタコヤキを乗せる少女を見ながら言う。「自立では精密攻撃
や航空戦は無理だが、高高度偵察くらいには役立つだろう」

やる気の表れか、何故か赤く色を変えた一つのタコヤキに、飛行場
姫は寝取られたような気持が芽生えムスツと続けた。

「ブリーフィングの時間は作れなそうだが、せめてわらわの食糧庫か
ら必要分を食べていくとよい。おぬし草食動物ではあるまい?」「あ
りがとうございます」少女は紫の髪をふわふわと揺らし乾燥室から出
て行った。

「すまんが、出来る範囲で駆逐の随伴を頼む」居合わせたソ級。様子を
伺っていたヨ級に北方棲姫が頭を下げる。「何かあれば総がかりで出
撃するゆえ、有事の際はくれぐれも伝えておくれ」

「そうね。何を考えているのか知らないけれど。ちっぽけな列島の
つや二つ簡単に沈めてあげるわ」

戦艦棲姫の赤い瞳が怪しく歪む。その姿はソ級、ヨ級の体を身震い
させるほどだった。

「あやつは奪還する価値はないのじゃろう?」「そうだな。殺そうとし
ていたくらいだし」「ではやはり、罨かの?」「ブラウンの目を細め、小
さな指が白い髪を垂直にほぐしながら言う。

「敵もまさか駆逐の奴が出てくるとは思わないだろうなあ」コロコロ
と背中を石椅子に擦りつけながら、ニヤニヤと笑う。「気の毒な奴ら
だ」

「樂觀しすぎよ？私、駆逐ちゃんに何かあれば、この星と無理心中するわよ？」

「やめろよ」淀んだ赤い目を細め二人を睨みつける彼女に、間髪入れずに飛行場姫が答えた。「お前のは冗談に聞こえないんだ」「あら、どうかしら？」

石椅子から立ち上がり、乾いた黒く長い髪を手で大げさに舞うように広げると、そのまま乾燥室を出ていく。

「あやつの過保護はどうにかならんもんかの？」怒らせた駆逐ほど怖いものもないだけだなあ」二人は疲れたように顔を見合わせた。

「おぬしらも食べていくとよい。場合によっては、しばらく食べられなくなるじゃろう」

入口付近で棒立ちしていた二名に、幼女は飛行場姫の長く細い髪を真っ直ぐにほぐしながら優しく言った。

少し風がある月夜。低く暗い雲が海の暗さを増し、夜光虫が海面を仄かに明るく照らす。前後左右パノラマに広がる暗く深い海は、騒めくように紫の髪とシトリンの如く黄色い瞳を持つ少女の足裏を支えている。

いつもの黒く短いセーラ服が闇夜に交じり、少女の肌に黒と白のはっきりとしたコントラストを作り上げる。

「ああ。ありがとうございます」

食事中に先行してくれていたソ級とヨ級が前方V方向に広がり、水平線手前で防水加工された光源を手に持ち針路を照らす。何年ぶりかの実戦であり極力消耗を避けるための配慮だ。

「あなたはここへどうぞ」少女は胸元の服を引っ張ると、小ぶりの胸の谷間にタコヤキを格納する。「潰れないで下さいね？」

少女は月光が雲を抜け斜めに降り注ぐ海の上、両手を大きく後ろに伸ばし伸びをする。足の接合状態を再確認すると、進行方向へ向かい海水にくるぶしまで足を沈める。

「では、久しぶりに羽を伸ばすのでしょうか」

少女の海面に浸された足から、つがいのヒレが伸び海面を舐める。

「フィンスタビライザーと呼ばれる船の翼は、本来は船体の姿勢を制御するための物であるが、少女の携えるそれはさらに多くの用途に利用される。航空機の高揚力装置のようにも動くそれは、脊椎反射の如く反応し少女の速度に良く答える。」

捕まらないようにするにはどうするか？捕まらないほど強くすればいいとの単純なコンセプトから生まれたこのシステムが、結果、少女を深海棲艦最強に作り替えた。

少女に渦巻く深い怨念が力を生み出し、分解吸収した戦艦水鬼と駆逐姫自身の二人分の心がこれを抑え込んで力を行使している。

小火器を用いることもあるにはあるが、少女にはもはや武装はいらない。少女自身が武装であり。その速度こそが最大の武器である。」「

「果敢積極機先を制し、敵を粉碎せずんば已まざるべし」

飛行場姫が良く口にしていた言葉が自然と滑り出てくる。少女の口から。『駆逐水鬼』の口元から。瞬間スカートが大きく上昇気流にもまれ捲り上がりながら大きく踊る。紫の髪が重力と拮抗し水平方向へとその手を伸ばしていく。

「夜の闇はね。とおっても怖いんですよ?」

少女が滑り出した。蠢く海面がざわざわと光る。雲が熱くなり、深い闇の中、はるか先に揺られるように光源が見える。10ノット。20ノット。50ノット。

少女が水鬼であることを前提にした超加速が、後方に水しぶきを上げながら、少女を前方に強く押し出す。フィンスタビライザーは順調に機能し前方に傾斜する体を飛び上がらせないように正確に海水を支配している。

100ノット、200ノット。爆発的な加速が後方にV字型に風の谷を伸ばし中心に乱気流を作る。小竜巻のように少女の後方に海面を暴れさせる。

「怖くて。。怖くて。。」

100ノットほどのところから少女の体に掛かる風が消える。駆逐水鬼は戦艦棲姫の得意とする低周波を使役し、負担は大きいながらも前方に傘雲のような空気の層を作り上げている。

500ノット。空気圧の過負荷から逃れた少女の体には更なる加速力の権利が得られる。数分で針路を照らしていた彼女らを追い抜き、その進行方向へと更なる加速を行う。

黄色い目を細めその瞬間を楽しむように待つ。600ノット。ここへ来てその加速力が衰え始める。代わりに前方が赤く歪み始めた。「潰れていませんか？」

少女は前方を見ながら谷間でコロコロと動くようにもぞもぞしているタコヤキに話かける。速度は650ノットに差しかかり、前方がついに発火した。

中心から渦を巻くように広がる赤い光源が少女の瞳を照らす。超圧縮された空気の層が音速に接触し燃えがったのだ。

対気速度マッハ1。少女の機装はもはや体の一部であり、非公式ながら全生物上、世界第二位の速度をマークする。

公式記録では第一位は1,316km/hをマークしたハエであり、こちらは単独にしてマッハ1.1の速度である。いかに深海棲艦と言えど、その強靱な体を持ってして、音速の前後が速度の限界であった。

「ふうん？どうしてでしょうね？」

強烈な速度で近づく“火の玉”を彼方に観測した駆逐艦は全艦で一斉反転を行い当海域からの離脱を始めたようだ。しかし、件の不審艦は黒煙を上げながらも針路を固定している。単に舵をやられただけの可能性もあるにはあるが。

「撃つて来ませんね。なんででしょうね」

相手が巡洋艦であれば既に有効射程圏内に入っているはずだが、攻撃が来ない。あるのは逃げ始めた駆逐艦からの後方へのけん制主砲射撃だけだ。

少女は訝し気に思いながらも不審艦から距離を空け、引き波の影響を少なく通過する。その際にも甲板員からの射撃もない。

「いつてらっしやい」

胸元から取り出したタコヤキを空に流すと一気に後方に離れていく。膨らみ威嚇するように不審艦の方向へカチカチと歯を鳴らして近づいて行くが上空を旋回するタコヤキにも一切の攻撃が加えられないようだ。

「不思議ですね？」少女の黄色い瞳が前方を捕らえ怪しく光る。「そうです。よく狙ってください？」

甲板上から伸びる複数の赤い線が少女の前方の火球を捕らえた。バラまかれたミサイルの束や、海面近辺を浅く威嚇するように爆発する爆雷が、少女への針路変更を強要する。

「ダメです」

不敵にも真っ直ぐ前進を続けた少女はついに駆逐艦の舷側スレスレを通過する。

一隻の駆逐艦は鈍い地響きのような音を上げ、側面の装甲が内側に振じり曲がり多量の海水を侵入させ傾斜を始めた。続く3隻目に狙いを定め、その火球が通過するさいに片側を大きく削り取った。

破損箇所が海面から高く浸水はしていないものの、こちらは内装に着火したらしく、中の者が滑稽にも切れ目から家財を投棄しているようだ。

「なんとも脆いお船ですね」

高速で通過した少女は、大きく距離を取り両足をスキーでカーブするようにそろえる。400ノット程度に速度を落とし、火球が消えるのと大きく旋回して再び針路を駆逐艦に固定した。瞬間視界が揺れる。

やはり不慣れな最大稼働は長時間続かないようだ。紫の髪が水滴を光らせ後方に大きく広がる。

「もう少し撃たせないと、ですね」

少女の狙いは新しい漁礁の確保であり、そのためには危険な爆発物を極力消耗させたい。最大深度150M程度ある大陸棚上であるため海底には遮蔽物が少ない。ここに上がってきた深海魚などを住み

着かせる予定だ。

「そうです。もつと撃つて下さい？」

誘うように低速で前進し、周囲に大きな水しぶき上がる。随伴していた、ソ級とヨ級もやがて追いつき、海底からジャミングを行い強制的に通信を途絶させる。

飛行場姫の航空攻撃に特化されていたであろう対空兵装は、海上を突撃してくるだけの少女を止めることは難しい。揺れ動く波を台に時折少女が高くジャンプを行うと、つられるようにランチャーからミサイルが吐き出される。

「これで終わりですか？」

少女は両腕を頭の上に大きく伸ばすと、飛び上がった姿勢から海へと深く早く潜る。魚雷のように泡が体を包み、高速で前進していく。ワザと必要以上に泡を立て、爆雷を誘う。

駆逐艦が自爆をかえりみない浅い深度で、次々と爆発を起こさせている。ついに衝撃が少女を捕らえ海上に弾き出した。二隻の健在な駆逐艦が針路を大きく変え少女に回り込む。

【深海棲艦が現れて以来、新設計の艦艇は対艦戦を想定しておらず、舷側の装甲を削り取り昔の帆船のように多くの砲塔が側面に設置されている。一部では装甲が開き、人が直接射撃できるようにもなっている。

これは従来の艦船では下方に回り込まれ、その巨大さが災いし、一方的に攻撃を受けたり、誤射による同士撃ちを行うなど混戦を極めた事から教訓を得ての再設計である。

また対象が小型かつ高速であるため近接信管の信頼性が薄く、旧来の時限設定式の炸裂弾が採用されている。

砲塔が一定の大きさからは、ファイアーワークスの名で設計された新型弾頭が搭載されており、弾頭内部に子爆弾が内蔵されている。

上空に撃ちあげれば花火のように広がり、前方に打ち出せば本体の爆発後に扇状に広範囲に攻撃が届く。さらに小型化された歩兵用の迫撃砲があり、こちらの弾頭にもファイアーワークスSが採用されて

いる。

ファイアーワークスSの射程距離は弾頭の重さから短く、条件次第では1km届くか届かないかの至近戦になる。

しかし、肉弾戦を好む深海棲艦は多く、数さえそろえれば面攻撃により多くの場合「撃退」に成功している。屈強な兵士二人がかりで運ぶ代物ではあるが、人の扱うもつとも信頼性の高い兵器の一つでもある。」

打ち上げられた体を羽を広げ空中でスピンをするように姿勢を直す。少女の黒いセーラー服が探照灯に追いかけられ、複数の艦からのライトが交差するステージの中央で、少女が笑う。

紫の髪から海水をほとばしらせ、着水と同時に左右に滑るように迫る火線から体を逸らす。回避のために100ノット程度に速度は落ちているが、それでも脅威の速度であることに変わりわない。

「あら、花火ですか」

少女の前方向上空にファイアーワークスが打ち上げられる。全周囲に爆発し小さな子爆弾の雨を降らす。

「まだこんなものに頼っていたんですね」飛行場姫のタコヤキ対策としても効果の高い兵器ではあったが、弱体化している飛行場姫すら沈められない貧弱さだ。「お可愛い事です」

「腰を痛めた飛行場姫さんなら当たりもしたのでしょうが」

少女は足を海上に戻すと、深海棲艦おなじみの戦闘スタイルで1海里ほどの距離を保ち駆逐艦群からの攻撃を誘う。

4隻から果敢にも打ち出される花火が夜空を飾り、降り注ぐ「火の弾」の中を少女はクルクルと回るように回避している。

追いかけられるライトの中、火の弾は時に少女の頬を擦り、服を焦がし、左右になびく紫の髪を短く変えていく。

頃合いを見計らい、太もみにガーターベルトのように付けられた信号弾に手を掛けると、暗い夜空に一筋のオレンジの閃光が昇っていく。少女は再び海水に足を沈めた。

「闇の中で沈んでください？」

降り注ぐ花火がついに大気バランスを崩し雷雨を呼ぶ。雷鳴が波を渦巻かせる。少女の元より短かった衣類をさらに短くさせた紫の下着が上下とも多く露出している白い体を、まるでダンスホールの如くなんどもフラッシュする。

浸水していた一隻は、戦列から大きく脱落しすでに置き去りにされていた。残る三隻に再び距離を空けるように加速を始める。

「やはり艦娘の気配がしませんね？」ソ級とヨ級に海底の潜水艦の捜索を指示したのだが。特に返事もない。「本当に何でしょうね？」

駆逐水鬼の意向に合わせて、駆逐艦の艦底を舐めるように潜水組が遊泳し、残る爆雷の消耗を強要する。

「さて終わりにしましょう？」接敵から数十分。少女は余りに不甲斐ない敵勢力に飽きてしまった。「花火はキレイでしたよ？」

400ノットほどに達したとき、大きく弧を描くようにカーブをしながら反転し、火球の速度まで加速する。残る駆逐艦の側面がすべて開き、中に立つ人が悲鳴を上げるように赤い光の線を飛ばしてくる。

逆巻き荒れる海面に赤い火球が滑り、何かを喚き散らしながらフアイアーワークスSを果敢に兵士が撃ち込んでくる。少女は口元を水平に小さく開くと、戦列の先頭から艦の側面をえぐり取る。

次々と傾斜浸水する艦に合わせて、脱落していた艦も「無事に」沈められたようだ。爆発を起こさず回転するように浮力を失い沈んでいく。

甲板に乗せられた弾薬がコロコロと海にばらまかれていく。パラパラと人が零れ落ち、オレンジの救命具を付けプカプカと浮かび上がる。

海面をゆうゆうと歩く少女に、恨むような、すがるような視線が集中した。

「追撃は断乎として飽く迄も徹底的なるべし」彼女が、飛行場姫が拾った言葉が巡り巡り彼らに戻ってくる。「お庭に入ってきた害虫はどうしますか」

大きな声を出し両手を広げゆつくりと回る。深い闇の中黄色い瞳が揺れ、雷鳴が少女のシルエットを照らし出す。凍えるような寒気が

世界に広がる。

「増える前に駆除しないといけませんよね？」

艀装の力を抜き体を海に沈め、首だけを揺れる波に浮かべる。ゆっくりと浮かぶ者たちへと近づく。恐ろしい力で衣類を剥ぎ取り、力任せに次々と沈めていく。

「お友達のご飯の時間です」

勢い強く白い体のサメが、荒れ狂う海面に一斉に飛び出した。体温を海水に合わせた少女の周りにグルグルとサメの群れが旋回を始める。近づく一匹のサメの顔の先端を撫でてやると楽しそうに海へと沈んでいった。

潜水組により、低周波と「エサの人」で誘引されたサメの一群が、沈められた人の塊に殺到する。

「人は食べる所は少ないんですから、飛び上がるほどエネルギーを使ってはだめですよ？」別のサメが少女の体にベタベタと冷たい体をすり寄せてくる。「ありがとうございます」

ソ級が顔を出し

呼吸器のようなものを手渡してくれた。

「エッチなサメさん。あなた奥さんいるでしょう？」エコーのように低周波をとばし周囲を確認すると身重のサメが様子を伺うように旋回しているようだ。少女の指がオスの突起を摩ると海面から顔を出しカチカチと歯を鳴らしている。「メッ」

少女に指で弱点である顔の先端を弾かれると子犬のように尾を振りサツと逃げ出した。

【深海棲艦が餌付けして、事実上飼育されているこのサメの一団は、本来の原住民であり海底工事の際に個体数を減らさせてしまったために、時折人などを与えて保護をしている。

鮫とは読んで字の如く性交を行う魚であり、また知能も高い。グループ単位での行動を熱心に睥けたため大型のシャチの群れと遭遇した際にもそこそこ縄張りの維持が出来るようになった。

潜水組が「原住民」同士の争いの仲裁を行っており、低周波や特殊

な音響爆弾を駆使してシャチ・クジラ・サメそのたの大型水生生物の対立の激化や直接の大規模戦闘を回避させている。その活動は海底警備隊と言ったところだ。

熱心に捕食するグループが増えた事により小魚などから抗議の声が上がる前に、戦艦を漁礁にするべく当海域に原形を留めさせたまま数多く沈没させている。ただ沈めるだけよりもその負担は大きく統治者のジレンマの一つである。

余談ではあるが、その食物連鎖の最上位に君臨するのは戦艦棲姫である。彼女の遊泳中は治外法権であり彼女に見つかった生き物は瞬く間に捕食される側になる。

彼女の独特な低周波を検知するやいなや一目散に全ての魚が当海域から離脱したり沈船の漁礁に隠れるのだが、哀れにも迷い子のように浮上してくる深海魚にはその知識はない。」

赤く変わり始める海水に、少女は顔を付けゴボゴボと気泡を吐きながら海中に潜ると、躡けられゆつくりと近づくとサメたちがガブガブと沈められた人間にかじりついている。どこか不満気なのは少女の気のせいではないだろう。

「もつと肥えたのはたまにしか捕れないですよ」ここでは基本的にただでさえ可食部の少ない人間が、さらに絞りあげられ筋肉繊維の多い個体ばかりが捕れる。「弱らせてあげますからゆつくり食べてくださいね」

海上に逃げ出そうとする裸の人間を捕まえては、打撃を与え弱らせ沈める。バカみたいな個体数だけはある人間よりも、本来ならばアザラシなどの油分の多い肉を与えたいところだが、あいにくこの温帯では確保は困難だ。

艦娘も与える前に戦艦棲姫が食してみたのだが、生き物が消化できる素材ではないらしく、彼女ですら吐き戻す事態になってしまった。処理にすら困る艦娘とはどこまでも厄介な存在である。

「食べたらずくエッチですか？しょうがないおちんちんですね」

美味しくないエサを完食したご褒美を貰おうと、オスのサメが少女

の白い体に黒いセーラ服越しに腹部を擦りつけてくる。

少女は火傷をさせないように意図的に体温をさらに下げると、両足を回しこみふとももで2本の生殖器を挟み込みながら尾びれにしっかりと絡みつく。

2 m以上はあるオスサメが、血のしたたるグロテスクな口をパクパクと開閉させ根元を両足でホールドされた尾びれを犬のように激しく振り動かす。暗い海中に多くの気泡が生まれる。

呼吸器を外すと、少女は抱き着くサメの腹部にそつと噛みついた。口で姿勢を固定すると太ももで挟み込んだ生殖器に素股をしてやりながら、両手を広げ尖る先端部分を両手で激しく手コキする。

噛みつき行為は本来オス側が行うものであるが、体格差もあり少女が固定の為にしている。この海域の多くのオスサメの腹部には戦艦棲姫以外の深海棲艦の歯型が複数存在している。

駆逐棲姫が最も人気があり、他のメスと性交中のサメですらメスを投げ出しておねだりを始めるオスが現れるほどである。

—何だか今日は忙しいですね。

少女は事の発端であるわんわんを思い出すと少しうんざりとするが、戦艦棲姫が気に入っているようなので、仕方ないからしばらくは一緒に面倒を見てやるかと気持ちを持ち直す。

足の翼を格納すると、瞳の色が紫に戻り始める。少女に柔らかさが戻りオスサメが喜ぶように腹部をさらに擦りつけてくる。

—はいはい。良い子にはご褒美ですよ。

ご褒美用の緩い低周波でトントンとサメの体を振動させながら腹部に甘噛みをする。

太ももの押さえつけと巧みな指の動かして2本同時に性交を経験させてくれる少女の腕前は経験豊富なオスサメさえも5分と持たずに少女の指の中に多量の精液を放出させる。

拡散する出力の低い優しい低周波はご褒美の合図と躡けてあり、様子を伺うように人懐っこく腹を見せて、少女の周りを順番待ちをするオスたちがグルグルと周囲を回っている。

順番を待ちさえすれば、鼻を虐められることはないので素直に待つ

ている辺りが可愛く、すぐに喧嘩を始めるシャチ達よりも少し少女には鼻屑にされている。1時間近くオスサメ達の相手をする、今だ雷雨の続く海上に少女は顔を出した。

「燃費が悪いですね。少しお腹がすいてきました」

雨で精液の付着する体を洗い流す。少し焦げて短くなった肩ほどの高さの紫の髪は、ストレートに垂れ顔にべったりと密着する。首を振って髪を広げた。

「ああ。タコヤキさん。どうでしたか？」

上空を風にもまれ旋回していた赤いタコヤキが小型化し少女の肩に降り立った。雨も落ち着きを見せ始め、薄まった雲の隙間からわずかに星の光が降り始める。肩のタコヤキを摘まみ、胸の中に格納する。

いつでも羽を開けるように体制を整えながら、いつものゆっくりとした巡航速度で不審艦に近づいて行く。引き波もなく停船しているようだ。水を得た紫の髪が僅かに後方へと伸びる。海面を滑りながら適度に当たる夜風が心地よい。

「おや？」

接近すると探照灯のようなスポットライトが少女を捕らえた。目を細め自然と艤装に力が込められる。続き、ライトが船尾を照らす。その先に視線を凝らすと、マストに高く掲揚された旗に見覚えのある顔が描き出されている。

「ああ。潜新ちゃんでしたか。わんわんは関係なかったんですね」

先日捕獲した提督を利用した、何らかの作戦行動と予測していたが、当てが外れたらしい。追っていたのが人間だけの駆逐艦というのも合点がいく。

「とは言え」少女は、潜水組の肩を足場に借りて高くジャンプする。「警戒しない理由にもなりません」

少女は羽を開き、乱気流を作り鋭く空中でスピンしながら、月光を背景に水しぶきを派手に飛ばす。着地前に翼を格納すると、新体操選手のように華麗に不審艦のデッキに降り立った。艤装の足の衝撃でデッキに少し歪みが出る。

「こんばんわ？」

顔をこわばらせる数名の青年兵士に向かって、紫の瞳の少女は無機質に笑顔を向けた。日の出までまだ3時間ほどあり、深い闇と温かい風が甲板を滑る。

少女の後方には胸の谷間から飛び出た赤いタコヤキが威嚇するようにかちかちと歯をならしている。

甲板を見渡すと闇夜に紛れる為か、全体的に黒く少し乱暴に塗装されていたようだ。大砲などは除去されているようで、甲板は滑走路のように広いスペースが広がっている。

艦の側面には先程照らしてきたライトが複数台設置されている。機銃の先端にはコルクのような物が詰められたままの物もあり、お世辞にも戦闘艦と呼べる代物ではない。

どちらかと言えば展示されていた船を無理やり走らせてきたと言った様子だ。撃たないのではなく、撃てなかったとの理由もあったのだろう。

青年兵士の顔を紫色の瞳を凝らし見てみると、どこか頼りない印象を覚える。着地前に見えた艦尾からは、目に見える大きさと鉄をひしゃげさせた穴から白い煙が昇る。

マストに照らされる潜水新棲姫の顔を見え隠れさせていた。大方の予想は付いたが、少女は警戒したまま甲板を艦橋に向かい歩き始める。

後甲板にダメージを受けてはいたものの、付近に“残存敵勢力”は認められず、艦に残された全ての照明が点灯する。

少女の黒いセーラー服は先程の戦闘で損傷し、紫の下着が上下とも露わになっていた。オスの絡みつく視線を、歩きたびにめくれ上がり濡れた紫の下着が浮き上がらせるお尻の隙間に感じながら、気にもとめない様子でゆっくりと艦橋に近づく。

「失礼しましたー」商業船の船長の格好をした男が、艦橋横の鉄の扉からばたばたと飛び出てくる。上から走って下りて来たのだろう、彼は息を切らせながら両膝を掴む。「ご用件は？」

少女は紫色の目を細め男を冷たく威圧する。広がる空気が周囲の者をも巻き込み、遠くで嘔吐しているかのような、嗚咽も聞こえてくる。

噂には聞いていたが、実際に深海を体験してみると体は震え、僅か

に開いた口が振動する歯の音を奏で始める。

「あつ・・・の」男は青ざめた顔で少女を見るが声が上手く出てこない。「通行許可を求めているわけではありませんね?」「ひこっじょう・どっのに・・・お会い・したく」彼は体を起こし声を絞り出す。

「私が『飛行場姫』です」

少女は圧倒する空間を緩めてやると、紫の髪から垂れる海水を肩に受けながら言う。

「こちらの」咄嗟に上着の内ポケットに手を入れると男は凍り付いた。脳裏によぎる。数秒先の光景が。攻撃すると取られたろうか。だが少女は意に介さず佇んでいる。「ピクチャーです」

震える声を先に出し、男はゆっくりと胸の内側から手を滑り出す。「ローレライ様から」彼は顔を爬虫類のように無機質な表情の少女に冷たく見つめられ、小刻みに絵を揺れ動かす。西洋からわざわざ。と、少女は少し呆れたように手を伸ばし受け取る。「こちらをお渡しすればよいと・・・」

白い紙に描かれた手書きの絵には、団子のように丸い顔をしたベビーコーンのような角が付いている飛行場姫が描かれている。右下には「ろーれらい」と書かれた平仮名とピースサインをしている手の絵がある。

夜間戦闘にも耐えうる視力の為、少女の少し上から全体を除いていた赤いタコヤキが、その絵を見てカクカクと笑うように顎を開閉させているようだ。対照的に、少女は少し不満げに紫の垂れる髪を耳の後ろに片手でかき上げている。

「他にもありますよね?」紫の瞳が少し目線が上にある男の、若干ブルーな目を見据える。「はっ・・・あの・・・」背筋に寒気を感じながら、口の中が急速に乾いていく。

「だしてください?」男の瞳の中が震え観念したように、再び胸元に手を入れた。「こちらはフォトです」取り出そうとする手が止まる。

「飛行場姫様へ」と男は念を押すように声を出す。「はい。どうぞ?」震えの手の中には数枚の写真が握られているようだ。青ざめた顔で男は写真を手渡した。

そう。あの子は悪い悪戯が大好きな“ことう子”だから。紫の髪が水気を落とし、夜風になびき少し楽しそうに揺れている。恐らく少女ではなく、ろーれらいご指名の飛行場姫でも同じことをするだろう。

二人の性癖は近いものがある。

「この写真は何ですか？」

少女は股の奥の疼きを隠しながら、裁判にでもかけているように極めて冷酷に、事務的に言葉を発する。海温に合わせた低い体温のため、少女の胸の下着を押し上げる二つの突起は初めからある。

全体的に湿り気を残し依然として海水を垂らす短くなつたスカートから激しく露出した股の布地は、股の奥からの粘り気のある分泌物を隠すのに十分機能している。

周囲で様子を伺い、恥かしい姿の少女の全身をしつかりと凝視し、刺さるような恐怖の中、股間を膨らます男たちにはその少女の変化に気付く者はいないだろう。

真正面で対面する男もまた、言い訳を考え思考の迷宮に囚われている。楽しめそうだと言うように、少女の口が僅かに水平に開いた。はやる気持ちを押しえるように息を小さく長く吐く。

「これで全部ですか？」少し目を大きく開き、わずかに手を震わせながら冷酷に問い詰める。「・・・まだ・・・ござい・・・ます」そうだ。必ずある。全員分。

「やった者をすべて甲板へ集めてください？」

「ですが・・・航行が」

少女が片手で指を鳴らすと、タコヤキが急上昇し力チ力チと歯を鳴らし始める。合図を受けたかのように艦首に振動が起きた。

「本艦は拿捕されました。あなたには選択肢が二つあります」紫の瞳が男を冷たく見上げる。「私に従うか。沈むか」「直ちに集めます」

彼は先程沈んだ駆逐艦4隻を思い出す。新鋭ではないが後期生産型の対深海棲艦用の艦艇が、瞬く間に沈められていたのを艦橋から見ていた。

【二】大本営は、新鋭艦と新兵器艦娘との共同攻撃により、深海棲艦との戦争で拡大した戦線を押し戻し、ついに敵の主戦力を海中に撤退せしめたと同盟各国に吹聴していたが、先ほどの戦闘を見るに大きな疑念を抱く。

彼には艦娘との接触こそなかったが、果たしてアレを止めることが出来る戦力が人にあるのかとの。

人には比較的友好的である潜水新棲姫との接触を最初に行つてしまつた彼らには、深海棲艦の本質を見誤させられたのも無理はない。

彼女は西洋において、気まぐれで人命救助もしているため、大本営発表による敵勢力の不当評価も相まり、西洋では深海棲艦全体に多くの誤解を持っている。艦娘さえ増えれば『不遇な生い立ちの彼女らも、いずれは人に属するだろう』と。【一】

艦橋に戻ると、彼は直ちに真鍮色の太いパイプのような伝声管の蓋を開け、大声で全乗組員に号令をかけた。艦橋から数回ドラの音のよな音を響かせると、忙しなく彼自身もデッキへと駆け下りていく。

総員退艦を思わせる内容に、男たちが足早に凍えるような寒気の待つ、前甲板の広大なスペースに集まり始める。

「お許しくださいー！」

再び照明を落とし甲板に出た者達が星明りに目が慣れたところ、事情が分からず団子のように集まつた、怯えた顔で男達の前に少女が立つ。

船長風の男は一人前に出ると少女の言語に合わすように言いながら、膝と頭を冷たい鉄に付けた。少女の作られた白く固い足指が、頭を地面につけている男の背中に乗せられる。

「言いなさい。彼女に何をしましたか？」

彼は顔を上げ、僅かに違和感のある白い脚から上へと少女を見上げると、体型よりも遥かに大きく少女を感じる。男が顔を上げると、背中からずり上がった少女の足が男の肩に乗り、強く踏み潰した。

少女の片足が上がり、紫の下着の中心から垂れる水滴が男の顔にかかる。異常な状況に、恐怖の中、男たちは股間を膨らませて少女に気

付かれまいと、もじもじ脚を擦り合わせる。

各々に勃起している股間部分を隠すよう努力しているようだ。少女は横目でそれを確認しながら続けた。

「小さなお口に、おちんちんをねじ込ませ」グリグリとかかとかが肩を圧迫する。「喉の奥でシゴかせた」

肩に乗り前後に動かされる少女の片足が、水気を帯びた紫の下着を股間に張り付かせ、わずかに生える紫の茂みと経験豊富な少女の女を見え隠れさせる。

「しつかりと、ぶっつくんさせました」

男は無言のまま足蹴にされ続け、ズボンに盛り上がりを作りながら、ギラギラとしたブルーの瞳で少女の股間を凝視しつつ、少女の詰問を聞いている。

周囲に集められた男たちもまた、自分の事のように波が艦を洗う音に混じり甲板に響く少女の声を聴いている。

少女の手の中には数枚の写真がある。全て別の男が、幼い女の子の口の中に、男の肥大化した性器が頬を膨らませるまで喉奥に挿じり込ませている写真が。

小さな女の子の幼い顔が、男の陰毛の中に埋め込まれている。顎を上げ写る喉は、半分ほどが僅かに男の形に膨らんでいる。一見幼女の頭を押さえつけ、食道までレイプしているかのようだ。

実際には、その特殊能力でレイプされているのが男の方ではあるが。絶命するほどの快楽を受け、本能からその頭を押し、外そうとしている所だ。

「なんですか？その股の膨らみは。ふざけているんですか？」

彼は膝立ちのような姿勢で上半身を起こしていたため、船長のような白いズボンが引きずられ股間の膨らみがより鮮明になっている。咄嗟に両手で隠した。

「手をどかしてください」憐れむように蔑むように冷酷に言い放つ。「そうです。そのまま腰を落としてください」少女はゆっくりと息を吐き楽しむ。

「どうしました？」

肩から下りた片足が、男の両足の間に乗り、体重が乗っていく。音の表情が歪み始めた。事情は知っているため彼の待つ質問は与えてやらない。弁明の機会を持たぬまま男は様子を伺うように黙秘を続け少女の重い足に責め立てられる。

遊びである少女と艦員の命を預かる彼とでは、その真剣度に違いが出るのは当然だ。彼には選択を誤ればあの駆逐艦のようになると、常に背中には冷たいものが流れている。

なぜそうなったのかの問いを待ち、弁明するためあらゆる問答を考える。また深海棲艦の知識に乏しく、不幸にも少女が飛行場姫が変体した姿なのか、あるいは別人なのかさえ判断がつかない。

ゆえにうかつな質問で彼女の機嫌を損ねさせれば身の危険に直結すると身を引き締める。

深海棲艦は単独にして、天災級の災厄を持ち合わせるとのゴシップを読んだことがあるが、東洋のジョークはユーモアが効いていると昨日まで笑い飛ばしていた自分たちが呪わしい。

太平洋上で強国の第三艦隊が蒸発した話も、あるいは真実だったのかもしれない。少女の戦闘能力を考えれば、十分にありうる話だ。

「これは、良いおちんちんですか？それとも、悪いおちんちんですか？」

少女のかかとに力が入り、男の股の間を強く甲板の黒い鉄に押し潰す。かかとを軸にゴリゴリと何度も足を半回転させる。男の顔が引きつるように歯に力を入れてうめき声を漏らしている。

「良いおちんちんですか？」足を持ち上げ「悪いおちんちんですか？」冷酷に振り下ろす。「答えるまで続けますよ？」再び足が上がり、一気に踏み潰すと足を振じる。

「悪いおちんちん？」

「・・・悪い・・・おちんちん・・・です」

再びより高く足が上がっていくと、怯えるように男は答えた。足が振り下ろされ、甲板に鈍い音が響く。男は小刻みに呼吸を速め、少女

の白い脚をただ見つめている。

「素直なのは良いことです。ズボンを下して？」

男の股間直前に振り下ろされた凶器は、甲板にわずかに歪みを作り出した。青ざめる顔で、男は一切の考えを捨て去り言われるままに従う。

「かつてにお漏らしして、悪いおちんちん」ズボンを下すと若干暗くて分かり辛いのが、男のトランクスにはシミが広がり股に液体が伸びている。「下着もです」

可愛い。

少女は楽しそうにソレを眺める。少女から放たれる凶悪な冷気に当てられ縮こまる男性器と、少女から逃げ出すように、体内に潜り込んでいる二つの睾丸が見えた。

下半身を露出して膝立ちをする男の足の間に白い足を添えて、足の指先で玉のシワを謎ってやると誘われるように二つの塊が垂れ落ちてくる。

男たちの視線が、下着の中で乳首を立たせ、股布から時折水滴を垂らす、少女の足指の間に挟まれしっかりと反り返った勃起に集中する。

自分の物のように膨らませる、足指の間が上下にスライドする姿に期待を込めて眺めて、多くの者たちが自然と股間に手を伸ばしている。

「た」少女の視界は揺らぎ、少し頭痛がした。少し足で遊びすぎたようだ。「つてくださいい？」

周囲の男たちに良く見えるように向かって、横向きに立たせる。少女の不備は一瞬の出来事だったので、すでに性欲に囚われている男たちには気付くよしもない。上空を旋回しているタコヤキだけが、少女を心配しているようだ。

ソ級とヨ級はいつでも艦を沈められるように、威嚇として艦首に衝撃を加えたのち、艦首から艦尾に沿って遊泳し、複数のバイタルパートナーを探針波によってすでに探り当てている。また並行して、艦娘などの探索を行い続けている。

「悪いおちんちは」少女の片手が男の毛深い股の間に伸びる「お仕置きです」

手の平の中に二つの玉を包み込み、握りしめ、指で擦り合わせる。男は逃げるように腰を動かし呼吸を荒げている。少女はその男が男たちに凝視される中うめき声を上げさせ羞恥する姿を堪能する。

「良い子にしますか？」力をかけゴリゴリと転がす。「本当ですか？」呻きながら首を上下にカクカクと動かす男の姿を見て、少し残念そうに少女は手を離れた。「では続けましょう」少女は少し胸を張り、露出する谷間を強調する。

「悪いおちんちんですか？」

男の視線が少女の胸の筋に視線を落とすと手を伸ばしながら冷たく問いかける。男はハツと視線を戻すと股間を立たせたまま、少女の紫の瞳に視線を合わせる。

「では問いましょう。あなたは何をしに来ましたか？」どこかつまらなそうに尋ねる少女に若干の違和感を覚えるが、この機を逃すまいと彼は言葉を慎重に選ぶ。

「ローレライ様のご希望であります」まるで失言を待つかのように、少女は目を細めて聞いている。「指定された食料その他をお届けに参りました」「その他とは？」睨むような目をして、指で股間を握りしめる。男は小さく悲鳴を上げる。

「ひっ。西洋の衣類であります！」怯える姿に、乾きを取り戻し海水で少しバサバサとした紫の少女の髪が楽しそうに夜風に流れる。「経緯をどうぞ？」

心無い取り調べを受けるように、少女は冷酷に続ける。取り巻きの男たちは雰囲気の変化に、こちらも少し怯えるように事の顛末を伺っている。

「我々は脱走兵でありまして」でしようね。少女は推測していた。身なりと艦の様子から民間。あるいは、『愚図』のどちらかであると。「潜水艦で離脱中に友軍から攻撃を受けました」

ああ。またか。最近多いんですよね、と少女は面倒そうに聞いている。つまり、逃げ出しているところを見つけられて、攻撃され沈没し

かけたところを、たまたま遊泳していた潜水新棲姫に浮上させてもらったという事だ。

その後、彼女と共同で繋がれていた展示品の艦を奪いでもして、ここまで来たのだろう。一生懸命に体を大きく動かし大げさに潜水艦の事故アピールを続ける彼を突然制止した。

「それで、その後はどうしますか？」

「アジアに離脱する予定であります」

大方予備役か何かで、無理やり従軍させられたのだろう。彫の深い顔立ちであるが、人が好きそうであるで頼りなく、撃ち合いを始めれば人間同士でもすぐに死にそうな顔をしている。

「アジアへ向かうのであれば、ローレライ様より、この写真と指定する物資をこちらへ届けて欲しいとの事でした」

物資あげるから、その人たちが届けてあげると、声が聞こえるようだ。少し苛立ちを覚えるが、いう事を良く聞くよい子であればわざわざ殺してやる必要もない。

細目で見渡せば、どれもこれも薄らバカにしか見えないのんきな顔をしている。少女は心の中で大きいため息をついた。ここがどういう所か、まるで理解していないらしい。

「タコヤキさん」手を上空にのぼして、グルグルと回す。赤いタコヤキがカチカチと歯を鳴らして、急降下してくる。「そつちじゃないです」団子になる男たちの上空に向かうが、少女が手招きをすると、大きく軌道を変え少女の肩に静かに乗った。

タコヤキの降下中にドーナツツのように輪が出来て、複数の男が青ざめながら尻もちをついている姿が少し楽しい。少女はタコヤキの頭を優しく撫でた。

「これを持って、下で待つソ級さんに渡して、姉さまを呼んでください。いいですか？」

耳があるのか分からないが、タコヤキの球体の側面にそつと呟いた。破れたスカートを脱ぎ下ろし、ポケットの中に写真と絵を仕舞いタコヤキの口に挟み込む。

少女のスカートを口にくわえたまま頷くように前方向に小さく回

転すると飛び去って行った。夜が明けるところには戻るだろうと予測する。星の動きを見るに後二時間くらいか。

さて、時間も余り、眼前に並ぶ『愚図』共とどうして遊んでやろうかと首を傾げ考える。紫の髪がごわごわと潮風になびいている。

上半身の黒く破れたセーラー服から零れ出る紫の下着と、性器の形にだけ湿り気を残し陰毛をしっかりと見せたままの下着に再び絡みつく視線の集中を感じる。

「物資の受け渡しはどのようにな？」少女は男を細目で睨みつける。「はっ。浮力のあるコンテナを指定場所に投下します」

通過した際に確認した船尾の継ぎ目が開き、そこから投下するのだろうと、真偽を判断する。飛行場姫のように。臆病なほど慎重な彼女であるがそれこそが彼女が今日まで元気に命を繋いでいる理由の一つだろう。

「それには感謝しましょう」男をドンと押すと硬い鉄板に尻もちを付き、うめき声を漏らす。「ですが」片足で、男の股を開かせると、その上に両膝を乗せるように立膝になり足を開かせたまま固定する。

「ごつくんさせた罰は受けてもらいます」反論しようと口を開ける男に、しなだれた男の股間に手を添えて素早くしごき黙らせる。

「二人で罰を受けますか？」少女の手コキを見ようと僅かずつ男たちが股間を膨らませて前によつて来る。「それとも全員がいいですか？」四本の白くしなやかな指が音を立てて男のカリ首を激しく上下に通過する。

「自分が」全てを言い終わる前に、もう片方の指が伸びゴワゴワと毛の生える玉袋を揉みしだく。「見られてますよ？」上半身をくねらせ、両手を漕ぐようにしながら上へと逃れようとする。しかし、少女の両膝がそれを許さない。

「全員ズボンを下してください？」いつのまにか男たちが二人を中心に輪を作っている。「罰は一人で受けるそうです。他の人にはご褒美だけをあげますよ？」

カチャカチャとする音と、衣擦れの音が一齐に響く。ズボンと下着を脱ぎ下ろし甲板に脱ぎ捨てられたズボンが輪を作る。下着を丸出

しにする少女の全方位から、男たちが体の隅々を見回している。

「イクところ、見てあげてくださいい？」両手を巧みに動かし、顔を隠し体をくねらす男をさっさと責め立てる。彼の制止を求める哀願もむなしく、少女の内またに届くほど白い体液がドロリと噴き出した。「早漏ですか？早いですね」

全員に聞こえるように少し大きく言う。少女は立ち上がると、腰に片手を当て踏み潰し、残る精液を自らの腹に吐き出させた。「汚い」

艀装の足裏に付いた精液を、冷たく硬い足裏を、男のほほに押し付け塗り付ける。顎を伝い流れる精液により、地上組が時々捕らえた男いじめをするときにザー汁フジと言う遊びをしていると、少女は思い出した。紫の髪が楽しく揺れる。

「皆さん。二列になってくださいい？」

紫の瞳が男たちをのぞき込み、わずかに身震いするかののように体を震わすと副縦陣を取る。

「まあ。素直な良い子達ですね」少女を挟み男達が二列に整列する。「お仕置きとご褒美が両方できる画期的な方法です」少女は楽しそうに水平に口を開く。

「二名。前へどうぞ」子宮の奥からの疼きが少女の下着に粘性の強いシミを広げていく。転がる男の上着を無理やり脱がし全裸にさせると少女の後ろ側に座らせた。「一度抜いてあげます」

「こちらに向かって立ってくださいい？」二人の男が少女に股間を握られながら、座らされ射精の余韻に浸っている男に向かされる。「彼には女の気持ちを味わってもらいましょう」卓越した少女の手コキが、次々と並ぶ男を射精させていく。

「はい。ぴゅっぴゅ」左右の男を調整しながら次々と射精させ、男の髪から体に白く黄ばんだ体液が降り注いでいく。「まあ。包茎さんですか？大丈夫ですよ」

皮の閉じた男すらも意に介さず楽しそうに射精させる。全ての男が回転するま頃には男の頭にはベトベトの精液が乾燥を始めガビガビとしている。

「まあ。フジ山みたい」髪から垂れる精液が肩に乗り白い雪のようにベタベタと固まっている。「どんな気分ですか？」一巡が終わると、少女は男に向き直り縮こまった股間を踏む。

「気持ちいいですか？」精液に濡れた手の甲で、涙に零れる顔を拭く男に尋ねる。「気持ちいいですか？」足をグリグリ回す。

僅かに泣きながら首を振る男に、少女は股をぐっしよりと濡らし子宮がキュウキュウと締め付けられる。同じ質問を続けグリグリと足で踏みこむ。

次第に股間を膨らまし口から精液の泡を作りながら、涙を目に溜め、小さく気持ちいいですと答えた。足をどかせると、新しい精液が僅かににじみ出ている。

「ザーズルにまみれて、我慢汁ですか」足を下すと、鉄板に精液の足形が僅かに出来る。「すつかり肉便器ですね」少女は紫の下着をスツと下ろし、胸の谷間に下着を入れると、男汁にまみれた男を押し仰向けにさせる。

「ど変態ですね」馬乗りに跨り白い股の間で、精液でベタベタな男の勃起を掴むと、一気に腰を下ろした。「どうですか？」

両手で逃げられないように腰を掴み、膣壁で締め上げながら男を犯す。空気を抜き形を合わせながら、腰をゆっくり上下に動かし膣コキを始める。男はたちまち首を振りながら奇声を出すかのように声を上げ始めた。

「おちんちんは欠陥品ですから」男の喘ぎ声に、黒いセーラー服の上半身から大きく露出したブラジャーの二つの突起が大きくなる。「オマシコほど気持ちよくなれないんですよ」

紫の陰毛が前後に擦り動き、精液を掻き乱しわずかに泡が出来る。

「でも」入口近くの膣圧を上げ、カリ首の裏筋を捕らえる。「本当に気持ちよくなると、男はよく鳴きますよ？」

まるでレクチャーをするかのようにポーカーフェイスでいつの間にか再び勃起して周囲を取り囲んでいる男たちに言う。

「もう出しちゃいましたか？」バタバタと手を動かしながら、男は少女の最奥に腰を突き出すように痙攣して、精液をまき散らさせられた。

「他の人は優しく抱いてあげます」

少女が立ち上がると内股にべったりと泡出つ精液がこびりついて
いる。

「私と、したい人いますか？」十分楽しんだので、首を傾げ紫の髪をふわふわとさせながら残りの男たちを快く誘う。「したい人は一列にどうぞ？」

スカートを渡し上空待機していたタコヤキにそつと指示を出すと、海水を口に入れて戻ってきた。

「こつちに」

上空に手を振り、低高度から男に海水を叩きかける。冷えきり怯えながら髪を垂らし精液を僅かに残す体を優しく抱き起す。

白い手で体の海水を払い落とし抱き付いてキスをする。口の中に強引に舌をねじ込むと男も少女の腰に両手を回してきた。

「コンテナの投下が終わったなら、また抱いてあげてもいいですよ？」

力なく勃起を始める股間に股を乗せ、体を小刻みに振動させて体温を高める。睡眠中にかかる体温のように高い温度で男を抱きよせた。

「ちゃんと働いてきてください」首筋にくちびるを付けると、強く吸い立て首筋に赤いアザを付ける。

「この場所に全て投下して大丈夫です」彼は立ち上がり、服を着直すと少しフラフラと船内へと向かって行った。

「では」男が船内に入っていくのを見送ると少女はご褒美を待つ男たちへと向き直る。「この中に童貞さんいますか？」先程の男の精液を股からわずかに垂らしながら少女が紫の髪を傾げて尋ねる。

「拳手をおねがいします」

少女が片手を上げると、釣られて多くの男たちが小さく手を上げているようだ。

「うん。圧倒的に童貞さんが多いんですね」軍ではよくある事だろうと考えるが手間取りそうだとも思え、少し面倒くさくなった。「最初の人」相手はいずれも少し大柄で少女は首を上に向けて話しかける。

「前からと後ろから、どちらがいいですか？」少し見上げ紫の瞳が男を見つめる。「いいですよ？」少女は前かがみになると、両手を鉄板に付

け、足を肩幅まで広げるとお尻を突き上げた。「あ。そこじゃないです」

やっぱりかと残念に思った。かなり角度を伴う挿入に入口から逸れる。後ろから見られているプレッシャーにより、挿入するもすぐに抜けてしまう。

「最初はゆっくりでいいです」

男の物を二本の指で優しく誘導すると、半ばまで滑り込ませる。

「そうです。そのまま滑り込ませてください」男が初めての感触に龟头を膨らませ喘ぎ声を出しながら根元まで無事に童貞を捧げる。「引きすぎです」

しっかりとストロークを始めようとすると、すぐに抜けそうになり少女が指で支える。

「もつと、膝を落として突き上げるように」対格差があり、男を中腰にさせると斜め前方に腰を動かす。反り返る先端が膨らみ、少女は力を抜き膣内の方向を男の物に合わせてやる。「いいですよ、良い子です」

両手で体を上げ背中を水平に近づけると、男が挿入をしやすくなり、激しく腰を振り始める。男が股間を打ち付けるたびに少女の白いお尻が震え胸が前後に動く。

「いいですか？ 締めますよ？」

口を開け喘ぎながらパンパンと少女のお尻に股間を打ちつける男の反り返るカリ首の後ろに、膣壁を動かし、ゆっくりと閉め付けしごき上げる。

男は突然の引つ掛かるような刺激に驚き股間を膨らませすぐに大量に精液を吐き出してしまった。

「もう出ちゃいましたか？」

精液が子宮の中に広がり、膣内がベタベタに精液に溺れている状態を想像し、少女は少し子宮が疼いた。引き抜かれる肉棒が精液をわずかに掻き出し少女の陰毛と太ももにドロドロと垂れている。

「少し締めすぎましたね」体を起こすとまだ物欲しそうにヒクついている股間の膨らみに優しくキスをする。「たくさんいるので、一人一回です」男を追い立てると、次の男が勃起を見せつけている。

「前ですか？」男に抱きかかえられるように持ち上げられると少しよろける。「ああ。私ちよつと重いんですよ」

艀装のせいもあり、体型から考えるより倍ほどの重さがある。重心は足に集中しているため男の腰を両足で挟み込み安定させる。

「結構力持ちさんなんですね」

ニコリと汗をかき笑って見せる男の膝は、すでに震えが来ている。彼女を抱き上げての性交は、80kg程度の重しを体に乗せスクワットをするようなものだ。

艀装自身に40kgほどの重量がある。足を抜いた少女の本体も構成される組織の密度の違いから人間よりも重さが発生している。

「危ないですよ？」

ついに前のめりに倒れる男を、片手を鉄板に伸ばし斜めに支える。そのままゆつくりと横になると、両脚を伸ばし大きく開き男を根元まで受け入れる。

足を自分の顔に向かい折り曲げ前のめりになる男の肩を足裏で支える。男はさらに密着してV字に開かれた足を少女の耳付近にまで押し倒す。

「上手ですね」脚を伸ばされ自然と股間が浮き上がる。男は腰を打ち付けるたびに中に溜まる精液を掻き出すかのように腰を小さく回すように動かす。「艀娘なら、もういつてるんじゃないですか？」

少女の膣内は極めて堅牢で、その気がなければ一切の刺激が遮断される。懸命に腰を回し股の間に精液の泡を作り続ける男を冷たく眺めながら、体内を振動させ膣内の温度を上げる。

「経験豊富な人には少し強くしますね？」

捕らえたワンワンを数秒で射精させた方法であり、適度な温度で締め上げながら、挿入された男性器に合わせて、膣壁を交互に動かすように男の性器を擦りつけエコーを内部循環させ肉棒の芯まで振動させる。

余裕を持ち腰を振っていた男が大きく口を空けて、喘ぎながら濃厚に射精する。

「あ。大丈夫でしたか？」

口を開けよだれを垂らし、痙攣する男を両足で胸を支えたまま首を傾げ尋ねる。少女にはあまり可愛いと思える男ではなかったのだ、わずかに感情がこもってしまったようだ。

ゴロンと体を転がし、ずり落ちる男を片手を伸ばし支える。まともに呼吸はしているようなので、そのまま横に置き、放置する。

「次の人どうしますか？」

起き上がりお腹を押しながら言う。詰め込まれた濃厚で黄ばんだ精液が少女の股から泡を作り、零れ出る。淡々をと男たちの求める体位に極力合わせて膣奥に射精させていくと、あの男が来た。

「ごめんなさい。最後にまわってもらってもいいですか？」しっかりと皮をかぶせた男は性交を拒まれたと思いきや、しよんぼりとした。並ぶ男たちからも嘲笑うような冷たい視線が刺さる。「大丈夫です」

離れようとする男に近づき。顔を下すと僅かに先端だけが見える尿道の穴に口を付ける。恥かしかる男の皮を指で少し広げ唾液を流し込む。

「最後に並んでください」少女の瞳にわずかに意地悪な色が見え隠れする。その後も一時間ほど淡々と作業をこなし、再び、包茎の男が回って来た。「はあ。お待たせしました」

流石に少女も疲れた様に、お腹を押し精液を噴き出させる。少女の下半身は精液がこびり付き一部では乾燥を始めてペリペリと剥がれている。

紫のフワフワとした陰毛にも精液が絡みつき、ノリで固めたかのようにベタベタと固まっている。鉄板には多量に零れ落ちた精液が広がる。

「タコヤキさん」片手をあげグルグルと回す「何度もごめんなさい」勢いよく離れるとフヨフヨと戻ってきて海水を叩き落す。

二人を中心に痛むような高度から落とされた海水が甲板上に広がり精液をながし広げて行く。行為を終えて服を着ようとしていた男の服が流され悪態をつきながら追いかけていく姿に、少女の濡れた髪が楽しそうに揺れる。

「あ。その人」コンテナの投下作業を手伝いに行こうと離れる男を、

呼び止める。「軍医さん？船医さん？いますか」近づく男に首をかしげ尋ねる。男が肯定的に返事を返すと

「じゃあ、大丈夫ですね」少女の口が僅かに開く。「暗いのでライト当ててもらっていいですか？」男は足早に離れ、展示用のスポットライトを少女に照らす。

僅かに空に白みが見え始める。輪のようなライトが少女を捕らえ、その影が男を暗く染める。

「良く見えないのでこちらに」

余韻に浸る作業員達が何がライトに気付き何が始まるのかと手を止める。ライトに向かつて、包茎の男が座らされ、少女が横から顔を寄せその先端を楽しそうに眺めている。強い光源が男の視界を遮り、周囲は見えていないだろう。

「このくさいの、しゃぶらせたんですか？」

先程唾液を少し皮膚内に流し込んだためか、尿と精液の劣化した匂いが先端からあふれ出ている。皮付きのまま楽しんでいたためか、少し先端が男の形に伸び膨らむ皮膚の色に違いが見える。

「剥いたことありますか？」少女は二本の指で先端をわずかに広げると、男の顔が苦悶にゆがむ。「エッチしたことは？」

口を付け唾液を息を吹き込みながら無理やり皮膚の隙間に流し込む。男は恥かしそうにうつむいている。光の中からは外が見え辛いが、外からの者には良く見える。男たちは再び膨らむ股間に手を添えて少女の行為に目を凝らして見続けている。

「ほうけいどうていですか」少女は楽しそうにため息をつく。「こんなに臭くて、出来るわけじゃないですよね？」

強く息を吹き込みながら先端から唾液を送り込み続けると、わずかに皮が脈打ち始め唾液が逆流し腐臭のする液体が零れ出てきた。

「ああ臭い」男を光源に対して直角に座り直させると、少女もその正面に座り両足を男の腰に回しこみ強力にロックする。「ほら、どうですか？」白い手を伸ばし、男の皮を上下にしごく。

唾液で滑りけを作られ残る気泡のコロコロと動くわずかな動きすら、男の未完成な性器を刺激するには十分機能している。硬化してい

ない皮膚が、巨大なクリトリスのように強い刺激を男にもたらす。

「じゃあ。むきむきしてあげますね？」両足に力を入れると、青ざめる男の顔を樂しそうにのぞき込む。上半身をクネクネと動かし逃げ出そうとする男に、視線が集中する。「意外とよく伸びますね」

両手を使い二本ずつ四本の指が均等に先端の空間を広げていく。

「一人でたくさんしたんですか？」爪の先で先端を擦りながらわずかに広げては戻し、男の悲鳴と喘ぎ声を楽しむ。「伸びがいいので、切らなくても良さそうですね」少し残念そうに少女が呟いた。

「ダメです」両手で少女の肩を押して、引きはがそうとする男を見つめながら、脚に力を込め冷酷に付き放つ。「いい子にしない子は、こうですよ？」

男の皮が大きく開かれ、ふくらみの根元を超え一気にズリ下げられた。幼い皮膚が空気に触れた感触で、男は大きく腰を振り動かす。ネズミ返しのように赤く膨らむカリ首が戻ろうとする男の皮膚を抑え込む。

「わあ。先端と皮膚の色が違いますね」

カリ首より上の男が悲鳴を上げながら膨らます、テーブルは二色に彩られており、先端付近は黒みを増し皮膚のように見えるが、それより下部は赤みを帯びて、薄皮のようにジुकジुकとした皮膚をしている。

「ああ。汚い」

皮をさらに引き下げ無理やり内部を露出させる。ポケットをひっくり返したような、皮の底の溝部分だった場所に、リング状に堆積する白く黄ばんだ精液や尿皮膚の老廃物があり、悪臭がただよう。

「汚い。汚い」顔をぶつぶつつく白い塊に近づけ、指を輪のようにし全体を包み込むとグルグルと左右に回す「あつ」男は腰をグイグイと動かし左右に振りながら強い刺激に抗えず精液を吐き出した。「早いですね」

「まだエッチしてないですよ？」股間をのぞき込む少女の長い鼻息が男の陰毛をわずかに揺らす。「はい。いきますよ？」体をズリ上げ、男の精液を零れだす尿道の穴に、粘液を垂らす少女の膣穴を近づける。

「ほら、入ってますよ?」

片手を男の肩にかけ姿勢を固定しながら、もう片方の手が男の肉棒を誘導する。1cmほど、先端が上半身に濡れた黒いセーラー服を着た少女に沈み込んでいく。

「いいんですよ?入れて」腰を引き逃げ出そうと、男は懸命に悶える。「入れちゃいましょう?」

体を上下に動かし先端を浅く出入りさせる。周囲の男たちが、海水をキラキラと反射させて、ライトの中、絡みつく少女の姿にこらえきれずに股間を擦りながら眺める。

「ほら。ほら」少女のベタベタとした体液が、膣内から溢れ出て、男の陰毛まで伝い流れる。「かわいい」無理やり男が押し倒され、片手で頭の上に両手を押さえつけられる「エッチしましょう?」

少女の全身の重量が男の太ももに乗り、わずかにのけ反る少女の秘部が男の股間を捕らえる。首を振り許しを請う男の瞳を堪能しながら、ゆっくりと腰を下ろしていく。

「入っちゃいました」

一気に腰を落とし左右にグリグリと回転させる。踊り食いされた小魚のように、力尽きるまで乱暴に暴れまわる男の肉棒を胎内で味わう。

「きつたないおちんちん入ってますよ?」接合部から淫液が男の睾丸にドロドロと泡を作り流れていく。「気持ちいいですか?」

「んっ」

水平線の彼方に日が顔を出し、滑りだす線状の光が二人を包む。紫の髪からキラキラと海水をまき散らし、楽しそうに腰を振る少女が幻想的に世界を魅了する。周囲の者たちが、自慰行為を忘れ、その光る少女を立ちすくみ呆然と見つめる。

「もうそんな時間ですか」

「じゃあ、中出ししましょうか」

怖い怖いと首を振る男を押さえつけ、膣壁で優しく添えるように男を包みこむ。

「怖くないですよ。ほら、ゆっくり呼吸してください」少女を見据えて

鼻で大きな長い呼吸音が艦体に打ち付ける波の音に交じり響き渡る。「大丈夫です」十分包茎を堪能した少女は、男に膣内での濃厚な射精を促す。

「ほら。もっとパンパンにザーメン溜めてください」

腰を動かすのと完全に止め、片手で男の睾丸をマッサージする。自らが股間を膨らます動きで喘ぎ声を上げながら次第により太くなり精液を送り出していく。

「そうです。もっと濃くしていいですよ？」押さえつける片手を外し男を開放する。「いいですか？ほら自分で動いてください？」

両手を腰の後ろに伸ばし、自分の体を支えると、可愛く歯を食いしばりながら男が腰をわずかに動かし始める。

「いいですよ。もっと深く」根元まで密着させる度、自然と男は大きく喘ぎ声を上げる。「もっとしていいですよ？」

言葉に反応するかのように、男の下半身が意思に反して上下に付き動き出す。歯を食いしばり涙を流しながら、男の下半身が暴れまわる。

「いいですよ深く、濃く」僅かに少女の頬に赤みが増す。突き上げる動作為が重量にもかかわらず少女の体を少し浮き上げる。「そうです。ガンバってください」

男の突き上げに合わせて膣壁を緩め刺激を弱める。わずかに膣内を振動させ粘液を溢れ出しながら、突き上げられる腰を手には体重をかけゆつくりと下す。

初めての刺激に限界まで先端を膨らまししながら、時折痙攣のようにビクビクと震えさせ出し入れする。次々と精液の込み上げを感じながらより深く、少女を求める。

「いいですよ。どうぞ？」

快楽に飲まれ、射精のタイミングが分からず膣内で溺れる肉棒に突きあがりに合わせ温めた膣内を少し収縮させる。空気を抜き密着度を上げると、男は大声で呻きながら特濃の精液を少女に注ぎ込んだ。

跳ね上がった男の腰が音を立てて落ちる。僅かなオレンジから青く変わる空を見ながら、少女は腰をゆつくりと上げ、精液の塊を噴き

出す男の物を引き抜いた。

「きもち、よかったですか？」

呼吸を整えながら、上下に男が頷いているようだ。2、3日はまともにも服も着れないだろうと思いい口が僅かに開く。オスとは難儀な生き物だと思いいながら立ち上がる。

「コンテナ、投下、完了しました」先程の首にわずかに赤い唇のあとを残す、少し偉そうな服を着た男が戻ってくる。「ああ意外と早いですね」少女は素直に感心すると、男を引きよせ唇を重ねる。

「続き、しますか？」先程から舷側に手をかけ顔を出す、赤い瞳に見せつけるように男に尋ねる。「あつ、あの。大丈夫です」怯えるように、困ったように男は答える。

「おちんちんは正直ですよ？」顔を合わせたまま手を下に下げ、何度も踏み潰され絞り取られたにも拘わらず、股間を大きく膨らませている場所をしっかりと握る。「見ていて、また、したくなつちやたんですか？」

男の脳裏に先程の経験がよみがえり全身が震える。少女はそっと白い手を伸ばして、男の顎を愛でるように撫ぜた。

「良いおちんちんは、ご褒美がもらえます」服の上から股間を包むように握り、上下に素早く揺する。「脱いでください？」

紫の瞳に見つめられながら男は、無言でズボンを下げる。少女を体験した男たちから聞いた話では、後にも先にもこの少女ほどの体験は二度と出来ない、口をそろえて言っていた。

「今度は、適度に」気持ち良くしてあげますから？」チラリと目を流すと、黒い髪の間から二本の角が僅かに見せ、赤い瞳を輝かせながらこちらを見ている女がいる。「前と後ろどっちですか？」

男の要望を聞くと、少女は四つん這いになり、お尻を突き上げ男の股間の高さに合わせる。

探るように、尿道の先端を擦りつけ少女の胎内の様子を伺う男に、少女はお尻を突き動かし、一気に根元まで挿入させた。

適度な締め付けを与え、安心したかのように男はパンパンと睾丸を打ち付け、少女を激しく揺らす。覗き見ている女も鼻息を荒くしているようでランランの様子を見ている。

「何ですか？ああ、いいですよ」

少女から許可を得ると、男は白いお尻を手でペンペンと叩き始めた。呆れたように体をするられお尻を叩かれながら、膣内の調整をしてやる。

放っておくと、おちんちんはすぐに主導権を取りたがるから困ったものだ。まあ、気にするほどの事でもないかと、しばらく好きにさせておく。

「あつ、出ちやいましたか？」ベタベタの広がりを感じると、少女は起き上がり、溜まった精液を腹を押して、絞り出す。「これ、あげます」胸の谷間から紫の下着を取り出すと、男の上半身の内ポケットに下着をねじ込む。

「さて、と」

少女は少しふらつきながら、すっかり発情した目でのぞき込んでいる来訪者に体を向けると、ゆっくりと歩を進めた。

— 海底のセラピー犬 —

19 Intermission キャスト・オフ

「何じゃ？」

乾燥室で飛行場姫の背中に乗り、肘でグリグリと圧迫している北方棲姫はソ級を見て石床に飛び降りた。

「出るぞー！」飛行場姫の引き締まった尻を音を立ててはたく。「いたっ」力を抜いていたため白いお尻が僅かに波打つ。

しかし入口に立つ彼女は、ポーチにぎゅうぎゅうに詰められた少女のスカートを取り出しそのポケットから写真を差し出してきた。それと、ご指名は戦艦棲姫らしい。

「なんじゃ」幼女は口を広げ思わず声を出した。白い髪が揺れ、紅茶のような済んだブラウンの瞳が躍る。「おい。飛行場姫ー！」数枚の写真の中にある一枚の絵を持ち、幼女が楽しそうに彼女を呼ぶ。

「なによう・・・」

少し腫れたお尻をさすりながら、飛行場姫はムクムクと転がり起き上がる。

「何じゃ、うすらバカが。はよう起きー！」

「はいはい」

少し不貞腐れた様に石椅子から下りると、数枚の写真と絵を受け取る。そもそもここまでソ級が戻ってきている時点で緊急性は少ないと彼女は判断しており、北方棲姫との若干の温度差があるのは仕方がない。

「んふ」彼女は口を広げ白い歯をイーッとするかのようになり、息を吹き出した。「なによこれ」一瞬緊張した空気が緩む。

「燃えてしまう。早く出よ」

「はいはい」

絵を見入る彼女の腰付近をグイグイと押し、駆逐棲姫のエタノールげんきん！とかかれた扉を押し開ける。

「ああ」飛行場姫は大方の事情を察した。潜水新棲姫が男を犯している写真を見て一人納得する。「戦艦棲姫はわらわが呼ぶゆへ、そこで休んでたもれ」

白く雄々しい髪をフワフワと動かしながら、幼女がソ級に微笑む。「報せてくれて、ありがとうよ」

ソ級は少し照れるように艤装をフックに掛け中心に吊るすと横になり長い黒髪を石椅子に広げながら青い目を瞑った。

「あやつは何処へ消えたんじゃ？」

リビングに姿が見えず、自室にも姿はない。リビングに飛行場姫を座らせておくと、一人ポテポテと白く小さな足で歩き回る。すると、通路の遠くから音が近づいてくる。

「ああ。下におったのか」

「あら、ホッポちゃんどうしたの？」両手にエタノールのポリタンクを抱えてヨジヨジと長い坂を上ってきている。「うん。実はの、駆逐の奴が」

ポリタンクが床に落ちる。幸い蓋が閉まっているので、ズリズリと滑り落ちていくだけだ。

「駆逐ちゃん？」

「ぐえっ」

幼女は戦艦棲姫に両手で勢いよく掴まれ、石でゴツゴツとした石壁に正面から押さえつけられ首が締まる。

「どうしたの？」ゆさゆさと頭を振られ気分が悪くなる。「ねえってば！ゆさゆさゆする。首がガクガクする。「あいたっ！」幼女の力強いスネ蹴りが彼女を崩れ落とさせた。「落ち着けバカめ」

滑りゆくポリタンクを捕まえると、両手に持ちズリズリと引きずるように持って来る。彼女は脛を抱えゴロゴロと転がっている。

「お主の悪い癖じゃ。駆逐はなんともないぞ」ポリタンクを床にそつと置くと白いワンピースのポケットから、写真と絵を取り出す。「ほれ、これじゃ」急いで飛び起きると、むしり取るように受け取る。

「なんだ、潜新ちゃんか」彼女は気の抜けた様に写真を返すとポリタンクを持ち、リビングへと向かう。「なんだとは、なんじゃ」

呆れたように写真をポケットに仕舞い、両壁が石垣のように見える通路内をポテポテとついて行く。

「駆逐がお主を呼んでおる」

「早く言つてよー」

長くしなやかな足を勢いよく動かしながら彼女が言う。

「待てというに、まったく」

こちらは体が小さいため、リーチを稼げずにより多く足を動かし追従する。

「なんだ、下に行つてたのか」

「あんた何でのんきにくつろいでんのよ」

赤い瞳が鬼の形相で睨みつける。

「走らせよつてからにバカめ」北方棲姫が息を切らしながらリビングに追いつく。「はあ？あたし指名されてないんだけど？」

飛行場姫の顔が付いた木のコップを持ち、飛行場姫の背中を押す合間をぬって、北方棲姫が床に置かれたエタノールコンロで温めていたヤカンのお湯を注ぐ。

「お。すまんの」

北方棲姫の顔の付く木のコップにもお湯を注ぎ、駆逐農園で採取してきた葉を、煎つて粉末にしたものを入れる。わずかにお湯が赤く変わる。

沸騰はしていなかったが、飲む分にはちようど良く十分に温かい温度だ。二人は息を合わせたかのように長い息を吐き出す。

「確かレッドティーとか言つたかの？自家製とは言え、渋みも少なくなかなか良い味じゃ」

「あ・ん・た・ら・ねえ〜」両こぶしを握り締め、眉間にシワを寄せて目を閉じながら長い黒髪がプルプルと震える。「まあ、落ち着けよ」

飛行場姫がたしなめるが、こちらは沸騰しているようだ。その言葉が油を注いだらしい。爆裂する怒りが彼女を突き動かす。

「バカやめろー！」

「止まるんじや。ハウス。ハウス！」

両手がテーブルを掴み震える彼女を、二人が目丸くして急いで手

を掴まえる。フルパワーで押さえつけられ、力が拮抗し体が震えるが僅かに戦艦棲姫の分が悪かったようだ。

二人に押し倒され床に制圧されると、彼女はじたばたと動き何か喚いている。

「件の巡洋艦はすでに抑え、駆逐艦もすでに沈んでおる」体重を乗せ体を押さえつけながら言う。「艦娘は？」「おらん」赤い瞳に睨まれながら、きつぱりと答える。

「あいたた」無理に動き痛めた腰に手をやりながら、落ち着きを取り戻した彼女を開放する。「・・・悪かったわよ」黒い長髪を垂らし、ぼつの悪そうに彼女が言う。「まったく。お主と来たらいつもこれだ」

床を擦ったフワフワとする白く長い髪を手で払いながら言った。

「このポリタンクどうすんだ？また飲むのか？」懲りない奴だと目を細め、飛行場姫が言う。

「お風呂にするのよ。駆逐ちゃん髪の毛が海水で痛んじやうじやない」

「ああ。そうか」心底どうでも良さそうに、次のお湯を注ぎながら飛行場姫が相槌を打つ。「しかたない。わらわが続きをやろう」

「あら。ありがと。気が利くわねホッポちゃん」ウキウキとリビングにある身長ほどの高さの鏡に体をクルクル動かして、まるでデートにでも行くかのように各所を確認している。

「どうせ。泳げば崩れよう。バカめ」

「こういうのは気持ちの問題なのよ。朴念仁」

売り言葉に買い言葉。タップダンスのように忙しなく動くたびに、黒く長いワンピースのスカートがクルクルと広がる。

「なんだおまえ。今度は出て行かないのか」

いつまでも、ぐだぐだと鏡の前でうろろうろしている彼女を横に見て、飛行場姫はどっかかりと木の椅子に座り、木のコップを手に持つ。

「あら？イイ女は遅れてくるものよ？」

「そいつあどうも」

手を伸ばし、新しい茶葉をトントンと入れる。揺れるレッドティーに、何処か寂しそうにしている飛行場姫の顔が写り込む。

「そろそろいいかしらね？」

素材の多くをマリンスューズのようにゴムで作られている、高いデザイン性でサンダルのようにつま先の見えるハイヒールに履き替えると、足のホックをパチパチと留める。長い黒髪を両手でフワツと後ろに広げると勢いよくターンする。

「じゃあ。ちよつと行って来るわね」

「早く行け愚図」

「そうじゃバカめ」

椅子に座りコップを手に持ちながら追い払うように言い放つ。

「うっさいわね」かかとをトントンと鳴らす。「じゃあ、ホツポちゃんお湯を頼んだわよ?」「任せよ」彼女は通路の前で片手を横に出し、肘を折り耳の高さまで折り返すと、指を広げる。

「バイバイ」

ポーズをとりながら可愛らしく、二度ほど手を真横に小さく振り動かし、下すとそのまま意気揚々と出かけていった。

「なんだアレ?」

「流石に気持ち悪いの」

北方棲姫はヤレヤレと椅子から腰を上げコンロに火をつける。チロチロと青い光が上がりその上に大型の鍋を乗せる。

「あの二人はすぐ帰って来るのかの?」

「来なければアイツを突っ込んでやればいいだけだ」

飛行場姫はグリグリと振じった布を鉢巻きのように頭に縛ると、二人分くらいの大きさがある、流し場内の掃除を始める。

「ああ、お主が拾ってきたアレか」ふむ。と考える。「アイツはホツポの部屋に突っ込むって駆逐の奴が言ってたぞ」流し場からガシガシと音が聞こえる。「なぜにワラワなのじゃ・・・」

また面倒事がやって来た白いワンピースのスカートを抱え、体育座りでブラウンの瞳が青い炎を見つめる。

「消去法」ガシガシとブラシが石を掻く力強い音が鳴る。「まあ。よいじやろう」一瞬眉間にシワがより沈黙するが、アレを無意味にキレさせると後が怖い。鬼の顔を思い出し身震いする。「ところで服はどうしたのじゃ?」

「ああ。ボロボロだし血が付いて汚いから捨てたよ。駆逐の奴が」
上水を呼び込み、濯ぎ洗いを行う。「困ったの」「まあ仕方ないだろう。
そもそも飼うなんて誰も思っただろうし」汗をぬぐい石の流
し場から出てくる。

「まったく。夜中まで働かされるなんて」濡れた体のままドカツと椅子に腰掛ける。「駆逐に言え」その言葉にイーッと白い歯を見せて答える。

「あー」思い出したかのように飛行場姫が声を出す。「なんじゃ」「アイツの服着せればいいんじゃないか？」先程までバカみたいにダンスをしていたアイツを思い出す。「ああ。まあ体型はあつていいよな」

「暴れるんじゃないか」「いや、あんがい喜ぶんじゃないか？」飛行場姫は注ぎきり、空になったヤカンの蓋を開け、中を覗き込む。

「タマゴが入ってる」鉄の円筒形の茶こしの中に卵が4つほど入っている。「冷蔵庫に入っておったぞ、夜食にどうぞって」卵は半円形でボール型のプラスチック容器に入れられ、少女の書置きが添えられていた。

「これ好きじゃないんだよなあ」

彼女は一つ取り上げると、殻ごと、口の中に放り込む。前歯で数回噛み割った後、奥歯を水平にスライドさせるように殻をかみ砕いている。オレンジがかった赤い瞳が左右に落ち着きなく動く。

「良薬口に苦しじゃ、好き嫌いしおってバカが」

駆逐農園は基地の上層部に位置し徹底された温度管理がなされている。野生のアヒルなどが放牧されていて、そのアヒル達から時折卵をいただくのではあるが、その多くは有精卵である。

つまり、卵内にはすでにヒヨコが存在している事が。食用にする際は主に、茹で卵にして食べられる。

濃厚な味わいから愛好家も多く、アジアでは珍しくもない食べ物ではあるが、生まれついてから食す習慣がないと、見た目の問題もあり魚をまるかじるする深海棲艦達の間でも、賛否の分かれる食べ物である。

食べものの自体の栄養価は群を抜いて高く、彼女らは知らずに食しているものの、疲れが取れやすくなるとの体験から薬味のように扱われている。

「戦艦棲姫など、駆逐のためと称してその辺の深海魚まで食べて出撃しているのに」北方棲姫のお小言モードが入り「お主の腰を労って」しづしづ二つ目の卵に手を掛ける。

「〜そんなだから、駆逐がお前になびかんのじゃ」「はいはい」聞こえが悪くなり少し欠伸をすると、ウトウトし始める。「後はワラワがやるゆえ戻ってよいぞ」

「ありがとホッポちゃん」

ため息をつく北方棲姫の好意に甘えて、少し背中を丸めながらフラフラとリビングから離れて行った。

駆逐棲姫の遊びが長引けば、艦娘の嫌がらせ組と会敵する可能性もある。もうすぐ夜が明けそうだが、潜水隊の主力であるソ級ヨ級を時間外に出撃させてしまったため、飛行場姫を休ませておいた方がいいと判断する。

杞憂ではあるが、全力出撃ともなれば、制空能力だけを切り取れば、依然として絶大の信頼性のある飛行場姫は外せない。

「静かなもんじゃ」

騒がしい二人組は外へ出て、時折泣きついてくる飛行場姫も部屋へ追い返すと一人、静寂の中、寂しさを覚える。小さな体の上半身をテーブルに乗せヤカンに腕を伸ばし手を止める。

リビングにはカッチ、コッチと時計の音だけが静かに鳴っている。「ああ。ソ級に持って行ってやろうかの」

ヤカンの蓋を閉め、黒い取っ手を持つとグイッと体を下し石床に下りる。白いワンピースのスカートがフワツと広がり、白い髪がモワモワと動く。

「ん。寝ておるか」

湿り気を残す、ソ級の黒髪に手を添える。手足を残して着こむダイビングスーツのような黒い服に、潜水には適さない、ムチムチとダイ

ナミックに突き出る胸と尻が窮屈に押しさえつけられている。

彼女の尋問時には、物哀しい青い瞳とふくよかに発達した体型から、戦災で言葉を失った未亡人のような役割を与えられることも多い。

「すまん。起こしたかの？」

乾かされる臙装から放たれる、海水の匂いと乾いた暑さの中、ソ級は目をゆっくり開く。

壁側に丸く横になっていたため、体を幼女の方へと回すと黒い髪が顔に巻き込まれ覆いかぶさる。ホラーのように髪の間隙から光る哀しい青い目が僅かに幼女を後退させた。

「うん。これをお前にと思ってたの」

ヤカンの蓋を開け、中身の卵を二つ手渡す。彼女はわずかに微笑みありがとうございますと受け取る。

「それで、上の様子はどうじゃ」彼女は殻をむき、茹でられ硬度をました白身の部分に歯を付けると少しずつ噛み削っていく。「そうか」世間話のように会話を続け、幼女が頷きながら話を促す。

「どれ、マッサージしてやろう」卵を二つとも食べ終わると幼女が横になるように促す。しかし、謙遜するように彼女は手を振っている。

「バカも追い返したし、あまり早く湯を張っても冷めてしまう」

幼女はソ級の背中に手を回しこみ、ウエットスーツのファスナーを引き下ろした。押さえつけられていた胸がふくらみ、自然と真っ白な背中が弾けるように露出する。

そのままうつ伏せにさせると、腰に馬乗りになり背中の背骨に沿うように小さな両指を少しずつ押しながらほぐしていく。指のサイズが小さいこともあり、北方棲姫のマッサージはその気持ちよさに定評がある。

「寝てしまっても構わんで」

両膝を体から外し、彼女を挟んで石の椅子に膝立ちで乗る。幼女が体を伸ばし、指が肩に近づくとびに白いワンピースのスカートから、真っ白で面積の多い綿の子供パンツが見え隠れする。こめかみから伸びる白く雄々しい長髪が垂れ、前後にブランコのように揺れる。

小刻みに呼吸を立て、髪を揺らしながら体を下げ、お尻に両てのひらを開きコリをほぐしていく。

腰を痛めた飛行場姫に良くやってやっており、不思議とお尻を揉みほぐし弛緩させてやると痛みが和らぐこともあるそうだ。ソ級は献身的なマッサージの中、寝息を立て始めたようだ。

「しばらくしたら、起こしてやるかの」

ゆっくりとスカート裾を抑え静かに跨ぎ、石床に降りるとお湯を張る作業に戻る。何度か熱湯を流し込んだ後、高温で衰弱しないように様子を戻したが、すでに彼女は出かけていたようだ。干されていた艀装もなくなっている。

「まったく。働き者ばかりじゃの」石の椅子の上には、小さくすり潰されたような卵の殻が広がっていて、一見乱雑に広がるゴミに見えるが、わずかにありがとうと読めなくもない。「まったく。散らかしていきおってからに」

幼女はぶつぶつと文句を言いながら卵の殻を寄せ集めるが、少し嬉しそうに白い髪が揺れている。

「もうすぐ夜明けか」

リビングへと戻るとローマ数字の文字盤を見ながら、手に乗せた卵の殻をゴミ箱に捨てる。

通路脇でわずかに水の流れる側溝に捨てても良いが、有機物の堆積が悪臭を発生させる原因になるため、基地の上層域では極力避けられている。また、側溝の掃除を行うのが主に自分であるという理由もあった。

壁に向かい垂直に立つ重錘式「じゆうすいしき」の置き時計は僅かに傾斜する石床に、水平になるように傾斜に合わせ盛り上げられた、石材のプレートの上に設置されている。振り子を動かし、カッチコツチと時をつげる。

「本当に時間は早いのに」

内部に見える揺れる振り子を見つめ幼女は呟いた。

壁に立つ、幼女の倍ほどの背丈のある置時計は、とある商船の通行

交渉時に収められたものだ。振り子である内部の錘を1週間に一度程度持ち上げ、下ろし、振りはじめを促す必要がある。

若干取り扱いに不便はあるが、電力がなくとも動くためこの海底ではその独特の駆動音とともに評価が高い。

時報機能は、定期的な調整を極力少なくするため設計時から廃されており、飛行場姫でも本体の分解清掃はある程度行える。

本体には一部、見覚えのない配列のアルファベットの文字が記載されており、商人に何かと訪ねたところ、時間が経つのは非常に早いという意味だそうだ。

「よいしょっと」ハシゴのような物を斜めに流しに立て掛けると、熱湯の入る鍋を流しに注ぐ。「面倒な事この上ない。あのバカに風呂を作らせよう」吹き出す蒸気が顔に飛び掛かりわずかにむせる。

「この際、海底ホテルにでもさせたらいかもしれんの」ニヤニヤとし幼女のブラウンの瞳が揺れる。蒸気により湿った白いワンピースは幼女の裸体と、子供パンツが透けて見える。

作業を進めるにつれて、思考がだんだんと捕まえた男の事に寄って来る。今日から自分の部屋に住まわすことにもなるわけであるが、少女が遊び続けたいからこそ、気密性。いや、防音性の高い自分の部屋を選んだのだろうと。

自分一人が男の前で、演技を続けさせられる羽目になり、ずいぶんと面倒な話になったと改めて気が重くなる。

酸素も艤装が造り続けているが、二人分となると生産量の調整が必要になるかもしれない。また仕事が増えたと、幼女は大きいため息をついた。

「帰って来おったか」

室内の照明がチカチカとなり、小さな光源に替わる。高頻度で行われた出撃ゲートの開閉により、備蓄されていた電力を随分と消耗したらしい。

残量が不足してくると、農園とゲート開閉用を除き、電圧降下により節電回路に自動的に切り替わる。

「ただいまです」少女が海水をポタポタと連れてきながら、リビングへ帰ってきた。「あ奴はどうした」幼女はひと段落付いたと、テーブルに座り白湯を飲んでいた。時刻はいつのまにか6時を過ぎている。

「姉さまですか？8時間くらい遠征に出てもらいました」

「ほう？」コップを置き、面白そうに声を出す。「あの巡洋艦はアジアに逃げたかつたらしく、姉さまが途中までの護衛についたんです」

潜新の奴がからんでいるとすればまあ、そんな事だろうと予測はしていた。

「それで、少し困ったことになったんです。見返りとして、物資の入ったコンテナを投下させたのですが」

ソ級、ヨ級と相談した結果、浮力を外せば沈みそうだが、この深度までは外装が持たないかもしれないとの結論に至った。

「もしかしたら、近くの島で荷下ろしする予定だったのかもしれない」ふむ。と幼女は話を聞いている。

「差し出し人は潜新で、荷受人は飛行場姫か。ならば白字裏書ではあるまい」幼女はイスからポンと飛び降りる。「グズグズを起こしてくる」飛行場姫なら何か分かるかもしれないと歩き出す。

「ごめんなさい」歩き出す背中に声がかかる。「迷惑をかけました」少女が頭を下げ紫の濡れた髪が下方向に垂れる。

「よい」表情が曇る少女の顔を下から覗き上げる。「失敗は誰でもするのじゃ」少女の両手を優しく少女の胸の前にもって来ると、両手を組ませる。

「それに」小さな手が少女の組まれた手を包み込む。「状況を見誤りお主を推薦した我らの責任でもある」優しいブラウンの瞳が。力を無くした紫の瞳を見つめ上げる。

「そんな恰好をしてないで早く風呂にでもつかれ」「でも」少女が顔を上げると、紫の瞳の両端にわずかに光が見える。

「お主を風呂に入れると、あのバカ姉に強く頼まれておつてな」両手を白い髪の毛の頭の上につける。「厳守しなかったとあの角で突かれては、た・ま・ま・ら・ん」

人差し指を伸ばし大きさにツンツンと動かす。紫の瞳から零れる

水滴を見なかったことにする。

「そんなささいなこと朝飯前じゃ」ケラケラと幼女はリビングを後にした。「まったく」ポテポテと通路を歩き飛行場姫の部屋へと向かう。「泣き虫のたまり場かここは」プリプリと不満を述べながら扉を開ける。「朝だぞ！起きんか！ぐず！」ピンク基調の部屋で、ベッドのように組まれた木の上に布団で眠る彼女がいる。

「なによーまだ早いじゃないキチガイ！」ゼンマイ式の高級そうな置き時計を見る。5時を少し過ぎたところだ。「もう七時前じゃ。また、巻き忘れおつてバカめ！」

布団を引つpegすと、可愛い熊のガラが全身に付くパジャマを上下着ている彼女がいる。何がいいのか知らないが頭には三角形のサンタの帽子のような物を被っている。

「まーた変な帽子をかぶつてからに」ベッドに飛びのると、銀色の髪がはみ出る帽子をスポツと剥ぎ取る。

「やめてよーこれないと髪が絡むんだからー！」

「じゃあ坊主にせい」

きやあきやあと二人は言い争いをして、無理やり彼女を目覚めさせると本題に入る。

「のう」「何よ」彼女は不機嫌そうに鏡台に向かい髪をといでいる。「巡洋艦からコンテナを出させたが回収できんらしい」それを聞いて少しぼーっとする頭で考える。「海底？」「海上じゃ」

ふーんと興味無さそうに聞いている。

「浮いてんなら、とりあえず島まで運べば？」「それが出来んから困つとろうが」幼女は不眠のため少しイライラと答えた。

「タコヤキいんじゃない」「ああ。そうじゃの」思い出した。あ奴らに押しさせればよいのか。「なんじゃ？」赤い瞳がニヤニヤと見つめる。

「あんたも出来んじゃない。呆けた？」「バカめ！」飛び上がり後頭部を平手打ちする。「あいたつ」銀色の髪が大きく揺れた。

かくして飛行場姫・北方棲姫によるコンテナ上陸作戦は迅速に行わ

言う。

「そうかしら？」

「そうじゃ」

そんな何気ないやり取りが、彼女には少し嬉しく感じられた。

20 飛行場姫 北方棲姫

「ここがそうだ。坊やにはここで暮らしてもらおう」飛行場姫が石の通路の奥にあるハッチを回しながら言う。「こいつは、人も平気で食うが、ワレが話を通すので安心しろ」細く銀色の髪がフワフワと広がる。

飛行場姫は力を入れハッチを回した。彼女の白い脚にわずかにスジが浮かぶ。鈍い金属音と共に冷たく灰暗い通路に光が滑り出てくる。

「なんじゃ。そやつは」

船のハッチのような扉が開くと、彼の想像とは違い部屋の上半分が薄い水色、下半分が緑色で子供部屋のような印象の四角く奥行きのある部屋が見える。ベッドのように木で組まれた場所の上に、布団が敷かれている。

施設内はほぼ石床で出来ているので、冷気対策として一段高い所で就寝するためだ。また、万が一、二酸化炭素が充満していた場合に、気が付かずに気を失うことをさける意味合いもある。

各部屋には二酸化炭素量を測定する計器が必ずつけられている。ベッドに直面して、壁際には勉強机のような場所に飛行機の模型がいくつも見える。

部屋自体はかなりの奥行で、さらに奥には、四人掛けほどのテーブルがあり、その先に入口と同じようにハッチの扉が見える。こちらにはロツクのように水平に鉄の棒がかかっている。

「ふむ」飛行場姫は大きさに姿勢を良くし、胸を張る。「私が先日捕まえてきたのだよ」

飛行場姫の手には手綱のように赤いリードがあり、その先には星形のスタッツの付く赤い首輪をつけた全裸の男が、ペタペタとハイハイ

歩きをして続いている。

「ほら、挨拶をしろ」

飛行場姫は、ブーツの脚で彼のお尻を押し、前に出させる。ベッドの上に小さく座る、北方棲姫のインペリアルポーズを思わせる深いブラウンの瞳が、値踏みするかのように男を見回している。

「それで、ワラワの昼飯にしてよいのか？」瞳が深く冷たく男を見下ろす。「ふむ」飛行場姫が手を組み、肩幅に股を開き大げさにポーズを取る。

「これは、行く当てのない身でな」白いブーツが彼のお尻にコツコツとぶつかる。「食っても構わんが、私によくなっている」

北方棲姫から放たれる、黒光りする銃口を向けられているかのような恐怖感が、彼の体に刺さり込む。卓越した殺気が彼の体をこわばらせ、わずかに飛行場姫の足の後ろに下がろうとする。

「ワラワは人嫌いで」顎の下に手を付け、彼を睨みつけるように言う。「私は忙しい。この坊やお前が面倒を見ろ」飛行場姫から深海が広がっていく。「骨の標本をかえ？」

拮抗する二人の気迫にいつの間にか彼は、飛行場姫の脚の後ろから事の推移を見守っている。

「貴様。ワレの命が聞けぬとでも？」彼女から広がる深海がその深さを急速に増していく。彼が初めて彼女と対峙した際のあの深度だ。あるいは、さらに深い。「むう」

ゴワゴワとした白い幼女の髪が居心地が悪そうに動く。あれほど恐怖した飛行場姫の重圧が、今は心強く感じるのは彼の心境の変化だけによるものだろうか。

「まあ。よかろう」力強くなった飛行場姫の深さが、ブラウンの瞳を一瞬嬉しそうに細めさせる。「深海棲艦同士で争っても仕方がない」逃げ出す前の捨てセリフのように体をこわばらせ幼女が言う。

「うん。ちょうどワラワも人間の生態に興味を持っていたところじゃ」ポンとベッドから飛び降りると、ワンピースのスカートがふわわりと広がる。「運が良いな。人間」

小さな手が彼の首に伸ばされ、そっと首を掴む。その瞳は忌々しそ

うに彼をのぞき込んでいる。彼は居心地の悪そうに視線を逸らした。「北方棲姫。その首は、貴様の首と同義だと思え」押さえつけるように、見下ろしながら高圧的に言い放つ。「お主。ずいぶんと、偉くなつたもんじゃな」鼻息を荒くし、こちらも両手を腰に添え睨み返す。

「五体満足なら良いのか?」「良い」銀色の髪がゆらゆらと動く。「よろう」幼女から、深い海の気配が消えた。

「お主、出てこい」飛行場姫の足の後ろに回り込んでいる男を、冷えた瞳が見つめる。「呼ばれているぞ、愚図」足を後ろに下げ、彼のお尻に引つ掛けると力強く前に押し出す。

リードが伸び「うくあ」彼の首が後ろへ引かれた。小さく息が漏れる。

「おい」幼女は股を開いてしゃがみ、ワンピースのスカートが両ももに乗り多くめくれ上がる。「おい」優しい平手打ちが彼の頬を撫でる。「こつちを向け」目を逸らす彼に瞳を合わせせる。ブラウンの瞳が彼の瞳の深部まで見つめた。

「飛行場姫。エサは良いとして」顎で奥のハッチを示す。「これのトイレはどうするのじゃ」他の部屋と違い、緊急時のシエルターも兼ねたこの部屋には、気密性の確保のために側溝が伸びていない。

「まさかここでさせるつもりかえ?」

「む。それは失念していた」

飛行場姫の泳ぐ目を、ブラウンの瞳が呆れるように追いかける。

「ならばリビングでよからう」気密性が高いこの場所では全ての匂いが長時間拡散せずに存在してしまう。気休め程度に部屋の四方に葉の細かい植物が置いてあるが、匂いに関してはさほど役には立っていない。「おい。愚図」

「お前は、ここで用便はすませたか?」飛行場姫は幼女の隣にしゃがみ込み、オレンジがかかった大きな赤い瞳で彼の顔をのぞき込む。「ウンコを出したのかと聞いている」

突然の事に困惑する彼に顔を合わせ問い詰める。

「少なくとも三日もため込んでいたのか」

彼は小声で出していないですと答える。

「それはすまなかつたな」白く冷たい手が、全裸で四つん這いになっている彼のお腹をさする。「確かに、少し張っているようだ」「なんじゃ、気持ちよかつたのか？」

幼女が彼のお尻側からのぞき込んでいると、彼女の指先が彼の腹をまさぐられ、彼は腹に向かってしつかりと反り返らせている。

「反方位じゃ。はよう進め」幼女が四つん這いになる彼の背中に飛び乗り、白く小さな足を回しこんで腹を蹴る。入口へと体を向けさせた。「まで。北方棲姫」

幼女の体は見た目に反して重く、僅かにふくよかな体型ではあるが、60〜70kgほどの重量がありそうだ。石床に当てる膝が痛み、彼は一瞬、助け船が来たと思いい僅かに安堵する。

「よもや止めるつもりではあるまいな？」約束をたがえるつもりかと低く声を出す。「そうではない。せつかくだ、鈴をつけてやる」

「予定通り」飛行場姫は、勉強机の引き出しから、小さな鈴が二つ付く赤いリボンを取り出し、彼の反り返る根元に結ぶ。

「ほう。面白い趣向じゃの。気に入った」

「ほりゃ。すすめ、すすめ」幼女は彼の背中に乗り、赤い手綱を片手に持ちながら、もう片方の手でお尻をはたく。冷たく仄暗い石の通路に、リズムカルに小さくなる鈴の音が響く。「良いぞ。これはなかなか愉快じゃ」

幼女は楽しそうに白い髪を左右に揺らしている。

足を止めると、少しつまらなそうに後ろから付いてくる飛行場姫の白いブーツが股の間に滑り込んでくる。白い靴ひもの段差が股間を刺激し、小さく喘ぎ声を出させては彼の頭をのけ反らせる。

彼は乳首を立たせ、靴ひもへの射精を堪えながらペタペタと手を前に進める。

「愚図。もう少し早くしろ」

通路が明るくなり、リビングが近づく。ブーツの先端が彼のお尻の隙間に挿じり込まれ、両脇から黒い毛が生い茂る肛門をグリグリ刺激する。

のけ反る顔は眉間にシワを寄せ、悶える腰振りが勃起の根元に付く

二つの鈴を喧しく鳴らす。途中すれ違ったソ級や潜水組の女たちが、冷たく青い瞳で彼を見下しながら嘲笑うように通過して行った。

「よしよし、よく頑張ったな。偉いぞ」

リビングにつくと、膝を赤くした彼を抱き上げ、椅子に座ると、子供をあやす様に膝に乗せ片手で彼を支えた。

白いレオタードのようなスーツ越しに彼の顔を胸に押し付ける。ツルツルとした胸の間で、彼は穏やかな表情を浮かべている。その光景が幼女を心底呆れさせた。

「おい、飛行場姫」一段下げた声で、彼女を睨みつけながら言う。「さつさと排泄を済まさせて部屋に戻せ」

彼を細く銀色に透ける髪で包み込みながら、彼女は知ったことかと自身も目を閉じあやす様に彼を抱きかかえている。夜通し起きていた幼女に苛立ちが込み上がる。

「もうよい、そ奴を貸せ！」

幼女は両手を伸ばし彼をむしり取ると、頭の上に力強く持ち上げ床に下す。そのまま冷たい石床に仰向けに寝転がらせると、幼女は男の横から執拗に腹を揉みしだく。

股間に結ばれた赤いリボンに付く、二つの鈴がリズムカルに鳴っている。次第に彼は顔をしかめ、冷やされた腹が水の動く音を奏で始める。

「パンパンに詰まっておる」

体を動かし、勃起を手前に彼の脚の上にアヒル座りで座った。僅かに鈴の音が鳴る。

白いワンピース越しに股間を擦りつけ、反り返り立ち上がる肉棒をさらに押し倒しながら、腸に沿うように指を動かし、体内の固形物を押し動かす。彼は鼻息を荒くして、お尻に力を入れながら耐えている。

「はよう出せ」

幼女は腰を押し付けながら前後に体を動かし、さらに激しく指を腹

に押し込み排泄を強要する。幼女の股に潰される鈴が睾丸に押し込まれ、彼は痛みから首を左右に動かすたびに長い息を吐いている。

「こんなに勃起させおつて」腰を反り返る勃起に乗せると僅かに幼女は股間に反発を感じた。「容器をはようもて」

体重を乗せ腰を前後に揺する。再び彼の体内から水の動く音が聞こえると、耐えるように股下の反発が強くなる。射精が先か、排便が先か。彼は二つの責め苦に耐えながら熱い声を漏らし喘ぐ。

「よしよし」彼女がボール型にビニールを何度か張ったボール型の容器を床に用意する。「立つんじゃ」幼女は跨り、彼の股から下りると彼を鏡の前に移動させる。

飛行場姫は趣向の予想が付き、縦長い鏡の前にあるビニールを貼られたボール型の容器に彼を跨らせ股を開いてしゃがませると、背中側に回り込み両手で脇を抑え込む。

幼女は横から顔を出し、白く小さな指で包み込むように、先端からわずかに精液を零れださせているリボンと鈴の付く彼の勃起を握っている。

「坊や見て見ろ」

鏡に彼の姿が写り、首から紐を垂らし、全裸で股を開いて恥かしい鈴の音を奏でながら、幼女の上下に動く指の中で今まさに射精しようとして先端を零れ出る液体で光らせながら尿道を開閉させている男の姿が見える。

彼の上半身は温度を上げ赤く変わり、心音を高めながら首筋から顔が、まだらに赤く染まっていく。視界がどんどん白く変わっていく、鏡から視線を逸らす彼の目じりに僅かに涙が浮き上がる。

「なんじゃ？糞詰まりか？」

ゴロゴロと鳴らしイキむ彼のお腹から一向に顔を出さない固形物に業を煮やし、幼女は片手にビニールを被せると、生い茂る剛毛を掻き分け彼の肛門を指でなぞる。そのまま指の腹を押し込んだ。

「ワラワが砕いてやろう」

ブラウンの瞳が冷たく光るように感じられる。細い指が一本。勢いよく彼の肛内へと侵入した。

「坊や、早くしないと駆逐棲姫も連れてくるぞ」一瞬彼の顔がこわばり、覚悟を決めた様に腹に力が入る。「何じゃ、駆逐がどうした？」ドリルのように指が半回転させ内部へと侵入させていく。

「こいつはどうも、駆逐を好いているらしい」彼に聞こえるようにワザと少し大きめに会話を行う。「それは面白いの」幼女の細かい指が一本完全に振じり込まれた。

「ほう。これは硬い」

楽しむように挿入された二本目の指が、排泄直前で頭を押さええられていた硬い固形物を押し戻す。

突き崩し、その固形物に指を指しこむと片手で手コキを続けたまま砕くことはせずに前後にゆっくりと滑り動かしていく。

お尻をほじくられ喘ぎ声を上げる彼の姿を、彼女は銀色の髪を揺らし、股を濡らしながらうつつとりと眺める。

「どっちじゃ？」出る。出ちゃうと。涙を零しながら訴える彼を嘲笑うように幼女が問う。「こっちはか？」手コキの速度が速まり「こっちはか？」

固形物に差し込んだ二本の指が、アナルを犯しているかのように固形物をゆっくりと前後させる。

「ほら。出せ」

「ひりだせ！」鈴の音が大きく鳴り彼が腰を前後に痙攣させるように振ると、彼は口を大きく開け、喘ぎながら鏡の男に向かい精液を飛び散らせた。「こっちもじゃ」

指の先端をカギ爪のように曲げ引き抜くと、茶色い固形物がビニールにボトリと落ちる。

そのまま長く蛇のように黄土色の塊がおならのような水音を立て滑り出てくる。

力を無くした彼の尿道から薄黄色の液体が漏れ始め、幼女は急いで角度を変えビニールの中へと誘導する。彼はすべてを見られた恥かしさから、顔を耳まで真っ赤に変え呼吸を荒げている。

「なんじゃ」見れば黄土色の固形物に鮮やかな血の筋が僅かに付いている。「お主バージンじゃったのか」幼女はケラケラと笑いながら、指

のビニール袋を外す。そのまま容器からビニールを外し先端を結んだ。

「捨ててまいれ」それぐらいせよとばかりに手に持つビニールを突き出す。「可愛かったぞ坊や」顔を真っ赤にして石床に座り込み涙を零す彼の顔を、両手で押さえキスをする。

彼女の絡め入れてくる舌の動きに答えるように鈴の音がなり、残る精液がドロドロと自然に噴き出した。彼女は幼女から犬の糞のようにビニールで結ばれた排泄物を受け取ると、フワフワとする浮揚感の中、下層へと下りて行く。

「さて、続きじゃ尻を出せ」

涙を溜めながら僅かに怯える彼を、樽のような入れ物にしゃがませ尻を落とさせる。

適度に熱い灰汁の温水に尻が沈み込み、彼の背中から幼女が指を樽の中へと指を滑り込ませ、肛門のシワを擦るようにはちやばちやと洗浄する。側面に泳ぐ剛毛を指で挟み擦る。

「良いじゃろう」桶から手を出すと塩を持ち、上水で指を揉み洗いする。「まったく。人間は手間が掛かってかなわん」

幼女は首を振り、面白くなさそうに白い髪を震わせるとリングの入口を、ブラウンの瞳を細め見た。

「のう。戦艦棲姫」

「随分と可愛らしい格好ね？」

流水の潤いのように輝く長い黒髪と、額から突き出る二本の角。スピネルのような澄んだ赤色の瞳がこちらを見ている。

黒いワンピースを着て腕を組みこちらを眺める彼女は、U字に垂れるワンピースから胸元を大きく見せ、真っ黒な下着を白い肌により強く調させている。

スラリと伸びる長く白い脚の先には、黒い爪のつま先が見えるサンダルのようなハイヒールを履いていて、彼女の平均より高い身長をさらに大きく見せている。

彼女は腕を下し、腰まで下りる長い黒髪を揺らしながらコツコツと近づいてくる。

21 戦艦棲姫 飛行場姫 北方棲姫 提督さん（強
制女装開始）

「あなた」

赤い瞳が見下す様に彼の体を舐めまわす。戦艦棲姫は両腕を伸ばし、彼女の白い指先、黒い爪が四つん這いになる彼の体をなぞっていく。

「ワキもお尻もこんなに生やして、恥かしくないの？」

彼女は体を添うように背中に重ね、黒いワンピース越しに大きな冷たい胸を背中に乗せる。耳に口を付けると、そのまま、わき毛と尻毛を同時に引つ張った。

彼は耳を赤く変え体を身震いさせている。彼の脈打つ鼓動が大きく早くなっていく。

「あら。恥かしいんだ」

真っ赤に変わった彼の耳に、小声でささやく。音量に比べて彼女の声の浸透具合が高いのは、同時に低周波に声を乗せているからである。

北方棲姫は彼女を見ながら、頭に響くからやめろとジエスチャーを行う。放っておくと、1、2時間はあの調子で事が進まなくなる。

「わらわ眠いゆえ、早くこ奴を連れて戻りたいのじゃが」

ポテポテと近寄り、白い足で、彼女の顔にベタベタと粘着されている、彼の頭を踏み潰す。「もう、射精も済まさせておる」足をグリグリと動かしながら淡々と続ける。

「ワラワの布団を精液まみれにされてはかなわんからの」小さなかかとが、彼の鼻に乗りゴリゴリと圧迫する。

「あら」彼女の耳が小さく鳴る鈴の音を拾った。「お顔ふみふみされて、おちんちんおつきくなってるの？」

彼のお尻から回り込む彼女の指先が彼の体を這いずりながら、しや

くとり虫のように進み、その現在位置をアピールする。彼はお尻をブルブル振ってその先へと進ませないように抵抗する。腰振りが鈴の音が周囲に大きく響く。

「なんじゃ。また勃起しおったのか」

大きく片足を上げ、再び彼の頭に白く小さな足を乗せると、膝で捲れる幼女の白いワンピースのスカートが彼の顔に被さる。

彼の視界を、明るい電灯が光を滑り込ませるスカートの中、白い綿で幅の大きな子供パンツが支配する。幼女はそのまま、足を前に動かし股間を彼の鼻と口に押し付ける。

「気色悪い鼻息じゃのう」

口は塞がれたため、呼吸をするたびに彼の熱い鼻息が、パンツをすりぬけ幼女の子宮に出し入れされる。

極限まで勃起させた根元に彼女の指先が到達し、黒い爪が弾く。彼は衝撃で体を大きく跳ね上がらせると。油断していた二人は彼から零れ落とされた。

「こりゃ。暴れるな」起き上がり、幼女の白い足の甲が彼の頬をはいた。「なによ。突然」こちらも突然振り落とされ、少し不機嫌に彼のお尻にハイヒールの柄をグリグリと食い込ませる。「気持ちいくせに」

彼女のハイヒールの柄が、彼の肛門を捕らえると足の動きに合わせて僅かに回転する。

「こ奴はケツが切れておる」

四つん這いでいる彼の顔の前に、股を開き幼女がしゃがみ込む。白いワンピースはもも上までめくれ上がり、白い下着がしっかりと見える。彼の視線が自然と向かい、恥かしそうに視線を逸らした。

「何じゃ？」小さな手を伸ばし、顔を押さえつけると、股の間に視線を固定させる。「ほら、見よ」

「なに我慢してんのよ」彼のしり穴からハイヒールを無造作に抜いた。「ほんとは見たいいくせに、バカなの？」肛門から僅かに輝く赤い液体が垂れている。

「あら？」こめかみから垂れる黒い黒髪を耳の後ろにかき上げると、楽

しそうに顔を近づける。「なーに？」片手の黒い爪で彼のお尻を広げ、穴から垂れる赤い血をまじまじと観察する。

「ふーふー」口を近づけ息をふきかけると、ゴワゴワと生える尻毛の奥で恥かしそうにギザギザの肛門が開閉している。「あつ！こらっ！」

空気の抜ける音とともに、腸内の空気を吐き出され、彼女は顔でその匂いを受け止める。反射的に体を飛びのかせ、乾いた破裂音がお尻に彼女の赤い手形を付ける。

彼は息を強く吐きながら上体を反り返らせ、鈴の音が大きく鳴り響いた。

「そのへんにしておけ」幼女がうんざりと声を出す。立ち上がり片足をあげると、小さな白く冷たい足が彼の頭に乗る。指先が髪をつまみ彼の顔をあげさせた。「ほれ。しゃぶってよいぞ」

髪を離し、スカートの裾を上げ、彼の顔の前に小さな片足が開閉するように指を動かす。しかし、彼は顔を赤くしたまま口を閉ざしている。

「あんた、足好きでしょ？」彼女の重い言葉に僅かに彼は全身に力を入れ、身構える。「好きでしょ？」

片方のハイヒールを脱ぎ、彼のお尻に足裏を擦りつける。彼女の透き通るような肌に気付かなかつたが、薄く白いストッキングをはいっていたようだ。つるつるとした凹凸のある足裏が彼のお尻を摩擦する。

「なんじゃ」幼女の白い足の指先が彼の鼻をつまむ。「虐めてやろうと思うたら」摘まむ鼻で彼の顔を起こしあげる。「お主、変態と言うやつか」幼女の冷たく刺さる言葉に、わずかに股間が跳ね上がり鈴の音が鳴る。

「じゃあ、止めじゃ」

彼の顔を圧迫していた冷たく白い足裏が、石床にゆつくりとおりていく。

「喜ばれては面白くもない」床に降りた白い足の親指動かす。彼は僅かに残念そうにその動きを瞳で追っている。「ん？なんじゃ？物欲しそうにみて。」

「これは変態欲しがりさんなのよ」白いパンストをももまで穿いている細い足裏が、彼のお尻をこねくり回す。「そうよね？」

彼女は腰に片手を当て、足指でお尻をなぞりおりろしていく。足の甲が鈴の付く彼の睾丸を支えると、彼は悶えるようにお尻を振り、小さく鈴の音を鳴らす。

「ほら、欲しいですか？」彼女の足の甲が四つん這いになる彼の足の間にねじ込まれたまま、パンパンに膨らませ反り返らす肉棒を彼の腹に押さえつけ、ゴリゴリ足の甲が擦り潰す。「早くしないとみんな呼ぶわよ？」

足の甲一つで彼の股間を持ち上げる、彼はびっくりしたように両手で地面を掴み、脚を垂らし腰を持ち上げられる。

「ほら、欲しいですしなさい」

彼は腰を小刻みに左右に振り感触を楽しみながら、足を開閉させながら顔に近づくと小さな白い足指に粗い鼻息をかけている。

「しゃぶりたいのか？よいぞ？」足裏を見せ、力を入れて閉じる。足裏にシワがよりかれの口にかかるとが近寄っていく。「こつちか？舐めたいか？」

口元まで数ミリ程度の至近距離になると僅かに彼の口が開く。僅かに冷たい床の匂いと海水が作り上げた潮のような匂いが彼の鼻に流れ込んでくる。

「言わねばダメじゃ」舌を伸ばし足裏に接触すると、少女は足を引く。「ほら。いいなさいよ」

彼女の膝がさらに高く上げられ、睾丸に鈴が大きく食い込み痛みを生む。うつろな瞳で小さく欲しいですと呟いた。

「スケベ猿」

彼女の脚が下り彼の膝が、床に打ち付けられる。瞬間口を大きく開けると、少女の足が喉にまで食い込んでくる。

「ほれ、味わえ」

少女は片足を伸ばし、脚に興奮した鼻息を感じている。喉奥まで突っ込むと、反射的に噛みつかれるが意に介さず指先が彼の深部を犯し踊る。

彼は目に涙を溜めながら瞳を霞ませ舌を足裏に密着させる。舌先を前後や左右に窮屈に動かしながら、冷たい感觸を楽しむ。

「自分で腰動かさないよ」

しなやかな白い脚を伸ばし足の甲で、股間を刺激しながら彼のお尻を平手打ちする。

「もつと振って」平手打ちをされるたびに尻が赤く変わり、呻き声を出しながら激しく腰を振る。「ほら。ほら」彼女は黒い髪を耳にかき上げ、何度もはたく。真つ赤に変わるまで。

「こつちも休むなバカめ」

白いスカートを両手で持ちながら伸ばす脚を、抜けきらない程度にズボズボと彼の口を出し入れさせる。彼は股間から鈴の音を響かせながら、少女の足に自らジュブジュブと絡む水音を立て吸い付いていく。

「ほれ、早く出せ」

少女は両手でつかみ、さらにスカートをめくりあげる。大きな白い下着を彼の視線の上に見せつける。持ち上がった片足が下着にシワを作りながら小さな縦筋の女性器を浮き上がらせる。

そこは、彼の鼻息の湿度と自ら零れだす粘土の高い体液が下着広範囲に濡らしている。

「ほら出すの」

彼の首から垂れる赤い紐を手で引き寄せ、彼の顔が苦しそうに僅かに後ろへ起き上がる。

二人の女の足が全裸で四つん這いになる彼の体を前後から犯しつつくし、彼は首輪を締め付けられながら尻を何度も叩かれ腰を振りながら少女の足をあさるように激しくしゃぶりたてる。

「あ」

突然彼女の足が股間から離れる。もう少しで射精できたところで足を離され腰を振り股間を鳴らしながら彼は、少女の足をしゃぶり続けていく。

「なくに？」振り向くと、飛行場姫が服を持ってきたようだ。「何だ。坊やお楽しみの最中だったのか」その声に驚き急いで足から口を離

すと、顔が真っ赤に変わり赤みが背中にも広がっていく。

「何急に恥かしがってんのよ」彼女はお尻を強くはたいた。乾いた音が響く。「駆逐棲姫を寝かしつけた後、こいつの服を持って来てな」

手には彼女のボディコンのようなピチピチとした黒い服で短いぴちぴちとした短いスカートと服だ。上半身の広く開く胸元まで一体化している。

「それ、私のじゃない。着せる気なの？」両手を腰につけ、顎を突き出しながら彼女が言う。「ふむ。体格はお前に酷似しているので問題なかろう」

コツコツと白いブーツの音をたてながら、飛行場姫が歩き寄ってくる。

「そんなのコレが着れるわけじゃないじゃない」彼女の片足が彼の背中を押しつぶし、彼は石床に大の字に潰された。「密着していて温かいかと思ったのだが」飛行場姫の視線が僅かに下に下がる。「はあ。あきれた」

彼女は黒いワンピースを脱ぎ、白い体に黒い下着が上下にあらわれる。

「どきなさい。しっしっ」彼の顔の前にいる北方棲姫を手でどかす。

「何じゃバカめ」彼女は彼の前に下着で股を開きしゃがみ込む。「あんたこれ着なさい」

無理やり立たせると、黒いワンピースを頭からガボツと被せる。ゴツゴツとした体に、ほぼフラットな胸元によりワンピースの胸元が大きく垂れ下がる。

「だっさ」

彼女の短いスカートにより、わずかに睾丸をのぞかせながら直角に盛り上がりが出てくる。

「しかも勃起してキモ」腕を組みグルグルと彼の周りを回りながら彼女の酷評が始まる。「流れ着いた水死体の方がまだいいわ」彼のスカートをめくりあげお尻を覗く。

「まあ、そういうな」何だか居たたまれない気持ちで、飛行場姫が止めに入る。「自分で見なさいよ」

彼女は立て鏡の前に力づくで立たせ、彼にワンピースを着たまま、首輪をつけ勃起させている姿を無理やり見させる。

「こんなのと寝るのか？ 気持ち悪い」

北方棲姫もまた腕を組み、呆れかえっている。着せてみればもしやとも思っていた自分が呪わしい。どれほど着飾っても愚図は愚図のようだ。第一胸のサイズが違いすぎる。

「機能停止した艦娘を抱き枕にでもした方がまだ良いの」

「さりとて」気持ち悪そうに彼の体を見上げ、上下に吟味しながら幼女が続ける。「お主の服はすでに廃棄しており」呆れた瞳が彼の股間で止まる。

「男装をわざわざ用意してやる気もない」幼女の膝が彼の股間をグリグリと押す。「まあ、ここは飛行場姫の顔を立ててやり収めてやるか」
「それとこれだ」

飛行場姫は白いスーツの隙間に指を滑り込ませ、もそもそと胸元から白い下着を取り出す。彼女の瞳が一瞬大きく開き角が大きく膨らんだ気がする。

「ほら」彼の鼻先に下着を垂らし匂いをかがせる。「誰の物かわかるか？」

「そうだ。いい子だ」言われるままに白い下着の股部分に広がる卵型のシミの後の匂いを嗅ぎ分け、小さく駆逐棲姫とつぶやく。「穿いてみる」サテン生地のはそれは光沢があり、つるつるとしている。

「早く穿きなさいよ。ぐず」面白そうだと思いつつながらニヤニヤと先を促す、彼女の赤く澄んだ瞳が、入口から紫の髪をフワフワとさせながら、楽しそうにのぞき込んでいる紫の瞳と目が合う。「ほら穿いて」

もじもじとしている彼の足に無理やり下着を足にくぐらせる。

「いやまで」飛行場姫が止めに入った。「何よ」飛行場姫は両手で彼のお尻を広げ隙間を覗き込む。

「下着に血が広がるかもしれん」戦艦棲姫がスカートを持ち上げ、飛行場姫がお尻の中をしつかりと観察する。「大丈夫そうだな。よし。穿け」

「何じゃ。情けない声を出しおって」

飛行場姫は彼と入口の間に立ち、ニヤニヤと彼の様子を見ている。二人の女が、サイズが小さく、太ももに引つ掛かる少女の白い下着をグイグイと引き上げる。

彼の助けを求めるような視線が飛行場姫にチラチラと向かうが、あいにく彼女にはその気はないようだ。

「ふむ。穿けたか」力任せに下着を持ち上げられ、黒いワンピースの中で、下着が彼の股間に密着する。「よし、スカートを捲つて見せよ」

ゴツゴツとした両手で黒いスカートの裾を掴むと、ためらうように手が止まる。

「何してるの。早く上げなさい」「そうじゃグズめ」居合わせた女たちの視線が、心臓の鼓動が離れても聞こえるほど早くなり、泥酔しているかのように首筋まで赤く染まる彼に集中する。「早くしろ愚図」

飛行場姫にお尻をはたかれ、目じりに涙をためながらゆつくりとスカートが持ち上がっていく。黒いワンピースの内側が徐々に暴かれ、水着のインナーのような白いサテンの下着が見え始める。

サイズ小さく、ももの内側から細く逆三角形に下着が張り付いている。さらにスカートが上がると光が差し込み、下着から鞞丸と鈴が零れ出ている。

「もつと上げなさいよ」戦艦棲姫がニヤニヤと彼の股に近づき、しゃがんで赤面しプルプルと震える彼の顔を見上げる。「上げるのよ」彼女の片手がスカートを抑える彼の手ごと、無理やりめくりあげる。

「あはっ。やっぱり」彼はスカートから手を離し、顔を手で隠している。「ほう」幼女がのぞき込むと、飛行場姫もまた彼の前にニヤニヤとしゃがみ込む。少女もまた彼の背後からその雰囲気を楽しむ。

「ふーふー」

彼の正面にしゃがむ戦艦棲姫が、小さな下着の上部から大きく顔を出す彼の亀頭に息を吹きかける。両足首を飛行場姫と北方棲姫に掴まれていたため、彼は腰をもじもじと動かし恥辱から逃げようともがいている。

「ふーふー」

「なるほど、なかなか面白い趣向じゃな」しゃがみ込む三人の女たち

が、下着から顔を出し釣り上げられた魚のように息苦しそうにパクパクと開閉する彼の尿道を凝視している。「危ないわね」

恥かしさで顔を隠しやがみ込む彼に、角が刺さらないように咄嗟に顔を引く。耳が赤くなりすすり泣くような音が聞こえる。

「ねえお顔見せてよ」彼女は彼の腕を掴むと、恥かしそうに首を振っている。「み・せ・て」

ついに無理やり顔を晒され、唇をぶるぶると噛みしめながら目には涙の垂れた後が出来ている。鼻からは、わずかに鼻水を垂らし、見つめられながらグズグスと時折鼻をすすっている。

「なんじゃこやつは。ベソをかきおつてみつともない」幼女の平手打ちが彼の頬を弾き首が大きく回転する。「あまり虐めてやるな」

飛行場姫が両手を伸ばし胸の中に引き寄せる。抱きしめられるとグズグスとなく音が多くなる。

「今度は泣き虫さんなの？ なっさけな」

斜めに抱き寄せられ、飛行場姫から零れ出てい居る下半身のスカートをめくりあげると、挟まれた肉棒の先端からわずかに液体がにじみ出ている。

「泣きながら我慢汁だして、ゴミくずみたい」

黒い爪が尿道をなぞり挿し込まれる。

「なんだ？」胸から顔を出し、上目遣いに涙目で飛行場姫の顔をのぞき込んでいる。「決まってるじゃない」

黒い爪がゾリゾリと尿道を削る。股間がビクビクと突きあがり僅かに鈴を鳴らす。

「甘やかすから、ムラムラしてぴゅーぴゅーしたくなっちゃたのよね？」

「そうなのか？」

飛行場姫のオレンジがかった赤い瞳が彼の顔をのぞき込む。彼はハツとなり、再び彼女の胸の中に顔を埋めると顔を左右に振っている。

「何でもよいが、ワラワそろそろ寝たいのじゃが」北方棲姫がプカプカと欠伸をしてウトウトとしている。「しょうがないわね」戦艦棲姫が

彼を彼女の胸から引きはがし、仰向けに床に転がせる。

「続きしてあげるからさっさと出しなさい」

真つ白でしなやかな体に、上下に織り込みと濃さの違う黒の彩色の施された黒い下着を付けたまま、彼の捲られたスカートから見える白い下着から飛び出す股間に、膝上まである白いパンストを穿く片足を乗せる。

「ほら、ぴゅっぴゅっ」巧みな足技で、極限まで勃起をさせると、次第に白いパンツがずり下がり斜めに大きく反り返る。「仕方ないやつだな」飛行場姫もブーツを脱ぐと口の前に近づける。

「可愛いやつだ」彼はうっとり眺めながら彼女のつま先一本一本にキスを始める。「むか」戦艦棲姫が目の前で寝取られたような気持でイライラと足を動かす。

「あんた、わたしんときそんな顔しないじゃない！」彼女が動かす足に少し力が入り、彼が苦悶の表情で飛行場姫の足に噛みつく。彼の表情が一瞬で白く変わった。「気にするなその程度、どうという事もない」申し訳なさそうに彼は噛みついた個所に舌を付け何度も舐めるが、彼女は銀色の透ける髪を手で大きく翻し、勝ち誇ったように戦艦棲姫にキメ顔を向ける。

「くやしー」両足を石床に下すとバタバタと両手を動かし地面を踏みつける。「そんな筋肉ゴリラより、私の方がいいに決まってるでしょ」下着姿でウロウロと歩き回る。

「どうする？変わるか？」腰を曲げ彼の顔をのぞき込む。彼は舌先を指の隙間に差し込みゆっくりと順番に汚れをこそぎ落としている。「も〜」

戦艦棲姫は牛のように角を突き出し、動物園で左右に歩き回るだけのゾウのように鬼の形相でウロウロとしている。

「早く終わらせよ、うすら馬鹿ども」

北方棲姫が見かねて彼の股間に足を乗せる。勃起に直角に足を乗せて、ブドウ踏みのように幼女の小さな足が彼の白いパンツから出る鞞丸を潰す。

足を前後に傾け適度に足裏で球を転がす、交互に鞞丸が刺激され彼

は悶えるように足をガサガサと動かしている。

「そうか。気持ちよいか」鼻で喘ぎ声を出し、執拗に見下ろす様に足を口に乗せる飛行場姫の足にしゃぶりつく。「まったく。冗談じゃないわ」

少し気を落ち着かせ、戦艦棲姫は彼の胸横にしゃがみ込むと、黒いワンピース紐をずらし乳首を露出させる。

「なんだ、乳首も勃起してるじゃない」場所がなく仕方なく、彼の乳首をパンスト足でこねくり回す。「ほら、早く汚いの出しちやいなさいよ」足裏全体でワンピースから零れ出た彼の胸部を押しつぶす。「ほら、ほらほら」

「そうじゃ早く出せ」

三人の女たちの足が彼の全身に這いずり回る。体を足で押さえつけられ彼は、目を霞ませ手足をバタバタと動かす。大きく開き喉奥まで足を受け入れながら胸部に足が蠢きまわり乳首を足指でつままれる。

股間には石床に腰を下ろした幼女の足が二本伸ばされていて足が躍るように股間全体を挟み込み擦りたてる。喉奥から、鼻先から、絞り出すような彼の歓喜の悲鳴が室内に響き渡る。

ついに観念したように大きく声を出しながら大きくまくられたスカートの下、自分のヘソの窪みに濃厚なドロツとした精液を吐き出した。

幼女の足が追い打ちをかけるように白い下着を押しつぶすと、ポコッと精液の塊が絞り出される。

「こりや汚すな」

役目を終え、小さく萎み始めて下着の中に逃げ込もうとする、彼の肉棒を幼女の細い指がすぐさま追いかけて下着を剥ぎ下した。

彼は飛行場姫に顔を起こされ、呼吸粗く上下に腹を動かしながらへソに流れ込んでいく精液をポーッと眺める。

白い下着が彼の両太ももを締め上げる。逃げ出す様に小さく変わっていく彼の亀頭が毛むくじやらの睾丸の間に乗り、ゾウの鼻のようにシワシワと伸びている。

「おい。誰か掃除をしてやれ」祭りの後の静かな疲れを感じるように飛行場姫が言う。「あんたしてやりなさいよ」振られた腹いせかつんツンとした態度で彼女が言う。「そうじゃ」

幼女もまた気怠そうにブラウンの瞳を細めている。この中で一番パフォーマンズが良好なのは飛行場姫であり、二人の冷たい視線が彼女に刺さる。

「ふう。まあ、よかろう」戦艦棲姫が彼の上半身を起こし背中を支える。北方棲姫が彼の両足を両手で広げて固定する。「手間取らせる愚図だ」

寝そべるように直角に彼の腹に顔を近づけ、銀色の髪を片耳の後ろに手でかき上げると、一気にヘソに溜まる精液を吸い上げる。

「何顔赤くしてんのよ」その様子を顔を僅かに赤くしながら心音を速めていく彼に、再び彼女はイライラと始めた。「ふふっ」

飛行場姫は口の中に溜まる精液を飲み下すと、彼の瞳とオレンジがかる赤く澄んだ瞳交差する。飛行場姫はわずかに微笑んだ。

「何処までも可愛い坊やだ」

彼の顔を見ながら舌をヘソに付け、精液の飛散をなぞるように顔を股間に下していくと、再び様子を伺うように、股間が傾斜を始める。

しかし、わずかに膨らむだけですでに力は無く、なめくじのように精液の後を作りながら腹の上をズルズルと伸びていくだけだ。

「もう立たないの？だっさ」戦艦棲姫が彼の耳元にそつと囁く。「変態で早漏で持久力もない。サルとした方がましだね」意地悪に顔を赤らめる彼に続けた。「去勢する手間が省けてよいの」

咄嗟に彼は手で顔を隠してプルプルと震える。容赦なく浴びせられる罵倒に、力なく垂れ伸びる股間が僅かに膨らんだようだ。

「こつちを見る坊や」

恥かしそうに僅かに手の隙間を広げ、こつそりと彼女の声の方を見ると、片手で股に掛かる白いパンツを掴む。

ナマコのように転がっている彼の尿道に、横から顔を突き出し彼女の舌が伸び触れようとしている。彼は手を閉じると首を振りイヤイヤを始めた。

「いら暴れないの」

彼女の舌が接触し、尿道に力任せに先端をねじ込まれるとヒヤツと嬌声を出し、平らな胸を突き出す。戦艦棲姫は彼の両手を掴み背中側に回しこむと、両手を石床に押しさえつける。

隠すものを失い、今まさに力なく転がる肉の塊が彼女の口の中に消えようとしている光景が滑り込んでくる。

彼は上半身を振り乱しながらダメダメと声を出す、笑いながらゆっくりと彼女の口の中へと消えていく。

飛行場姫の下が全体を絡め取り、喉奥へ出し入れするたびに、彼の上半身は後に手を押さえつけられ、騎乗位のように何度も胸を突き出し大きく跳ね回る。鈴の音がリンリンと勢いよく騒ぐ。

部屋中に、彼女の銀色の髪が上下に動きながら作る卑猥なこびり付くような水音と、彼が奏でる恥かしい嬌声が響き渡った。

珍しい喘ぎ声が施設中に響き渡り、多くの者が作業を止め自然と手が股間に伸びる。紫の髪をフワフワとさせのぞき込む少女も、黒いスカートの手に手を差し込み、紫の下着の中に興奮気味に手を激しくねじ込んでいる。

「ほら。おしまいよ」

彼は目から涙を零して、口からもよだれが垂らしている。上半身を離すと、力なく横に倒れた。

「ま。これだけ消耗すれば寝られましょう」ゼエゼエと呼吸を荒げ涙を横に垂らしながら、立ち上がり手の甲で口をふき取る飛行場姫の顔を見つめる。「いい運動になったか？ぼうや」

「ほんっっちゅ」

戦艦棲姫が彼を起こし上げる。腕の前で太ももを支え足を開かせたまま抱き上げた。

そのまま大きな洗面所に連れていかれると、北方棲姫が水を出し、彼の黒いワンピースのスカートの中に潜り込みパチャパチャと股間を洗う。突然のあまりの冷たさに足をジタバタと動かしている。

「暴れるなバカめ」

幼女の平手打ちが彼の股間に刺さる。全身に痺れるような痛みが

広がりがおとなしくなった。幼女の細い指先が全体を揉み洗いしシワをなぞるように彼が作り出した油分を落とす。

「良いじゃろう」スカートの中からゴワゴワとした白い髪が出てくる。「さ。部屋に戻るぞ」

手で水を拭い彼の股間から水分を減らすと、そのままピタピタとしたサテンの白い下着をグイッと穿き戻させる。

「まったく気味の悪い格好じゃて」彼がよると立ち上がると、黒いワンピースのお尻を幼女がはたいた。衝撃で小さく声を出し股間を突き出す。

「どうした坊や」

首輪を持ち先導する飛行場姫に付いて歩く彼は、数歩ほどフラフラと歩き石床にしゃがみ込む。黒いワンピースのスカートがブワツと広がる。彼は何かを訴えるように彼女の瞳を見上げる。

「ゆるす。言ってみろ」

大きく瞳を開きながら彼に近づくと、恥かしそうに小声でおしっこと言っているようだ。

「あら。あらあら」戦艦棲姫があざ笑うかのように下着姿のまま彼の横にしゃがみ込む。「おしっこ？」赤く澄んだ瞳が楽しそうに彼を見つめる。「おしっこなの？」ワザと声を荒げると、彼は恥かしそうに顔を曇らせ下を向いた。

「めんどろじゃの」

幼女はよろよろと欠伸をしながら様子を伺っている。飛行場姫は首を回し辺りを見回すと、さくじつバカがバカ騒ぎしたなごりが転がっているのを見つけた。

エタノールのポリタンクだ。手綱を離し蓋の空いた一つ拾い上げると中を確認する。どうやらすでにすべて揮発しているようだ。

「おい。これにしろ」彼の前に半透明のポリタンクがとんと置かれる。「あらいいじゃない」戦艦棲姫がニヤニヤといやらしく彼の顔をのぞき込む。彼の顔が瞬時に赤く変わっていった。

「なんでもいいから早くせよ」

幼女が彼を膝立ちにさせると、下着を引っ張り下ろす。スカートを

めくりあげられ、傾くポリタンクの入口に尿道がセットされた。彼は
すがるように周囲を見渡すが、誰も彼が彼の放尿を望んでいるようだ。
「早く出さんか。愚図め」飛行場姫が見下ろしながら、彼の頭をはた
く。二人の女は彼の両脇にしゃがみ込みその先端を見つめている。
「はやくしなさい」「そうじゃバカメ」

女たちにもつめられ尿意が僅かに遠のくが、恥辱にいつまでも耐え
るよりかは早く終わらせようと、黄色く僅かに湯気のがる液体が勢
いよく零れ出る。

「くっさ」戦艦棲姫が手をパタパタとさせながら顔を離す。「おえっ」
ふんふんと鼻を近づけ尿道口を観察していたため匂いを直に吸い
込んだ。彼女は大げさに床を転げまわり、騒ぎ立てる。性的なスイツ
チが入っていないかつたため非常に不快なものと認識したようだ。

「近づきすぎじゃバカめ」

幼女は事務的に肉棒を指で支え淡白に作業をこなしている。放尿
が終わると、数回振り残りを絞り出させる。そのまま、タンクの
キャップを閉めると、「再び下着を穿き戻させた」

「まったく手間のかかる坊やだ」

呆れるように再び彼の赤いヒモを持つと、飛行場姫は彼と、北方棲
姫を連れて、部屋へと戻っていった。

22 駆逐棲姫（白ナース服） 北方棲姫

北方棲姫の部屋の重いハッチの扉が開く。扉の音に北方棲姫がすぐさま反応し、布団をどかすと目を細めた。

「夕飯をお持ちしたのですが」

白いナース服に身を纏い、白いナースキャップを紫のフワフワとした頭に乗せる少女が立っている。北方棲姫は口を開け、言葉を失った。

「おいグズ。起きよ」北方棲姫の小さな胸に頭を寄せ、抱き付くように寝ていた彼の腹を、白く小さな足で踏み潰す。「はあ」彼は踏み潰されながらもどこか幸せそうに寝息を立てている。「何たるうすら馬鹿じゃ」

「お主。疲れてはおらんのか？」北方棲姫は木でベッドのように組まれた場所の上から、少女を見下ろしながら言う。「大丈夫です。少し寝ましたから」少女の顔色は良さそうだ。

「ぐ、ず。お、き、んつか」小さな足が、高さのある木のベッドから彼の体を足で叩き落とす。石床に体をぶつけると、もぞもぞと体を丸め始めた。

「気持ち悪いですね」戦艦棲姫の黒いワンピースを着て、自分の白い下着が、彼が曲げるように寝ている、ももの付け根から見え隠れしている。「き・も・ち・わ・る・い」

少女のナースサンダルが彼のほっぺたをブンブンと潰す。

「あ。起きましたね」鼻を白いナースサンダルの足裏でゴリゴリと潰していると目を覚ましたようだ。「気分はどうですか？」

鼻から口に掛けてギザギザとした足裏が乗り、サンダルの先端から見える白い靴下の匂いを嗅ぎつつ、目を出し声の方向を仰ぎ見る。

少女は白いパンストに脚が覆われ、寒さからだろうか、その上に白いハイソックスを膝上まで履いている。

ももの半分ほどまでカバーするナース服のスカートの内部には、ピ

ンク色の透けるような生地の下着が見えた。僅かに縦に紫色に見える影は、恐らく少女の体毛だろう。

胸元のボタンで止まるタイプのようだ。体の中心より左にズレ縦に5、6個ほどのボタンが並んでいる。胸元は小さなUの字で露出は少ない。

少女の頭には少し大きな白いナースキャップが乗っている。少女の手の平の上に乗るのは、大きな皿だろうか。

「夕飯の時間です」少女はスカートの中に視線を感じながら彼を見下ろす様に言った。「気分はどうですか？」少女の視線の先が彼の太ももに乗っている。彼は恥かしそうにはだけたスカートをひざ下まで下した。

「うん。その恰好はどうしたのじゃ？」北方棲姫が少女に呆れたように尋ねた。「ええ。飛行場姫様に仕立てていただきました」こちらは努めて冷静にポーカーフェイスでいる。

「ふむ」

北方棲姫は納得したように言うが。内心は何だかよくわかっていない。恐らくは、どちらかの企みであろうが、少女が楽しんでいるようなので放っておくことにしようとの親心である。

潜新が送り着けた物資には、あちらがもっている洋服の類が組み込まれていたようだ。あれは、あれで気が利くところもある。

「それを食わすのかえ？」

少女の手の上の皿には、もりもりと魚が並んで乗せられている。長い体に銀の背筋の魚だ。しかし、発育はあまりよさそうではない。魚の表面も僅かにボロボロと皮がめくれている。

「戦艦棲姫様が獲ってきて茹でてくださいました」

ああ。と。北方棲姫は納得した。どうせいい加減に鍋に突っ込んで、身が底にでもくっ付いたのだらうと。あれは生で踊り食いすることも多いため、わざわざ茹でるのが面倒な気持ちも分からんでもないが。

「どれ」北方棲姫がピョンと飛び降りると、一尾を皿から取り上げる。「ふむ」口の中に頬り込み頭からガジガジと丸ごと噛み込んでいく。

「なかなか美味である」

幼女の手から、ガジガジと鉛筆削りのように魚が口の中に消えて行った。

「どうぞ」少女が片手で、彼の口に魚の頭を向ける。「温かいうちが美味しいですよ」硬直する彼を見ながら持ち上げた魚を、少女は自分の口の中に魚の頭からパクパクと消えさせていく。「これは人も食べられるはずですよ」

過去に襲った船の中に、網の中に多量にこの類の魚が入っているものがあつた。漁獲量と備え付けの冷却機材から、恐らく食用にしたと判断する。

今回収獲したこの魚は、念のため一度茹でている。捕獲の際に、僅かに鱗を飲み込んでいたようで口の中にペタペタとくっつく感触が残る。少女は無表情でレロレロと舌を回して、口の中に張り付く透明な鱗を飲み込んだ。

「のう」

彼の口に魚の頭を無表情でグリグリと擦りつけている少女に、何か言おうと小さく声を出す、鋭い紫の視線が幼女の声を遮った。こやつ知っててやっておる、と。人間はアレを丸ごと食う者は極めて少ないと。

「まあ、よかろう」

幼女はもう一尾を手に取り、知ったことではないとカツカツと魚を口の中に消えさせる。

飛行場姫から聞いた話では、これは軍属が長いとも聞く。かなりの前線巡りも経験していたようだ。いまさら魚の一匹二匹どうということもなからうと、幼女は知らぬふりを決め込んだ。

しかしこの魚は、内臓の苦みが全身に回っているようだ。あのバカは本当にそのまま茹でたらしい。

「ほら、ほくほうさんも食べてますよ」ブリブリと擦りつけられる魚の口に、彼は怯えるように口を閉じている。「食べないんですか？」紫の澄んだ瞳と至近距離で目を合わせる。

「食べてください？」無表情な少女に対して、彼の心音は速まり、次第

に顔が赤くなっていく。「ね？」フワツと紫の髪を揺らし、少女が首を傾げると、顔を真っ赤にして彼の口が僅かに開いた。

瞬間、少女の瞳が僅かに細まり彼の喉奥にまで魚の頭が突き刺さる。口蓋垂、彼の喉ちんこに魚の鋭い口が突き刺さり、むせながら頭を引き戻した。

ゲホゲホと体を丸める彼の姿に、無表情でキョトンとしている少女のピンクの下着は、ねっとりとした湿り気が広がり始めている。

「あーんしますか？」彼はプルプルと首を振っている。「困りましたね。食べてもらわないと怒られてしまいます」

魚と皿を石床に置き、少女は白いナース服のスカートをズリつと腰まで上げると、白いパンストの中のピンクの下着を僅かに見せながら、彼の腰を挟み込むように跨った。

彼の着る黒いワンピースの中で、わずかに盛り上がる個所が、少女のピンクの股間に擦れる。

少女は露出した股に気付いていない様子で、体を半回転させると、置いてある魚の皿に手を伸ばした。ズシつと乗る冷たい感触が彼の太ももに密着する。

「よいしょつと」一尾の魚を再び取ると。鼻と鼻が擦れる距離までズリズリと腰を動かし密着する。「あーん？」彼は少女の大きな紫の瞳に見つめられながら顔を真っ赤にしてプルプルと顔を震わせる。

「真っ赤な顔。お熱ですか？死ぬんですか？」少女のおでこが彼のおでこに押し付けられる。少女の吐息がさらに彼の顔を赤く変え、彼の逸る鼓動とともに彼の耳を先端まで赤く染まる。「仕方ないですね」

少女は魚の頭を口で咥え、両手で彼の両腕を掴み、お尻に回しこまさせる。そのまま、手を戻し魚の頭を齧ると、ゆっくりと口の中で粉々に砕いていく。

少女は奥歯を水平に動かし、しつかりと大きな骨を噛み砕いた。そして、かじった魚を片手に持ち、ゆっくりと彼の唇に顔を近づける。

「んー」

少女は無表情で口を突き出し、残る片手で彼の頭を自分の顔に力強く押し付ける。彼の唇に、少女が舌をねじ込み歯をこじ開けると、一

気に苦みのある液体と魚の頭が彼の口の中に流れ込んでいく。

強力な力が彼の頭を押さえつけ、次第に彼は溺れるようにそれを飲み下した。

「ぶう」

少女は息を吐くと、手に持つ魚の胴体にかじりつき、内臓ごとゴリゴリと奥歯で噛み砕いていく。そして同じく顔を近づけた。

少女は股間をグリグリと揺り動かし性的な刺激を与えながら、逃げようともがく彼を押しとどめる。深海棲艦の重さが彼に逃走を許させない。

「よくやる」

傍からみていれば、一見恋人同士の甘いいちやつきにも見えなくもないが、あれではやられている当人には拷問だろう。ナース服で腰を彼の股の上で腰をプリプリと動かしながら、デーパーキスでエサを与えている。

「気の毒なやつじゃ」

彼は少女のお尻を握りしめながら、顔を真っ赤にして、股間を少女の股にグリグリと押しつぶされる。気付かれていないと思っているのか、彼自身も少しづつ腰を動かし少女の股を求めているようだ。

「はあ。うすら馬鹿しかおらんのか」

少女はベッドに座り、小さな足をプラプラさせながら、様子を見下ろしている。

「何じやろう、こうもやもやと」少女はベタベタと引っ付く二人を見ながら足をプラプラとさせている。「なぜわらわの部屋でやるのじやろうか」

「あーん」彼の体を押し倒す様に少女が体を前に倒していく。三分の一ほどになった魚の体を彼の口に近づけるが、中心に背骨が見える。「あーんしないんですか？」少女が悲しそうに首を傾げると、彼は渋々口を開けた。

「はい。あーんです」

彼が口を開けると、無表情にもどりズボツと口に魚を突っ込んだ。目に涙を浮かべながら背骨を噛み下している彼の顔をまじかで観察

し、少女の子宮は締め付けられるような刺激を生み出す。

「何だか無性にイライラするのう」

ピヨツと石床に飛び降りると、一人机の上の飛行機の模型の整理を始める。緑と青のコントラストの壁を見ながら遙かな空に思いをはせる。

「あーん」背中からまだ声が聞こえてきた。あのバカどもはいつまで引っ付いているのかと、無表情で小さな手が一つの白い飛行機を持った。ゴワゴワとした白く雄々しい髪が不敵に揺れる。

「ぶーん」

北方棲姫の小さな手の中で、飛行機のプロペラが回転する。机の上に敷かれたシートの上を滑り、幼女の手中の中、フワツと大空に飛び立った。

「ぶーん」

ペタペタと歩きながら飛行機を手に持ち、上空へ向かい高度を稼ぐ。今なおイソギンチャクのように絡みついている二人に向かい、あゝ我らの北方攻撃隊が出動した。

「ぎゅーん」

手を伸ばし上空にその雄姿が光る。燃料タンクを手でドロツプさせ、翼を左右に振ると斜めに旋回しながら急降下だ。

「ぶーん」

「きゃっ」少女は可愛く声を出した。

目の前で突然模型飛行機が彼の髪に急降下してきた。髪の毛が飛行機のプロペラにもじやもじやと絡まっている。少女の澄んだ瞳が楽しそうに大きく膨らむ。

「大変です。からまつちやいました」

少女の手が伸び、彼の頭にくっ付いている白い飛行機をプリプリと左右に振る。そのたびに髪が引つ張られ、彼が小さく悲鳴を上げている。少女は彼の上半身を押し倒し、ぶら下がる飛行機に手を伸ばす。

少女のナース服を盛り上がらせている、胸の谷間がしっかりと彼の顔を潰した。うんうんと少女が体を伸ばし、手を伸ばし、少女の重い太ももが彼の持ち上がった股間を左右にこねくりまわす。

「はあ」どうやらやぶ蛇だったようだ。「もう、勝手にせい」胸を押し付けながらベタバタとしている少女を白々しく見ながら、幼女は冷め始めた魚をガリガリと食べ始めた。「うすらバカのドミノ倒しじゃ」

何だか今日の苦い魚は、一段と美味に感じられる。

「はい。取れましたよ」

プロペラを逆回転させ、絡まる髪を外しながら、わずかに外れない髪をしなやかな白い爪で、プロペラの軸の近くから引きちぎる。

上半身を揺るように動かし、彼の湿った洗い鼻息が少女の胸の谷間に、ナース服にしみ込み流れ込んでくる。

「終わったらのけ。それは、ワラワと模擬戦をするのじゃからな」幼女がプクプクと白い頬を膨らましなから言う。「飛行機ごっこですか？」「も・ぎ・せ・ん・じゃ」首を傾げ言う少女に間髪入れずに睨み返す。

「口でブーンとか、ばばとかいうアレですか？」白いナース服の胸が、彼の顔の上でブリブリと揺れ動く。「そうじゃよ？飛行場姫ともやるが？」

少女の紫の瞳が丸く膨らむ。真剣な顔をして、アレがブーンしている姿を思い浮かべ、わずかに口がほころんだ。

「飛行場姫になついている以上」幼女の言葉に少女の耳がピクつと動く。「適性があるのかもしれない」

少女のブラウンの瞳が自分で言い出したことではあるが、どこか自問するように彼を見ている。

「そうじゃの？」幼女の小さく白い足が彼の顎を踏み、カカトが左右に顔を振らせる。「そうなんですか？」

少女の足を手ではたき落とすと、少女が両手で彼の顔を抑え紫の瞳を大きく膨らませて彼の顔を鼻を押し付け合いながら見つめ合う。少女の熱い吐息が彼の顔を真っ赤に染める。

先のワンワンレースでの大敗北をまだ根に持っているようで、この隙に寝取ってしまおうという魂胆が、幼女には見え見えだった。どうでもよい話ではあるが、この後の哨戒の交代に遅れるのはいささか困る。

「おい、駆逐棲姫」

幼女が声を一段下げていう。

「何でしょうか」こちらはもう少し遊んでいたのにと云った表情だ。「引っ付くのもよいが」

彼の黒いワンピースのスカートをガバツと幼女が捲ろうとすると、彼が素早くスカートを両手で抑えた。

「何ですか？」のしかかっている彼の体から下りると、ずり上がって、白いパンストの中のピンクのパンツをまる見えにしている状態から、スカートを元の位置までズリズリと下した。「気になりますね」

少女は彼の抑えるスカートを幼女と一緒にになって、引っぺがす。

「えっ」少女は捲りあがるスカートの中を見ると、小さく声を出した。「こつれ」少女の体が僅かに震え続ける。「まさか・・・」彼は顔を背けて知らないふりをしている。

「お主のパンツじゃよ？」

捲れ上がるスカートの下、食い込む小さな白いパンツ上部からは、パンパンに膨らませた彼の尿道がはみ出ている。また、転げ出る睾丸には鈴が付いておりその芸術性を際立たせている。

「穿かせとったんじゃ」悪びれもなく幼女がケラケラと言う。「そんな・・・」

少女が両膝を石床にぶつけるような勢いで落とし、両手で顔を隠す。正面からでは確認できないが、幼女のブラウンの瞳が僅かに水平に開いた少女の口を見逃さなかった。

「ひびい・・・」

少女は顔を抑え背中を振るわせる。

北方棲姫は、ペタペタと石床を歩き奥のハッチを空けると中へと消え、フルーツセットを持ってきた。

部屋奥にあるテーブルの前の木の椅子に座り、真っ赤なツタの付いたリングを足をプラプラさせながら、シヤクとゆっくりかじり始める。今度は痴話げんかかと、ブラウンの瞳が遙か彼方を見ている。

「触らないで！」よろよると起き上がり、股間を鳴らしながら伸ばす彼の手を、少女が顔を隠しながら片手で叩き落す。「ご飯まで食べさせ

てあげたのに」

少女は背中を丸めヒクヒクと動きながら、涙をすすするような音をさせている。

「私のパンツ穿いて、こんなに勃起させて」少女からの恨み節が彼に突き刺さる。オドオドしてかける言葉を探している彼に、次々と呪いの言葉が降りかかる。「そんなに膨らませて気持ち悪い」

彼の気持ちとは裏腹に、たつぷりと教育された彼の股間が射精できる物を求め魚のようにパクパクと尿道口を開閉させている。

少女から刺さる罵倒すら、快感に変わっているとといった様子だ。幼女からも腐ったゴミを見るような感情のない視線が飛び込んできている。

「悪いおちんちんですね」

少女はナース服のスカートを直しながら立ち上がる。紫の瞳には振り切ったような涙の跡が見える。しかしその瞳は何かを決心したかのようであり、仰向けに転がる彼をもそもそと後退させる。

紫のフワツとした髪の上でズレたナースキャップの位置を直すと、少女は両手で腰を掴み、冷たく見下ろしながら、ズカズカと指の出るナースサンダルで歩みを進める。

ズルズルと逃げる彼を追いかけ、緑と青のコントラストの壁際に追いつめる。

足で彼のずり落ちたスカートを腹までめぐりあげ、彼の股間を再び露出させた。少女の白いナースサンダルの足が、彼の股間に迫り怒りを込めたような紫の瞳が彼を見下ろす。

「変態おちんちん」少女は片足の力カトを石床につけ、太ももまで白いソックスを履いた足指の上に逸らして足裏を斜めに止めたまま、少女は続ける。「きつたない精液をパンパンに溜めて」怒声が混じるように威圧しながら少女が言う。

「ほら、腰を出して、自分でしてください？」斜めに構えた足が、彼の股間の手前に止まる。「ほら、早く」

片足を曲げているため、少女のパンスト越しにピンクのパンツと、その中の少女のポワポワと生える紫の体毛が透けて見える。

「そんなにおちんちん膨らませて」彼は息を荒げ、めくれあがった白いナース服の、そのスカートの内側に視線を送っている。「欲しい癖に」誘うようにナースサンダルのギザギザとした靴裏が彼の履く少女のパツパツの下着を撫でる。

「早く」少女の気迫に押されて、彼は僅かに股を持ち上げ自ら少女の足裏に股の中心を擦りつけ始める。「良いですよ。もつとです」言われるままに白い下着をグイグイと押し当てる。「もつと、もつと」

片足を上げ見えるピンクの下着には、わずかに色の濃い部分が楕円形に広がり始めているようだ。彼の瞳が少女の性的興奮を見つける。

僅かに怒りによるものか、ほほを赤らめているようではあるが、少女自身は股の湿り気に気付いていないようだ。

彼は少女が楽しんでいるならばと、心を決めて少しづつ声を出しながら、少女の足へと股間の鈴を鳴らしながら腰を突き出し、強く押し返す。

北方棲姫は何だか使命感に駆られているような彼の瞳を見て、どんなうすら馬鹿なのかとうんざりしたように、ミカンの皮を剥いている。そのままかじってもよいが、飛び散る果汁により大惨事になるとの彼女の経験則だ。

なんだか、あの二人はよくわからない駆け引きをしているようだが、やっている事はただの足コキプレイだとミカンの皮を口に放り込む。もう少し寝ていればよかったと後悔する北方棲姫であった。

「こんなに出して、変態おちんちん」どうやら終わったようだ。「おい駆逐。ワラワの部屋を臭わせるな」「ごめんなさい」少女は彼の太ももをナースサンダルでグリグリと潰す。

少女はお前のせいで怒られたと言っているようだ。ナースキャップを片手で押さえ、体を前へと曲げながら、彼の両足を無理やり肩と残る片手で開かせながら脚の間に四つん這いになる。

大きな白いナースキャップが彼の視界を遮るが、彼の腹に射精した精液を舌で舐めとるような感触がある。

腹の上で上下にモコモコと動くナースキャップを、彼は力なく眺めている。彼の履く少女の白いパンツからはみ出る亀頭の先端に舌

が触れ、尿道に沿い縦に舌がにじみ出る精液を絡め取っている。

そのまま、少女の口の中へと先端が沈み込み、下を亀頭のクビレをなぞるように舌を回転させ、わずかに付着していた皮の隙間の恥垢を削り取る。彼が吐き出した白濁液はすべて静かに少女の体内へと消えていった。

「これでよいです」

少女が顔を上げ、唾液でベタベタになった、再び勃起を始めた肉棒を白いパンツの中に半分ほど戻す。そのまま黒いスカートで膝まで下した。

「そのパンツは穢れたので差し上げます」少女はナース服の乱れを直しながら立ち上がる。「それは、もういらないです」表情の読めない無機質な紫の瞳が彼を見下ろしている。

「用は済みました」いつのまにか魚の消えている皿を手にとり、少女はそのままハッチを開いた。「ではさようなら」

角の立つような、ツンツンとした態度ではあるが、楽しそうにふわふわと動く少女の紫の髪を少女がブラウンの瞳で見送る。ガチャンと重い扉が閉まり、バルブが回転した。

「では、模擬戦の続きを始めようとするかの」捨てられた子犬のように、暗い表情でふさぎ込んでいる彼の顔を白い足が強烈にはたく。

「早く立たんかバカめ」

彼はよろよろと立ち上がると、石床に斜めに置かれている少女の臍装から黒いタコヤキがポコポコと出てきて、小さくしぼむと彼の周りにフヨフヨと浮かぶ。

「では始めるとしよう」

奥にあるテーブルに滑走路がプリントされたシートを置き、彼の手にも模型飛行機を持たせた。タコヤキが強襲中の飛行場から飛び上がり、空戦をするという設定だ。

交代までの僅かな時間。北方棲姫の暇つぶしスパルタ教育が始まる。飛行場姫の昔を思い出すようで何処か懐かしい気持ち芽生えた。

「お主はいい子にしておれ」

木のイスに足をプラプラさせて、ひと段落遊んでいると壁にかかる小さな木造りの時計を見て、北方棲姫がおもむろに立ち上がった。壁にある艤装を持ち、ペタペタと歩き出す。

「ではの」こやつは底なしなグズのように、特に何かをしだすとも思えないが、と。思い出したかのようにおもむろに立ち止まる。「何を漁ってもよいが、勝手に射精はするでない。匂いがこもるのじゃ」

ぷよぷよと浮遊してタコヤキたちが、艤装の巢へと帰っていく。魚臭くなった部屋で、鼻をヒクヒクと動かして、空調もどうにかするかと考えながら、幼女は小さな手で入口のバルブを握った。

23 飛行場姫 北方棲姫 (航空決戦・過去)

「ほう。精が出る」

白いブーツでツカツカと石床の通路を歩き進むと、飛行場姫は北方棲姫が彼に側溝の掃除の指導をしている所を見つけた。

恐らくは経験があるのだろうが、手に持つデッキブラシには腰が乗った動きをしており、中々に見どころはありそうだ。

「ん。ただ飯を食わずでなく、芸を仕込んでおつてな」

黒いスカートワンピースを着た彼は、一心不乱に超長距離の側溝をジャカジャカと掃除している。作業の為に股間の鈴は外されているが、常に指導のために北方棲姫が腕を組み艦としているため、思わぬ遭遇の危険は特にない。

オーダーさえまともになれば、民族柄なのか、コレはずいぶん素直で言う事を良く聞くようだ。また、北方棲姫による洋式指導もあり、欠点指摘型指導に馴染んでいた彼には心地よく思っているのかもしれない。

「ほう。良い子だほうや」

飛行場姫は側溝に下り、ブーツを流れる冷水に漬け込み汚れの舞具合を確認する。しかし、有機物や廃棄物の巻きあがりは認められず、彼女のブーツに当たる冷水が綺麗に波紋を作っている。彼女は素直に感心した。

「そうじゃろう。これは良く働くんじや」

北方棲姫は良い拾い物をしたとばかりに、カラカラと笑う。しかし、裸足の為人間にはこの水温は酷だろうと、定期的に足を温めさせている。また、北方棲姫が直々に足のマッサージをしてやるためか、彼の士気は高い様だ。

「おい坊や。私はこれから風呂を作るので、貴様も終わったら手伝え」
銀色の髪をふわっとゆらすとクリクリとした赤い瞳で、彼の顔をのぞき込む。「駆逐棲姫の管理している農園に小屋ごと作るので手が足りん」

「まあ、早くとも一か月ほどはかかるだろうがな」飛行場姫の構想の中にはすでに確固たるイメージがあるようで、わずかに口元を緩めニヤニヤと言葉を続ける。「愚図のお前を役立ててやろうというのだ。後で私の部屋へ連れて来てもらえ」

ピンク色の部屋に一人、鉢巻きをしながら飛行場姫が簡素な図面を引いている。小さな屋根があり、吹き抜けのバンガローだ。

工期短縮と使用資材の最小化のため、脱衣所などはなくダイレクトに二人が足を伸ばせる程度の小規模な浴槽を設計する。

どのみち使うのは自分たちであるため、問題があればその都度微調整していけばいいだろう。時間だけはたくさん余っている。

「出来ればヒノキで組みたかったが、入手は困難か」

ふむと。机の光を浴びながら図面を眺める。お昼の定期便が来たようだ。部屋に、僅かに振動する音が伝わる。両手を背中に伸ばし伸びをすると、伸ばした足が机にぶつかる。

振動で、机の角にかけていた、さび付いた戦利品のゴーグルが落ちてくる。

「あの日が最後か」

その日以来、人の乗る航空機は、自分をまともに相手にしてくれなくなった。今あるのはただ、機械的に向かってくる艦娘の無人機だけだ。

時折来る人間たちも、航空機ではなく重装甲の艦船だけになってしまった。タコヤキが噛み切れない強度の艦船。あのファイアーワーカーを運ぶためだけの鉄の箱だ。

「終わってみれば、寂しいものだな」

名も知れぬもののゴーグルを手に取り、彼女は哀しく呟いた。

それは、戦艦水鬼が少女を抱いた日。

それは、沈みゆく北方棲姫が掴んでいたゴーグル。

・
・
・

大本営からの勧告を無視し、独断先行した大国の一個任務部隊は、高速で移動する彼女らをすでに補足していた。

一機の青いカラーリングの双発機に急遽増槽を付け3500mの高空から、彼女らのねぐらへと追尾する。

上下振動が少なく機内で喫煙も可能なため、乗組員は片道フライトとはいえ、双眼鏡により高みの見物を行っている。

「ふむ」北方棲姫は高空からの視線を感じるが、海上を全速で前を向いて進む。「のう。つけられておる」「ああ。そうだな」

飛行場姫もまた同様に、少し焼け跡の残る銀色のシヨートヘアを後方に伸ばし北方棲姫の後に続く。駆逐棲姫を奪還し帰路に付いているが追撃されない保証はない。

少女を抱く戦艦水鬼を中心に前方方向は潜水新棲姫が先行し、しんがりは北方棲姫・飛行場姫の両名が務めている。

他の深海棲艦は別働隊として南方方面の島の一つを陽動作戦にて押さえに出ているため、未だ合流は果たせていない。

圧倒的な差を見せてなお向かい来る敵勢力に呆れもするが、終わってみれば肩透かしであったため延長戦があるのは飛行場姫にも僅かに楽しさが込み上げる。

「来ると思うか？」飛行場姫は赤い目を細め、半壊した二本の飛行場の滑走路を模した艦装を愛しそうに撫ぜる。「来るじやろうな」

潜水新棲姫は深海棲艦唯一の高周波使いである。全身を高周波の膜で覆い、極少の気泡を体に巻き付ける事により、その遊泳速度は海上に行く深海棲艦よりも遥かに速い。

しかし、反面。生み出される海底ノイズが極めて大きく彼女が認知

されるまでは、怪獣が泳いでいると噂されていたこともあるほどだ。「前にはローレイ様がおる」皮肉を言うように口を曲げ、苦々しく北方棲姫は言った。「では我々は、後ろを楽しむとしよう」

後に公に語られぬ歴史の一つ。本作戦においてゲスト参戦しているローレイこと潜水新棲姫は戦場伝説としてのみ記憶され、その偉業の実態を知る者は当事者たちしか存在しない。

「見えるか？」飛行場姫は彼方の点の塊に感づいた。「ああ。西洋の愚図共じゃ」

彼女らとの戦闘は、低高度での急旋回、急上昇の格闘戦が必要になる。そのため、低高度において圧倒的な制空能力を誇る、特に過給機を付けていない、その名を馳せた白い大本営機が事実上の脅威であった。

奴らのその白い機体は美しく、舞い踊るように素早く空を踊り、命を惜しまず機銃を撃ち込んでくる。

西洋の機体はその多くが高速域での一撃離脱戦法を好んでいたため、後方を支えるウイングマン共に御しやすい。つまり、上空全域において良好な性能を持つタコヤキには、小回りの効かないその設計思想が仇となっている。

近年では欧州の新聞の「デッドリー・ジョーズと闘うな！」との見出しに、丸く黒いボディに白い歯をむきだしにしたタコヤキの白黒の写真が一面に掲載されている。

「わざわざ追いかけてきたのじゃ。手強いぞ」北方棲姫は広がる白い髪を、髪留めで抑え丸め込む。「仇討合戦か」

飛行場姫は目を細め次第に大きくなる点を楽しそうに見つめた。今度ばかりは彼らも帰る事を前提に戦わないだろう。

覚悟の差の埋まったパイロット達がどれほどの物か、彼女のパラチアサファイアを思わせる澄んだ瞳が、次第に広がる点に向かう。

「悪く思うな」

彼女は足を止め、反転する。銀色の髪が照り返されるアルミのように強い日差しをたくわえている。青い空の下、数本の白い雲がなびき、静かな波の上に彼女は膝を下げる。

中腰の姿勢で両手をゆつくりと広げると、両手腕に乗せた飛行場から黒く丸い塊が次々と滑り上がっていく。

急上昇し、迫る航空機に向かうタコヤキから数個が離れ、動きを止めた彼女らに合わせるように旋回していた上空の航空機の片羽をかじり取った。

「あやつには厄日じゃの」

飛行場姫に続き、北方棲姫の背中に背負うように、斜めに伸びる滑走路から弾き出されたタコヤキが、
「運悪く」死にぞこないパラシュートで降下する一人の男の紐を噛み切った。

着水の瞬間まで恐怖に青ざめる男の悲鳴が続く。

「よもや生きて帰れると思うな」ブラウンの瞳がどこか寂しそうに正面に迫る航空機群を見つめる。「む」北方棲姫のほほが奥歯を強く噛む事により僅かに膨らんだようだ。

「どうした？」僅かに顔を強張らせる飛行場姫に、北方棲姫が問う。

「うん。一当てしてみたが、ゼロよりも手強い」

敵の編隊は上下二つに分かれ、各々が200ほどありそうだ。こちらのタコヤキは連戦が重なり、100にも満たない。

時間をかければ圧勝は目に見えているが、航空戦にて後れを取り、戦艦水鬼に追いつかれては面子が立たない。地上組からも永遠に物笑いの種にされるだろう。僅かな焦りが彼女の判断を鈍らせる。

「何処を見ておる！」北方棲姫が気持ちの散乱に気付き、平手で彼女の頬を叩く。「しっかりここにおれ」一瞬目を見開き、気を取り直した飛行場姫はすぐさまタコヤキの管制に戻る。「そうじゃ。しっかりな」

北方棲姫も先方から迫りくる敵機の群れに備えた。

飛行場姫のパラチア・サファイアのような瞳が大きく前方を掴んでいく。高速で突入するタコヤキが交差する手前。より上空の塊が雲の中へと入り消える。

飛行場姫のタコヤキ隊が縦に伸びる太い雲の中へと正面から突入し、敵機と交差する際の乱気流により体をクルクルと回しながら、思い思いに敵の数を漸減していく。

海の中のように暗い世界。雲の中。それは空飛ぶ海だ。荒れ狂う

海流。上下に逆巻く海底海流の東。エアポケットすらも彼女らの遊び場に過ぎない。

雲の中を交差する際に、青い翼に絡みつき、氷が僅かに翼に付き出る音を頼りに、方向を変え次々と体当たりする。30機程の青い機体の破片と人の形だったものがバラバラと雲の中から零れ落ちている。

航空優勢。環境が悪化するほど、世界が沈むほど彼女は強くなる。

低高度を来る敵機を前に、北方棲姫のタコヤキ隊は苦戦を強いられていた。敵の青いプロペラ機は重火力で、4連装の機関砲がタコヤキの動きを制限する。

正面突入を試みたタコヤキが、2機からの集中砲火により顎を砕かれ瞳を割りながらシウルシウルと海面に打ちつけられる。

続くタコヤキが後方の機体を叩き落したものの、依然として前進している敵機が、機体を巧みに傾かせ左右にUの字にウエーブするように前進してくる。

その動きが恐らくは限界機動を超えていると彼女は予測した。彼らにはやはり退路はないのだ。たゆんだ翼ではもう基地までは戻れない。

「こやつはエースじやの」

片手で押さえつけた白い髪がざわざわと動く。

——それに覚悟もよい。

幼女の口元が怪しく歪む。航空戦とは時に虚しくそして儂い。彼らの狙いは彼女らではなくそのはるか先を見据えている。

【幾多の経験から戦闘爆撃機以下の機動性では、タコヤキを相手にするには極めて分が悪い。どれほどの空中要塞を飛ばそうとも、クジラに群がるシャチの群れのように、全ての死角からその胴体を一瞬で食い荒らされてしまう。

タコヤキの台頭と、新型人型兵器の情報をすでに掴む事により大国では身を結ばない本作戦を支持していない。彼らは仲間達との約束。

人の意地のためにのみ戦っている。それゆえ強く輝き、多くの強さを絞り出す。」

「こちらは新型か」

飛行場姫の、雲の中を交差したタコヤキが反転し攻撃に戻るが、いつもよりも敵機の手が速い。双発機のようなだが、下を飛ぶ航空機の群れと大きさが変わらないように見える。

かなりの大きさがある。以前に会敵した白い双発機よりも速く硬い。搭乗席の風防を直上から撃ち抜けば事は単純であるが、あいにくタコヤキたちにはその余裕がない。

連戦により給弾の追いついていないタコヤキ達は懸命に空を泳ぎ、後方から翼に食らいつく。敵航空機は1機、また1機とその数を減らされていくが、仲間の犠牲を厭わぬ覚悟で編隊を維持する統制が、彼らの強固な意志を思わせる。

「星付き置いてけ」

北方棲姫のインペリアルトパーズを思わせるブラウンの瞳が怪しく揺らめく。目を大きく見開き白いゴワゴワとした髪が風に泳ぐ。彼方上空を全身で見つめる。

「そうだな」隣に立つ飛行場姫もまた、焦げ付いた髪を風にゆだね、世界を意識を拡大させていく。前方方向扇形に、まるで3Dレーダーの如く役割を持ち空に深海が広がる「後で評価しよう」

上下合わせて300機ほどが、大出力のエンジンが、異常な高速を作り、飛行場姫の作り出す狂気の世界に突入する。彼女はクスリと笑う。

お前たちならば深海でも泳げるだろうと。もし彼らが新兵だったとしても、それらはすでに英雄であり、今彼らは人生最高の熱を帯びている。この程度の深度では冷えきらないほどの。

「飛行場姫！」

北方棲姫が吠える。

「お主何機行ける！」潮風をたくわえた白く雄々しい髪が広がる。そ

ここに焦りはなくその瞳はすでにこの戦闘の先すらみているようだ。「貴様の倍はいけるさ」

遠くを見据えながら、片手を遙か前方に向け伸ばし、ふてぶてしく答えた。青空の元、銀色の髪が透けるように光る。赤くオレンジの瞳が見開かれ、世界の深度がより深くより広く変わっていく。

「ゆうてくれる」北方棲姫はカラカラと笑う「まことあっぱれ」彼女も同じく片手を伸ばした。「ならばやってみい」今、二つの飛行場は完全に敵を掌握した。

息切れをするように追いかける飛行場姫のタコヤキたちに、統制が戻る。それは魚の群れのように道を作り、必殺を狙い飛び回るハチのように恐ろしい。

黒い道は向かい来る航空機の群れに後方から襲い掛かる。敵航空機は意図的に左右に滑り込み、ダッチロールをしながら各々に回避を試みるが、ここへきて彼らはタコヤキの遊泳速度を見誤った。

情報以上。あるいは音速を超えているかもしれない。黒い本体が白と赤のコントラストに変わり明らかに性能が上がった。

流石のパイロットたちにも気の揺らぎが見える。飛行場姫の感覚が風防の中、落ち着きなく左右を見回すパイロットの顔を捕らえた。「終わりだ、坊や達」

進退窮まり、急降下し海面を目指す彼らに非常にもタコヤキの群れが殺到する。速度を稼ぎ機体を水平方向に激しく回転させながら風防への噛みつき攻撃を回避していくが、ついにその機動に耐え切れずに空中分解を始める者たちが出る。

海に立つ二人を肉眼でとらえられる距離に迫りながら、体を欠損させて墜落していく男の顔に悔しさがにじみ出ている。飛行場姫の慈悲深く憐れむ瞳が男と一瞬交差すると僅かに彼の表情が和らいだようだ。

兵隊として身を置き、いつかウジを作りながら死んでいくのかもしれないと予想していた彼の思う死は、これでいいと。あるいは今。少し幸せに感じたのかもしれない。海面に首が打ち付けられるまでの数分。

彼の世界は今と過去を激しく行き来し、世界が重なるその瞬間には僅かに微笑んでいたようだ。

「バカめ」北方棲姫が落着の瞬間を横目で捉え、寂しそうにつぶやく。「流れ着けばワラワが食らうてやる」

北方棲姫のタコヤキは黒いままではあるが、卓越した技量により、航空機と並走したあと背面飛びをするかのように、タコヤキが空中を一回しながら風防に次々と食らいついていく。

人類にはまだ経験の浅いその戦法に、既存の航空機が対応できるはずもない。前方直上から高い機動性により機関砲の死角から風防を捕らわれては頼れるものはもはや、自決用に腰につけられた拳銃と少し大きめの手投げ弾だけだ。

風防がバリバリに崩れ白い歯が迫る瞬間、豪快な体をした男は下卑たわらい声を出しながら、あらかじめ抜いていた手投げ弾を片手ごとその口の中にねじ込む。

割れた破片が男の目に突き刺さるが、その片手はしっかりと歯の内側に振じり込まれている。

彼を機体から引きずり出し、口を激しく振り回すが、爆発の瞬間まで力を込めクサビのように歯茎を捕らえていた。

内側からの爆発により歯をバラバラにし顎が外れたタコヤキが、黒煙を渦のように作りながら海中へと猛烈な速度で落下していく。

「彼らは今、空の中で陸戦を体験させられている。航空機とは所詮、少し足の速い潜水艇でしかない。深海棲艦は、あるいは、この星全てを海の中と認識しているのだろうか。」

潜水艦の横を、同じ速度で泳ぐ事の出来る人間がいれば、その可動範囲と死角の多さからどちらがより有利に戦えるかは考えるまでもないだろう。ゆえにタコヤキは、空を泳ぎ巧みに攻撃範囲の死角に迫る。

弾幕によりカバー出来る範囲は少なく、人類には、特にこのような

一方向に飛行を続けなければならぬような作戦は、火線の、弾幕の密度を稼げずに最も苦手とするところである。

もし出来る事ならば、空飛ぶ円盤の上にでも立ち、斧でも振り回していた方がよっぽど現実的に戦える事だろう。」

重低音の轟音の束が近づいて来る。降下してきた航空隊の塊が先導し、250近い青い鉄の塊が、彼女らの直上の突破を試みる。

高度は極めて低く、穏やかに流れるわずかな波の盛り上がりにはプロペラの先端が接触するかのような高度だ。

「上手いのう」顔に掛かるしぶきを手の甲で拭いながら、北方棲姫は僅かに笑う。「ああ。良く知っている」

飛行場姫もまた、楽しそうに笑いながら、高度を下げタコヤキを追いかけてさせる。次々と着陸していくかのように新型機の群れが海面上を走る。

白と赤のコントラストのタコヤキ隊がその後方から敵機を追いかけて、攻撃をかける。しかし、そのさらに後方に続く編隊から射撃を受け、突入後の攻撃姿勢がままならない。

この時、飛行場姫は二者択一を迫られた。

一つは、前方の高角度でダイブし増速した新型機の突破を許し、後方の塊を挟撃すること。

もう一つは、後方から攻撃を受けながら、先行する敵を攻撃すること。その判断は僅か数秒しか許されない。

斜めにスライドするように降下する白と赤のタコヤキたちは、すでに後方の航空隊の射程圏に滑り込み数個が海中に落とされた。

限界稼働を続ける敵の新型機のエンジンは度重なる過負荷にオイル漏れを起こしているようだ。僅かに、機体後方に海水以外の飛沫が見える。しかし、推力が落ちている様子はなく編隊が乱れることもないようだ。

大した愚図どもだと飛行場姫の口が緩んだ。

「上げるー」

飛行場姫は号令をかけ、片手を強く大きく振りあげる。飛行場姫

と、北方棲姫の航空隊が一気に斜め前方に上昇していく。

時に答えは奇抜さを求めるのかもしれない。彼女の選択は攻撃の放棄であり、自らの体を犠牲にする大胆かつ無謀な作戦だった。

前方を走る航空機の編隊が射撃をはじめた。わずか手前に、水たまりに降り注ぐ豪雨のような水柱を作っている。

後方から攻撃を加えていた青い機体のパイロット達に動揺が走る。前後の死を巻く塊が一斉に斜め前方の上空に向け上がりだしたのだ。「反転突入！」飛行場姫の航空隊が縦方向に円を作りながら後方の塊に迫る。「言うだけの事はある」北方棲姫はクスクスと口に手をあて笑っている。

飛行場姫の認識力は第3の解を手繰り寄せた。極限に高まる緊張の中、後続する敵機が海面スレスレの飛行をしている事に気付く。

彼らの卓越した技量が災いし、一瞬の出来事に空を眺めながら、前方のタコヤキにつられて機首を上げてしまうものが出る。

結果、機体後部が波に接触し、機体をバウンドさせる者。バランスを崩し翼を回転させながら、その翼を弾き飛ばすものが出る。

それらの機体がビリヤードのように、続く数機を巻き込んだ。統率が乱れ、巻き込まれまいと僅かに上昇を始める敵の群れに、赤と白のコントラストのタコヤキが急降下する。

円を描くように斜め後方から襲い掛かり、動きを読まれていた敵機の大半が一瞬でタコヤキの歯の餌食となった。

阿吽の呼吸で北方棲姫の黒いタコヤキ隊が、二人に迫る敵の新型の群れに増速しながら急降下する。しかし、新型機の一群が二人に機首を向けながら、空中をドリフトするかのように左右に広がっていく。「こやつらショーでも始めるつもりかの？」高強度に裏打ちされたその双発機が、恐らくはエンジンの強弱の調整と機関砲の射撃による減速を考慮しての横滑りだろう。「ああ。楽しませてくれる」

飛行場姫と、北方棲姫は、攻撃姿勢を崩さずに砲火の中心に佇む。卵型に膨らみ赤い火線と鉄の塊が、彼女たちを包み込む。

体に当たる強力な射撃が、彼女たちの全身に大きくアザを作る。服を切り裂き、髪を引きちぎる。僅か十数秒。全身を激痛が襲い続ける。回復力を超える衝撃が二人の体から体液を吹き出させる。

耳障りな重低音が猛る海面と共に通過する。

「こんな物、邪魔なだけじゃ」北方棲姫がボロきれのようになった、白いワンピースを引きちぎった。「次はこちらの番じゃて」痛々しく青アザが全身に出来、片目からはオレンジ色の体液が流れ出ている。「そうだな」

飛行場姫はその特殊スーツにより衝撃を軽減され、露出していた手足にダメージが集中している。長く自慢の銀色の髪も、いびつなシヨートヘアの如く短く変わった。

一世一代の航空シヨールを敢行した新型機は、二人の領空を突破し、戦艦水鬼を追撃する。

しかし、ヨロヨロと機首を立て直している隙を、北方棲姫は見逃さなかった。ドリフトするようなスライドにより急降下で稼いだ速度が大きく低下している。

「帰れ!!」

北方棲姫が大きく口を開け白い歯をむき出しにする。軋む体をマリオネットのように海上をカクカクと半回転し、伸ばす片手が、新型機を狙う。

通過した50機ほどの塊から、10機ほどが翼を傾け、海面のしぶきをたくわえて海上に波紋を生み出す。

翼を水平に戻すと、重火力の機関砲を乱射しながら、プロペラの回転を上げ北方棲姫のタコヤキ隊に反転突入して来る。

「愚図め」

風貌の中には口を大きくあげ、何か叫んでいる男たちの顔が見える。腹には黒光りした爆弾が一つ。そのターゲットはこちらに絞ったようだ。小刻みに上下に振れる様子からもはや長くはないだろう。「ワラワがカバーする」北方棲姫のタコヤキ隊は長方形のような隊形を組み、さながらハエたたきのように前進する。定番の対カミカゼ対策だ。しかし、隊列維持と防御に重きを置いたため、速度低下が著しい。

「お主は抜けろ」

「ああ」星付きは手前から投弾し、爆弾を海面をはじく様にジャンプさせ低高度を攻撃する手段に長けている。抜けられれば大ダメージは必至だ。「任せろ」

しかし、飛行場姫は、彼女を信じ、自らのタコヤキ隊を増速のみに専念させる。

「来たの。地獄へさかおとしじゃ」

タコヤキ隊が格子状に展開され厚い鉄板のように迫る航空機を吸収して行く。脱落したタコヤキの穴はほかのタコヤキが移動することによりすぐに埋められる。

「新型爆弾か」飛行場姫は目を細める。爆発力が予想よりも大きい。弾き飛ばされるタコヤキの量と規模が予想よりもはるかに大きい。「厄介だな」

「奴らも我らを研究しているという事じゃのう」

二機の青い航空機が爆弾を抱えたまま、タコヤキの穴を突き抜ける。陽光をうけ、動き出す黒い爆弾が光を放つ。

「ちっ」

飛行場姫は群れの一つをすぐさま、敵機に目掛け進路を合わせる。「任せよと言った！」北方棲姫が海面が滑走を始める。「貴様！何をするきだ！」飛行場姫の伸ばす手は空を掴み「戻れ！」北方棲姫が二機へと相對する。

「貴様らは通しはせんよ」

飛行場姫は見ていた。ゆっくりと。彼女は空へと飛びあがり、片腕を引きちぎると、一機の風防に向け恐ろしい速度で投げつけた。それは奴の目に突き刺さり機体が垂直に上昇を始めると爆散する。

残る一機に向け、飛びつき風貌から男を掴みだすと速度の差から彼女は弾き飛ばされ、きりもみ降下しながら海中へと没していく姿を。

あ・と・は・ま・か・せ・る

着水までの瞬間に彼女の口が小さく動く様子が見えた。満足げな顔で高速で沈んでいく。

「貴様ら。帰さん」

飛行場姫は落ち着いていた。恐ろしいほどに落ち着いていた。怒りを振り切ると冷静に戻るのか。彼女の深海は極限まで広がり、海面の温度低下から海上に霧が発生する。彼女の姿がゆらゆらと見え隠れするように消えていく。

赤く、オレンジの瞳が怪しく揺れる。

銀色の髪は広がり、帯電するようにパチパチと光り輝いている。この日、世界は海の底へと沈んだ。言い知れぬ恐怖と息苦しさが世界を席卷する。それは、深海に棲む者たちをより輝かせた。

タコヤキ隊は異常な速度で増速し、先端から強力な引き波を作り出す。それはささやかに通過するだけで、先行していた全ての敵機を空中で爆散させた。

「死ぬなよバカめ」

飛行場姫は後続の有無を確認すると、海中へと素早くダイブしていった。

・
・
・
・
・

「坊やはどうした？」

飛行場姫はハツとなり、部屋に入ってきた北方棲姫に声をかける。どうやら一人のようだ。

「あやつらと、昼飯を食っておるよ。腰をやったので休憩じゃ」北方棲姫は彼女の持つゴーグルを目にする。「安心せい」白く雄々しい髪を揺らし、幼女はやさしく微笑んだ。「だから、たまには泣いてもよいぞ」彼女の眼には涙が浮かんでいる。

「残されるかと思った」飛行場姫は頭につく小さく二つ突き出る赤い角ドリルを、幼女の胸に預けると小刻みに震えだした。「ワラワは、簡単に死にはせんよ」銀色の頭をポンポンと撫でる。

「しかし、ワラワの腹を開けたのは、お主くらいなもんじゃな」幼女はカラカラと笑い出した。「だって…」飛行場姫は、水を吐き出せなく

なった、北方棲姫の脇腹をタコヤキで噛み切るといふ荒業に出た。

「まことあっぱれ」

「あれは心地よい気分じゃった」

世界が海底に沈む中。北方棲姫は腹から海水を吹き出し目を開けた。彼女らはどこを失えば死ぬのだろうか。海上で、飛行場姫の膝枕の上で、北方棲姫は急速に不足個所を回復していく。

凍えるように寒く、深い霧の中。

かすかに光が生まれ、北方棲姫は再び海上に立ち上がった。もはや、今の飛行場姫にはそれほどの力が出せないだろうが、世界はその恐怖を、彼女の深さを、未だに記憶している。

奇しくも、人類はそれ以降人類同士の大規模航空戦を経験していない。世界には深海棲艦という、飛行場姫という、絶大な抑止力があるのだ。ゆえに、航空決戦思想は時代遅れの産物となってしまった。

「今は、好きなだけ泣くがよい」

ピンク色の部屋に。

すすり泣く声がしばらく続いた。

24 深海のメリークリスマス 01

「飛行場姫様はどこへ行きましたか？」

駆逐棲姫は白いナース服姿のままリビングをウロウロとしている。ピンク色のリボンの髪留めを付け、フワフワと紫のツインテールが左右に世話しなく行き来する。

四つん這いになり、背中を足置きに使われているバカなワンワンと目が合った。

「あいつなら自室に戻ってるわよ」戦艦棲姫は白い生足を組み、黒く重いブーツのカカトで、ドスドスと彼の黒いワンピースを着た彼の背中を叩く。「お風呂作るんで凶面引いてるみたいよ」

「あ、このかつかうかしら」少女からの冷たい感情のこもらない視線にさらされ、彼女は赤く淀んだ瞳を泳がせながら言う。「あの。きょうは、上では、お祭りしてるみたいなのよ」

少女はふんふんと、余り興味がなさそうに大きなナースキャップを僅かに動かし聞いている。戦艦棲姫の恰好は、一言で言えばパンクな雰囲気だ。

タンクトップに、腕を不規則にちぎった黒めのダメージジーンズジャケツト。首には二連ほどのらせん形状をした銀の首輪のようなものを垂らしている。

ズボンは濃紺のショートジーンズであり、中心には黄金色のボタンが縦に並んでいる。

白くしなやかな長い足はそのまま踊り出され、黒く重そうなブーツに差し込まれている。ズボンの側面には、金の細い線のようなものが数本垂れている姿が見える。

一見、愚鈍でありきたりなコーデイネイトとも思える恰好であるが、高身長に白い体。そして、潤い深く長い髪を持つ戦艦棲姫が着ているとなると話は変わってくる。

極め付きには、直に着る黒いタンクトップが張りのある彼女の大きな胸をさらに強調している。

白い四肢を際立たせ、かつ大きな胸をさらに強調する黒いコントラスト。体に対して僅かに小さい黒いジーンズジャケットは、衣類の調達が困難な海底での、彼女自身の特性をよく考えられた、先鋭的なスタイルと言えるだろう。

確かにワイルドで勇ましい格好だ。

しかし、なぜいま――

少女の考えは僅かに姉に追いつけなかった。

「・クリスマスじゃからか」腰かけ彼の背中に足を乗せる戦艦棲姫から、テーブルを挟んで反対に座り、足をプラプラさせながらフルーツをかじっていた北方棲姫が小さく呟く。「そういえばもうそんな時期じゃの」

少女は心底興味がなさそうにフルーツの咀嚼音を立てる。シャコシャコと静かな音が部屋に響く。

「何か人間のところには、この時期になると普段と違う格好でウロウロする風習があるみたいなのよ」

彼女は腕を組み、不可解な連中だとばかりに二本の角を上下に動かしながら言う。

「それでせっかくだから、私もしまった服を出してみたのよ」

「ああ、そういえばそんな催し物をしてましたね。人間たちは」少女にはそれで自分も変な恰好ばかりさせられていたのかと、ようやく納得がいった。もともと大半は姉たちの純粋なスケベ心からだろうが。

「ふう」

少女は紫の瞳を細めてヤレヤレと小さくため息をつく。少女は衣類に特別な感情を持っていないため、いちいち着替えさせられてはただただ面倒なだけだ。

「あによその顔」彼はどこか呆れた顔で、何か言いたそうに戦艦棲姫を見上げている。「なんか言いたいことでもあんの？」

無情にも固いブーツが彼の背中をつつく。

「あんたは足置きなんだから、そこで静かにしてればいいの。わかったかしら？」

彼女は長い黒髪を指で耳の後ろにかけて押さえ、勝ち誇るかのよう

な顔で彼を見下ろす。

カーテンのように軽やかに広がり垂れる黒髪の中、彼女のスピネルのように澄んだ赤い瞳が楽しそうに揺れている。今年は楽しいオモチャがいると言う事だ。

「ちよつと動いたくらいで」彼女は足をほどき片足を空の腹に滑り込ませる。「あんたは背中いたいいたいしちゃう役立たずなんだから」

彼の股に垂れる黒いスカートを片足で掬い上げ、そのまま四つん這いの彼の股の間にブーツの固い甲が差し込まれる。彼は可愛く小さな声を出し、僅かにお尻を持ち上げた。

「駆逐棲姫、こいつ今日はもう、ぴゅっぴゅさせたのかしら？」彼女の足の甲が彼のスカートの中から固い抵抗を感じている。「はい。戦艦棲姫様。さつき、私の靴底で小汚いオス汁をまき散らしてました」

少女の紫の髪が不満げに揺れ、声も低く少しイラだっているかのようだ。少女にとって艷装である足での行為は負担が大きかったためだ。ともすれば外れてしまうかもしれないため必要以上に神経を使う。

「ぴゅっぴゅが余りにも汚く臭かったのよ」少女は白いナース服のスカートを僅かにずり上げ、白いストッキングに包まれた片足をぎこちなく彼のお尻に近づける。「お掃除ごっくんまでさせられてしまいました」

少女は誰にとは言わず、そつと幼女の方へと視線を向ける。冷や冷やとする彼の気持ちと裏腹に、幼女からの小気味良い咀嚼音は途絶えない。少女は腹いせにとそのままサンダルの先端を斜めに彼のお尻にねじ込んだ。

「あら、それは災難だったわね」二本の足が交互に力を込めるたびに、逃げ場を失った彼の股間は小刻みに震えながら前後に動き、スカートを振り恥ずかしい腰振りダンスを始める。「マテを躡らないといけないわね」

体を起こし、長い黒髪をかき上げた。部屋に僅かに振動が伝わる。相も変わらず年中無休とは恐れ入るが時報変わりにはちょうど良い。そろそろ昼の時間というわけだ。少女はお尻にねじ込まれた足を

下し、スカートを正すと調理場へと離れていく。

「戦艦棲姫様、どうぞ」

少女は白いナース服を着たまま大きなナースキャップをもこもこ動かし、テーブルの上にゆっくりと食事を配膳する。

戦艦棲姫はその間、テーブルの下で片方の靴を脱いだ彼女の生足の指を、彼に丁寧におしゃぶりご奉仕をさせ時間をつぶす。

「キャベツが出来ていたので、ロール状に巻いた中にゆで卵を入れてみました」

「あら、美味しそうね。なかなか上手じゃない」彼女はまじまじと観察した後おもむろに二つあるうちの一つを手に取り口の中に放り込む。

「はいひーふあひよ」

ゴリゴリと硬質化した卵白をかみ砕き一気に飲み込む。ホホを膨らませ微笑む。

「うむ。よくできておる」北方棲姫も配膳されたロールキャベツのようなものを手に取り半分かじるとゴリゴリと食べ始めた。出来ない姉と違いよくできたものだとしみじみ思う。「大変美味である」

「ワンワンには、煮詰めたお芋をとかしたスープにニンジンです」

どちらも丁寧に煮溶かしているため、イモは完全に溶け切り、ニンジンは舌だけでもすりつぶせるほどに柔らかく作られている。

朝に調理を始めコトコトと弱火で加熱し続けた丁寧な食べ物だ。

処理が面倒なためウンチが固くならないように配慮されている。

「こんなの、水でも飲みましょきやいいのよ」足の甲で彼の腹をトントンとたたき上げる。「そう思いましたが、飛行場姫様にこう作るよう言われました」

少女はテーブルの下に頭を屈め紫のふわふわした髪を片手で押さえながら、テーブルの下をのぞき込む。呼ばれて振り返った彼と、少女の澄んだアメシスト色の視線が至近距離で交差する。

「あつ。また顔が赤くなってる」

「どうしたの？ 駆逐棲姫」腕を組みニヤニヤと彼女は言う。「こ奴は熱

でもあるのかもしれない」北方棲姫は涼しい顔で小さな足をプラプラさせながら言う。「はい。今日はよく、顔が赤くなるみたいなんです」少女は顔を起こし言う。

「はい、どうぞ」大きなナースキャップをテーブルの下で僅かにぶつけながら、深いボールの木の皿を床に置く。「まだ、熱いですよ」

ドンブリのようなそれに、彼はのぞき込むように口を伸ばし、じゅるじゅると下品に音をたてちよつとずつ吸い込みはじめた。

「どれ、飛行場姫も呼んでくるかの」北方棲姫はポンとイスからおり、小さな素足でポテポテと床を歩き出す。「ああ、夕飯には備蓄されている肉を使うとよい」

すこぶるどうでもいい話したが、お祭り気分な少女達の気分を盛り上げてやるのも親心というものだ。

「あら、いいのかしら？」戦艦棲姫は赤い瞳を広げ、珍しいこともあるものだと思しうに首をかしげた。「良いと言っておる、バカメ」

普段であれば、希少品である冷蔵された肉の類は勝手に持ちだそうとするところはお小言を食らうものであるが、どうやら北方棲姫も乗り気のようなのだ。

「じゃあ、エタノールもいっぱい持ってこようか、しら：」少女から冷たい視線が彼女に刺さった。「ま、たまには良からう」

これを見越してかしらんが、潜新のよこしたコンテナもある事であるしたまにはガス抜きも必要かと、幼女は一人、部屋を後にした。

「ふむ。待たせたな」

大きなテーブルの上には、ぶつきらぼうに焼かれたワイルドなステーキのような肉の束、穀物により作られた数々の食品。果実を直に潰し割られた、エタノールの果実酒などが並ぶ。

哨戒から戻り、衣替えに手間取ったのか彼女は遅れてやってきた。ヨ級、ソ級を始めとする潜水隊とパーティーを始め、ワンワンとのふれあいを楽しみながら一部が終了した後、入れ違いになるように飛行場姫がやって来る。

しかし、その姿を見て凍り付く様に、戦艦棲姫、駆逐棲姫、北方棲姫は言葉を失った。

「なんだかしらんが、仮装パーティーと聞いていたのにな」

飛行場姫は上下ピンク色で節々に白いフリルの付くもさりとしたドレスに、白いガーター付きのハイストッキング。手には肘付近まで伸びる薄手のグローブを付けている。

一言でいえば、二昔前のプリンセスと言った所か。航空優勢。彼女は会場の機先を制することになった。風もなく、僅かに帯電している銀の細い髪がフワフワと舞、輝く。

日々の鍛錬により細く整った顔立ちに。パラチアサファイアの如くオレンジがかかった澄んだ赤い瞳。まるで、動く宝石のように彼女は悠々と席に付いた。

「公家にもつづれ、か」北方棲姫は口に付けていたリングを床に落とした。「お、すまんの」拾い上げ、幼女の股の間にひよっこりと顔を出したワンワンの頭を手で撫でてやる。

「やあ、坊や」飛行場姫がテーブルの上にグローブの白い手を組み顎を乗せ、高貴な宝石のような瞳で彼を見下ろす。「どうだ、わたしは美しいだろう?」

一瞬にして顔を赤らめテーブルの下へ逃げていった彼を見て、彼女はフフと笑いたいそう満足げに言い放つ。

「なによあんた、一人だけ汚い格好して」姫と呼ばれるほど、元より彼女たちの素養は高い。それをそのまま姫である恰好をされれば「それはすまなかつたな」あふれ出す余裕の中飛行場の守りは盤石だ。

「くやしいく」ワイルドな恰好をした彼女は、きいきいと喚きながら、容姿道理に素性の知れぬ大きな肉を引きちぎってかじっている。「むう」

少女もまた、僅かに機嫌を悪くしながら、このグズをどうしてくれようかと姉と視線を交わす。

「ほれ、共食いではない。安心して食べ」

幼女はバカ姫どもの抗争などどこ吹く風と、ワンワンに噛みちぎり小さくしたお肉を、幼女の股を開いた子供パンツの前に、ひよっこり

と顔を出す彼の頭を撫でながら与えている。

「まったく、姦しいとはこのことじゃ」

「くちくしえいき」腹いせにエタノール果実酒を多量に飲み気分酔いした戦艦棲姫が、膝の上に鎮座させている少女に宣言する。「いまこそ、あのあだ敵をだろうすうのよ」テーブル越しに彼女を指す指が僅かに震えている。

「いちばあん、美しいのは、わたしなの」少し酔いを落ち着け彼女は席から立ち上がった。「どれが一番きれいか早く選んで」テーブルの下をのぞき込み、黒髪を指で遊ぶようにときながら言う。

「ほう？」飛行場姫もまた面白そうだと声を出す。第一回のレースでは難敵である駆逐棲姫を下し、もはや向かうところに敵は無いと言った貫禄を見せている。「面白いところみだ、よかろう」

「ほれ、肉じゃ」幼女は口で噛みちぎった食材をせつせと与えている。「ころそこ。餌付けしてんじやないわよ」アルコールに浸したお肉を、美味しそうに彼は頬張っている。「なんじや騒々しい」

彼は少し酔いが入り、幼女の股の間にうつぶせになりホワホワとした緩んだ顔を預けている。

「あなたにも関係あるわよ」少し頭をはつきりさせ、赤らいだほほが白く戻る。「ついでにマテも躡けられるし一石二鳥よ」

何か思いついたようであるが、こういったコトであればアレの右に出るものはいない。だてに尋問官をやっているわけではないということだ。

「オスは、おちんちんから出来てるバカなの」さすがのような視線を幼女に送る彼をテーブルから引きずり出し、黒いワンピースを脱ぎ降ろさせ、駆逐棲姫の穿いていた食い込む白いパンツ一枚の姿にさせる。「見なさい」

戦艦棲姫は3人に良く見える様に、半分以上が窮屈な下着から顔を出しているパンパンに膨らんだおちんちんを白く長い指で上下になぞる。

彼は背中であ手を組まされ、彼女の恐ろしい力の片手で掴まれているため、身動きが取れずに指から逃げるようにくねくねと腰を動かす。

「こんなにパンツ黄ばませて」白い逆三角形の小さな下着は、張り出す形に合わせ黄色い筋が付いている。「どこまで、黄ばんでいるかしら？」強い電光のもと良く見える様に片足で彼の腰を持ち上げ股を開かせる。

「もつと下までです」彼女は彼の恥ずかしい勃起を少女に見せつけながら、戦艦棲姫に下着のシミを指でなぞりおろされる。「いやらしい坊やだな」

3人の視線が彼の股間に集中し、零れ出した精液などの体液が作り出した道筋をあざわらう。

「あ、そこは凄く溜まってますよ」食い込む睾丸の間に黄ばみが集中し、ジユクジユクと湿度が残っているようだ。「あら、ホントまだ湿ってるみたいね」

しなやかな彼女の二本の指が、彼の肉の付け根を確認するようにグジグジと押しつぶす。彼は墮落しきった顔で楽器のように小刻みに小さく鳴き声を出し羞恥に耐えている。

「なんじゃ、またあたらしいのを零れ出して」付け根を嬲られ、上半身をもじもじと動かしながら新しい精液の汁が、僅かに先端からこぼれ出て光を放っている。「ちゃんと舐よ」

女に苛められることが大好きな変態男のように彼女の立てた爪の動きにしっかりと喘いでいる彼を見て、幼女も呆れたようにインペリアルトパーズのような綺麗な瞳で見つめ、言う。

「おちんちんぶら下げてるものは、口では何とでもいうけど、ここは凄く正直なのよ」

彼女の片手が彼の汚い二つの果実をギュツと掴んだ。そのまま力を込めて彼を床に転がし四つん這いにさせる。彼は荒い呼吸で股をさすり始めた。

「それ貸してちょうだい」彼女に言われ少女は席を立つとりボンを外し、フワフワとストレートに下りる紫の髪を指でなぞるように整え

る。「これをここにマキマキするのよ」

白いパンツから無理やり引きずり出した肥大化している肉棒に貞操帯代わりに、手慣れた手つきでリボンをきつく結びつける。締め上げる際に恥ずかしいネバネバとした、汗だけの粘液をピュツと噴き出す。

すぐさま彼女はが口を付け、部屋を汚さないように全て吸いつき舐め取っていく。

「これでいいわ」

再びパンツを腰まで戻させると、白い下着からピンクのちようちよ結びのリボンが零れ出し、さらに先にはグロテスクに肥大化した、男の証が筋を作り隆々とそびえたっている。

パーティの催し物としても見ごたえがあり、なかなか面白い。彼は少しでも少女に見せないようにもじもじと内モモを擦り動かし隠そうと始めた。

「じゃ、こつち来なさい」彼は戦艦棲姫が座っていたイスに座らされる。「あんたみたいな早漏おちんちんを躡けるには――」

彼女は少女の腰を掴み上げる。反射的に少女は小さく悲鳴を出しながら、スカートがずり上がるように自ら股を少し開いた。

「これが一番なの」駆逐棲姫が彼の股の上に馬乗りになり、ちようど白いパンツ越しに少女のピンクのパンツが彼の肉棒と接触する。「あの、これは」少女は少し躊躇うように声を出した。

「そのまま、腰を振ってあげなさい、駆逐棲姫」つまりは着衣での素股で男のホンネを探ろうというものだ。靴底に射精できるような変態男には、セックスよりも効果が高いこともある。「え、嫌です。誰か」
「さすがのように少女が半回転させ動かすと、少女の柔らかく大切な場所とオスのいやらしい肉腫が擦れ合い、感じ始めた彼の口から気持ち良さそうな息が漏れる。」

「気持ち悪い」少女のビンタが彼のホホに炸裂し、射精したかのように少女の下着にブクツと膨らませる。少女の下着に食い込み、固い肉が押し込まれてきた。「良いぞ坊や、そのまま動かしてやれ」

ホホにモミジの赤い後を作りながら、彼はわずかずつ腰を動かして

しまう。彼は少女への欲望を我慢しきれずに申し訳なさそうな顔をしながらも、声を漏らし腰を自然と突き出す。

少女はこのバカ犬の最も気持ちよく感じさせられる位置を探りながら、背中を戦艦棲姫に支えられつつ上下に体を揺する。紫のフワフワとしたストレートヘアを広げながら動かしている。

「いや、ほくほうさん」少女は腰を合わせる様に擦り付け太ももに力を入れて落とされないようにしながら、幼女に助けを求め。「ふむ。それも仕事の一つじゃ」しかし帰ってきたのは無情な一言だった。

「この、エロワンコ」少女は上下に彼の股間で突き上げられながら、少し収縮した瞳で彼を睨みつける。しかし、彼は顔をそむけるだけで、さらにアソコの押し付けを始めたようだ。「こんなに膨らませて」

少女のツルツルとしたストッキングにマーキングするかのようになり、ギツギツと擦り付ける。苦悶の表情とは裏腹に、お気に入りの女の子を見つけたとばかりに、彼の下半身が正直に動く。

彼はイヤイヤするように首を振りながら、うつすらと目に涙を浮かべて、腰の動きを少しずつ加速出せていく。少女に射精したいと訴えるように小さく喘ぎながら彼の上半身がのけ反っていく。

頃合いを見て、少女から二度目のビンタを受けると、彼はドライアクメしたのか、ビクツと体をのけ反らせ少し静かになった。

「あら、ぴゅっぴゅ出来なくて残念そうねえ」

戦艦棲姫は少女を彼の股から取り上げると丁寧にイスに戻した。

「終わるまでここで見てなさい」酷い目にあつたとばかりに、少女は不貞腐れながら再び野菜を乱雑に食べ始めたようだ。「知らないです、そんなバカワンコ」

「また、嫌われちゃったわね」

耳元で悪魔のように彼女は甘く囁く。片方のホホに二重の赤みを残したまま彼はキュツと口を閉じた。